宮城県文化財調査報告書第95集

宮城県営圃場整備等関連
遺跡詳細分布調査報告書

（昭和 57 年度）

昭 和　58 年　3 月

宮 城 県 教 育 委 員 会

序

太平洋と奥羽山脈などの山々に囲まれ自然に恵まれた宮城県は昔から人々の豊かな生活舞台となってきました。その証が5300余箇所を数える埋蔵文化財包蔵地として周知されております。

学問の進歩と人々の理解によって私達の祖先の残した貴重な遺跡が調査解明され、往時の生活文化の復原が可能になりつつあることは喜ばしいことであります。

地域の発展と埋蔵文化財の保護・保存の調整は、関係各機関と綿密な連絡のうえに実施しているところであり、年を追ってその効果が現われ、各方面から理解が得られるようになってきました。

本報告書は、県営圃場整備事業に当たり遺跡の範囲・性格を把握するなどの文化財保護上の協議資料を得るために実施した色麻古墳群・蝦夷塚古墳群・黒沢館跡（色麻町）、岩ノ入遺跡（丸森町）に係る詳細分布調査と協議の結果上記4遺跡と千賀田遺跡（丸森町）の幹線排水路部分に係る記録保存の発掘調査の結果をとりまとめたものであります。

この報告書が研究者及び関係者はもちろんのこと広く一般の方々に活用され、文化財保護に対する温かい理解が一層深められるよう願ってやみません。

最後に、この調査に深い理解と多大のご協力をいただいた宮城県農政部と色麻町の関係者並びに多くの方々に厚く御礼申しあげます。

昭和 58 年 3 月

宮城県教育委員会
教育長　三　浦　　徹

目　　次

序
はじめに…… 1
(1)　色麻古墳群…… 3
(2)　蝦夷塚古墳群・黒沢館跡…… 167
(3)　千賀田遺跡…… 189
(4)　岩ノ入遺跡…… 199

例　　言

1.　本書は県営圃場整備事業に関連する5遺跡の調査報告書である。
2.　調査は宮城県教育庁文化財保護課が担当し、関係各市町村教育委員会の御協力をいただいた。
3.　色麻古墳群の報告書中に「色麻遺跡土壌の分析結果」（庄子貞雄、山田一郎）を収録し、同遺跡の火葬墓出土の焼骨の鑑定は、札幌医科大学、百々幸雄氏にお願いした。
4.　本書における土色は「新版標準土色帳」（小山・竹原:1967）を使用し、土性については国際土壌学会の粒形区分を参照した。
5.　この報告書に使用した地図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図の「丸森」および、同5万分の1地形図の「中新田」である。
6.　執筆編集は文化財保護課が行なった。各遺跡の担当者は次のとおりである。

色麻古墳群	古　川　一　明
蝦夷塚古墳群・黒沢館跡	斎　藤　吉　弘
千賀田遺跡	後　藤　彰　信
岩ノ入遺跡	村　田　晃　一

はじめに

宮城県教育委員会は、宮城県営圃場整備事業にかかる 5 遺跡（色麻古墳群、蝦夷塚古墳群、黒沢館後、岩ノ入遺跡、千賀田遺跡）の詳細分布調査および発掘調査を昭和 56 年度国庫補助事業として実施した。

千賀田遺跡は昭和 55 年度の詳細分布調査の結果、農政部との協議により大部分は盛土工法により保存を図ったが、幹線排水路部分は切土施工止むなきに至り本年になって記録保存の発掘調査を実施した。

他の 4 遺跡については、隣接地での調査とこれまでの表面観察の調査ではその範囲及び性格がかならずしも明確ではなかった。とくに色麻古墳群及び蝦夷塚古墳群・黒沢館跡には地籍図・古記録によると、現存する古墳のほかに多数の古墳が存在したことが知られており、56 年度の調査結果から推しても、現水田下に古墳の下部構造の遺存が予測された。そこで圃場整備事業を実施するに当たり遺跡保存のための協議資料を得ることを目的に遺跡の範囲、遺構の分布、遺跡の性格等を調査した。

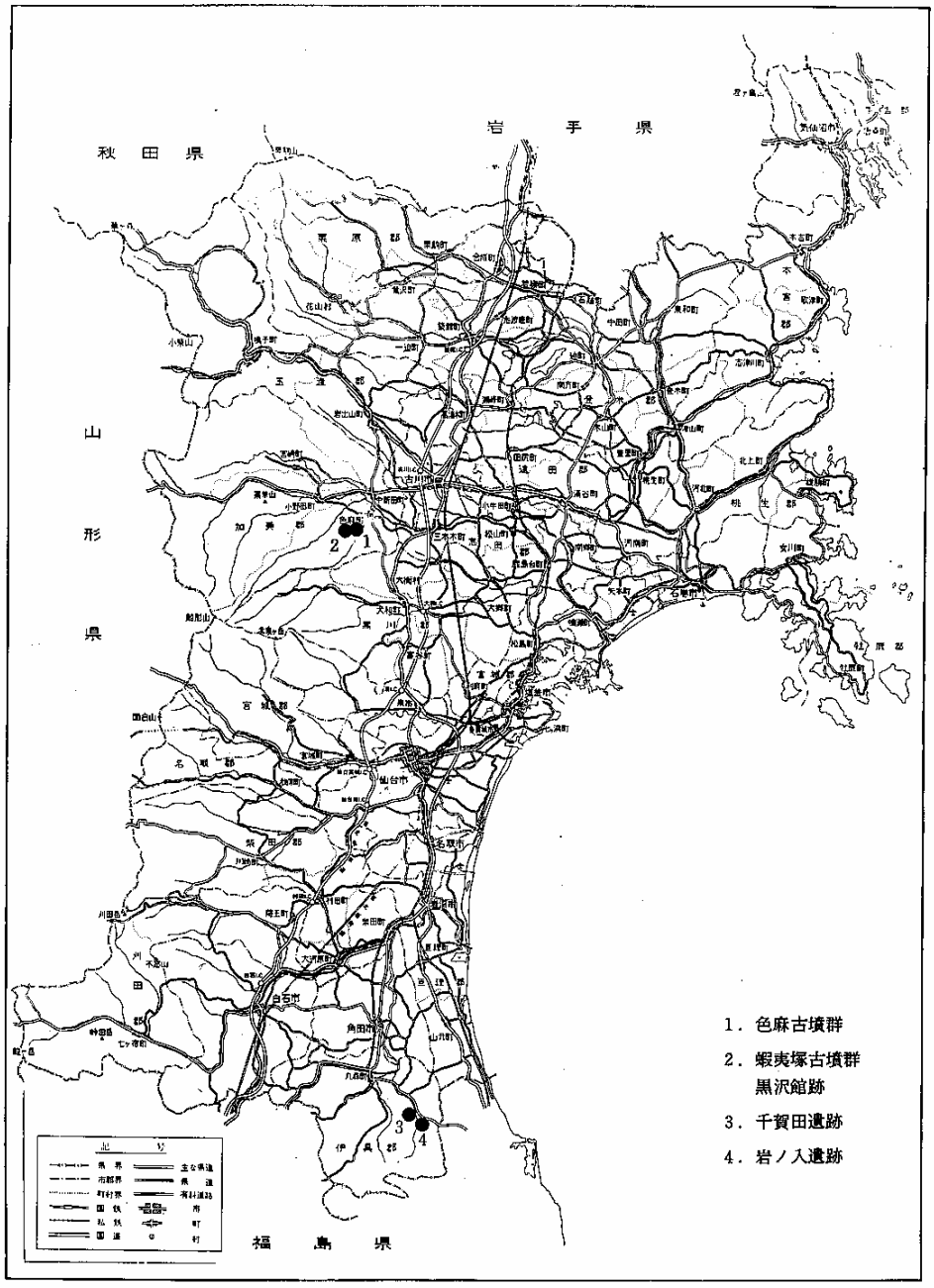
なお、色麻古墳群では詳細分布調査の結果、現水田面下から予想をはるかに越える 88 基の古墳と住居跡等が発見されたので、文化庁の指導も得、関係者間で度重なる協議を行い、幹線排水路部分を除いて盛土工法により保存することになった。

工法の変更には経費の増加が伴うために協議は難航したが、農政部及び色麻町の関係者の文化財に対する理解の深まりと関係者による受益農民への献身的な働きかけにより、同意を得たものである。

また工事の施工に当たり、文化財側から保存のための仕様書を提出し、施工側からは施工計画書の提出があり相方確認のうえ、工事の立合を行なうなど万全を期した。

排水路部分については一部計画変更により、古墳部分をさけて通る水路としたものもあったが、4 基については記録保存の措置をとった。

岩ノ入遺跡については協議により遺跡の大部分を盛土工法により保存し、排水路部分については記録保存の調査を実施した。



遺跡位置図

(1)　色麻（しかま）古　墳　群

調査要項

遺 跡 記 号：ＧＴ（宮城県遺跡地名表登載番号　31006）
遺跡所在地：宮城県加美郡色麻町上郷・高野
調 査 期 間：昭和 57 年 4 月 8 日～昭和 57 年 9 月 11 日
調査主体者：宮城県教育委員会
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
調査員：狩野　正昭・阿部　　恵
後藤　彰信・古川　一明
調査対象面積：217000 ㎡
発 掘 面 積：17680 ㎡

目　　次

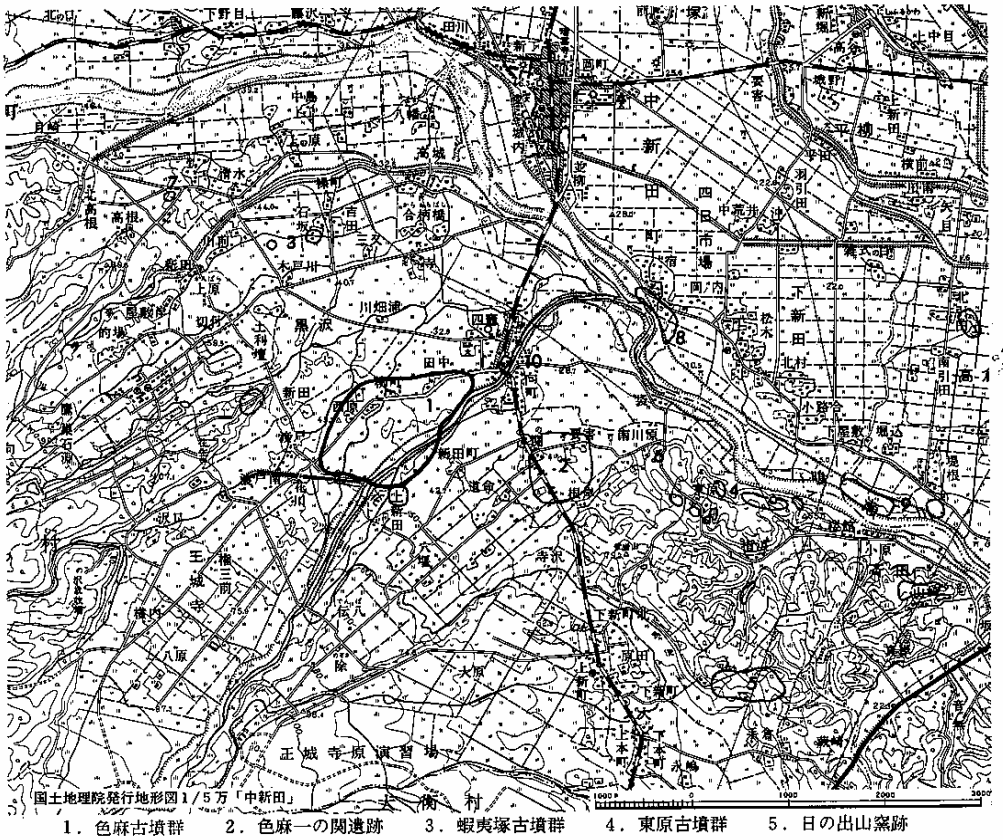
Ⅰ　遺跡の位置と環境 5
Ⅱ　調査の方法と経過 8
Ⅲ　発見された古墳 13
Ⅳ　古墳についての考察
　1　古墳の構造について 101
　2　出土土器について
　　(1)　土器の出土状況 106
　　(2)　出土土器の分類 107
　　(3)　出土土器の組み合わせと年代 115
　3　副葬品について 122
　4　群構成と被葬者の性格 123
Ⅴ　古墳以外の遺構と遺物
　1　住居跡 127
　2. 火葬墓 136
　3. 土壙 138
　4. 畝状遺構 139
　5. 住居跡、火葬墓、土壙、畝状遺構の考察 139
　6. 弥生時代の遺物 141
Ⅵ　まとめ 144
(附)　色麻古墳群土壌の分析結果　　東北大学農学部　庄子貞雄・山田一郎 147

Ⅰ　遺跡の位置と環境

色麻古墳群は宮城県北部、加美郡色麻町上郷、高野に所在しており、町の南西部にあたる。

遺跡の含まれる宮城県北部の地形を概観すると、西部は奥羽山系の丘陵、東西は北上山系の丘陵地帯であり、両丘陵地間の中央部が平野部となっている。中央の平野部はさらに東西に区分することができる。東部は北上川を母胎として南北に広がる沖積地を主体とするものである。西部は奥羽山系から東へ枝状にのびる丘陵間に形成された東西に広がる沖積地を主体とするものであり、南から吉田川流域、江合・鳴瀬川流域、迫川流域の三部分がある。東部の沖積地は“北上川低地帯”と呼ばれるように谷地部分が多くその本格的な開発は近世以降のことであるが、西部の各沖積地は古くから開発が進んでいたと考えられ、そのことは周辺に各時代を通じて多数の遺跡が存在していることから推定できる。

本古墳群は江合・鳴瀬川流域の平野部（大崎平野）の南西端に位置している。この地域には標高30～90mの扇状地性の洪積台地が広がっており、この台地を解析して花川・保野川などの中小河川が各所に狭い氾濫原を形成しながら北東に流下し鳴瀬川に合流している。古墳群は花



第1図　周辺の遺跡

川の中・下流域南北両岸の東西２㎞、南北１㎞、標高35～45mの範囲に分布している。北岸が上郷地区・南岸が高野地区で、現状は一部山林部分もあるが大部分は水田であり、確認できる古墳は水田中に残存している。

本遺跡周辺には各時代の遺跡が多数所在しているが、その中でも本古墳群と深く関連する古墳時代から奈良時代の諸遺跡の状況についてみて行きたい。まず古墳時代前期、中期の遺跡として鳴瀬川、江合川流域に分布する諸古墳がある。これらの諸古墳は、岩手県胆沢町角塚古墳のような孤立的なものを除けば、前期、中期古墳分布の北限地域を形成している。主要なものとして宮崎町夷森古墳、色麻町御山古墳、同念南寺古墳、古川市青塚古墳、小牛田町京銭塚古墳、同保土塚古墳など50mを超える規模の円墳、前方後円墳、前方後方墳があり、時期的には東北地方南部土師器編年（氏家：1957）の第Ⅰ型式「塩釜式」期の土器類が出土し、4 世紀に遡る可能性の指摘される青塚古墳（平沢・太田：1981）、夷森古墳、断面台形のタガをもつ埴輪が採集され5、6 世紀の年代が想定される御山古墳、念南寺古墳などがある。このような規模、年代は、仙台平野以南における主要古墳の在り方と比較した場合でも大きな相違はないものと言える。

一方、同期の集落跡についても、鳴瀬川、江合川流域の自然堤防などの微高地上に多く立地するものと推定され、古川市塚の目、竹の内両遺跡では「塩釜式」期に属するとみられる竪穴住居跡が 15 軒、同じく留沼遺跡（手塚：1980）でも１軒発見されている。小牛田町山前遺跡（小牛田町教委：1976）では前期に属する竪穴住居跡 25 軒と大溝とが確認され、大溝からは農工具を主とした木製品も発見されている。上記諸遺跡のうち、特に御山古墳は、花川沿岸で本遺跡の下流約 0.5 ㎞に位置するもので、本古墳群との関係は必ずしも明確ではないが、距離的には極めて近接した位置にある。

次に古墳時代後期、奈良時代の遺跡として、後期、終末期群集墳、官衙、寺院跡、窯跡がある。まず、群集墳は高塚と横穴の双方がみられるが、高塚群集墳は大崎低地西部の丘陵、台地上に主に分布するのに対し、横穴群集墳は主に大崎低地北部・南部・東部の丘陵に分布し、高塚と横穴が共存する地域もみられる。群の規模は、高塚、横穴ともに 10～30 基前後によって構成されるものが多いが、岩出山町川北横穴古墳群（氏家他：1970）では 200 基を超える横穴の存在が推定され、高塚群集墳における本古墳群同様、極めて突出した規模を誇っている。本古墳群周辺で内容が明らかなものとしては、本遺跡の北西約１㎞の色麻町内に所在する夷蝦塚古墳群、北方約５㎞の宮崎町米泉館山横穴古墳群がある。夷蝦塚古墳群は径 10m前後の円墳がかつては十数基確認されていたが、現在では１基のみが地上から確認できる。立地は、本古墳群に極めて類似し、保野川中流域南岸の扇状地性洪積台地上にある。古墳群の範囲、規模は確認されていないが、十数基規模を大きく上回るものではないと推定される。古墳の構造、出土遺

物の在り方は、本古墳群のそれに極めて類似しており、本古墳群の一部と共存するものと考えられる（斎藤：1983 本書所収）。米泉館山横穴古墳群（佐々木：1972）では 2 基の横穴が調査されている。高塚群集墳が主に分布する大崎低地西部の中にあることに加え、その内部構造は、他地域のものとはやや異なり床面敷石、間仕切り石等の特徴ある施設が確認されており、横穴式石室との類似性も指摘されている。出土土器の特徴から古墳の使用年代として「8 世紀前半を遡る時期」から 8 世紀後半の年代が想定されている。

上記の群集墳の年代に近接もしくは重複する時期に本地域には官衙、寺院が造営されている。大崎低地西部地域では古川市名生館遺跡、伏見廃寺、中新田町城生遺跡、菜切谷廃寺、色麻町一の関遺跡など比較的多くの遺跡が調査されている。一の関遺跡（阿部：1977）は、本遺跡の南東約 1 ㎞に位置し、建物基壇跡、掘立柱建物跡、土壘状遺構などが発見され出土遺物から 8 世紀を中心とした寺院跡もしくは官衙跡である可能性が強いとされている。しかし、部分的なため遺跡の範囲、性格については不明な点が多い。

城生遺跡（中新田町教委：1978 他）は、一の関遺跡の北方約 6 ㎞に位置し、現在までの調査で築地、溝による外郭施設と、その内部に掘込地業倉庫跡、掘立柱建物跡、竪穴住居跡が発見され、北辺外郭線中央に八御門も確認されている。出土遺物から 8 世紀前半から平安時代にかけてのものと考えられており、遺構の状況から官衙施設としての性格をもつものとされている。なお、この北東約 1 ㎞には、付属寺院とされる菜切谷廃寺跡がある。

城生遺跡の更に 6 ㎞北北東には名生館遺跡（多賀城調査研究所：1980）が位置している。現在までの調査で、7 世紀末から 9 世紀にかけての掘立柱建物群、竪穴住居跡などが発見され、特に 7 世紀末から 8 世紀初頭には瓦葺、四面廂付掘立柱建物跡が造営され、整った官衙施設としての性格をもつものとされている。なお、この南約 0.8 ㎞には付属寺院とされる伏見廃寺跡がある。

窯跡としては、本遺跡の南東約 3 ㎞に日の出山窯跡群、同じく非西約 4 ㎞に高根窯跡群がある。このうち、日の出山窯跡群Ａ地点（岡田地：1970）では 7 基の窯が調査され、瓦、須恵器が発見されている。瓦は多賀城跡の創建期に供給されたものであり 8 世紀前葉前後の操業期が想定されている。

以上のように、群集墳、官衙、寺院跡、窯跡は位置的、年代的に極めて密接な関係にある。特に一の関、城生、名生館などの官衙関係遺跡は、現在の陸羽街道沿いに約 6 ㎞間隔で位置するが、名生館遺跡は古代玉造郡域内に属し、「玉厨」の墨書土器が発見されたことなどから玉造柵跡の有力な擬定地とされ、一方、一の関遺跡は古代色麻郡域に属すと考えられ、色麻柵跡に関連する施設と推定されている。このような特色ある遺跡群の周辺に高塚を主体とする群集群が分布することは、それらの被葬者の性格を考える上で極めて興味深いものと言える。特に

色麻古墳群の場合は、300 基を超える規模をもっており、被葬者集団の性格は、上記のような歴史的環境の中で理解されるものと考えられる。

Ⅱ　調査の方法と経過

調査対象地区は、南西限が花川、北東限がカギ型の圃場整備の区割の線によって画きれた約22ha の地域である。調査区の設定は調査区北東端の圃場内幹線道路の交点の中心を原点、磁北方向に基線をとり、幅3mのトレンチによる調査を基本とした。

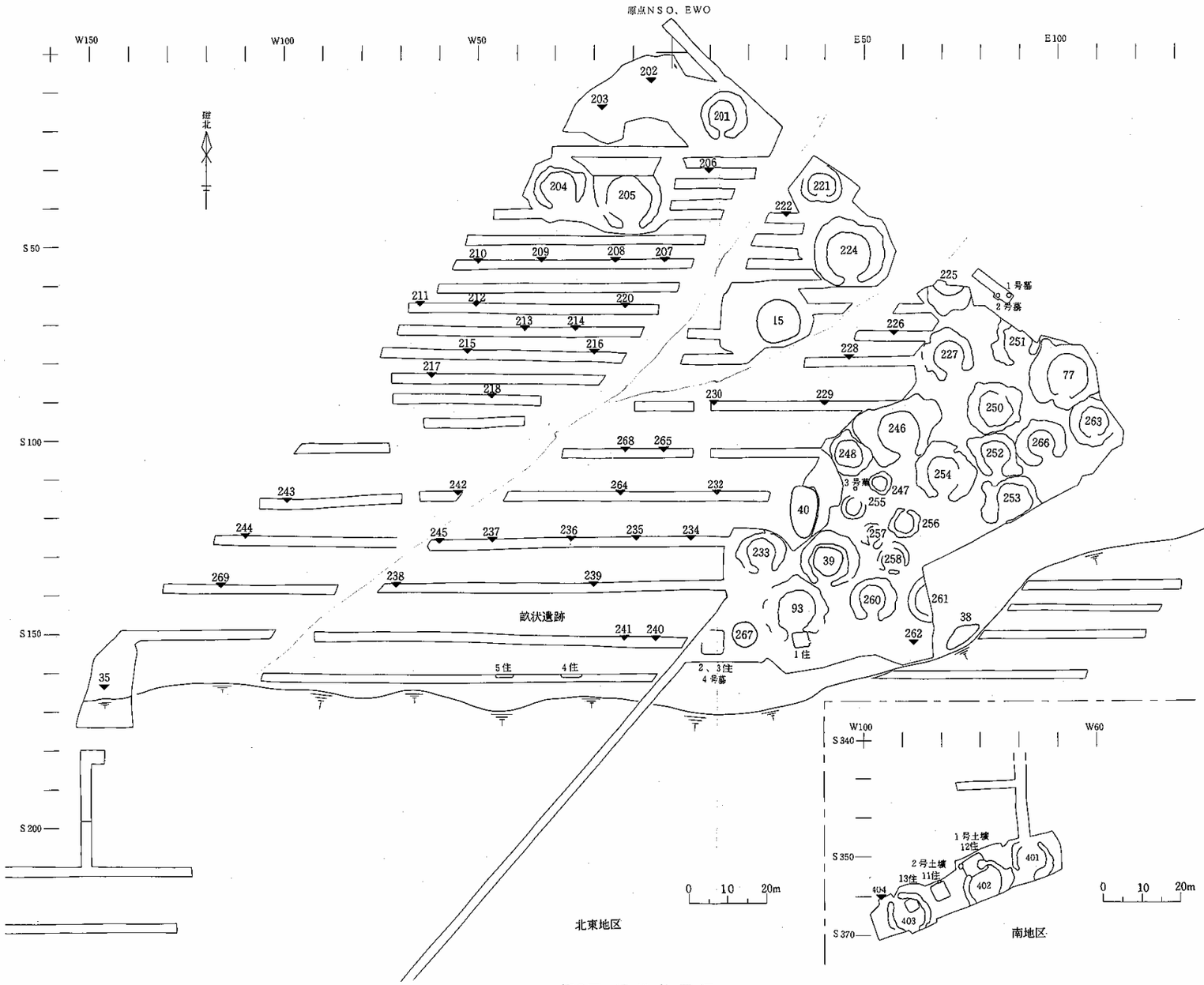
調査は当初、地域内のすべての古墳を確認することを目的として、北から南へ 3m間隔でトレンチを順次設定していった。その結果、約4,000 ㎡の範囲に約20 基の石室が確認され、古墳の密度、分布範囲が当初の予想を大幅に上回る高密度、広範囲のものであることが予想されるに至った。このため、トレンチの間隔を 9mに広げ、分布範囲の確認を主眼とする調査に切り替えた。また、これと併行して、古墳の分布、残存状況をより明確に把握することを目的として、調査区東端部の区域について面的な遺構確認作業を行った。

これらの調査の結果、最終的な実発掘面積は約 17,700 ㎡に達した。そのうち東端部の面的確認部分は約6,000 ㎡である。また、検出された遺構は古墳88 基、竪穴住居跡8 軒、火葬墓4 基、土壙2 基、畝状遺構などである（東端部の6,000 ㎡部分に含まれる遺構は古墳24、竪穴住居跡2 火葬墓2）。出土遺物には、各遺構に伴うものの他には、弥生時代の土器・石器などがある。

確認された遺構の多くは、盛土保存が決定されたため以後の精査は行なわず、確認段階における記録の作成に留めた。記録は、ある程度遺構の概要の知り得るものについては$\frac{1}{20}$実測図、写真記録を、その存在のみが確認されるものについては写真記録のみを作成した。ただし確認時点において、遺構底面近くまで削平が及びすでに遺物が出土した遺構については完掘した。また、東端6,000 ㎡における遺構については、その内容把握の意図のもとに可能な限りの精査を行った。具体的には古墳周湟の規模の確認や、それに伴う遺物の取り上げなどである。

以上の一連の確認調査終了後、計画主線排水路にかかる古墳4 基（第201、221、227、248）住居跡1 軒（第2 号住居跡）の事前調査を行った。なお、古墳の番号については、昭和53 年度宮城県教育委員会による分布調査の地点ナンバーを採用し、新たに確認された古墳については北東地区に分布するものは200 番台、北西地区のものは300 番台、南地区のものは400 番台として登録し、住居跡についても北東地区のものを0番台、南地区のものを10番台とし登録した。

第２図　古墳の分布と調査区位置図


原点NSO、EWO
W150
W100
W50
E50
E100
E150
S50
S100
S150
S200
磁北
敵状遺跡
北東地区
南地区
1号墓
2号墓
3号墓
1住
2、3住
4号墓
4住
5住
1号土壙
2号土壙
12住
13住
11住
0 10 20m
W100
W60
S340
S350
S370

第3図 遺構位置図

Ⅲ　発見された古墳

古墳の分布と残存状況

調査対象地区内の地形は、大きくみて扇状地性の洪積台地と、花川の氾濫原とに分けることができる。氾濫原は、調査対象地区南半の花川北岸に沿った地域で、一方の洪積台地は対象地区内では北西部と、北東部に分かれているが、調査区外で連続する同一の台地面である。台地面は、氾濫原からの比高、0.5m～0.2mで、南西から北東に緩やかに傾斜している。この他花川北岸の一部に、氾濫原に囲まれた微高地が一ヶ所みとめられる。

調査の結果、古墳の分布は洪積台地上、微高地上にのみみられ、氾濫原には分布しないことが確認された。具体的には、調査対象地区北西部の台地上（以後北西地区と仮称する。）に16基同じく北東部の台地上（同北東地区）に68基、花川北岸の微高地上（同南地区）に4基、計88基の古墳が、それぞれまとまって確認された。台地上、微高地上での古墳の分溝状況は極めて高密度で、隣接する古墳の周湟が切り合ったり、回避するような形態を示すものが多く単純計算によれば4,000 ㎡の中に20基前後の古墳が分布することになる。このような状況は、特に北東地区ではほぼ台地上全域にわたってみられ、古墳の空白地帯はほとんどみられない。

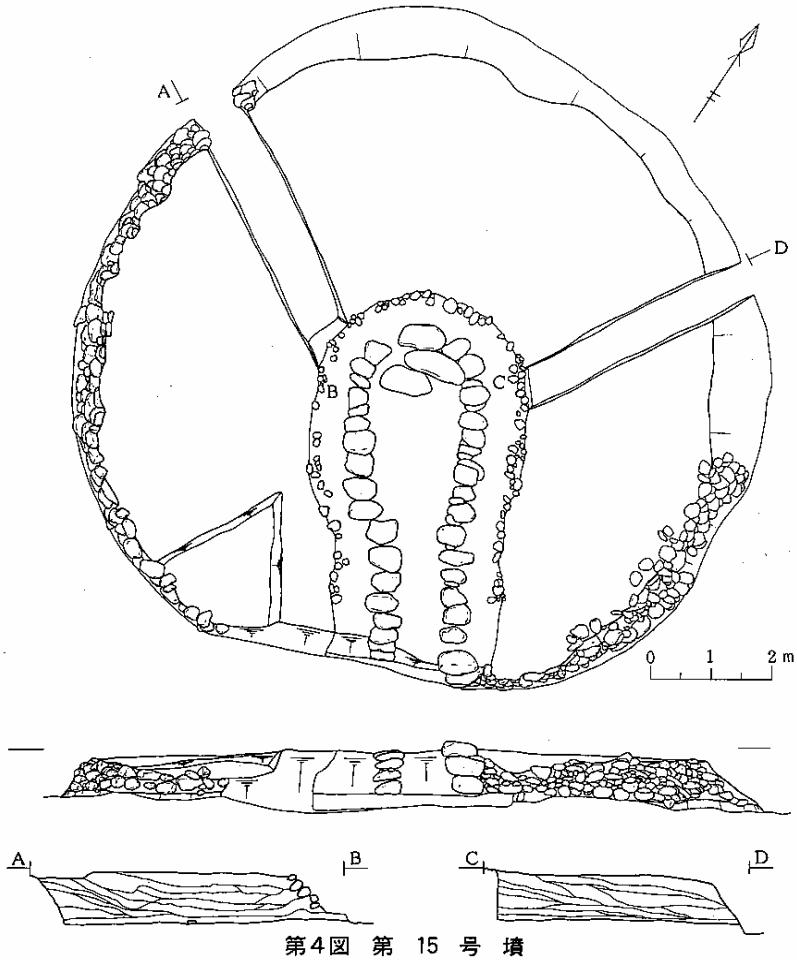
次にこれら古墳の残存状況をみると、総数 88 基の古墳のうち、墳丘を地上で確認できたものは14基で、その他の74基は全て平坦な水田面下に石室下部、周湟が確認されたものである。このように大部分の古墳は、その上部が開田等によって削平され、下部のみが遺存している。古墳の破壊は歴史時代の各時期を通じて行われたと考えられるが、明治19年の本地区の地籍図、及び昭和 25 年の東北大学考古学研究室作成の古墳分布図にはかなりの数の古墳が記載されており、多くの古墳は戦後その上部を失ったものと思われる。

確認された古墳とその出土遺物

今回の調査で確認された古墳は 88 基で、このうち周湟を含む全体の構造を確認したものは28基、トレンチ内で一部のみを確認したもの60基である。前者についてはその規模、構造の概要について記述し、後者については確認事項を一覧表に示すに留める（第1表参照）。

第15号墳

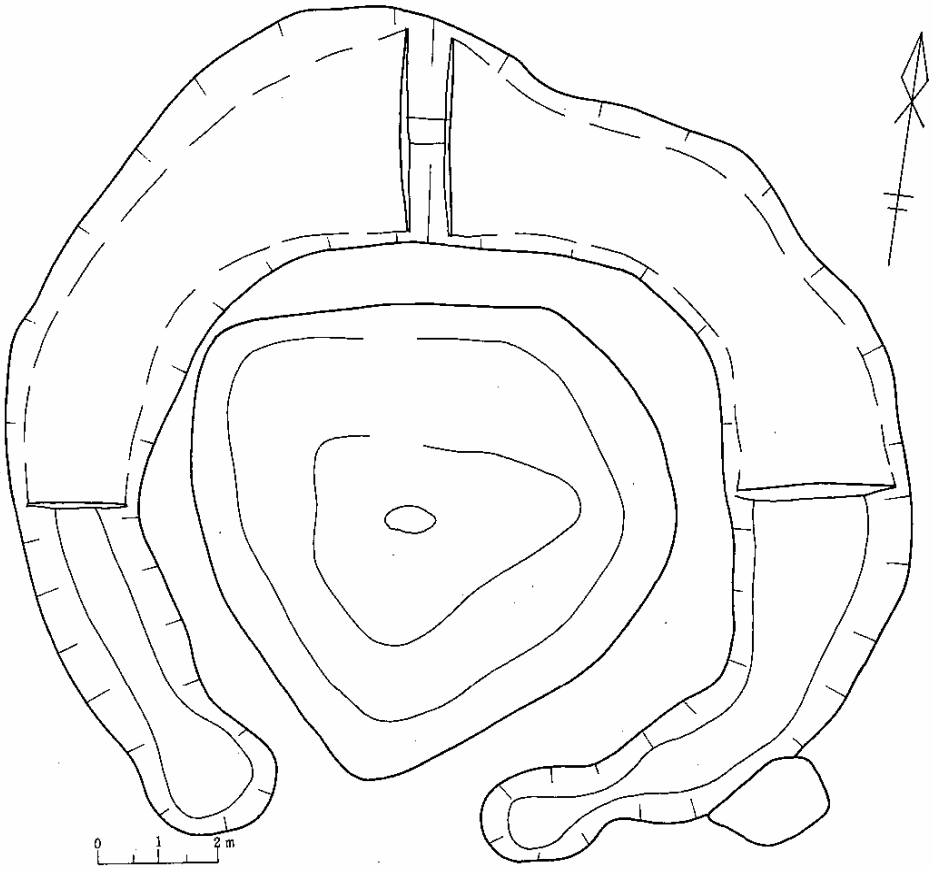
確認状況：直径約 12m、高さ 1mの墳丘が残存していた。墳丘の上面は畑として使用され、墳丘の斜面は雑草により覆われていた。表土を除去した結果、畑耕作土直下で石室の上部が確認され、墳丘斜面には葺石が良好に残存することが確認された。しかし墳丘の南端は水路にかかり一部崩壊しており、前庭部も破壊されていた。墳丘周辺の水田耕作土直下は地山砂礫層となり、周湟は確認されなかった。



第4図　第　15　号　墳

主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りをもつ。石室床面は確認面下約 80 cmにあると推定される。〈奥壁部〉には直方体状の石がみられ、同様の石が数段積まれているものと考えられる。崩壊を免れた東側の〈羨門部〉にはやや大きめの石が三段階積み上げられている。〈玄門部〉は確認面が高いため明瞭でないが、特殊な石の用い方はみられず、袖状の突出が確認できる。〈玄室部〉には崩落した石室上部の用材と思われる大小の礫、砂利、土が堆積している。〈羨道部〉は上部に砂利、シルトの堆積もみられるが、主に拳大の礫が無秩序に充填されている。〈裏込め〉には砂利が使用され、その縁辺は粒径のそろった礫で押えられている。〈掘り方〉は南端部の崩壊した面では地山が約 20 cm掘り込まれ、その内部にはしまりのある砂礫層が認められた。側壁根石は、その層の上面にのっている。

外部施設：〈周湟〉は確認されていないが、削平により失われた可能性が強い。〈墳丘〉は



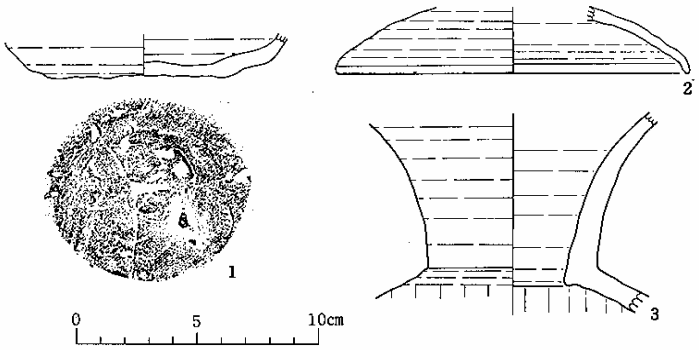
第５図　第　39　号　墳

平面形が玄室北半部に中心を置く円形であるが、羨門部両脇でややつぶれる形をとる。墳丘斜面の傾斜度は大きく、葺石は大小の河原石が互目積みにされている。積み土は主に黄褐色系の砂質シルトからなり、石室に寄せかけるように積み、その後に墳丘の成形を行なっていることが土層断面から観取される。旧表土と考えられる黒褐色シルト質土層の上面はほぼ水平で、一部が葺石外にも存在しているが、その上面がテラスになると考えられる。

出土遺物：墳丘南端を流れる水路の河床下から土師器、須恵器が出土している。図化できたものは土師器坏１点、須恵器瓶口縁部１点で、他に須恵器甕の体部破片がみられる（第 82 図）。

第39号墳

確認状況：直径8m、高さ1.5mの墳丘が残存している。墳丘の表面は大小の円礫により乱雑



第６図　第39号墳出土遺物

に覆われているが、これらの礫は墳丘を構成するものではなく本来の墳丘の形態規模は大きく損われている。墳丘自体については調査を行わなかったが、周囲の水田直下 15 cmの地山面で周湟が確認された。周湟は南半部と土層断面を観察する部分のみを掘り下げた。

主体部：不明である。

外部施設：〈周湟〉内外周とも不整な円形である。前庭部で途切れるが、削平を考慮すれば浅い掘り込みがあったと考えられる。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなる。〈墳丘〉は不明である。

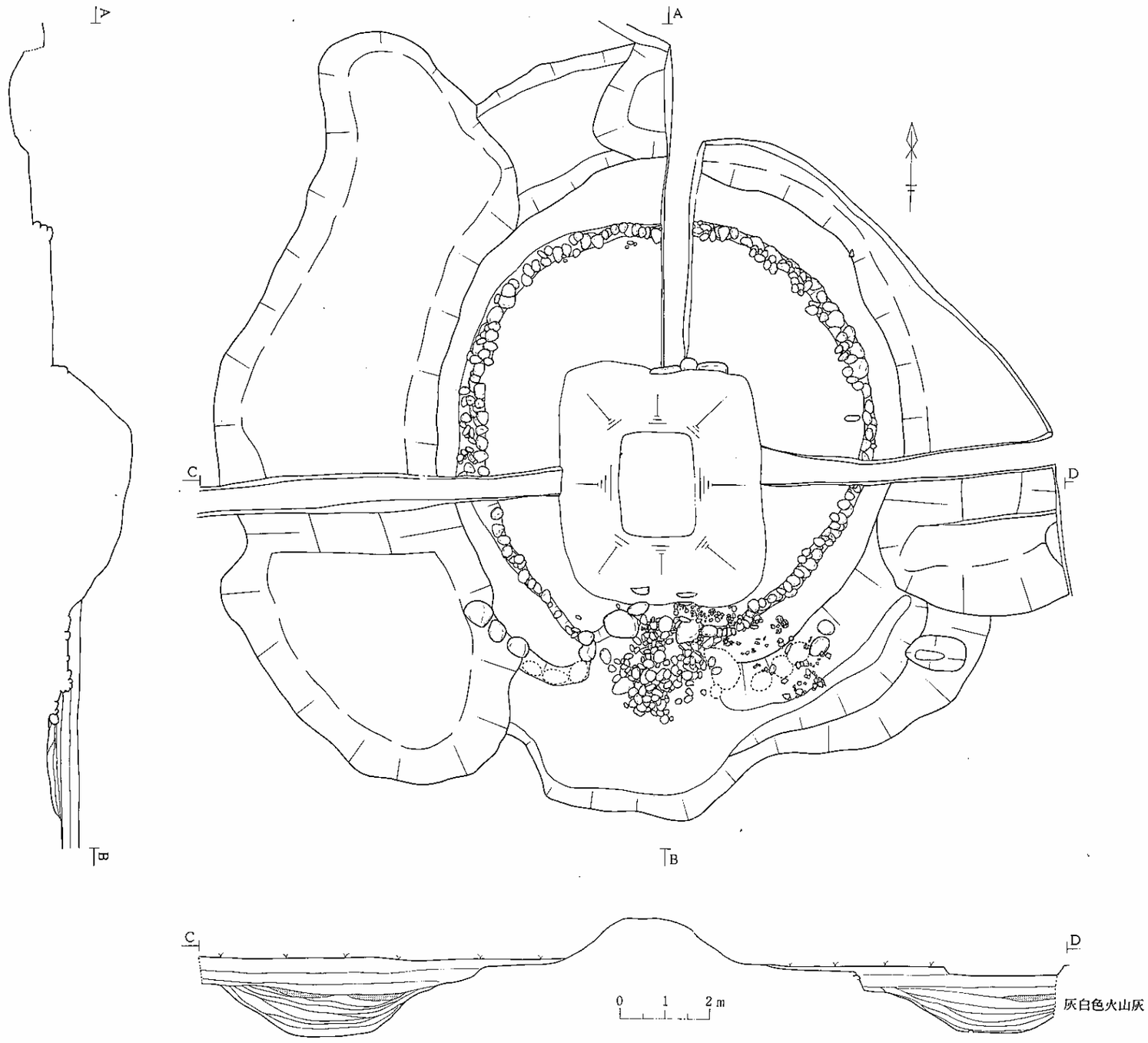
出土遺物：周湟南東部の底面、堆積土から須恵器が出土している。図化できたのは坏・蓋・提瓶の破片のみである。

第77号墳

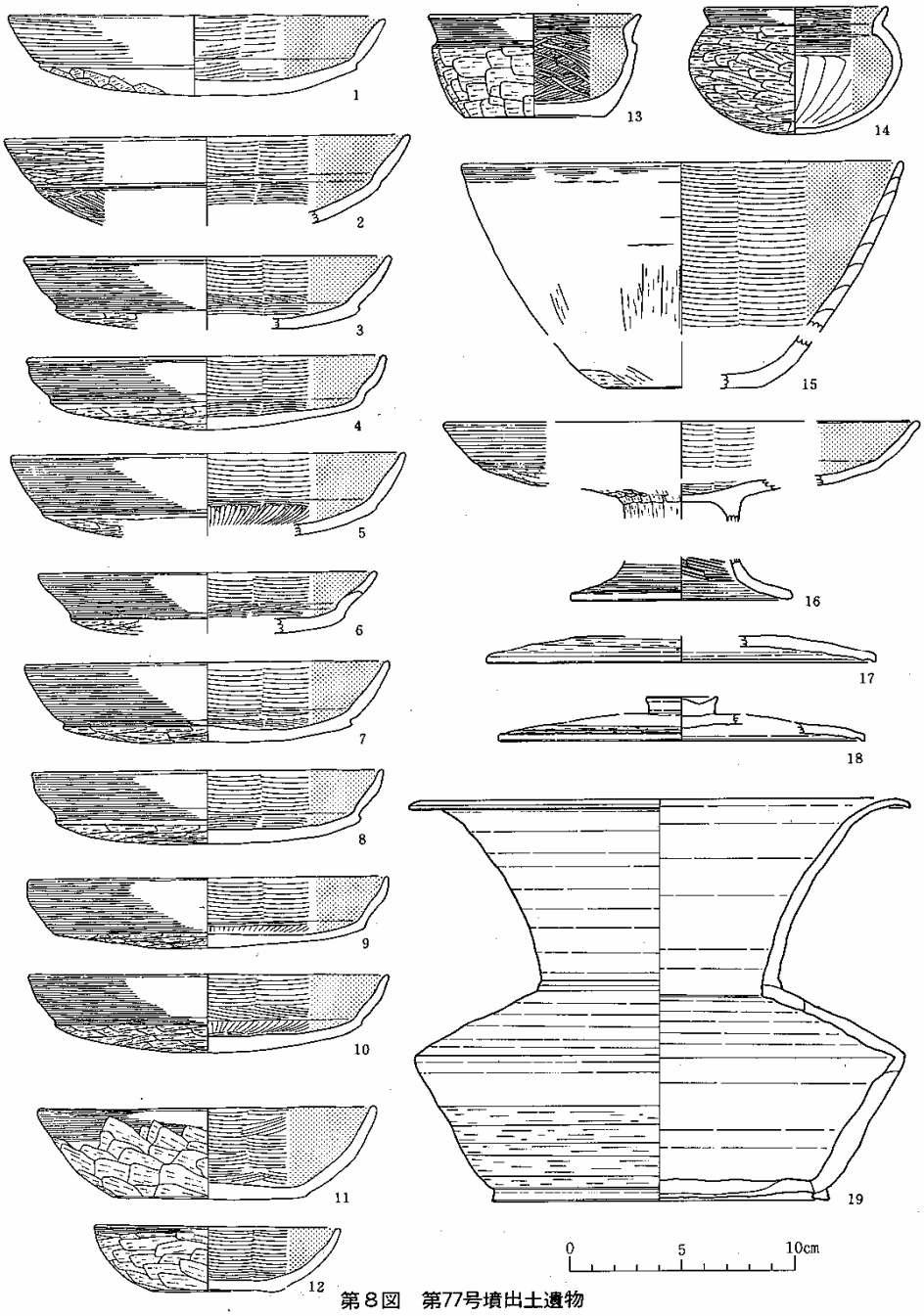
確認状況：石室の裏込めと思われる粒径 5 cm前後の円礫が東西 4.4m、南北 5.2m、高さ 1 mの台錘状をなして残存していた。部分的に石室の側壁あるいは奥壁の用材と推定される石が露出しており、石室自体の保存状態は良好であると思われる。周湟は遺物の出土する南東部と土層断面を観察する部分のみを掘り上げた。

主体部：横穴式石室である。〈羨門部〉に円筒状の石、〈奥壁〉に直方体状の石を配置している。〈羨道部〉には粒径 15 cm前後の円礫が充填され、その一部は前庭部に崩落している。石室内部は未調査である。

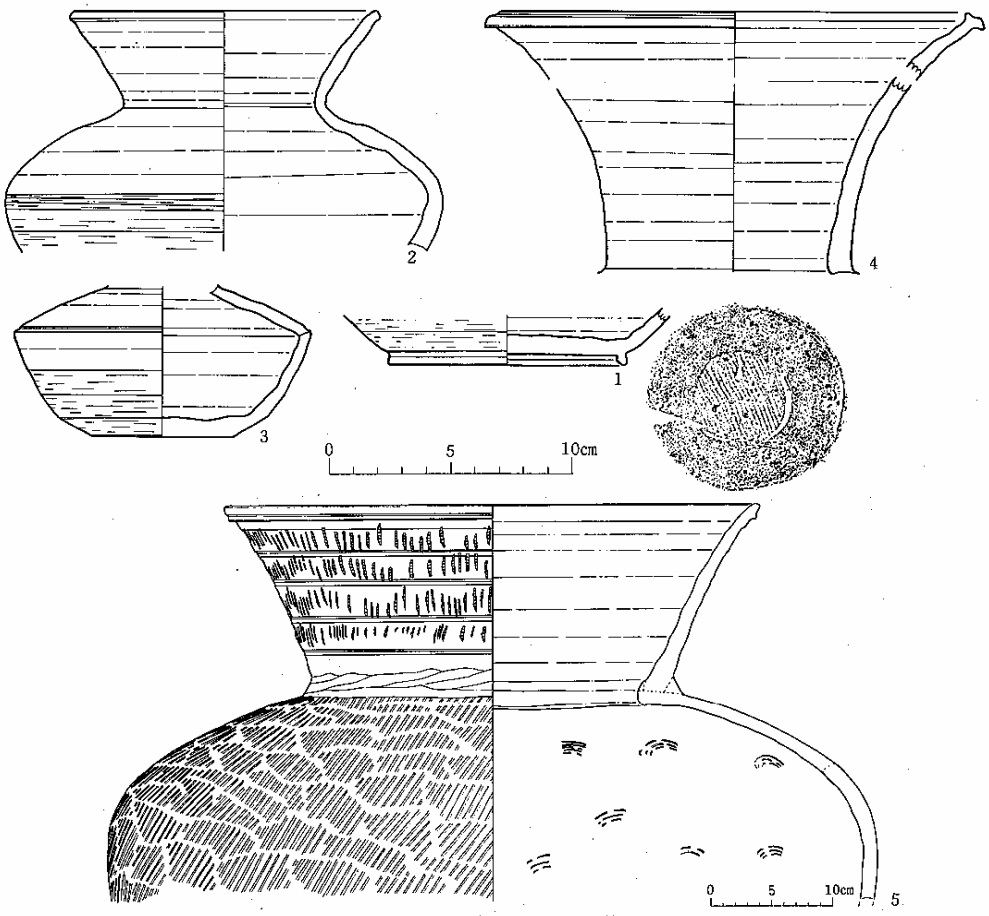
外部施設：〈周湟〉は北東の外周の一部が調査区外に伸び未確認であるが、内周はほぼ正円形を呈し、外周は不規則に出入りし不整形である。深さ、幅は不均一で前庭部及び石室北部では浅くなり、石室の東、西部で深くなっている。堆積土は主に褐色シルト質の土壌からなるが灰白色火山灰が最上部に堆積している。〈墳丘〉は、基底部のみが約 30 cm残存しており葺石の



第7図 第 77 号 墳



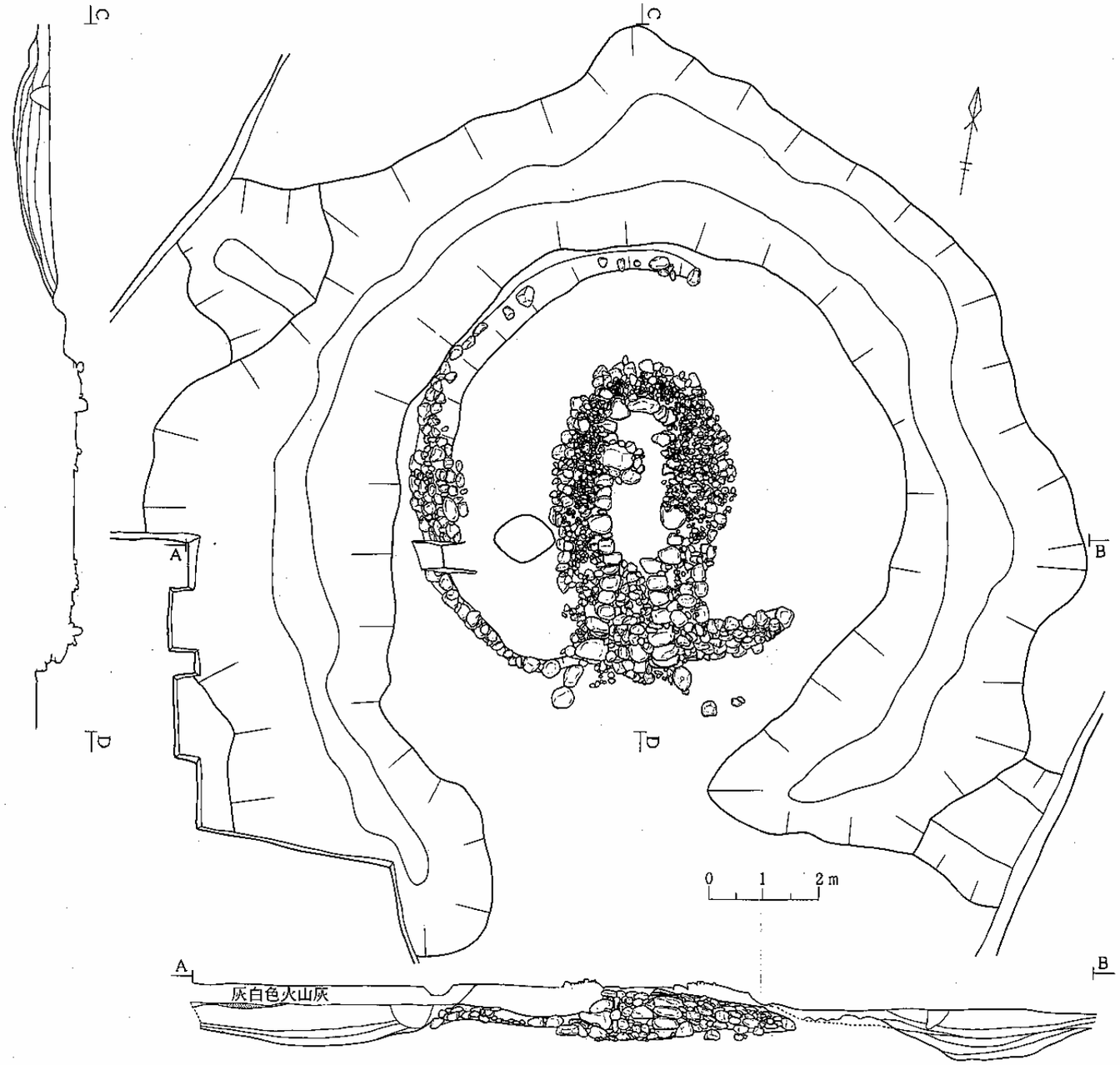
第８図　第77号墳出土遺物



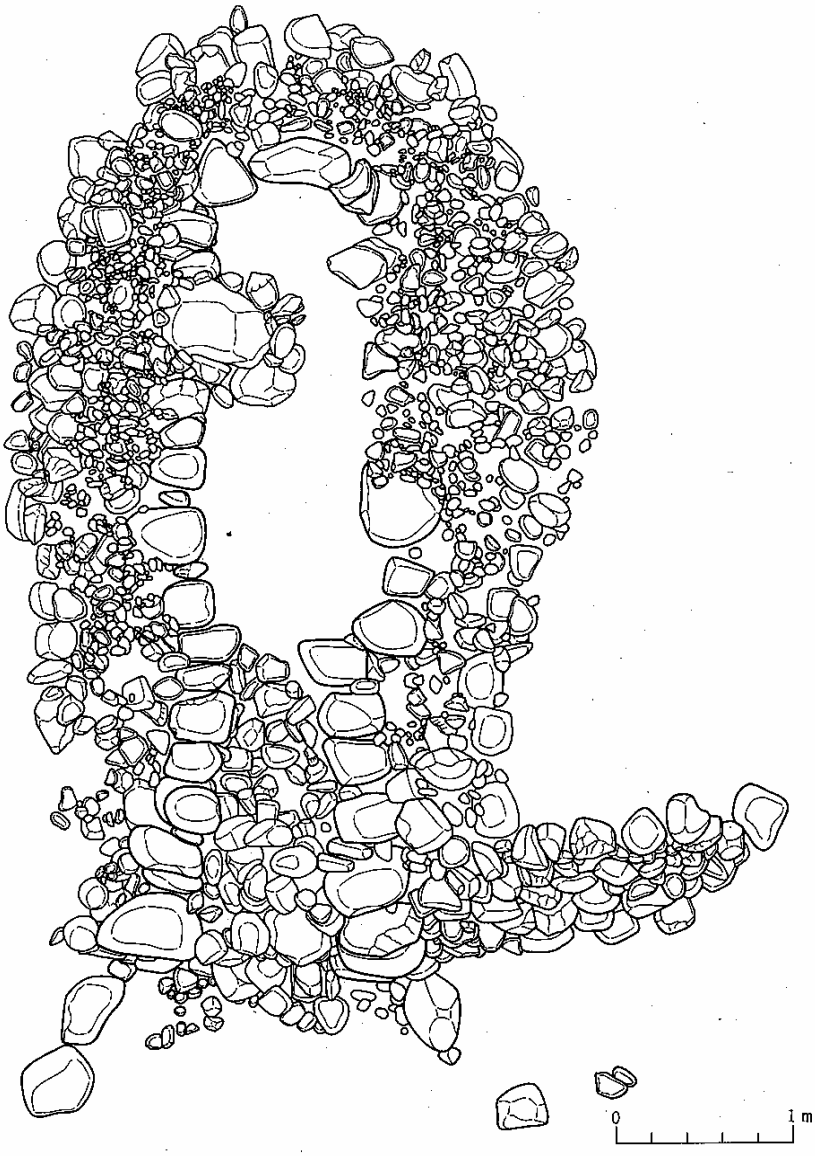
第９図　第77号墳出土遺物

基底部も全周している。葺石は正円形にめぐり、羨門部では羨門前端の円柱状の石にカギの手状に接続している。葺石と周湟の間は幅30～50 cmのテラスとなっている。墳丘積土の状況は不明である。〈前庭〉には地山を掘り込んで平面形が台形の区域が設定され、その東西は周湟に接続している。テラスとの比高20 cm、周湟底面との比高50 cmで、テラスから前庭へ「ハ」の字状に石列がみられ更に周湟内側斜面に伸びている。

出土遺物：前庭周辺から土師器、須恵器、鉄鏃が出土している。図示できたものは土師器坏12点、高坏1、鉢2、壺1点、須恵器壺類5点、蓋2点、甕1点である。土師器坏5点（第8図3、8～10、12）、埦、鉢、須恵器広口壺3点（19、2、3）は、いずれもほぼ完形で、羨門部東側のテラス上に置かれた状態で出土した。鉄鏃の破片もこのテラス上から出土している。土師器坏5点（1、2、4、7、11）、須恵器甕は上記のテラス上から周湟斜面にかけて流れ込ん

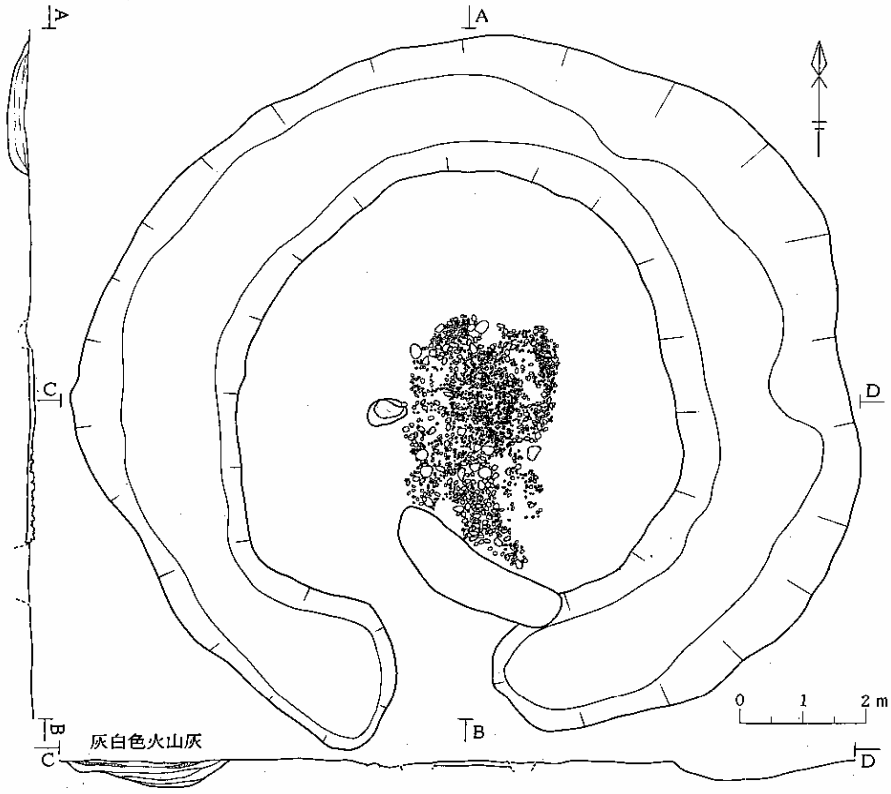


第10図　第93号墳全景



第11図　第93号墳石室

だ状態で出土し、いずれも破片となっていた。土師器坏２点（5、6）、須恵器広口壺、蓋は、前庭に崩落した閉塞石中に少破片となって混入していた。



第12図　第201号墳全景

第93号墳

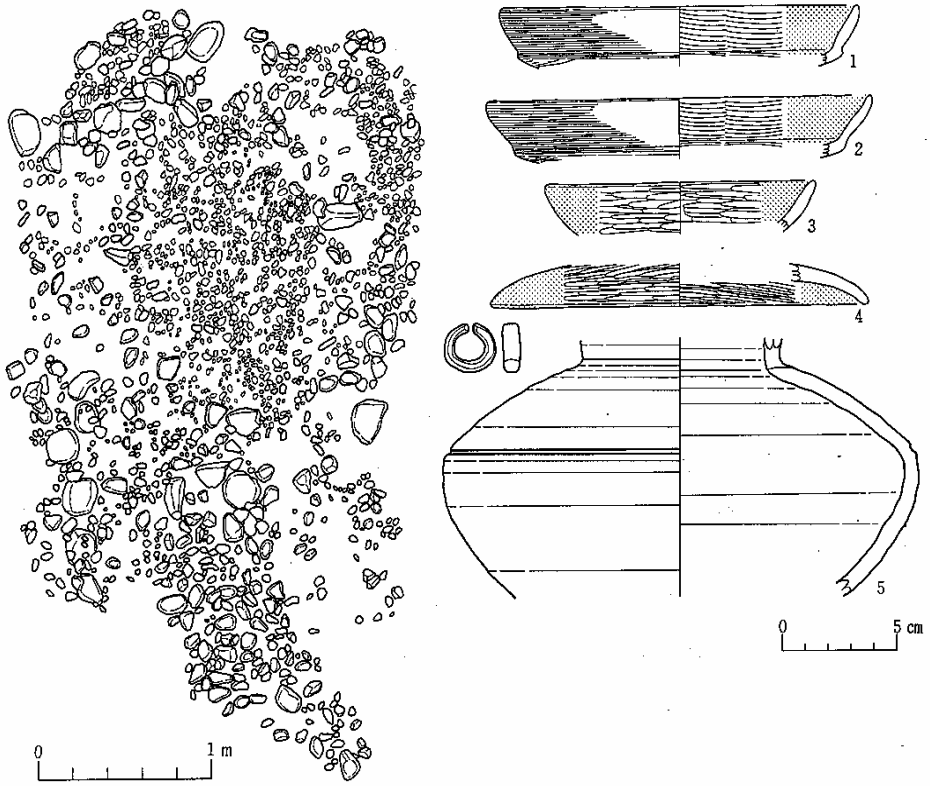
確認状況：昭和55年度の調査で水田面下20㎝に石室の上面が確認されていたものである。今年度の調査により墳丘の西部が地下に埋没した保存状態の極めて良好な古墳であることが確認された。石室床面は残存する石室上面の約 1m下に存在すると考えられる。玄室内中央の西側部分に石が投棄された小さな攪乱壙が認められるが、石室内の保存状態は良好である。墳丘の東半部は、開田により削平され失われている。また、前庭南部に平安時代の竪穴住居跡が一軒存在する。周湟は全掘した。

主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りをもつ。〈奥壁〉にはやや偏平な石材が頭を出しており一石を立てるかもしくは、敷石を積み重ねた構造であると考えられる。〈玄門部〉に特殊な石は使用されていないが袖状に突出している。〈羨門部〉の側壁には、やや大きい偏平な石材を横積みにしている。〈羨道部〉は円礫が無秩序に充塡されているが、羨門部ではやや大きめの石を横積みにしてこれらを押えている。羨道がハの字状に開くようにみえるが、これは玄室側の側壁の持ち送りが強いためで、実際の規格幅は玄門部、羨門部でほとんど変らないもの

と考えられる。〈裏込め〉には、拳大の円礫を無秩序に詰めているが、その外縁にはやや大きめの石を配置している。

外部施設：〈周湟〉は内外周ともほぼ円形でその中心は、玄室中央部に想定される。前庭部で浅くなるが、その他はほぼ深さが一定し底面の凹凸は少ない。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、上部に灰白色火山灰が認められる。〈墳丘〉盛り土には褐色の砂質シルト質の土が認められる。〈葺石〉は羨門部の両端から正円形にめぐり、積み手は互目積みである。墳丘と周湟との間には、幅0.3～1mのテラスが存在する。〈前庭〉羨門前端の両側から「ハ」の字状に石が配置され平坦面が形成されている。平坦面の底面は地山であることから掘り込んで作られたものと考えられるが、その明確なプランは確認できなかった。

出土遺物：前庭底面から須恵器坏破片が1点出土したが、これは紛失してしまった。墳丘上、周湟南部、前庭等の堆積土から土師器が出土しているが、これらは古墳に伴うものではない。



第13図　第201号墳石室・出土遺物

第201号墳

確認状況：水田下 20 cmの地山面で残存する石室の上面が確認された。石室の側壁、奥壁等は全て抜き取られ、床面の敷石と裏込め最下部のみが遺存していた。周湟は全形を確認したが、石室の南端部から周湟にかけては攪乱を受けていた。周湟は完掘した。

主体部：横穴式石室で、玄室部に胴張りを有していたと推定される。残存する石室の最下部は地山を掘り込んで構築されたもので〈掘り方〉の平面形は長方形を呈する。

外部施設：〈周湟〉は内外周ともやや不整な円形で、前庭部では途切れるが、削平を考慮すれば浅い掘り込みがあった可能性も考えられる。深さは西半が深く、東半はやや浅いが、これは、西半部の地山の下層に分布する礫層を避けたためと考えられる。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、上層部には灰白色火山灰が認められる。〈墳丘〉〈前庭〉は削平により失われ、その構造は確認できない。

出土遺物：羨門東側の周湟堆積土から土師器、須恵器が出土している。図化できたものは、土師器坏3点、蓋1点、須恵器壺1点である。これらの土器の出土状態は墳丘側からの流れ込みを示しており、古墳に伴うものと考えられる。石室の床面敷石中からは金環が1点出土している。

第204号墳

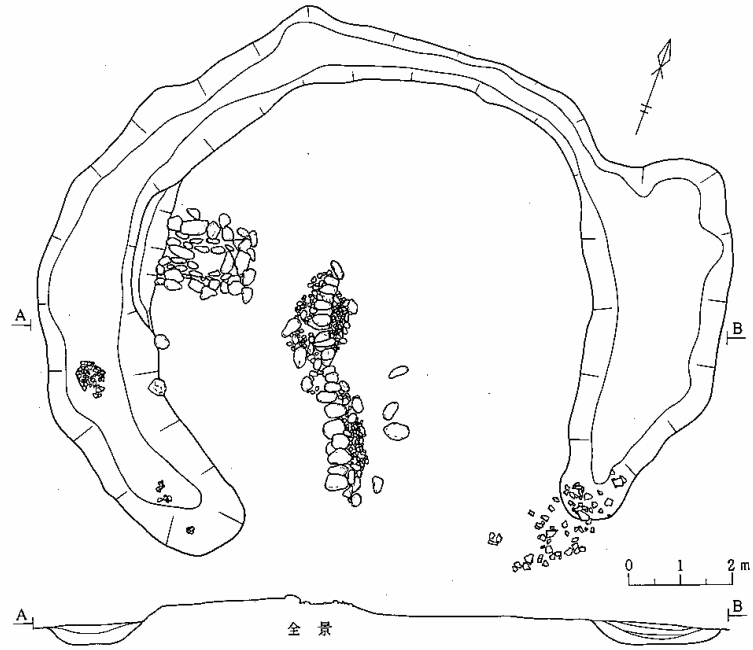
確認状況：南北に延びる畦畔下に石室西半分の側壁最下段、石室床面の一部が遺存していた。この畦畔の東の水田面は西のそれより約20 cm低く、石室の東半分及び奥壁はこの東の水田によって破壊されたものと考えられる。確認面は東西とも水田面下20～25 cmの地山面である。周湟は完掘した。

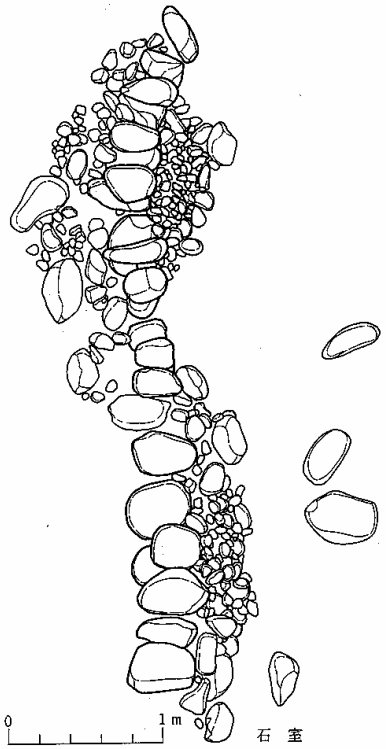
主体部：横穴式石室で、玄室部に胴張りを有する。〈玄門部〉〈表門部〉の床には 20×30 cm程度の石材が埋置され、石室各部の床の区切りを成しているが、玄門、表門の側壁に特殊妬材は使用されていない。裏込めは、玄室部分にのみ認められ、羨道部では確認できない。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形は羨道部で側壁外側の線に一致し、玄室で裏込めの外側の線にほぼ一致する。

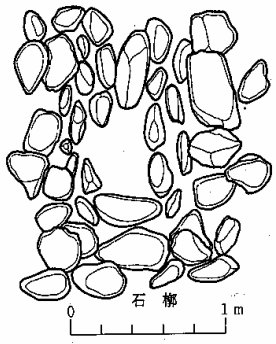
外部施設：〈周湟〉は内周がほぼ正円形で、その中心は玄室北半部に求められる。外周は北東部で極端にくびれ、不整形である。前庭部では途切れているが、削平を考慮すれば浅い掘り込みがあった可能性も考えられる。深さは石室東部側がやや深く北部から西部にかけては浅い。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、火山灰は認められない。

〈墳丘〉〈前庭〉は削平により失われている。

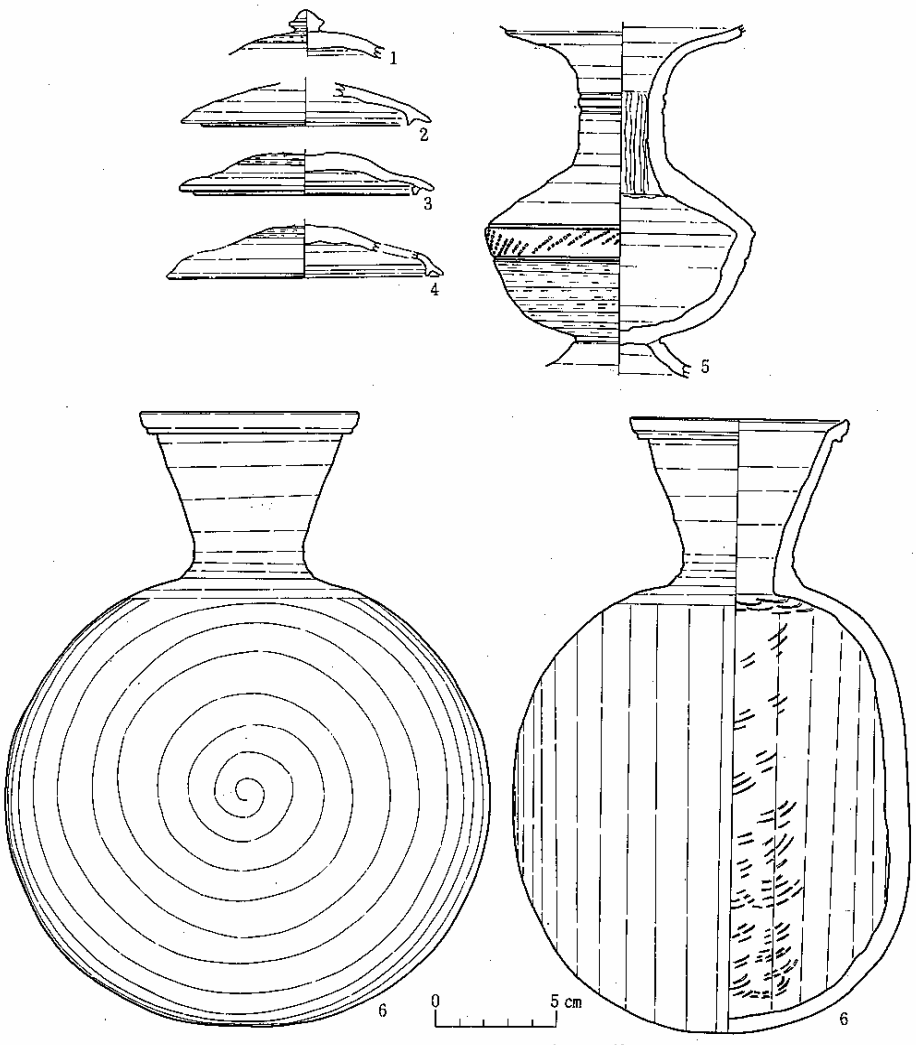
出土遺物：羨門東側の前庭・周湟底面・堆積土から、須恵器甕1点、台付長頸瓶1点、蓋4







第14図 第 204 号 墳

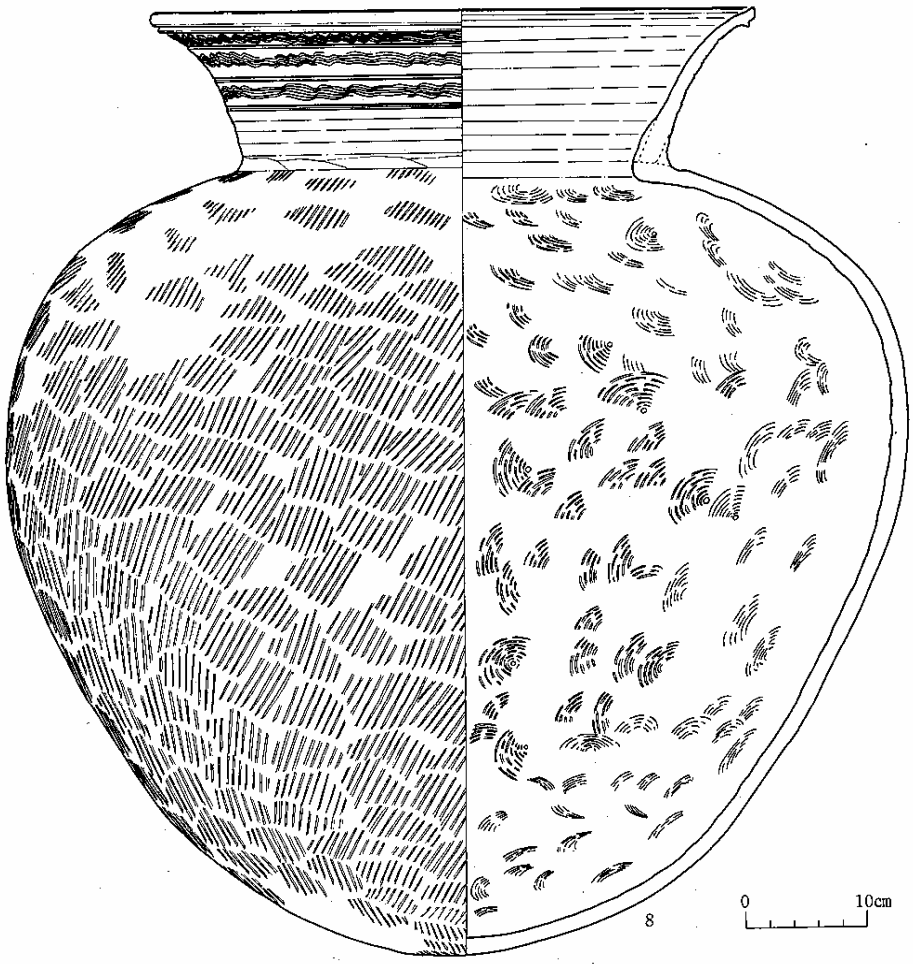


第15図　第204号墳出土遺物

点が、羨門西側の周湟から須恵器提瓶１点が出土している。須恵器甕、提瓶は前庭方向から周湟内に流れ込んだ状態で出土し、長頸瓶・蓋は甕の破片と混在していた。また周湟北西部の堆積土から須恵器甕１点が単独で出土しており、底部が周湟底面よりわずかに離れていた。

第205号墳

確認状況：水田面下約 20 cmの地山面で残存する石室の用材が確認された。主体部は元位置を保つと考えられる数個の側壁用材を除き裏込め、床に至るまですべて破壊されている。その他、石室西方の周湟の一部が攪乱を受け、更に羨門部西側を通り、前庭を横切る溝状の攪乱が認め



第16図　第204号墳出土遺物

られた。周湟は遺物の出土する南端部と、土層断面を観察する部分のみを掘り上げた。

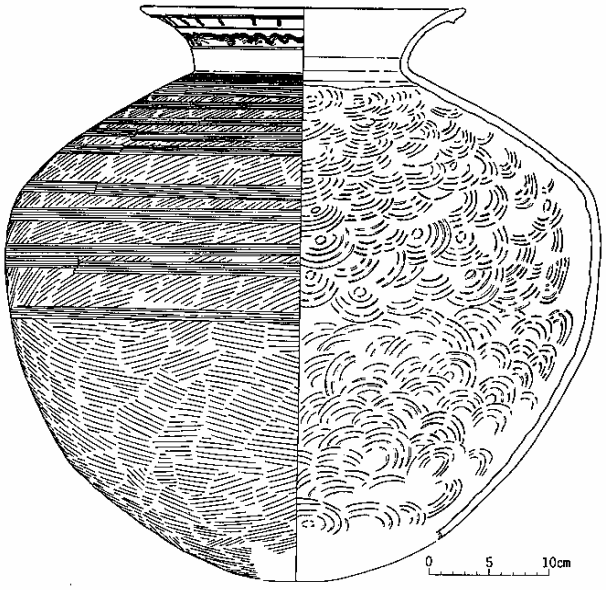
主体部：横穴式石室である。詳細な構造は破壊が著しいため確認できない。

外部施設：〈周湟〉は北部が調査区外に延びるため観察できないが、内周はほぼ正円形で、その中心は玄室北半部にある。前庭部で途切れるが削平を考慮すれば、浅い掘り込みがあった可能性も考えなければならない。深さは石室の東西で深く南に向かって徐々に浅くなっている。北側の深さは確認していない。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、火山灰は認められない。〈墳丘〉盛土は削平され失われたと考えられるが、羨門の西側に葺石の一部と考えられ

る石列が残存している。この葺石と周湟の間には幅 60 cm前後のテラスと考えられる平坦面が介在する。

〈前庭〉羨門の西側の葺石前端から南方に直線的に延びる石列が認められ、前庭の施設の一部であると考えられる。

出土遺物：羨門東側の周湟底面、堆積土より土師器、須恵器が出土している。明確な流れ込みの状態は示さないが、堆積土各層に含まれる破片で接合するものが多い。図化できたものは、土師器甕 1 点、須恵器長頸瓶 3 点、短頸瓶 1 点、甕 1 点である。完形品は全くない。



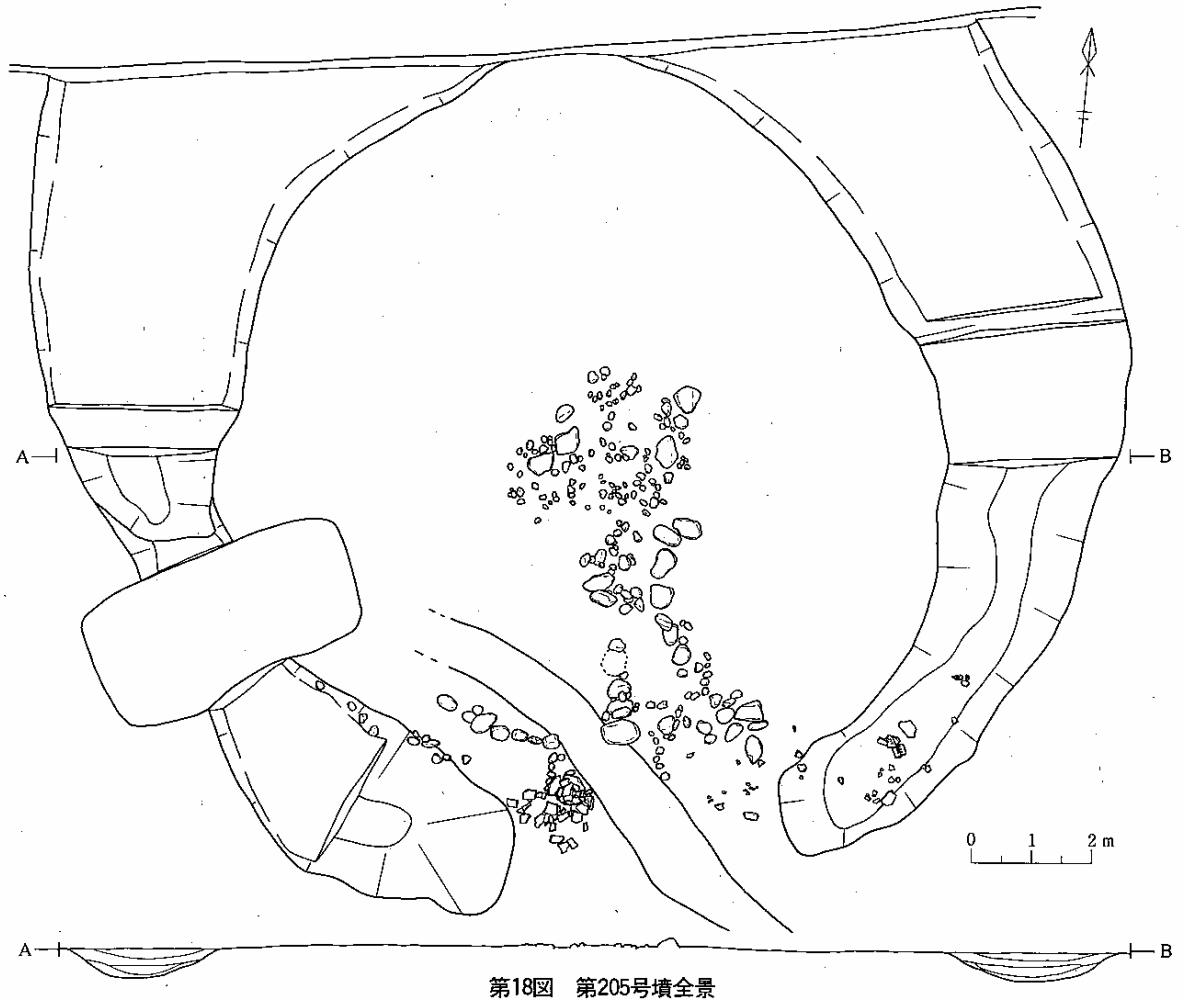
第17図　第204号墳出土遺物

また前庭から土師器、須恵器が出土している。図化できたものは、土師器坏 5 点、埦 1 点、高坏 1 点、須恵器坏 3 点、甕 1 点である。須恵器甕はその底部が地山に設置された状態でつぶれており、それらの中に土師器、須恵器の坏類が混在している。周湟内出土のものに比べ完形品が多い。この他図示できなかったものの中に断面三角形のカエリをもつ須恵器蓋がみられる。

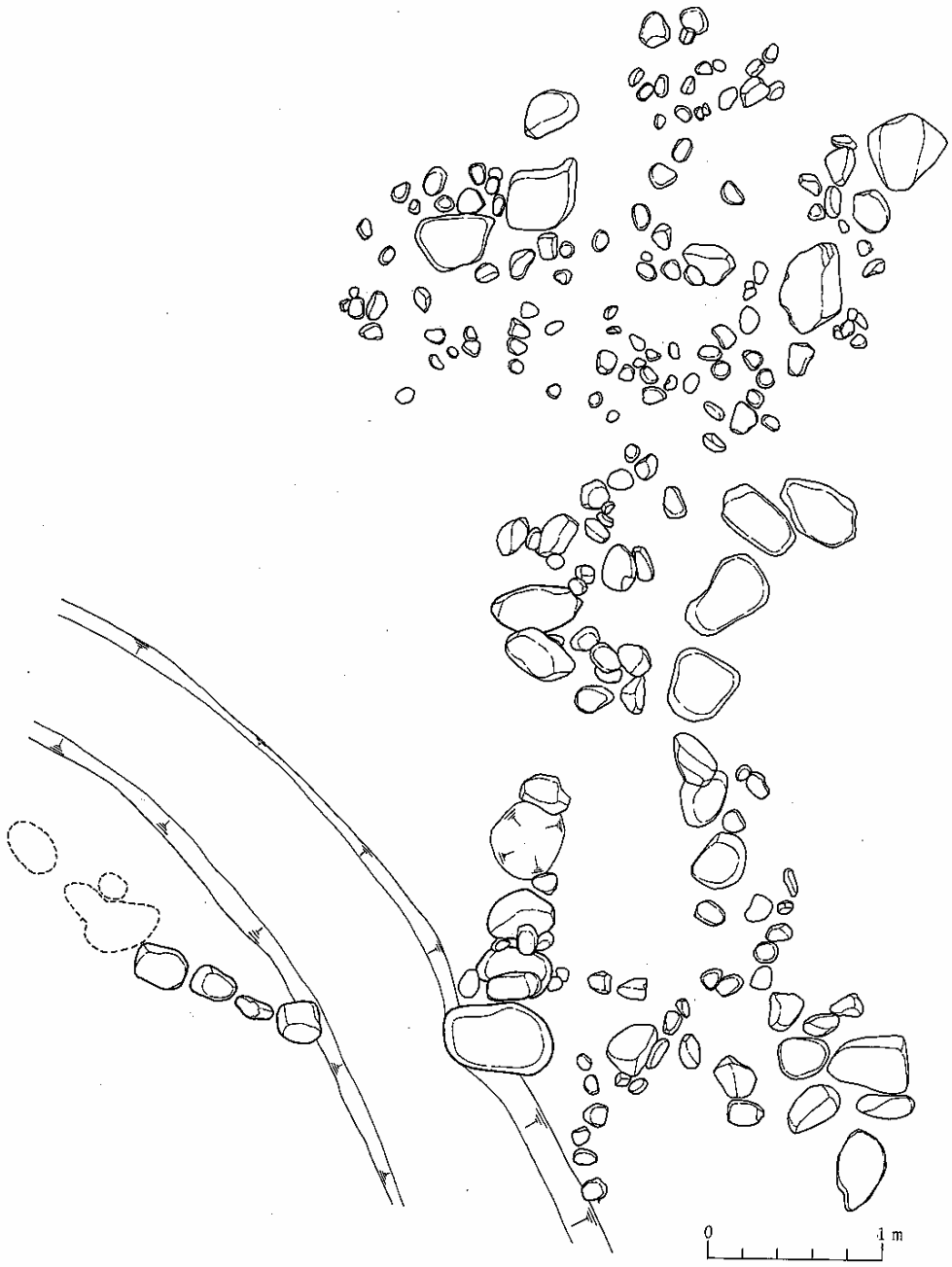
第 221 号墳

確認状況：水田下 20 cmの黒褐色土層上面で残存する石室の上面が確認され、石室床面は更に 30 cm下で確認された。西側の周湟中に攪乱壙が認められ、北西の周湟の一部も溝状の攪乱を受けている。しかし、石室については側壁が 2～3 段残存し、保存状態は良好だった。これは、本墳の所在する水田が客土によって造成されたためである。本古墳は計画水路にかかるために遺構全体を精査した。

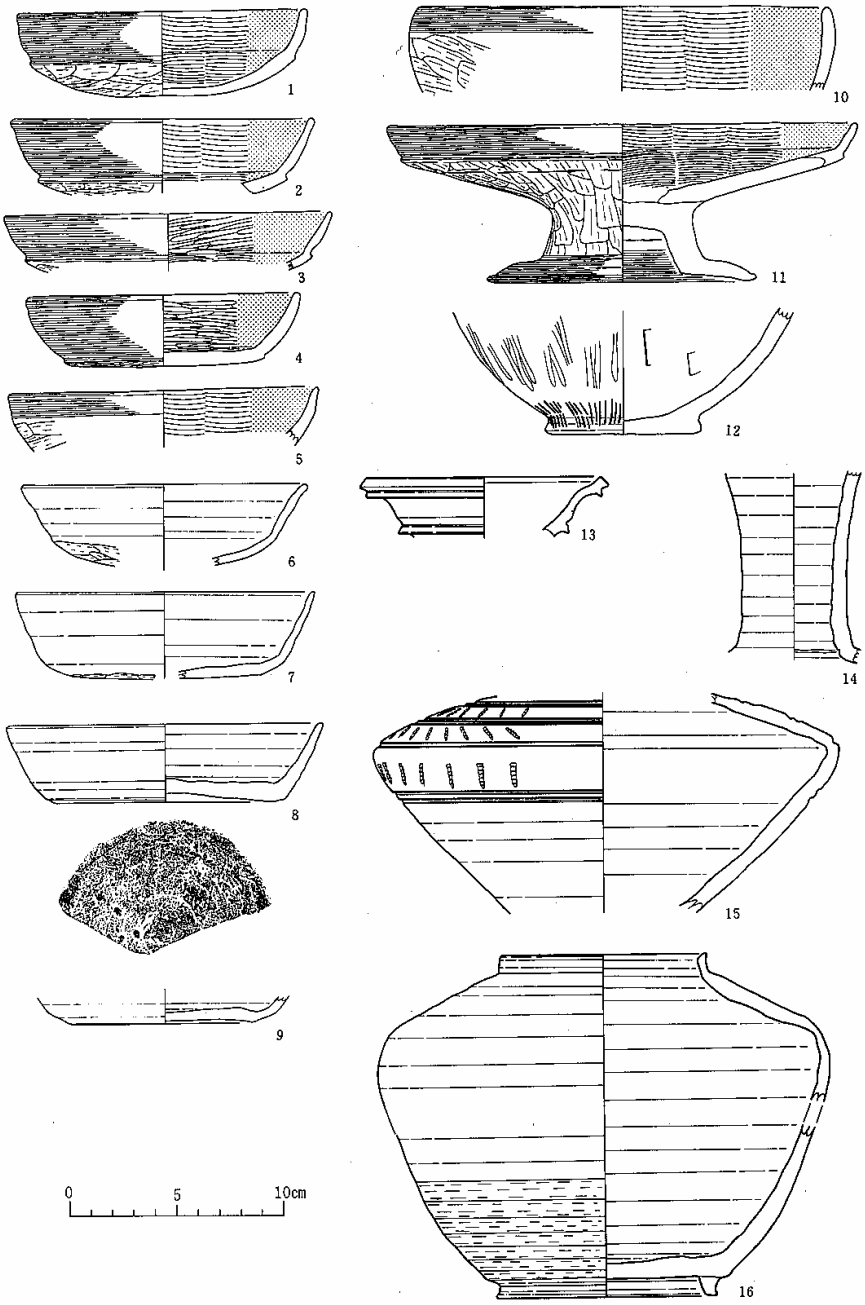
主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。〈側壁〉は互目積みで持ち送りがみられる。〈奥壁〉には直方体の石が使用されており、同様の石が数段積まれていたと考えられる。〈玄門部〉の側壁はやや大きめの細長い石を通目積みにし突出部が造り出されている。〈羨門部〉の側壁にはやや大きめの偏平な石が使用されている。〈羨道部〉には円礫が無秩序に充塡されているが、その両端の玄門部及び羨門部ではやや大きめの石が規則的に積み上げられている。〈床面〉は羨門部、玄門部に偏平な石を 3 個ずつ埋置して梱石とし、各部の区切りを成してい



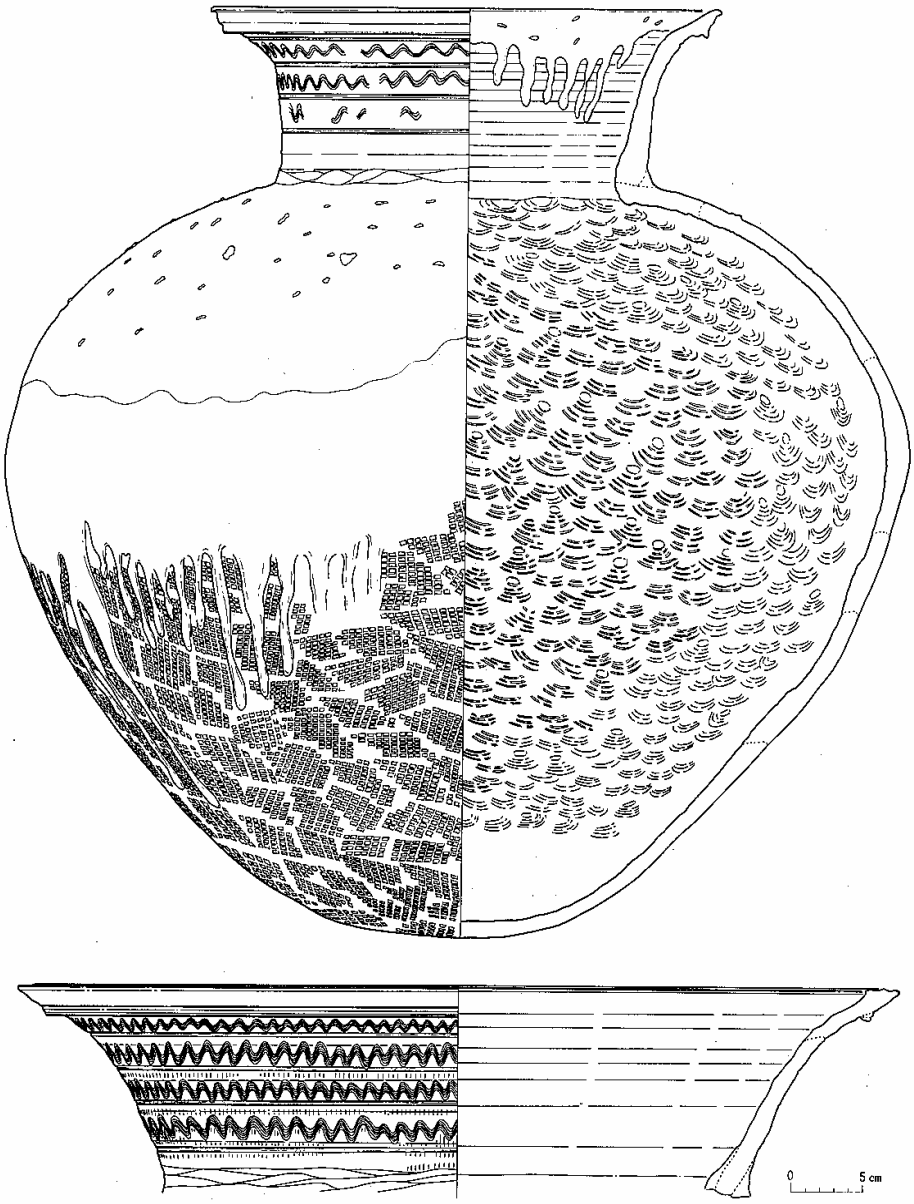
第18図　第205号墳全景



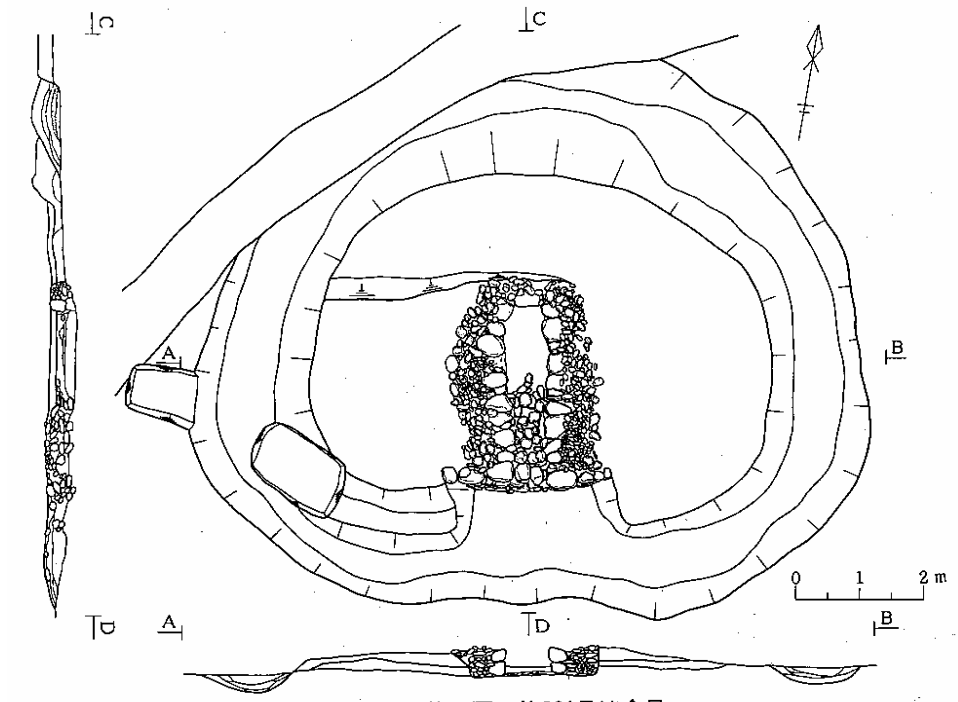
第19図　第205号墳石室



第20図　第205号墳出土遺物



第21図　第205号墳出土遺物

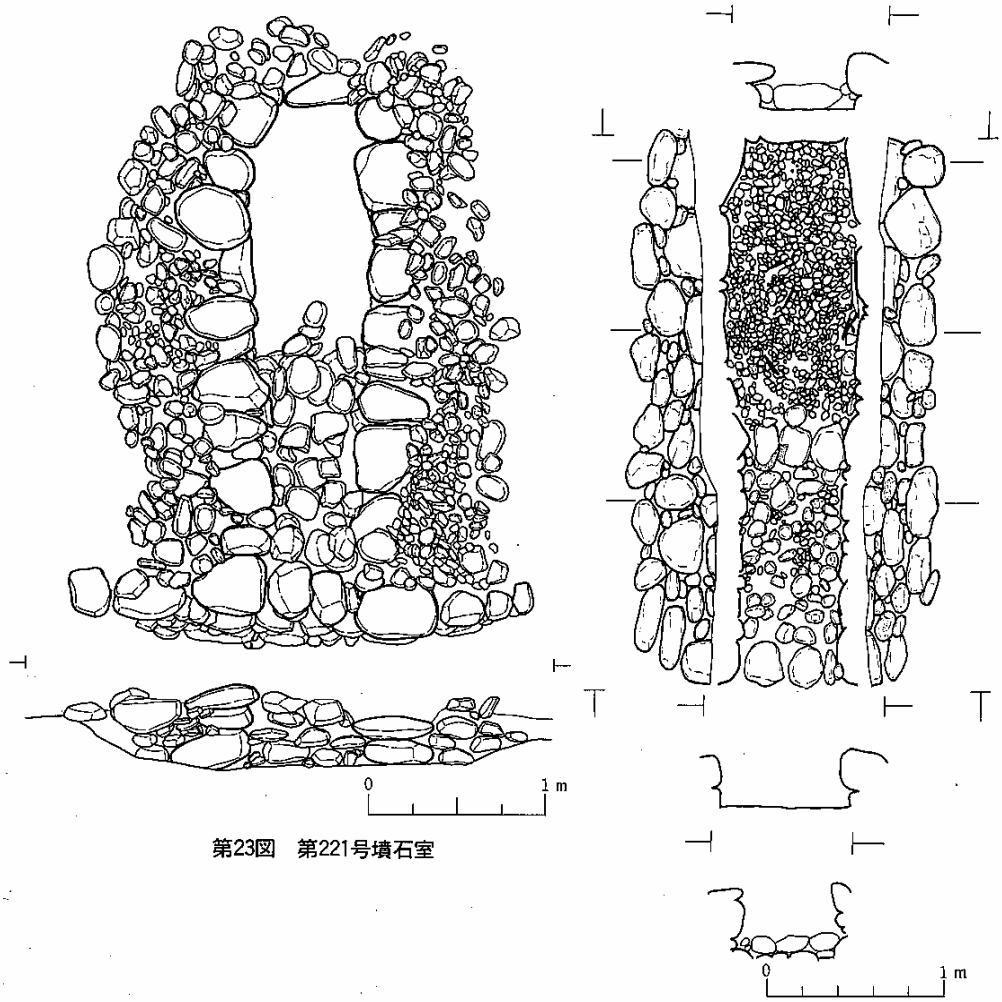


第22図　第221号墳全景

る。羨道部の床は礫の大きさが不揃いで、しかもまばらでありかなり粗雑である。玄室部の床は羨道の床より約10㎝高く、前述の玄門部の石は玄室から羨道に向かって傾いている。石室は封土、旧表土、地山を掘ん込んで構築されていて、〈掘り方〉の平面形は裏込めの外郭線にほぼ一致し、石室の形態に相似している。〈裏込め〉は円礫が無秩序に充塡されているが、部分的に控え積みも認められる。

外部施設：〈周波〉は内周、外周ともやや東西につぶれた円形を呈し、その中心は玄室北半部にある。南西で第222号墳の周湟に接し、その一部が本墳の周湟を破壊している。深さは北側で深く南に行くにつれ浅くなり前庭部にいたる。堆積土は主に褐色系シルト質土壙からなり、上層部に灰白色火山灰が認められる。〈墳丘〉は西部に盛土の一部が残存するほか、旧表土は周湟内のほぼ全域に残存している。葺石は認められないが、石室南半部にはテラス状の平坦面が認められる。〈前庭部〉羨門前の周湟内側の法面を断ち割るようにして平坦面が形成され、羨門の左右には袖状に石が組まれている。この平坦面のレベルは、石室掘り方の底面のレベルとほぼ一致している。

出土遺物：羨門部東側の周湟底面、堆積土より土師器坏4点、須恵器長頸瓶1点、甕2点が前庭中央底面より須恵器壺1点が出土している。長頸瓶を除きいずれも底部が遺構面に接地し



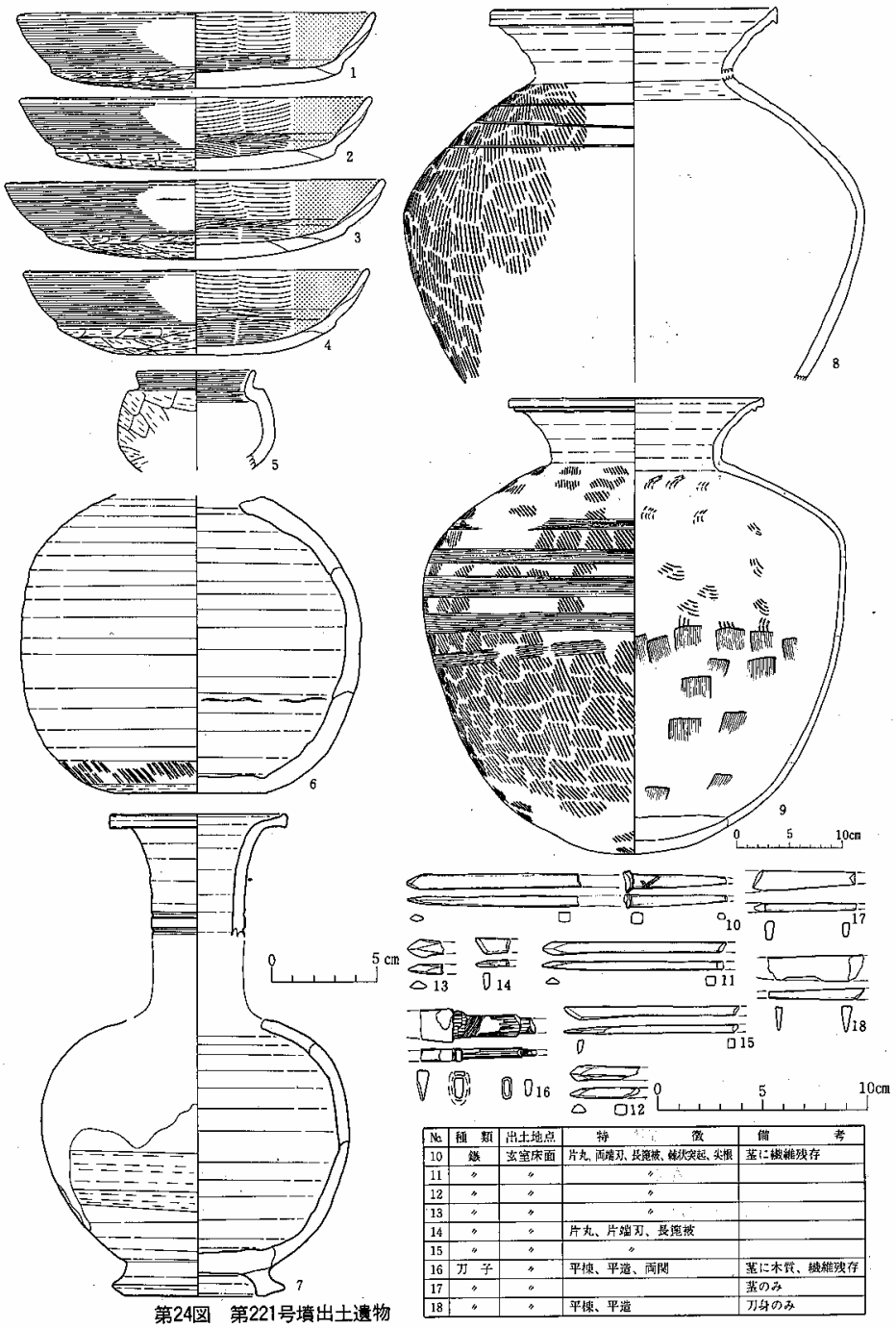
第23図　第221号墳石室

た状態である。長頸瓶は破片となり散乱していた。また玄室床面より、直刀、刀子、鉄鏃が出土している。図化できたのは、刀子２点、鉄鏃６点である。

第224号墳

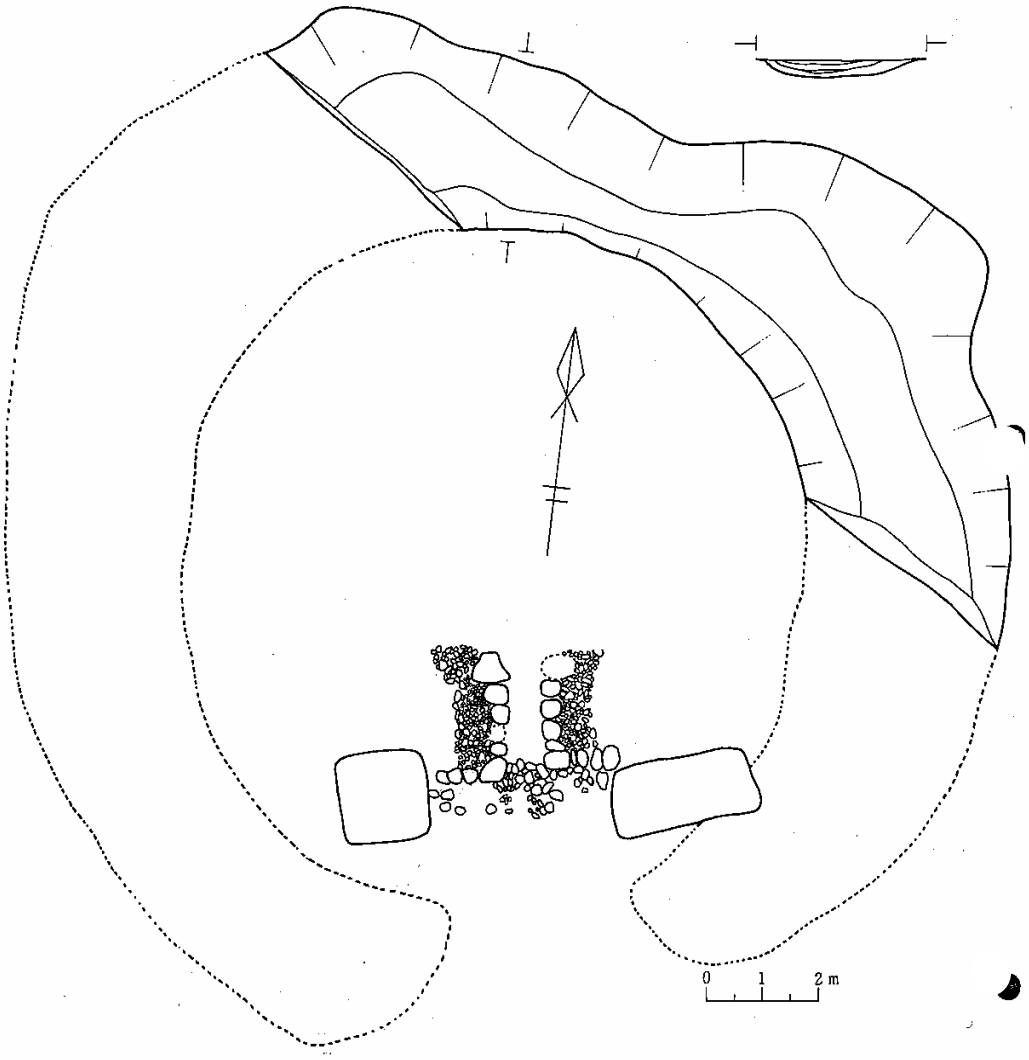
確認状況：水田直下 30 cmで残存する石室の上面が確認された。石室は羨道、羨門部のみを確認し、玄室部および前庭部については手を加えなかった。羨門の左右に破壊した石室の石材が投棄された攪乱壙があるが、石室自体の保存状態は良好である。周湟は、計画水路にかかる北東部のみを掘り、その他はプランのみを確認した。

主体部：横穴式石室である。〈玄門部〉側壁に特殊な形態の石を用いている。



No.	種　類	出土地点	特　　徴	備　　考
10	鏃	玄室床面	片丸、両薙刃、長鋭被、棘状突起、尖根	茎に繊維残存
11	〃	〃	〃	
12	〃	〃	〃	
13	〃	〃	〃	
14	〃	〃	片丸、片端刃、長鋭被	
15	〃	〃	〃	
16	刀　子	〃	平棟、平造、両関	茎に木質、繊維残存
17	〃	〃		茎のみ
18	〃	〃	平棟、平造	刀身のみ

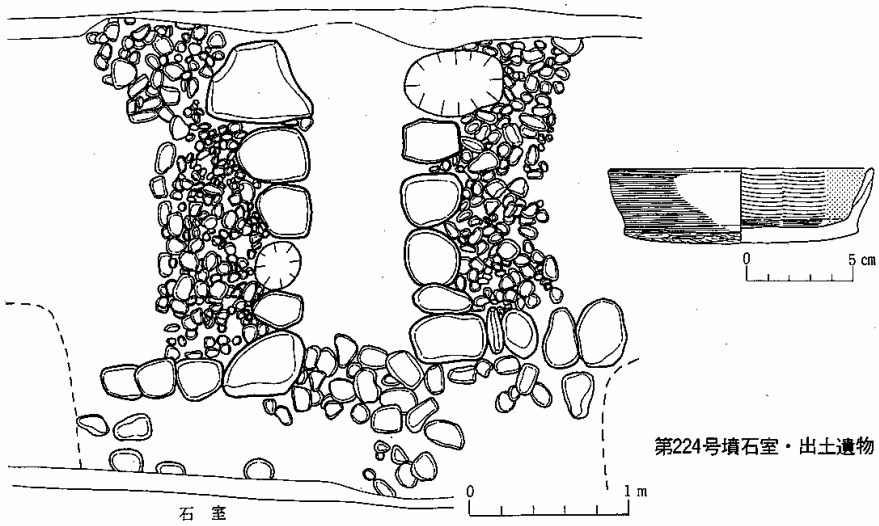
第24図　第221号墳出土遺物

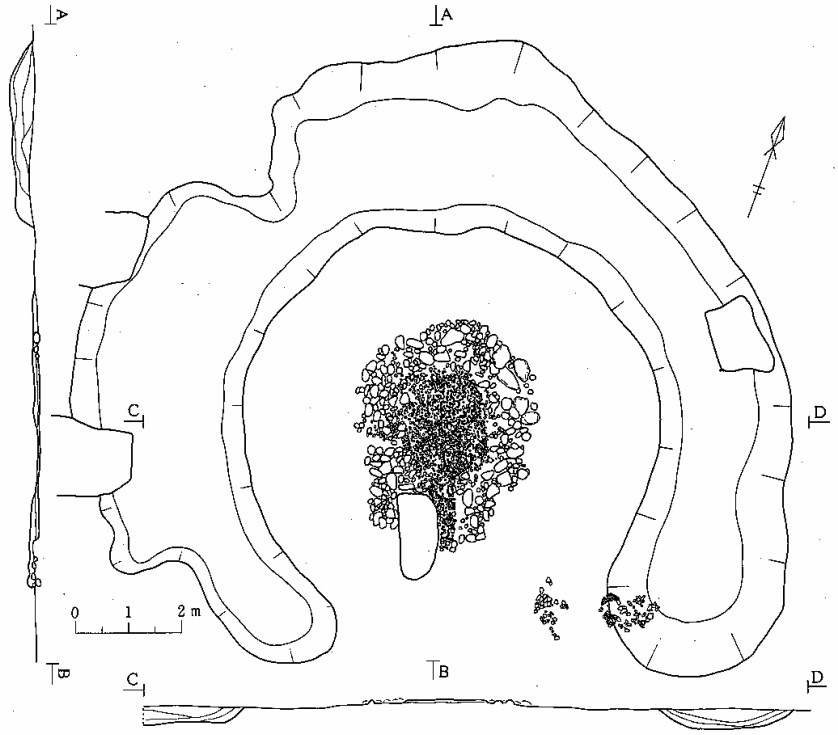


第25図　第224号墳全景

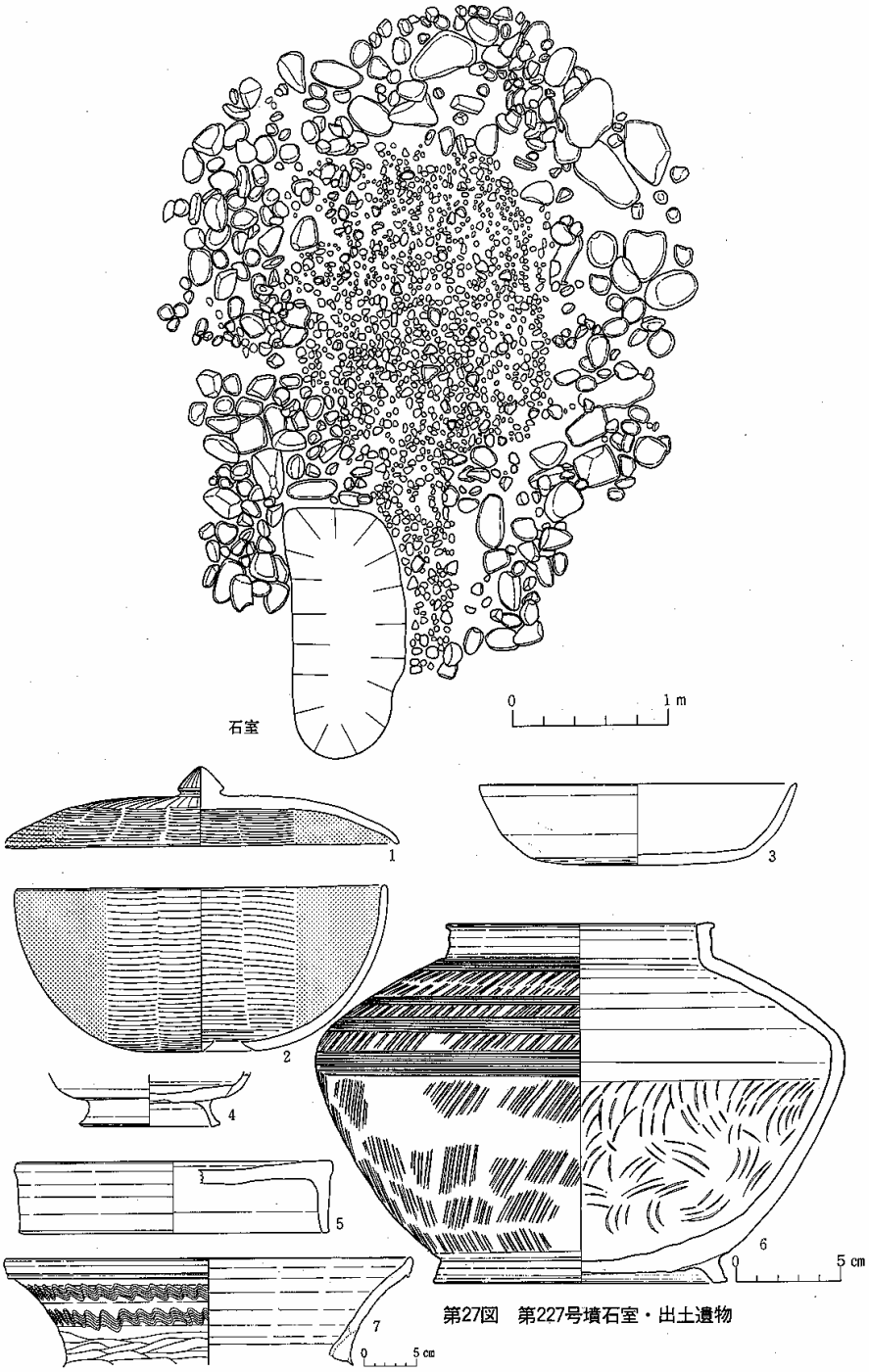
外部施設：〈周湟〉は内外周ともほぼ正円形で、前庭部で途切れている。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなる。〈墳丘〉は削平されている。羨門の左右に葺石状の石列が残る。

出土遺物：前庭堆積土から土師器、須恵器が出土している。図化できたのは土師器坏１点のみである。





第26図　第224号墳石室・出土遺物，第227号墳全景



第27図　第227号墳石室・出土遺物

第227号墳

確認状況：水田面下20㎝の地山面において残存する石室の上面が確認された。石室の側壁、奥壁等は全て抜き取られ、床面の敷石と裏込めの最下部のみがかろうじて遺存している状態で、石室の南端部及び、周湟の東部、西部には破壊した石室の用材を投棄した攪乱壙が認められた。周湟は完掘した。

主体部：横穴式石室で玄室部は胴張りプランであったと考えられる。残存する石室の最下部は地山を掘り込んで構築されたものであるが、〈掘り方〉の明確な範囲、形状は確認できなかった。

外部施設：〈周湟〉は内周が正円形でその中心は玄室中央部付近に想定される。外周は北西部と南西部で若干内側にくびれるが、ほぼ正円形を呈する。前庭部では途切れているが、削平を考慮すれば浅い掘り込みがあった可能性もある。深さはほぼ一様で底面の凹凸も少ない。堆積土は主に褐色系シルト質の土壌よりなる。〈墳丘〉〈前庭〉は削平により失われている。

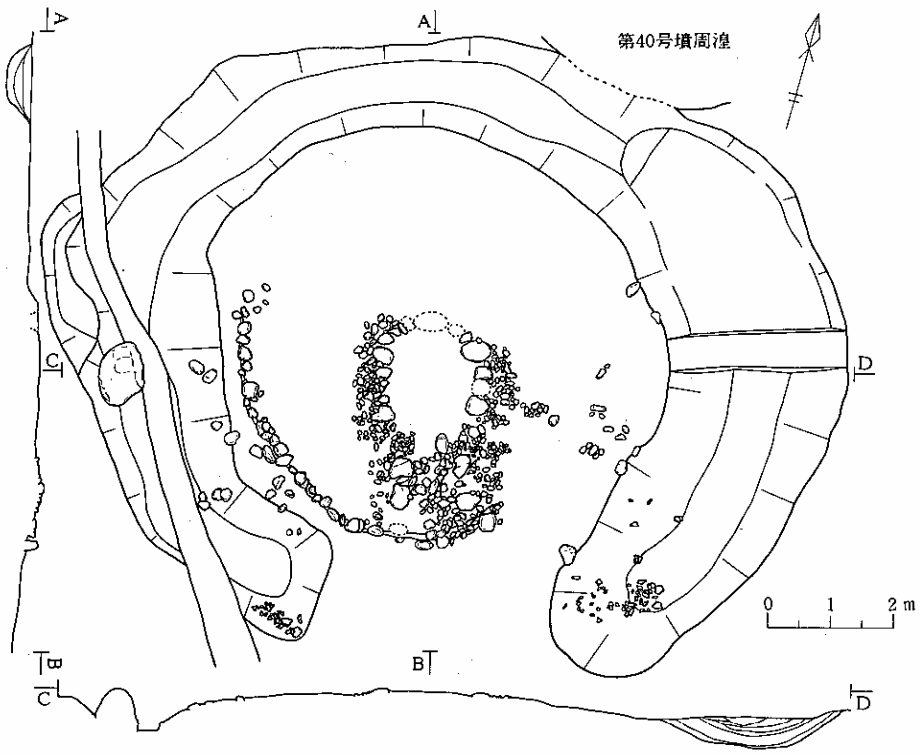
出土遺物：前庭部周辺から土師器埦、甕各1点、須恵器坏1点、高台付坏1点、短頸壺1点、蓋1点、甕1点が出土している。土師器埦、蓋（第27図1）、須恵器坏、高台付坏は、羨門部の南西より出土した。出土位置が不明確なまま取り上げてしまったが、周湟堆積土もしくは前庭堆積土より出土したものと考えられる。いずれも少破片となっていた。須恵器短頸壺、蓋（第27図5）、甕は羨門部南東の前庭より出土した。短頸壺、蓋はいずれもほぼ完形で出土位置、口径からセット関係にあるものと考えられる。甕はその口縁部が前庭東端に口を下にした状態で出土し、体部は少破片となって周湟斜面に沿って前庭方向から流れこんだ状態を示していた。

第233号墳

確認状況：水田面下 30 ㎝で残存する石室の上面が確認された。確認面では奥壁、玄門、羨門部をはじめかなりの数の側壁用材が抜き取られているが、ボーリング調査を行ったところ、石室床面は40㎝下に残存していることが確認された。攪乱も認められないことから石室下部の遺存状態は比較的良好であると考えられる。西側の周湟は溝状の攪乱を受けている。周湟については、北西部の一部を除き全掘した。

主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。確認面が高いため石室内の細部構造は観察できない。石室は、地山を掘り込んで構築されていると考えられるが、石室の〈掘り方〉は確認できなかった。

外部施設：〈周湟〉は内外周ともほぼ正円形で、その中心は玄室北半部付近に想定される。前庭部では途切れるが削平の影響を考慮すれば浅い掘り込みがあった可能性もある。深さは東側が深く西側では浅い。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなる。〈墳丘〉は南西部の封土



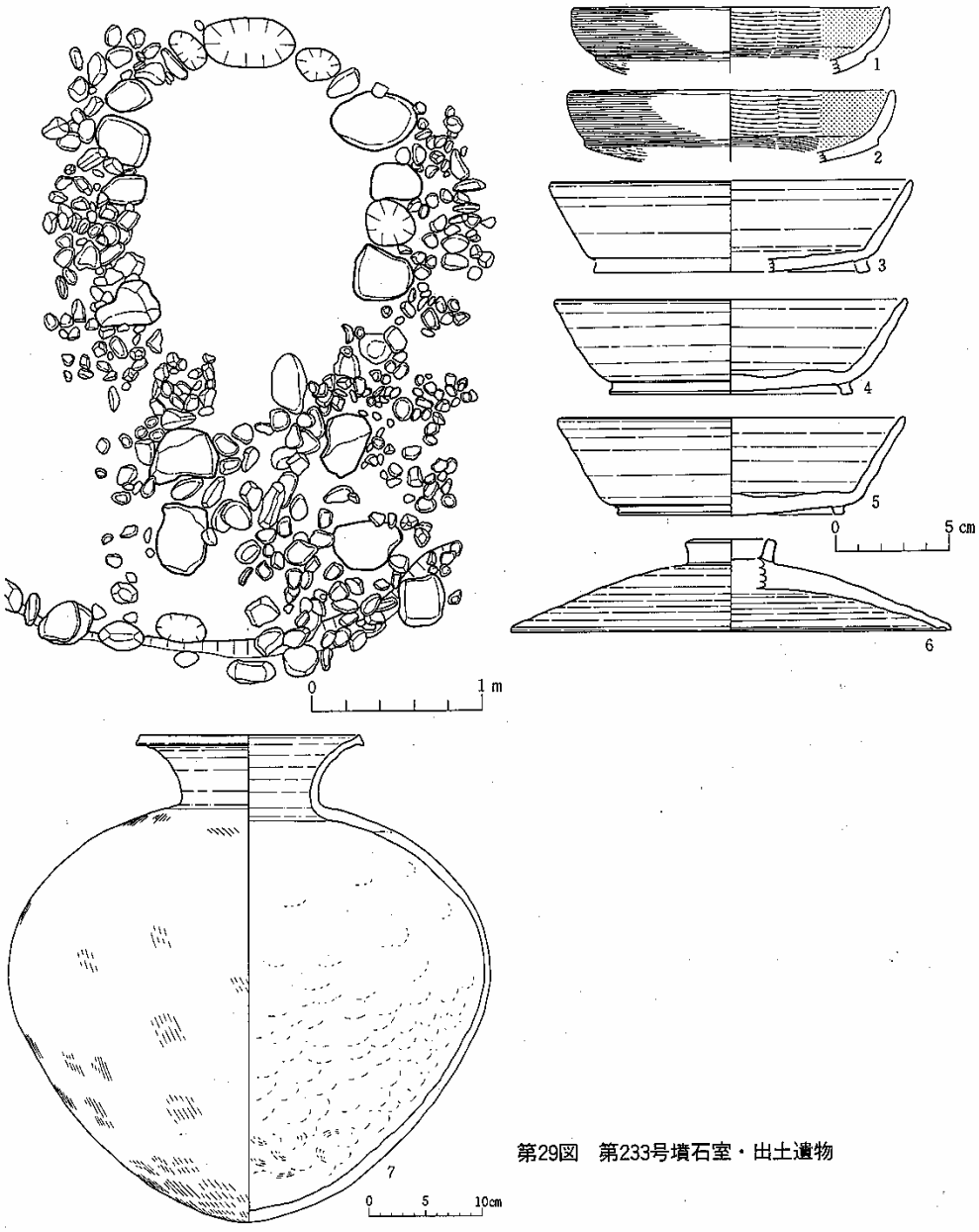
第28図　第233号墳全景

の残存が良好で葺石1～2段遺存し、更に葺石と周湟の間には幅30～50㎝のテラス状の平坦面が認められる。しかし、その他の部分では削平が著しく地山の礫層が露出しており、封土、葺石は残存していない。〈前庭〉は削平により失われている。

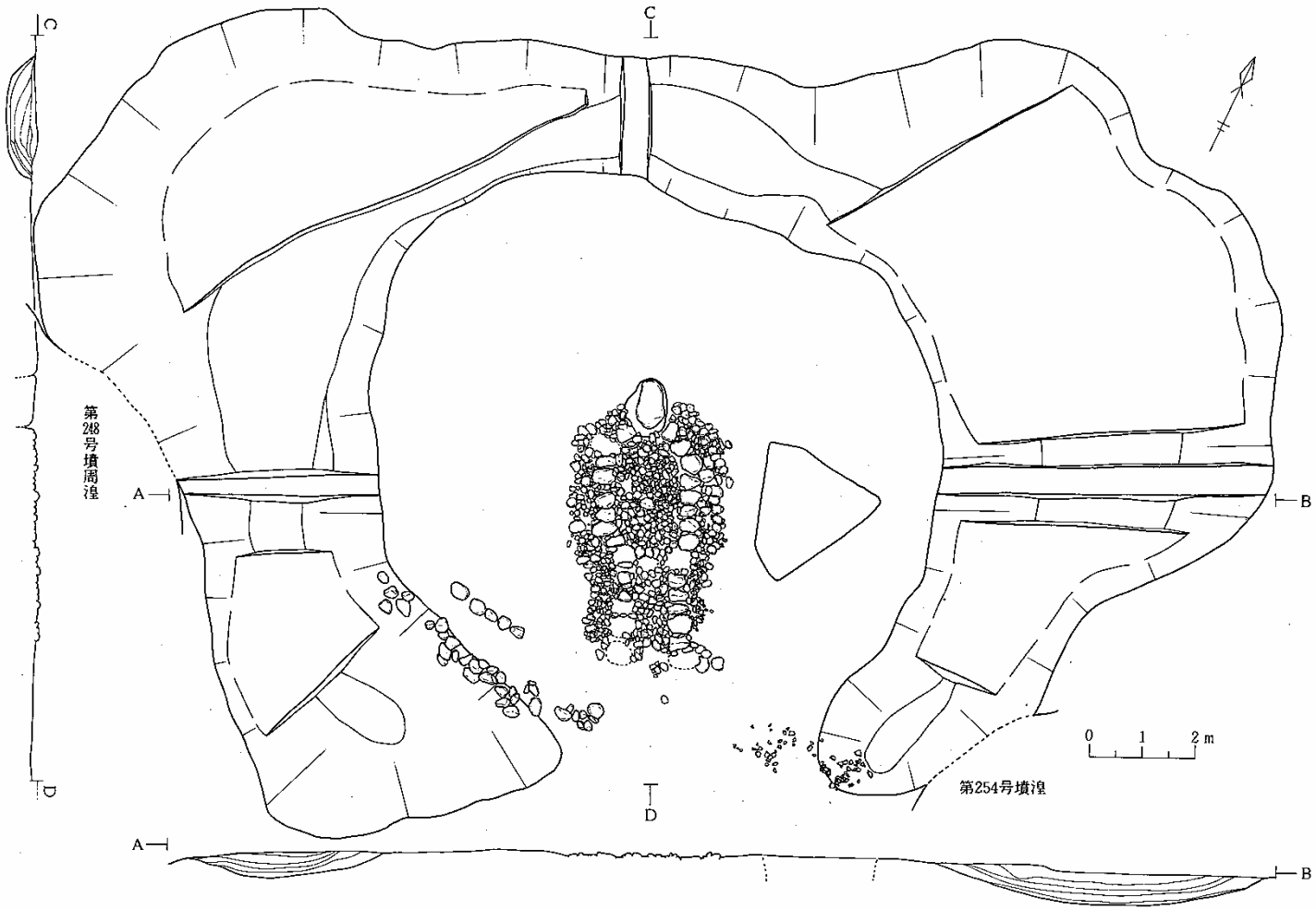
出土遺物：前庭部周辺から須恵器、土師器が出土している。細片となっているものが多く、図示できたものは土師器坏2点、須恵器高台付坏3点、蓋1点、甕1点である。土師器坏、須恵器蓋は羨門部南西の周湟斜面に前庭方向から流れ込んだ状態で出土し、須恵器甕（少破片となっており図示できない）の破片と混在していた。須恵器高台付坏、甕は羨門部南東の周湟斜面から底面にかけて前庭、墳丘方向から流れ込んだ状態で出土し、その一部は周湟堆積土のかなり上層にも含まれていた。

第246号墳

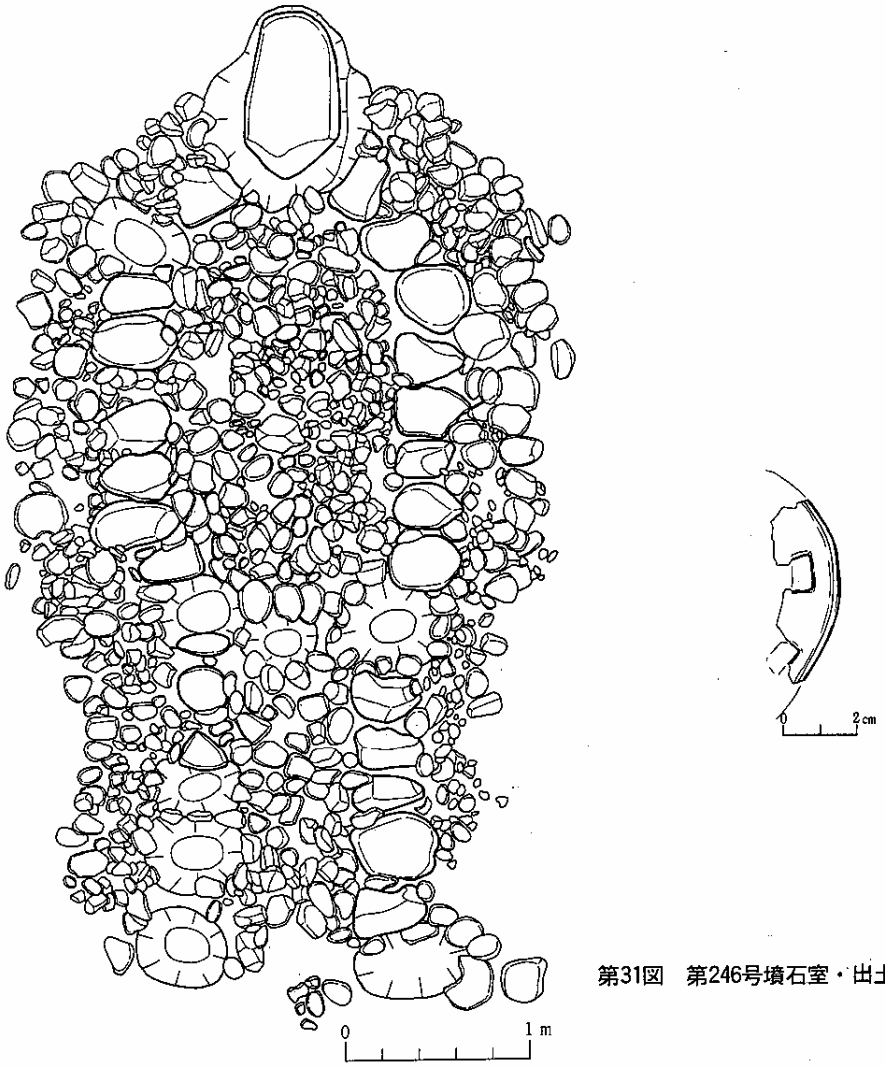
確認状況：水田面下 20 ㎝の地山面で残存する石室の上面が確認され、石室床面も同じレベルで露出した。羨門部、玄門部の石材及び即壁が3ヶ所抜き取られ、奥壁は転倒している。しかし、その他の側壁最下段、石室床面等は良好に遺存している。石室の東部には破壊された石室



第29図　第233号墳石室・出土遺物



第30図　第246号墳全景



第31図　第246号墳石室・出土遺物

の用材が投棄された攪乱壙が認められる。周湟は南端部、土層断面観察部及び計画水路にかかる北側の一部のみを掘り上げた。

主体部：横穴式石室で玄室部に同張りを有する。〈奥壁〉には転倒した状態で確認されたやや偏平な石が立てられていたものと考えられる。〈羨門〉〈玄門部〉の床には石室床の各部を区切る石が埋置されていたことが抜き取り痕跡から確認できる。石室は、地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込めの外側の線に一致し、石室のほぼ相似形を呈している。外部施設：〈周湟〉は内周がほぼ正円形で、その中心は玄室奥壁前端部付近に想定される。外周は不整形で第248号墳に接する西部と、第254号墳に接する南東部とで委縮する一方、東部

及び北西部では大きく外に張り出している。なお、第248号墳、第254号墳の周湟の一部が本墳の周湟を破壊している。前庭部で途切れるが、削平を考慮すれば浅い掘り込みがあった可能性も考えられる。堆積土は主に褐色シルト質土壌よりなる。〈墳丘〉は削平されているが、羨門の西側に葺石の一部と考えられる石刻が残存している。この葺石の間には、幅50㎝前後のテラスと考えられる平坦面が存在する。〈前庭〉も削平されているが、羨門西側の周湟内側の斜面には、前庭の構造の一部を構成すると思われる葺石状の石の配列が認められる。

出土遺物:羨門部南東の周湟底面から須恵器甕 1 個体分が出土しているが、図化できなかった。玄室の床面から鍔が出土している。

第247号墳

確認状況：水田面下 20 ㎝の地山面で残存する石室の上面が確認された。ボーリング調査を行った結果、石室床面は石室の確認面から約40㎝下に残存していることが確認され、石室の遺存状態は良好であると考えられる。周湟は全掘した。

主体部：竪穴式石室であるが、壁材、裏込めの状態や胴張りプランである点等、その構造は本古墳群に主体的な横穴式石室のそれと極めて類似した様相を示している。〈奥壁〉北側妻部は円柱状の石材を縦位に使用した一石構造であるのに対し、南側妻部は多密使用によりカーブを持たせている。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込め外側の線に一致し、楕円形を呈している。

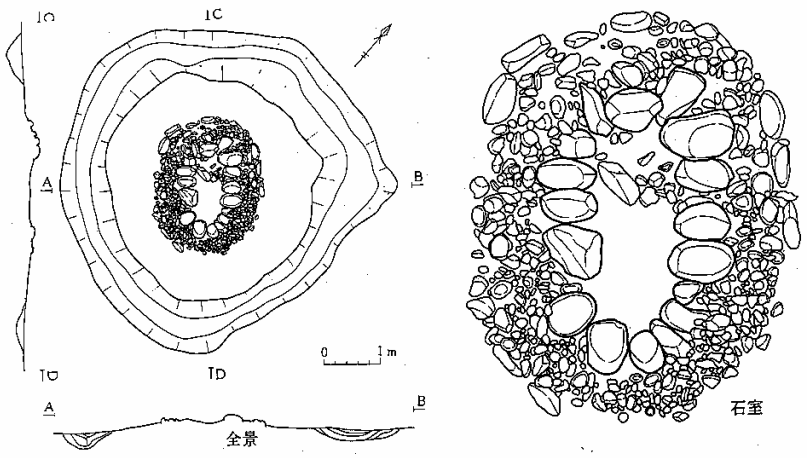
外部施設：〈周湟〉は内外ともほぼ正円形で、その中心は石室中央部に求められる。石室を全周し、深さも一様である。堆積土は主に褐色シルト質土壌からなる。〈墳丘〉は削平により失われたと考えられる。

出土遺物：遺物の出土はない。

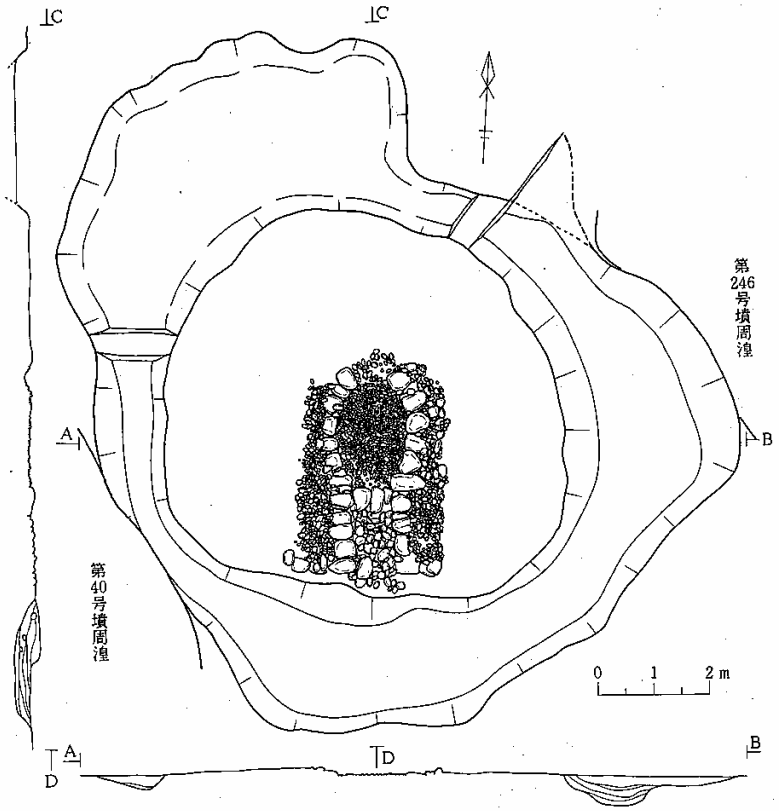
第248号墳

確認状況:水田面下15㎝の地山面で残存する石室の上面が確認され、石室床面もそれとほぼ同じレベルで露出した。石室は奥壁が失われているが、その他は遺存状態が良好で攪乱壙も認められない。周湟は北西部を除き掘り上げた。

主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。〈玄門部〉の側壁はやや大きめの横長の石材を使用し、床には偏平で横長の石材が三個埋設され、梱石的な構造を示している。〈羨門部〉の側壁はやや大きめの偏平な石材を使用し、その床面には偏平で横長の石材が一個遺存しているが、本来、数石が配列されていたと考えられる。〈床面敷石〉は羨道部より玄室部が細かいものによって構成されているが、両者とも丁寧な造作である。石室は地山を掘り込んで構築さ



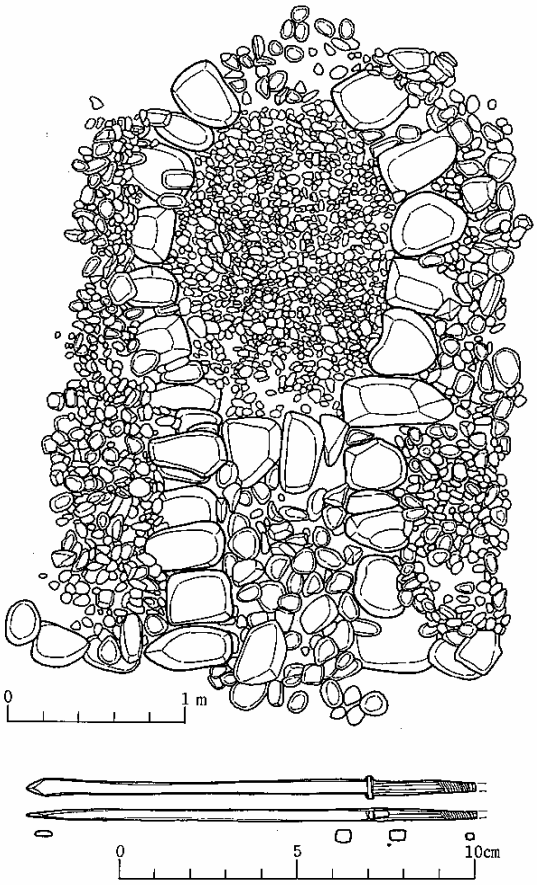
第32図　第 247 号 墳



第33図　第248号墳全景

れており、〈掘り方〉の平面形態は裏込め外側の線に一致している。

外部施設：〈周湟〉は内周が南側でやや膨れる不整な円形で、その中心は石室北半部に想定される。外周は不整形で、第246号墳に接する北東部、第40号墳に接する南西部で委縮するのに対して、南東部、北西部では張り出している。尚、第246号墳の周湟の一部を本墳の周湟が破壊し、第40号墳の周湟の一部が本墳の周湟を破壊している。深さは幅に比例し、南東部、北西部が深く、南西部、北東部は浅く、前庭部も深く掘り込まれている。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなる。〈墳丘〉は削平により失われたものと考えられるが、葺石の一部と考えられる石が羨門の東西に若干認められる。更に、周湟内周を不整形にしている南半の東西への膨らみは、対称形を示すことからテラス的な施設とも考えられる。〈前庭〉羨門前方の周湟は深く、平坦面等の施設の形成は認められない。

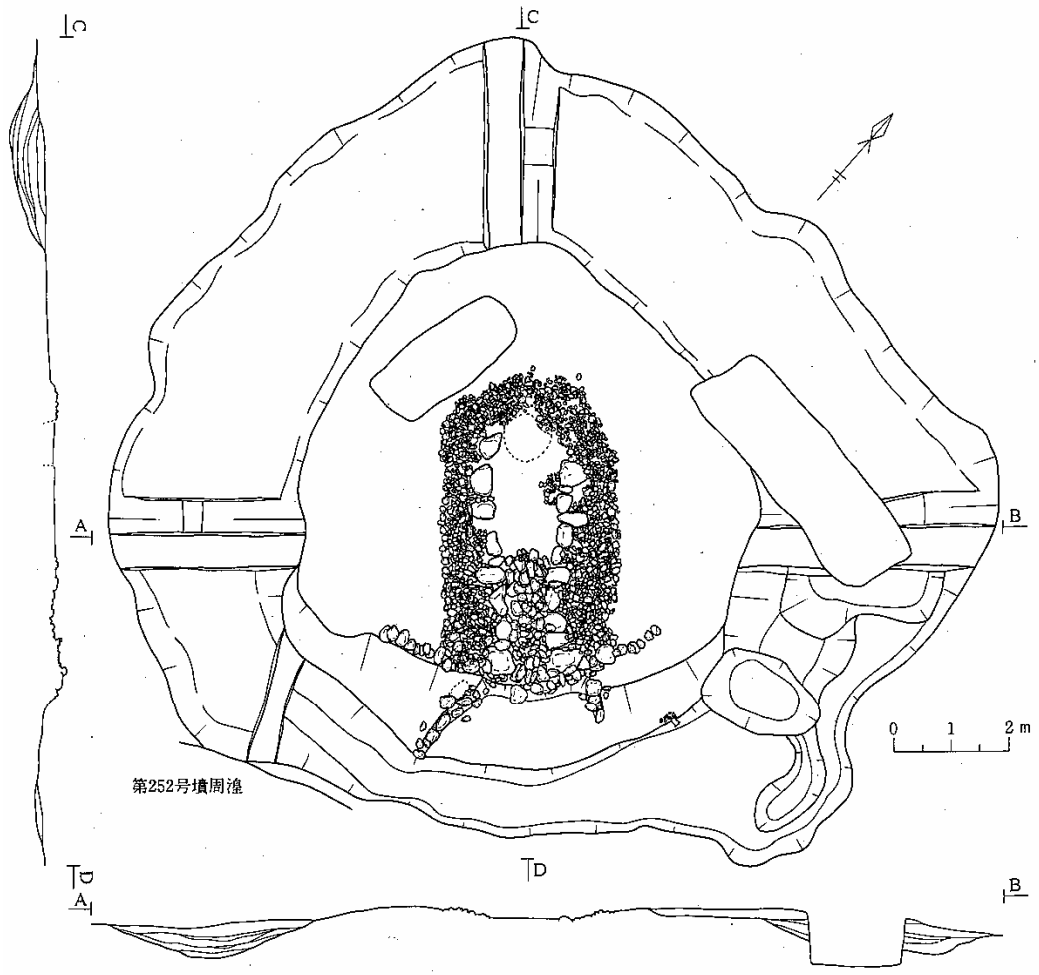


第34図　第248号墳石室・出土遺物

出土遺物：〈石室床面〉より鉄鏃、人骨の細片が出土しているが、図化できたのは鉄鏃1点のみである。

第250号墳

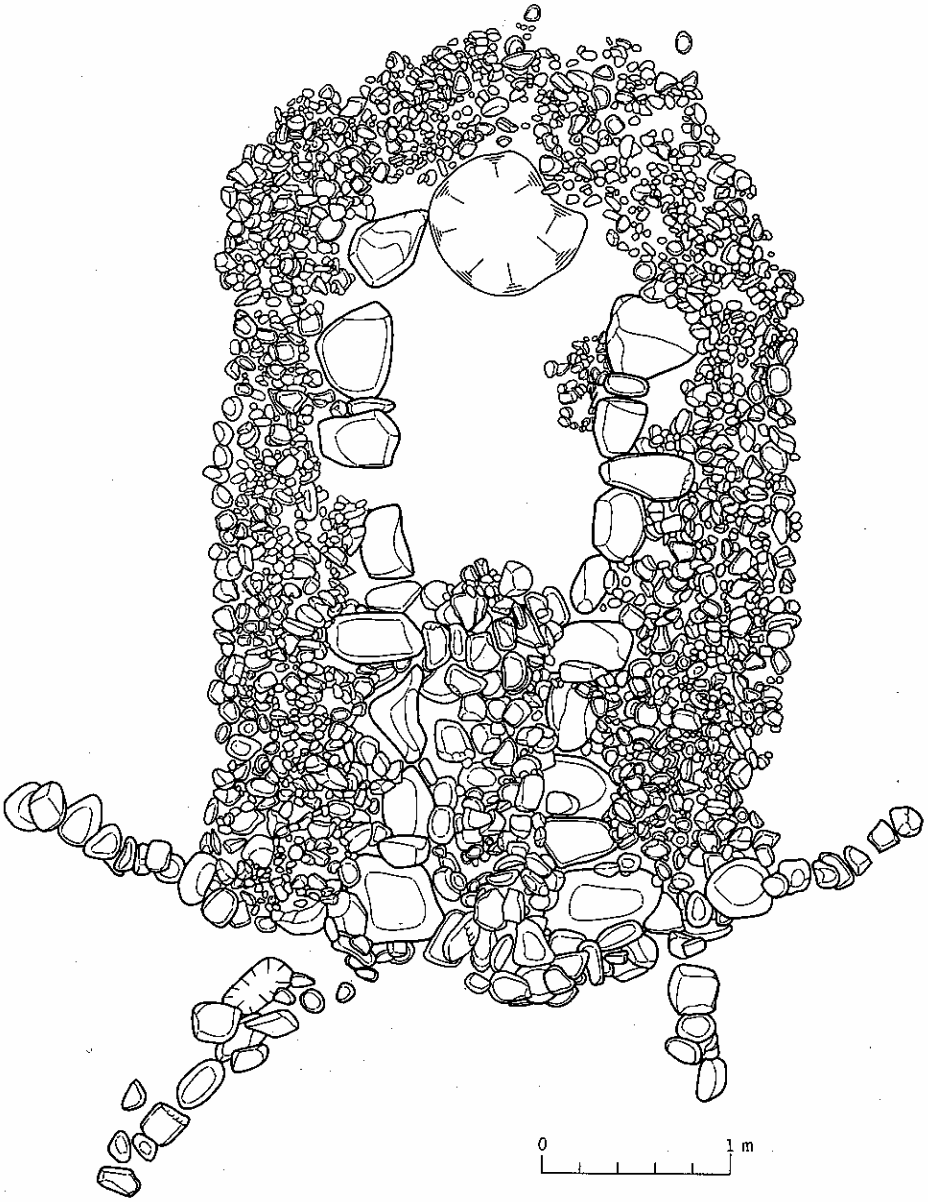
確認状況：水田面下 20 cmの地山面で残存する石室の上面が確認された。ボーリング調査により、石室の床面は確認面の約30 cm下にあることが確認された。奥壁部は攪乱を受けているが、側壁最下段、閉塞石等はかなり良好に遺存している。石室の北西及び東の周湟には、破壊された石室の用材が投棄された攪乱壙が認められる。周湟は南半部と土層断面観察部のみを掘り上げた。



第35図　第250号墳全景

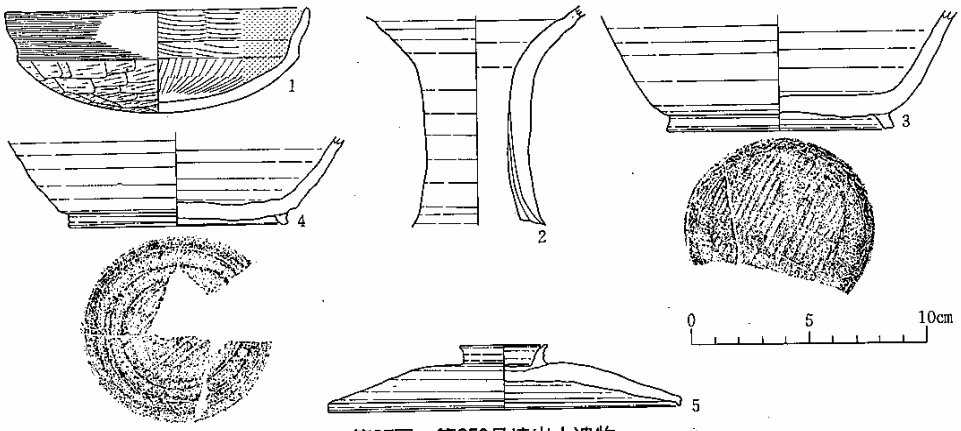
主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。〈羨門〉〈玄門部〉の側壁には横長でやや大きめの石材を配置している。〈羨道部〉には拳大の円礫が無秩序に充填されているが、その両端の玄門、羨門部分ではやや大きめの石が規則的に積み上げられている。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の形態は裏込め外側の線に一致している。

外部施設：〈周溝〉は内周が南北に長い不整な円形で、その中心は玄室北半部付近に想定される。周湟は全周するが、前庭部では浅くなり、南東部の底面には不規則な凹凸が認められる。堆積土は主に褐色砂質シルトの土壌からなる。なお、南西に隣接する第 252 号墳の周湟は本墳の周湟の一部を破壊している。〈墳丘〉は削平されているが羨道の東西に葺石状の石列が残存し

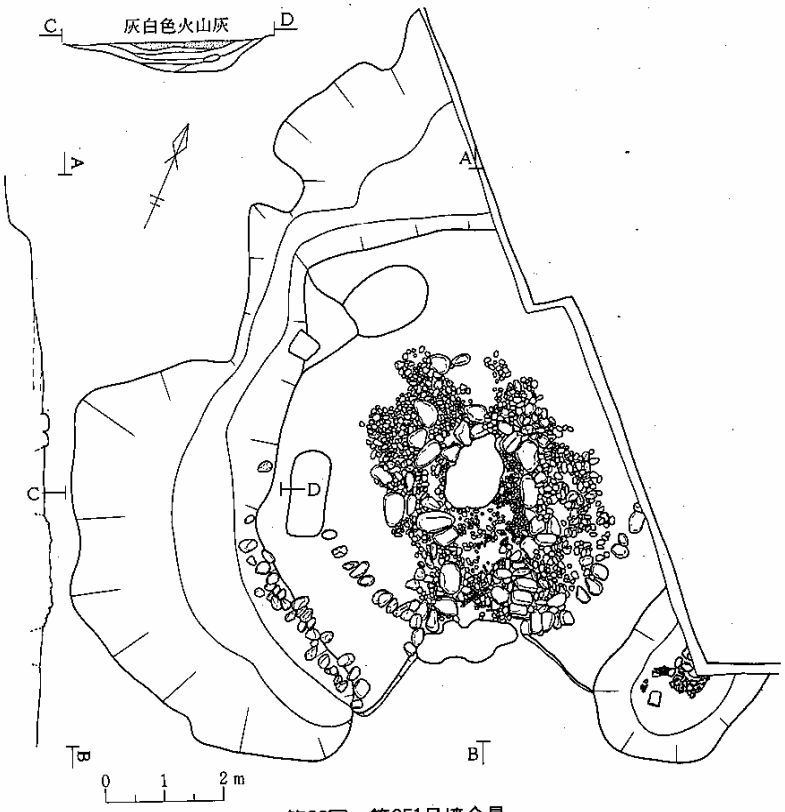


第36図　第250号墳石室

ており、この葺石から周湟にかけてはテラス状の平坦面が認められる。〈前庭〉羨門部前方の周湟内側斜面を断ち割って平坦面が形成されている。平面形態は台形で、羨門前端部から「ハ」の字状の石組が認められる。この平坦面のレベルは予想される石室床面レベルとほぼ一致する。

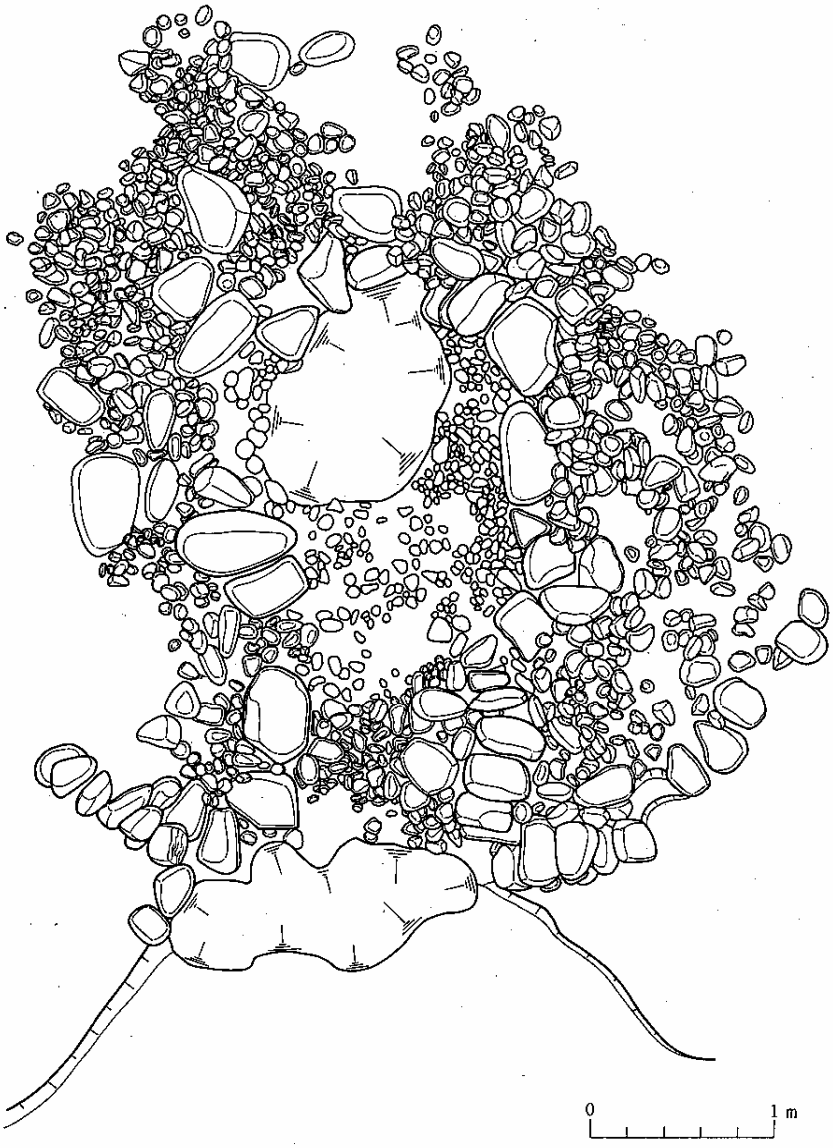


第37図　第250号墳出土遺物



第38図　第251号墳全景

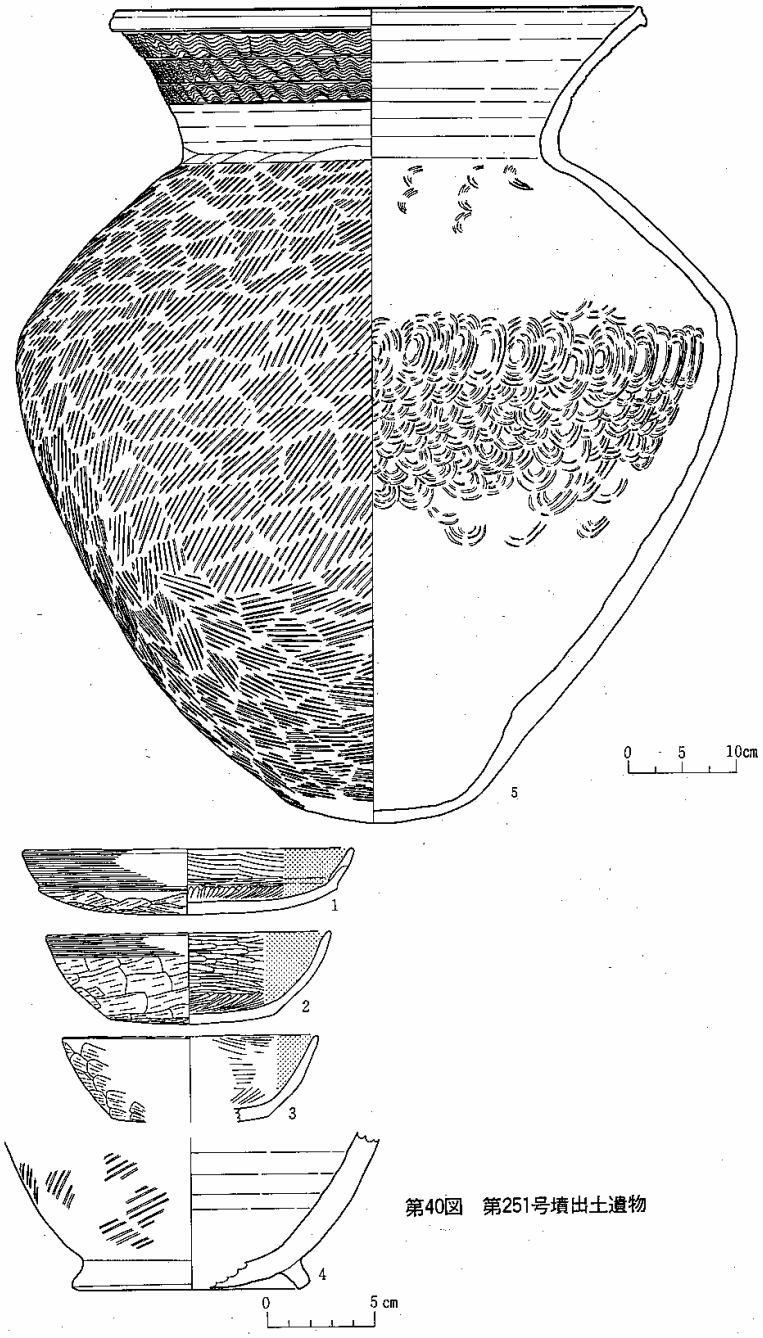
出土遺物：羨門部東側の周湟床面から土師器坏１点、須恵器長頸壺が出土している。いずれも少破片となっていた。



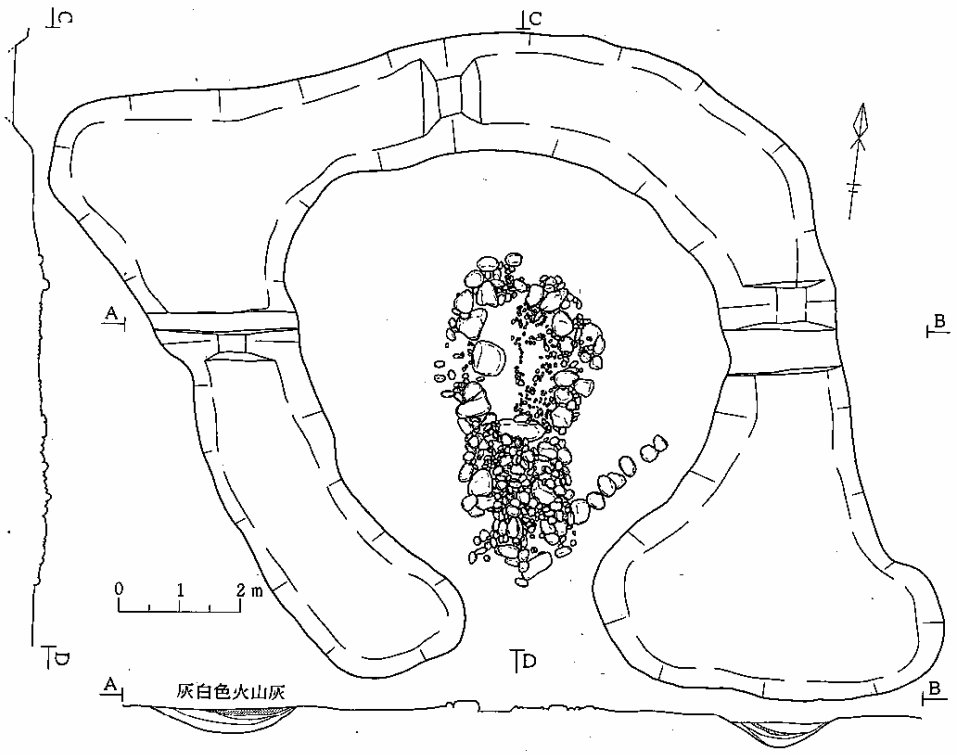
第39図　第251号墳石室

第251号墳

確認状況：周湟及び墳丘の東部が調査区外に及んでいたが、石室以西の状況は確認することができた。残存する石室の上面は水田面下20㎝で確認され、石室の床面も露出した。しかし、石室用材、裏込め用材の多くが残存してはいるものの、そのほとんどは原位置から移動しており、更に、玄室中央部の床面には大きな攪乱壙が認められるなど、石室自体の残存状態は悪い。



第40図　第251号墳出土遺物

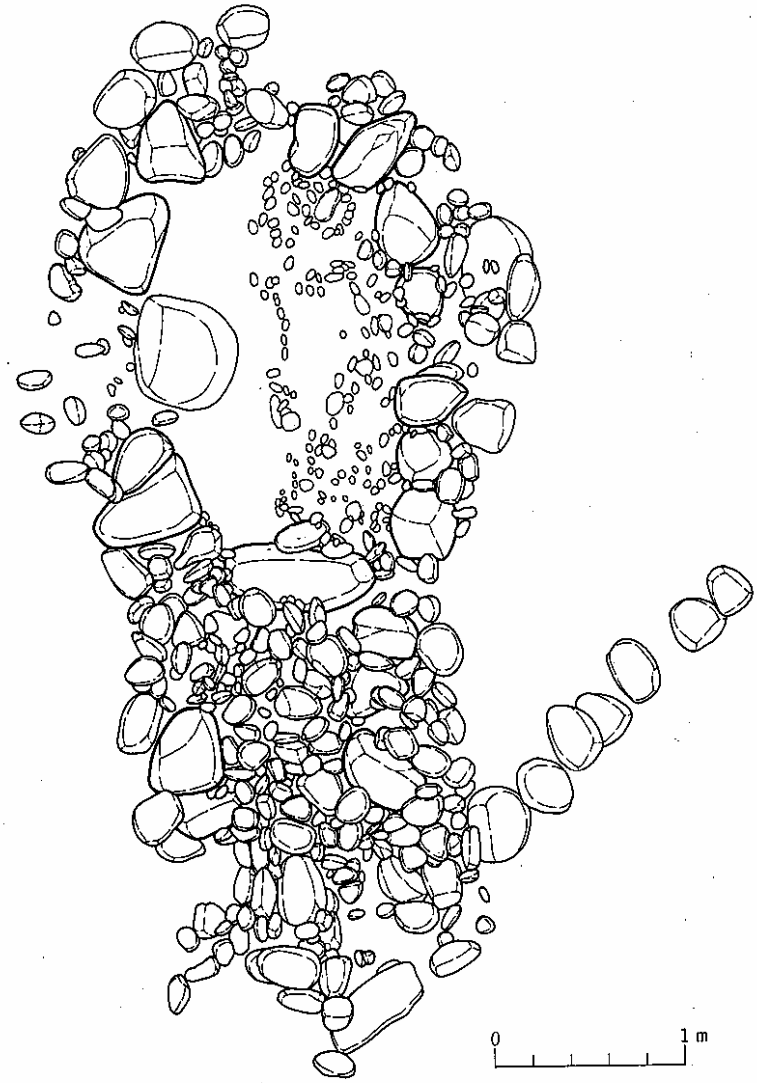


第41図　第252号墳全景

この他、羨門前、石室西方等にも攪乱壙が認められる。

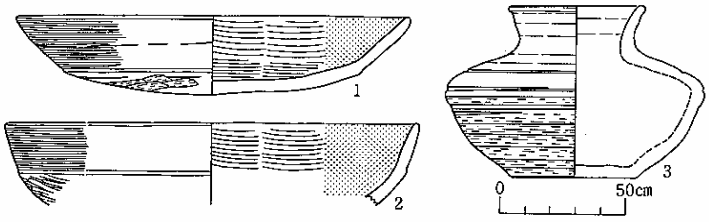
主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。詳細な構造上の特徴については残存状態が悪いため検討できない。〈石室床面〉は旧表土直上もしくは封土内に構築されていると考えられるが、掘り方の有無等具体的な構築技法の検討も困難であった。

外部施設：〈周湟〉内周がやや不整形ではあるが円形になると考えられ、その中心は玄室北半部に求められる。外周は北西部で内外にくびれ、北部で大きく張り出しており不整形である。前庭部では途切れるが、削平を考慮すれば浅い掘り込みがあった可能性も考えられる。堆積土は主に褐色シルト質土壌からなり、最上層には灰白色火山灰が認められる。南西部内側斜面には葺石状の石列が認められる。〈墳丘〉石室の周囲に旧表土が確認され、その上にわずかに封土が残存していた。また、石室の羨門両側から伸び、石室の周囲を半周する葺石の根石も確認された。葺石と周湟との間には幅約 1mのテラスが存在している。〈前庭〉特殊な石の配置は認められないが、羨門前方に石室床面との比高 10 cm、テラスとの比高 20 cm～10 cm、周湟底面との比高 20 cm前後の平坦面が形成されている。平面形態は「ハ」の字状を呈する。



第42図　第252号墳石室

出土遺物：羨門部南東の周湟底面から土師器、須恵器が出土している。図化できたのは土師器坏３点、須恵器甕１点である。須恵器甕は口縁部が口を下にした状態で出土し、体部破片がその周囲に散在していた。土師器坏は少破片となりこれら甕の体部破片と混在していた。



第43図　第252号墳出土遺物

第252号墳

確認状況：水田面下15㎝の地山面で残存する石室の上面を確認し、床面もほぼ同じレベルで露出した。石室は奥壁、玄門、羨門部の側壁用材をはじめとして、いくつかの側壁用材が失われており、他の用材も原位置から移動したものが多い。周湟は土層断面観察部分のみを掘り下げた。

主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。〈玄門部〉の床面には直方体の石材を埋置し梱石としている。〈羨道部〉には円礫が無秩序に充塡されているが、羨門部には紡錘状の石が規則的に積まれている。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込め外側の線に一致し、石室とほぼ相似形を呈する。

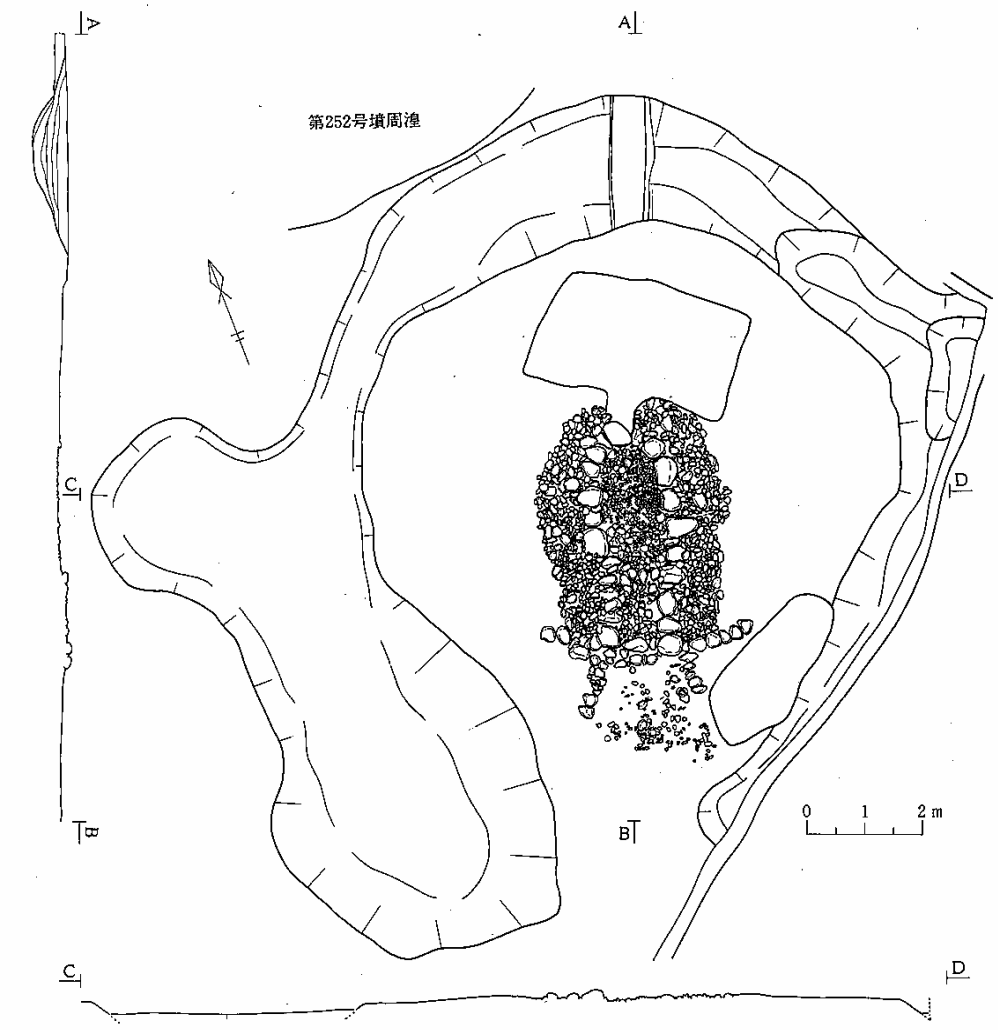
外部施設：〈周湟〉は内周がほぼ円形で、その中心は玄室中央部付近に想定される。外周は不整形で、第250号墳に接する北部、第254号墳に接する西部、第266号墳に接する東部で委縮するのに対し、南東部、北西部では大きく張り出している。前庭部で途切れるが、削平を考慮すれば浅い掘り込みがあった可能性も考差られる。なお、第266号墳の周湟の一部を本墳の周湟が破壊している。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、灰白色火山灰が最上層に堆積している。〈墳丘〉は削平により失われたと考えられるが、羨門東側には葺石の一部と考えられる石列が認められ、テラス状の平坦面も認められる。

出土遺物：羨門西側の崩落した閉塞石下より、土師器坏2点、須恵器壺1点が出土している。

第253号墳

確認状況：水田面下 20 ㎝の地山面で残存する石室の上面が確認され、床面もほぼ同じレベルで露出した。奥壁が失われているが、側壁は良好に残存している。石室北側及び羨門東側には、破壊された石室の石材を投棄した攪乱壙が認められる。周湟の東側の外周は調査区外にのび未確認であるが、それ以外については確認し、その北東部のみを掘り上げた。

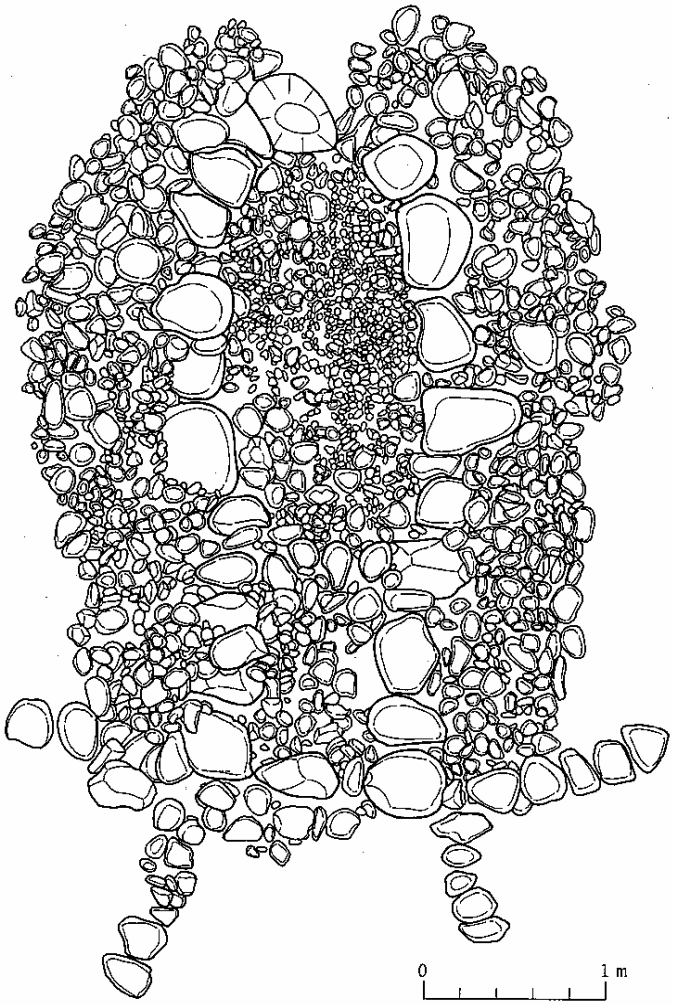
主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。〈羨門〉〈玄門部〉の側壁に特殊な石材の配置は認められないが、羨門部の床にはやや偏平な石が一個埋置されている。〈床面〉は玄室部が粒の揃った円礫からなるのに対し、羨道部は不揃いでまばらである。レベルは玄室部が羨道



第44図　第253号墳全景

部よりも約 10 cm高い。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込めの外側の線に一致している。

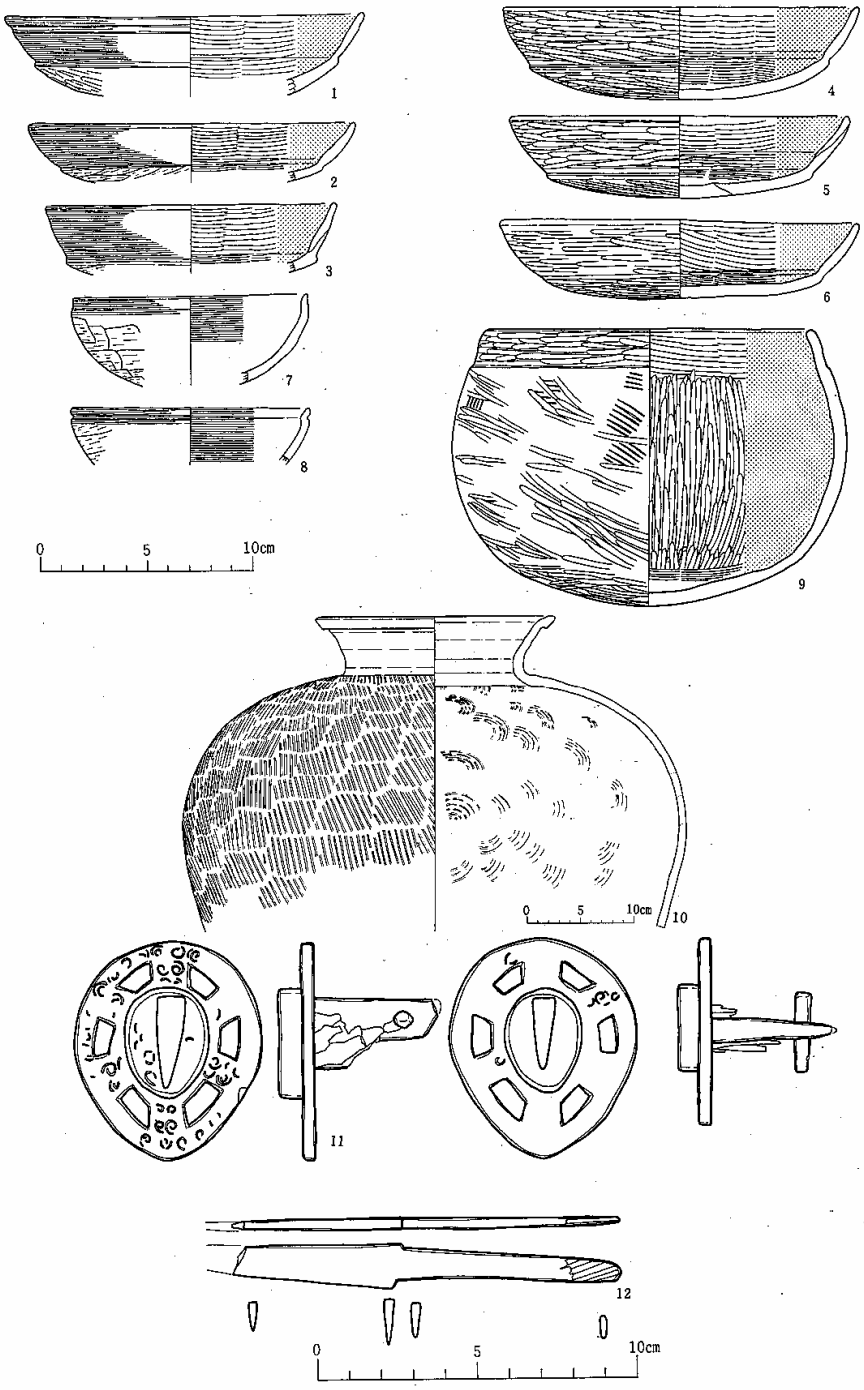
外部施設：〈周湟〉は内周がほぼ円形を呈し、その中心は玄室北半部に想定される。外周は不整形で、第 252 号墳に接する北西部から北東部にかけて委縮するのに対して、西部から南西部にかけては大きく張り出している。深さは北半では浅く南に向かうにつれ深くなっている。前庭部では途切れている。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなる。〈墳丘〉は削平により失われたと考えられるが、羨門の東西に葺石状の石列が認められ、テラスの存在も推定される。



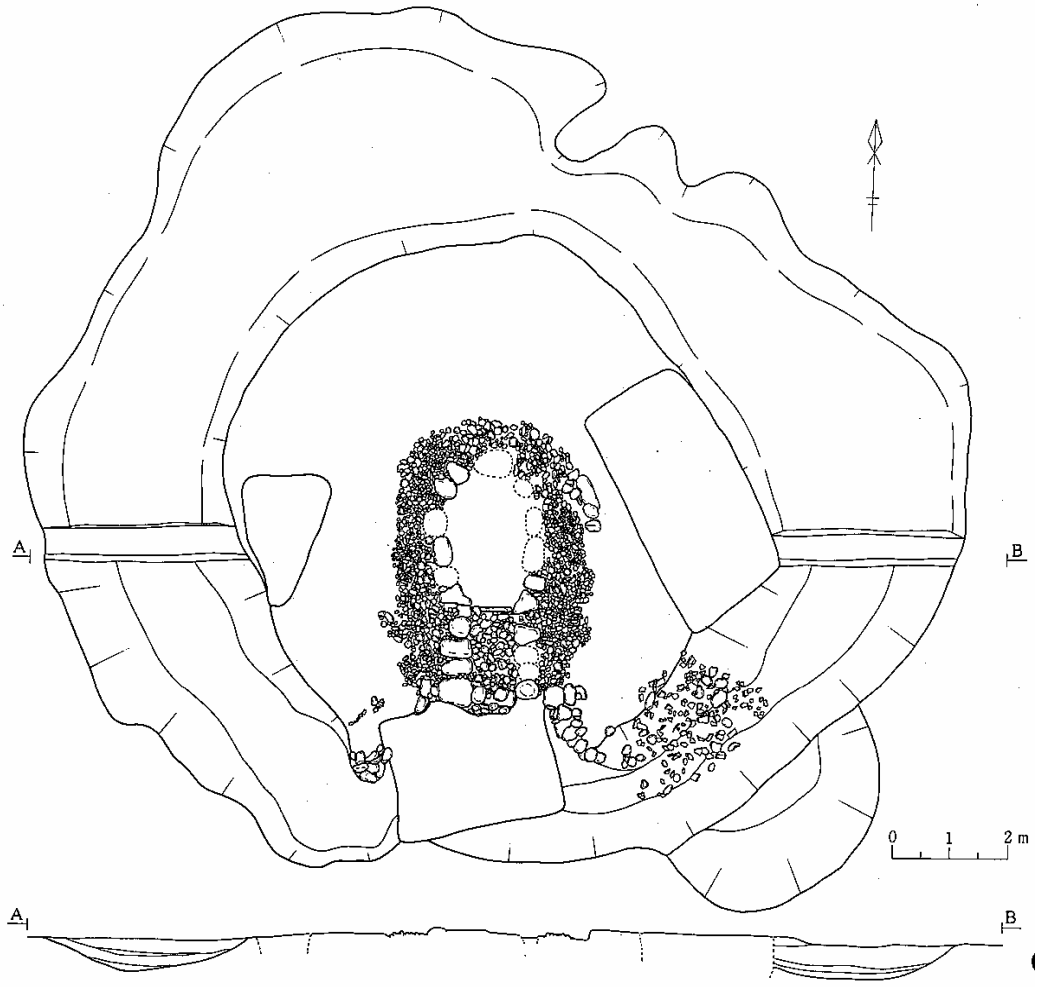
第45図　第253号墳石室

〈前庭〉明確な掘り込み等のプランは確認できないが、羨門前方には地山を掘り込んで平坦面が形成されており、羨門前端部から「ハ」の字状の石組みがみられる。平坦面のレベルは玄室床面との比高約10㎝である。

出土遺物：前庭周辺から土師器、須恵器、玄室床面から鉄鏃、刀子、直刀が出土している。図示できたのは土師器7点、埦1点、須恵器甕、刀子、鍔各1点である。土師器坏3点（第46図4～6）、埦はいずれも完形で、羨門前の前庭底面に置かれた状態で出土している。土師器坏5点（第46図1～3、7、8）は羨門南東の周湟堆積土から、須恵器甕は羨門南西の周湟堆積土から出土している。いずれも少破片で周湟斜面に沿って流れ込んだ状態で出土している。



第46図　第253号墳出土遺物

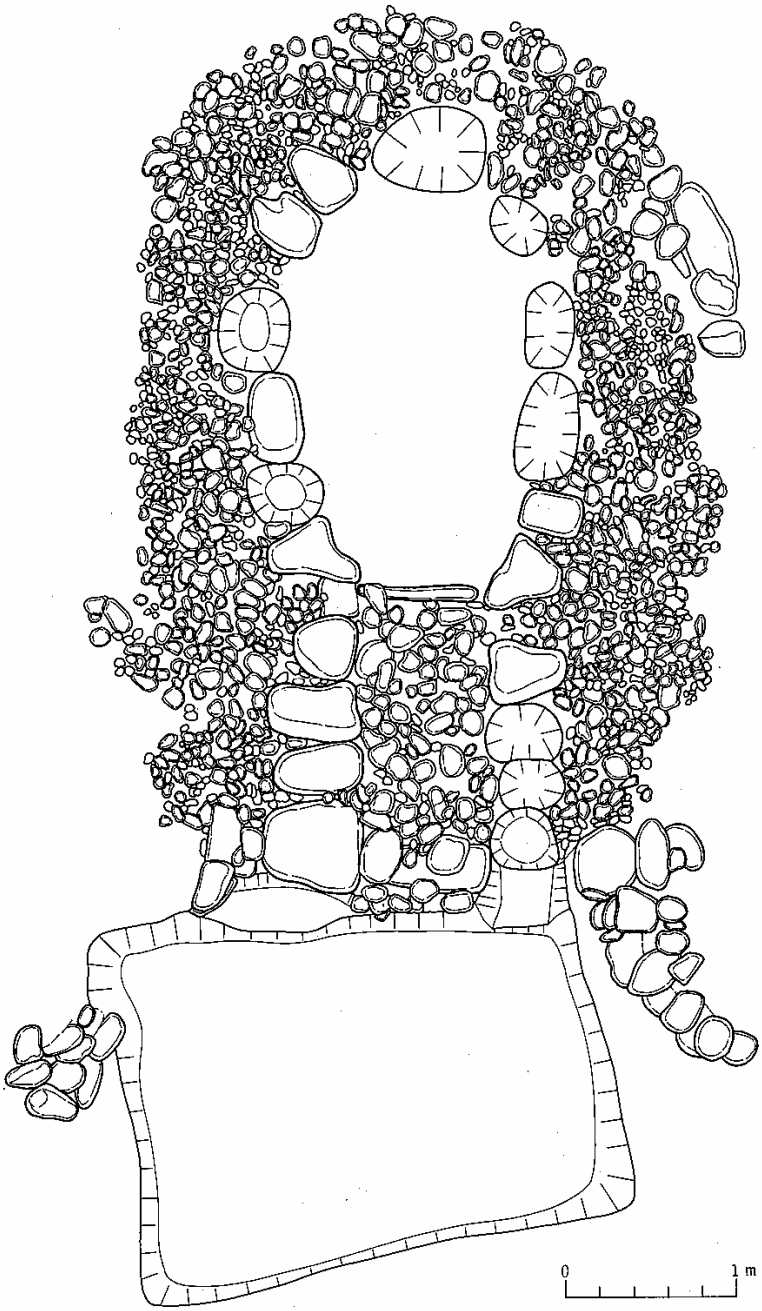


第47図　第254号墳全景

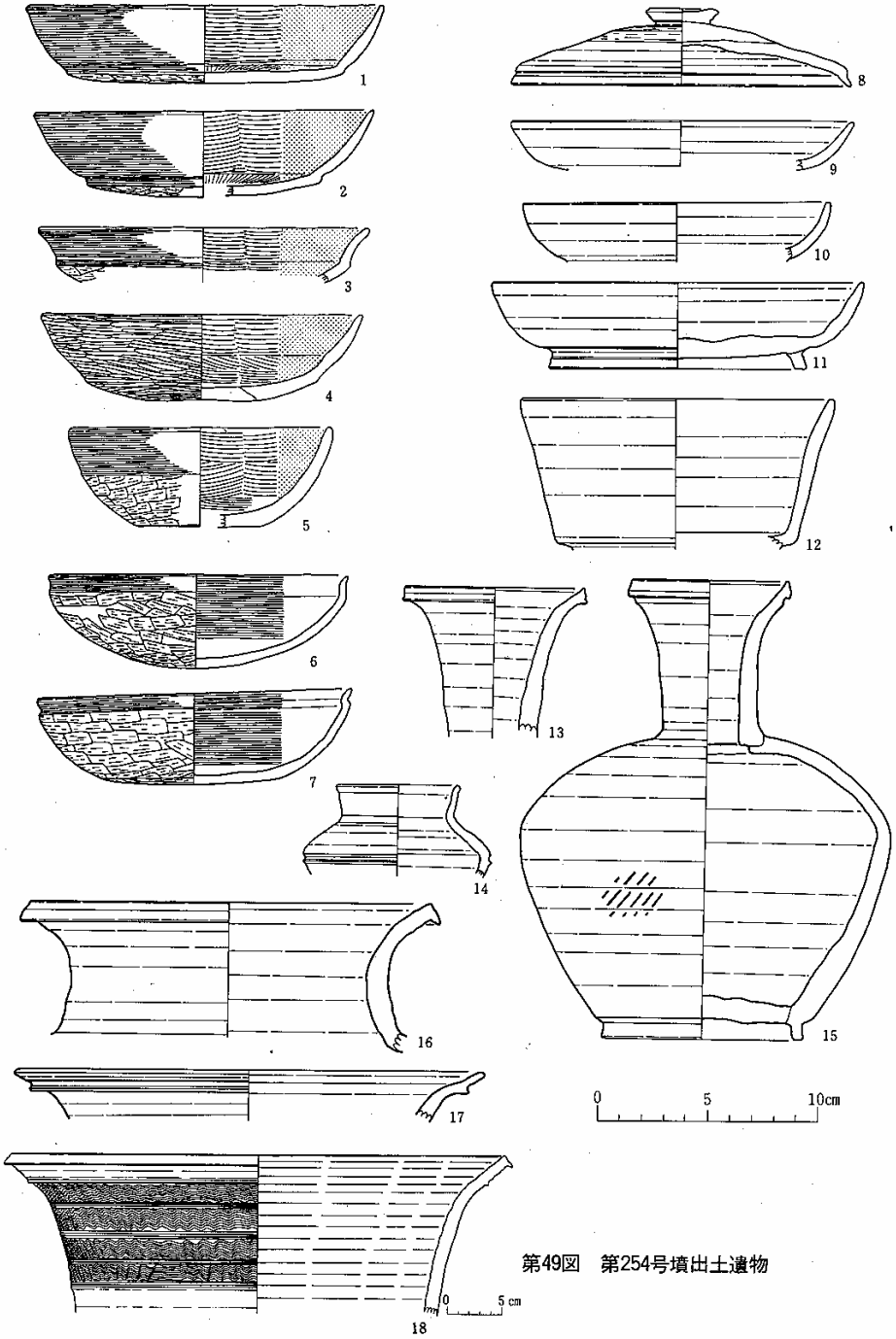
第254号墳

確認状況：水田面下 20 cmの地山面で残存する石室の上面が確認された。石室は奥壁、羨門東側の石および側壁が7ヶ所抜き取られ、羨門前端部が攪乱の影響を多少受けているが、石室内のボーリング調査を行ったところ、確認面から約15 cm下に床面敷石が確認され、攪乱も認められないことから石室内の残存状態は良好と考えられる。石室の東西および羨門前端に破壊された石室の石材を投棄した攪乱壙が認められる。周湟は南半部のみを掘り上げた。

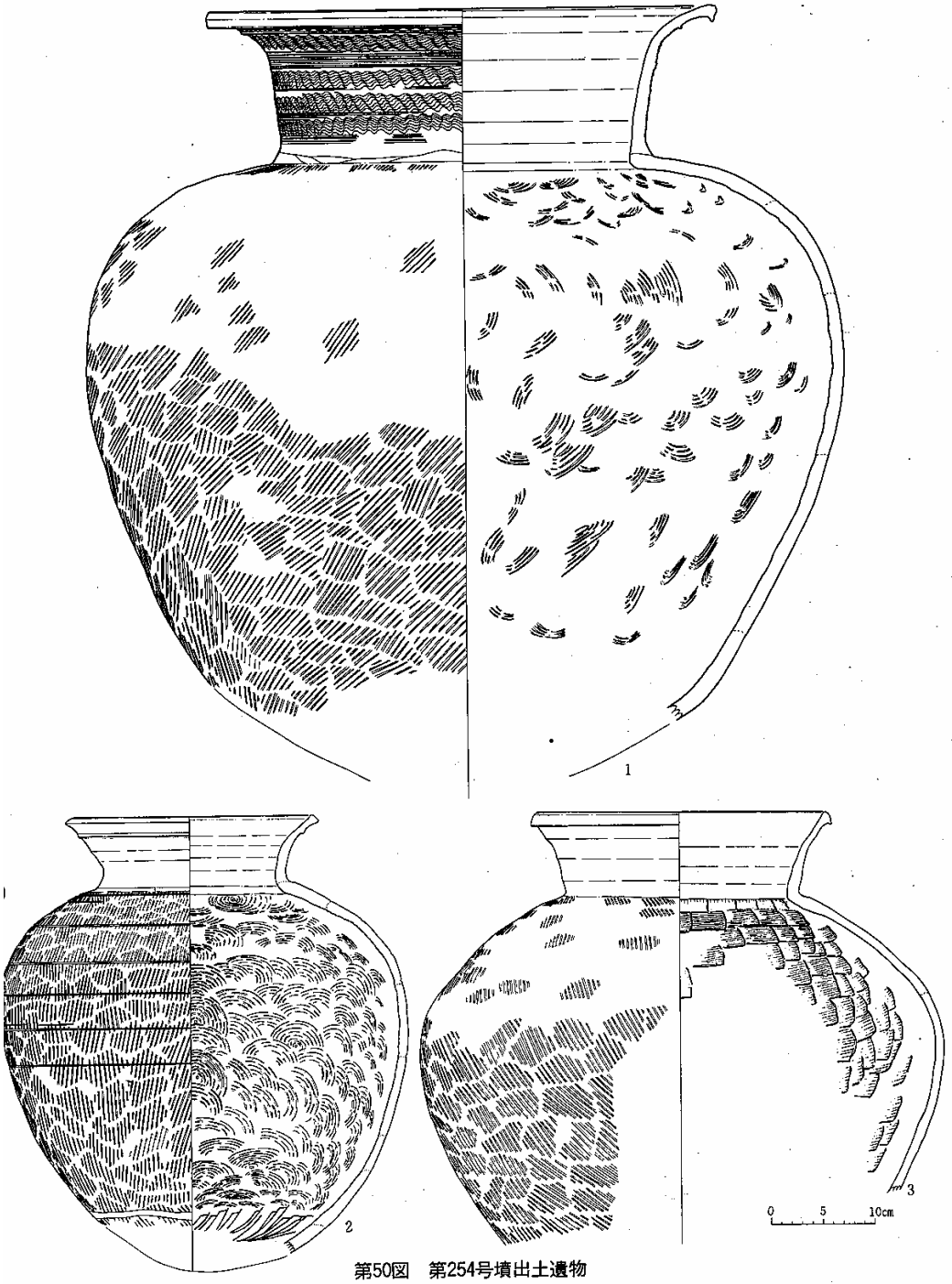
主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。〈玄門部〉の側壁には三又状の特殊な形態



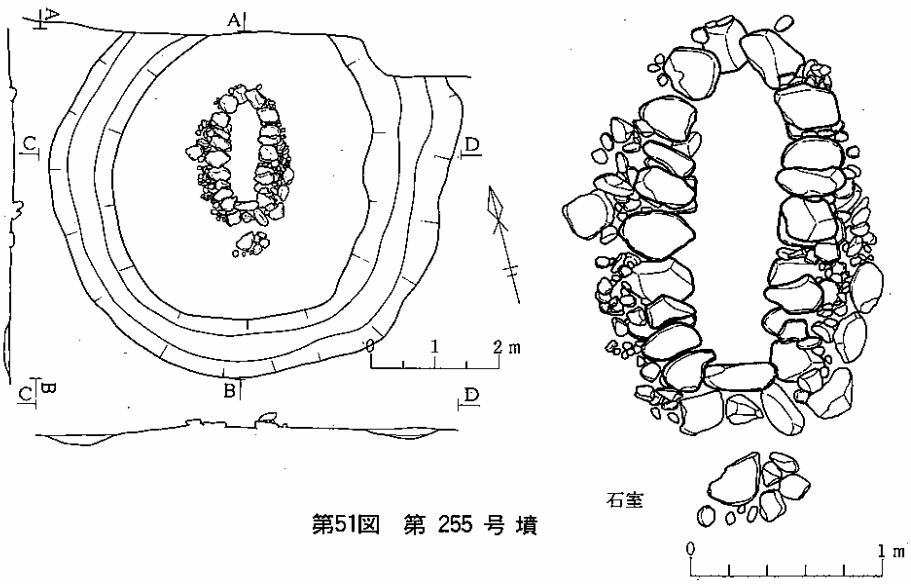
第48図　第254号墳石室



第49図　第254号墳出土遺物



第50図　第254号墳出土遺物

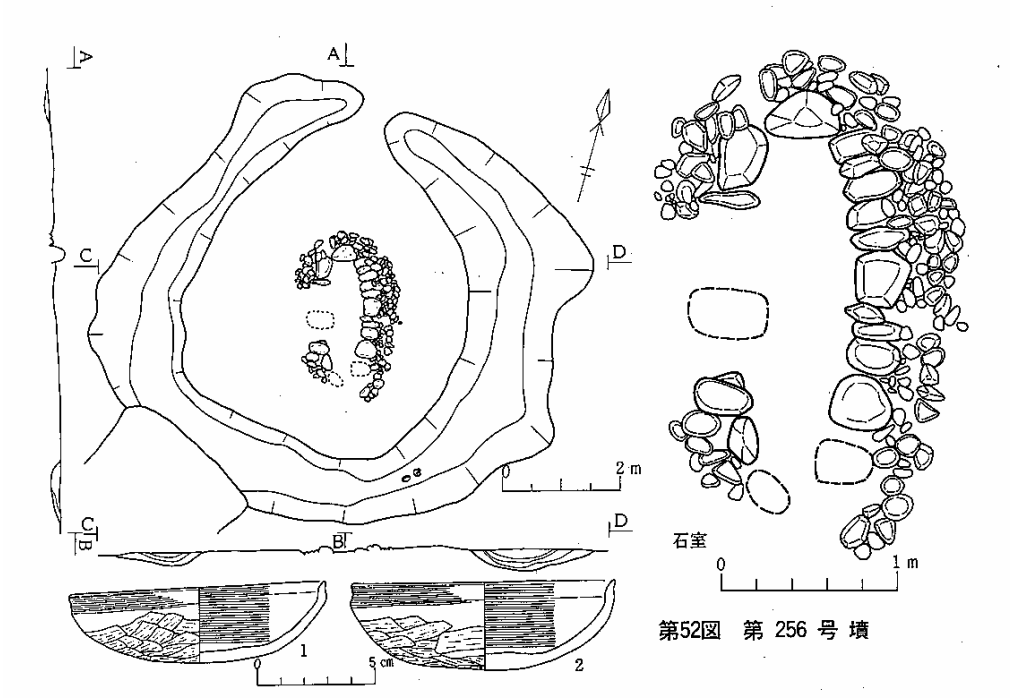


第51図　第 255 号 墳

の石を用いて突出部を造り出し、床面には偏平な石を一個埋置し梱石としている。〈羨門部〉も側壁にはやや大きめの偏平な石が配置され、床面には直方体上の石が埋置されている。石室は地山を掘り込んで構築されており〈掘り方〉の平面形態は裏込め外側の線に一致している。

外部施設：〈周湟〉は内周がやや不整な円形で、その中心は玄室北半部に想定される。外周も第247号墳に接する北西部及び第252号墳に接する北東部で若干委縮しているが、ほぼ円形を呈する。なお、第247号墳の周湟は本墳の周湟外周の一部を破壊している。周湟は全周するが南に行くにつれ浅くなり、前庭部に至っている。堆積土は主に褐色系シルト質土壌よりなり灰白色火山灰が最上層に堆積している。〈墳丘〉は削平により失われたと考えられるが、羨門の東西に葺石の一部と考えられる石が数石認められテラスの存在も推定される。〈前庭〉には攪乱壙が入っているが、羨門前端の東西からテラスにかけて「ハ」の字状の石組みが認められる。

出土遺物：前庭周辺から土師器、須恵器が出土している。図示できたものは土師器坏 7 点、須恵器高台付坏4点、蓋1点、長頸瓶2点、壺1点、甕6点である。土師器坏6点（第49図1～3、5～7）、須恵器高台付坏2点（11、12）、蓋、長頸瓶（15）、壺（14）、甕（1～3、17）は羨門部南東のテラス、周湟斜面、周湟底面にかけて出土した。小破片となり流れ込んだ状態のものが多いが、特に3個体の甕（第50図1～3）は、各個体の破片がテラスから周湟底面へとほぼ帯状に流下しており、その分布は羨門に近い方から（2）、（1）、（3）の順となっている。小型の器種は、これら甕よりも羨門寄りから出土したものが多い。羨門南西のテラス部からも土師器坏、須恵器高台付坏、甕2点が出土しているが、周湟内からの土器の出土はない。



第52図　第 256 号 墳

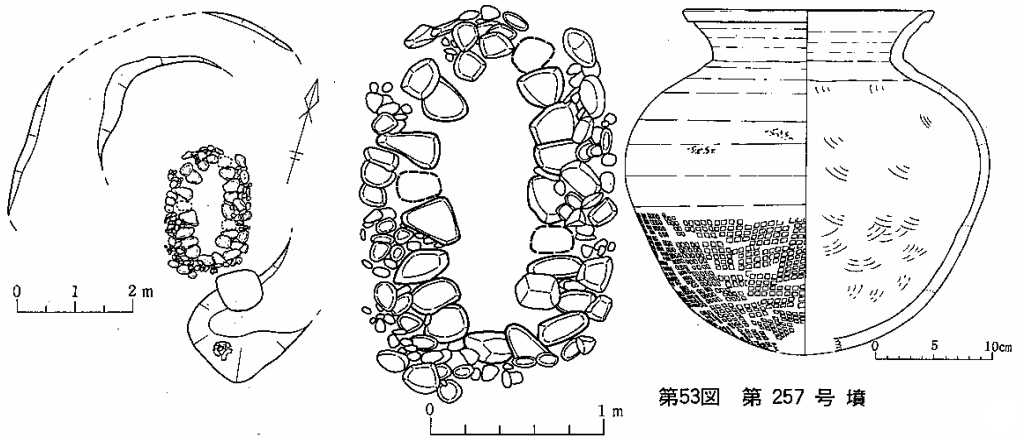
第255号墳

確認状況:水田面下 15 cmの地山面で残存する石室の上面を確認した。ボーリング調査の結果、床面敷石は確認面から 60 cm下に存在することが確認され攪乱も受けていないことから、石室の保存状態は良好であると考えられる。周湟の北部は掘り過ぎにより確認できなかったが、それ以外については確認し全掘した。

主体部：竪穴式石室であるが壁材、裏込めの状態、胴張りプランである点等、その構造は胴張りプランの横穴式石室のそれと極めて類似した様相を示している。〈奥壁〉北側妻部は多石使用によりカーブを持たせているのに対して、南側妻部は偏平な板状の石を縦位に使用している。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込め外側の線に一致し楕円形を呈する。

外部施設：〈周湟〉は内外周とも南北に長い楕円形を呈する。北部の状況は不明であるが、深さはほぼ一様で途切れる部分はない。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、火山灰は認められない。〈墳丘〉は削平により失われたものと考えられる。

出土遺物：遺物の出土はない。



第53図　第 257 号 墳

第256号墳

確認状況：水田面下20cmの地山面で残存する石室の上面が確認された。ボーリング調査を行った結果、確認面下10cmに床面敷石の存在が確認された。石室の西側、南側の用材は失われているが攪乱は認められない。周湟南西には攪乱が認められる。

主体部：竪穴式石室と考えられるが壁材裏込め等の状態や胴張りプランである点等、その構造は、胴張りプランの横穴式石室のそれと極めて類似した様相を示している。〈奥壁〉北側妻部は三角錘形の石材を使用した一石構造である。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込めの外郭線に一致し楕円形を呈する。

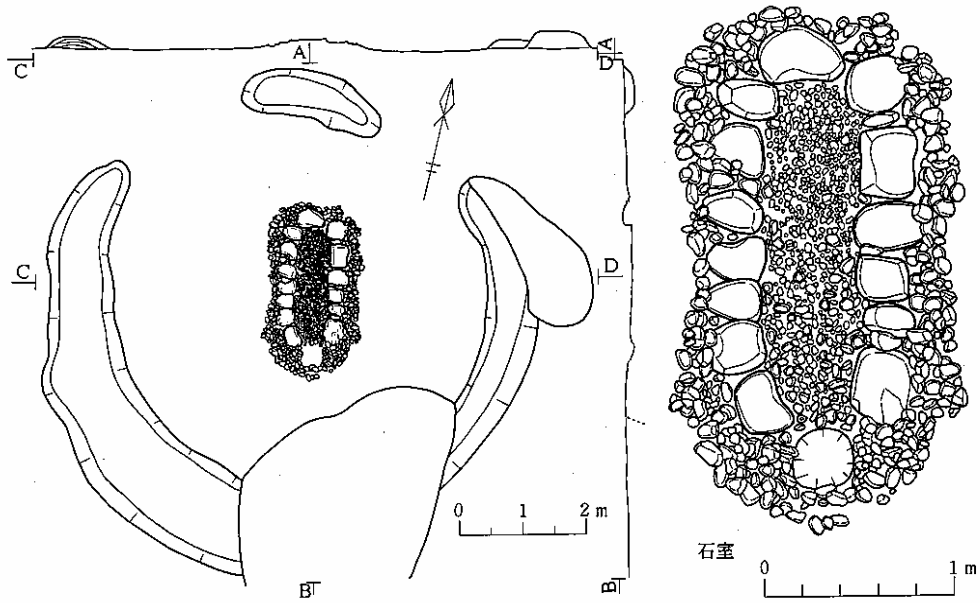
外部施設：〈周湟〉内外周ともやや不整ではあるがほぼ円形を呈し、その中心は石室中央部の中軸線上に求められる。深さはほぼ一様で北端では途切れている。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、黄褐色火山灰が介在している。〈墳丘〉は削平により失われていると考えられる。

出土遺物：石室南東側の周湟底面から土師器坏2点が出土している。いずれも完形で口を上にして置かれた状態であった。

第257号墳

確認状況：水田面下20cmの地山面で残存する石室の上面が確認された。ボーリング調査を行った結果、確認面下30cmの床面敷石の存在が確認された。側壁の一部が抜き取られているが、攪乱は認められず、石室下部の保存状態は良好であると考えられる。周湟は削平により部分的に残存するのみである。

主体部：竪穴式石室であるが壁材、裏込めの状態、胴張りプランである点等その構造は、胴



第54図　第 258 号 墳

張りプランの横穴式石室のそれと極めて類似した様相を示している。〈奥壁〉北側妻部は多石使用によりカーブを持たせているのに対し、南側妻部は三角錘形の石材を使用した一石構造である。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込めの外郭線に一致し楕円形を呈している。

外部施設：〈周湟〉は一部を残し削平されておりその詳細は観察できない。〈墳丘〉も削平により失われたものと考えられる。

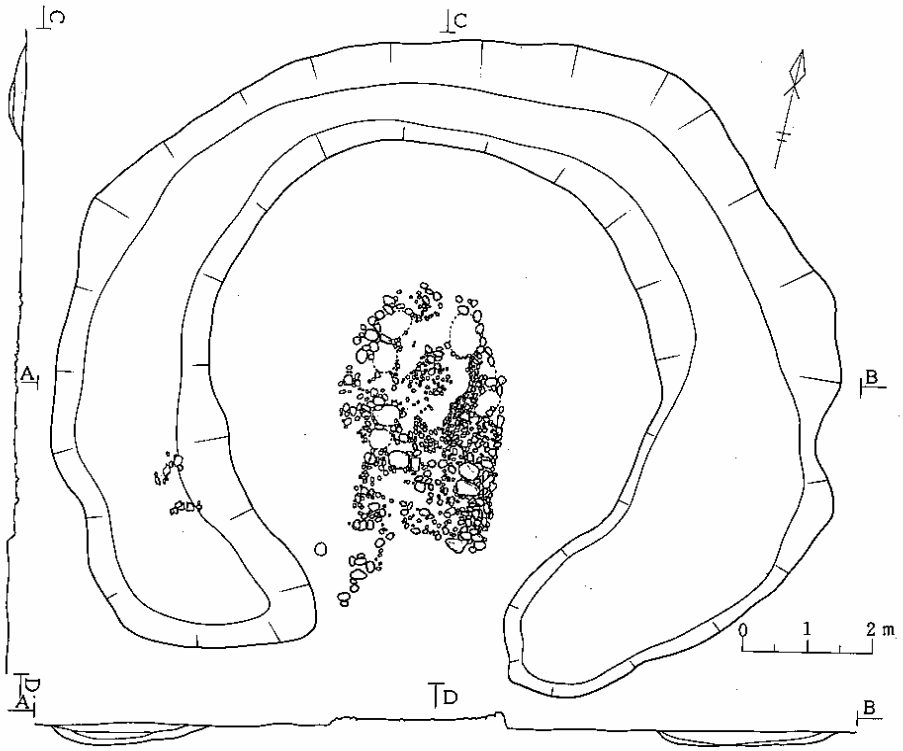
出土遺物：石室南側の周湟底面から須恵器甕1点が出土している。口を下にした状態で出土している。

第258号墳

確認状況：水田面下35cmの地山面で残存する石室の上面が確認され、床面も同時に露出した。奥壁南側妻部の石は抜き取られているが、その他の石室最下部の構造は良好に遺存している。周湟は北部、西部に攪乱を受けている。周湟は全掘した。

主体部：竪穴式石室であるが壁材、裏込めの状態、胴張りプランである点等その構造は、胴張りプランの横穴式石室のそれと類似している。〈奥壁〉南側妻部は石材抜き取りの痕跡から一石構造と考えられ、北側妻部も一石構造である。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込め外側の線に一致し楕円形を呈する。

外部施設：〈周湟〉は内外周ともほぼ正円形で、その中心は石室中央部付近に想定される。



第55図　第260号墳全景

北西部、北東部で途切れているが、削平を考慮すれば浅い周湟が存在した可能性も考えられる。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、火山灰は認められない。〈墳丘〉は削平により失われたものと考えられる。

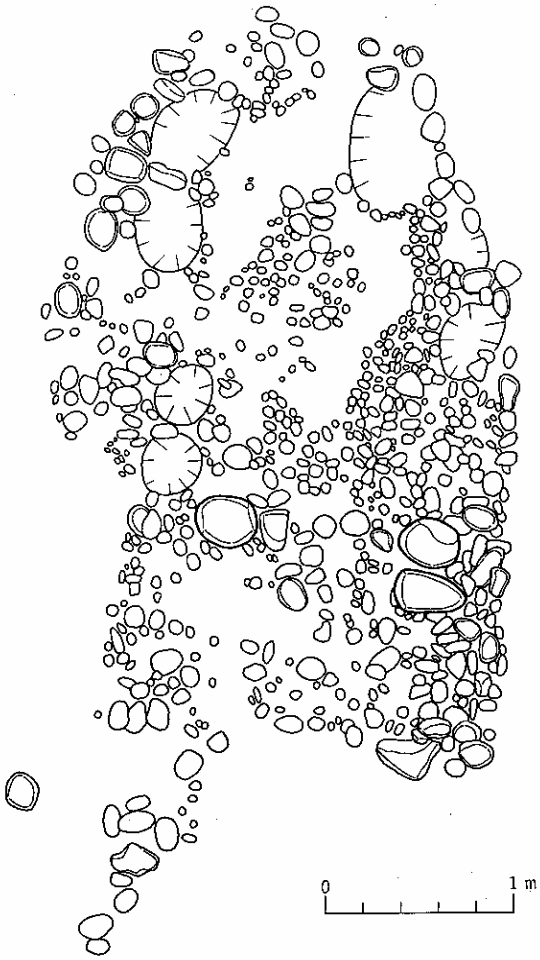
出土遺物：石室床面から刀子破片が出土したが、図化できなかった。

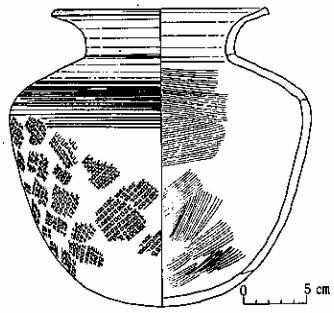
第260号墳

確認状況：水田面下10cmの地山面で残存する石室の上面が確認された。石室の側壁は羨道部のものが3ヶ所残存する他は全て失われており、床面敷石も半ば失われ残存するものも原位置から移動していると考えられた。周湟は全掘した。

主体部：横穴式石室で玄室部は胴張りプランであったと考えられる。残存する石室の最下部は地山を掘り込んで構築されたもので、〈掘り方〉の平面形態はアーチ型を呈する。

外部施設：〈周湟〉は内外周とも円形で、その中心は推定される玄室北半部に想定される。前庭部では途切れるが削平を考慮すれば浅い掘り込みがあった可能性も考えられる。深さはほぼ均一である。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、火山灰は認められない。〈墳丘〉は





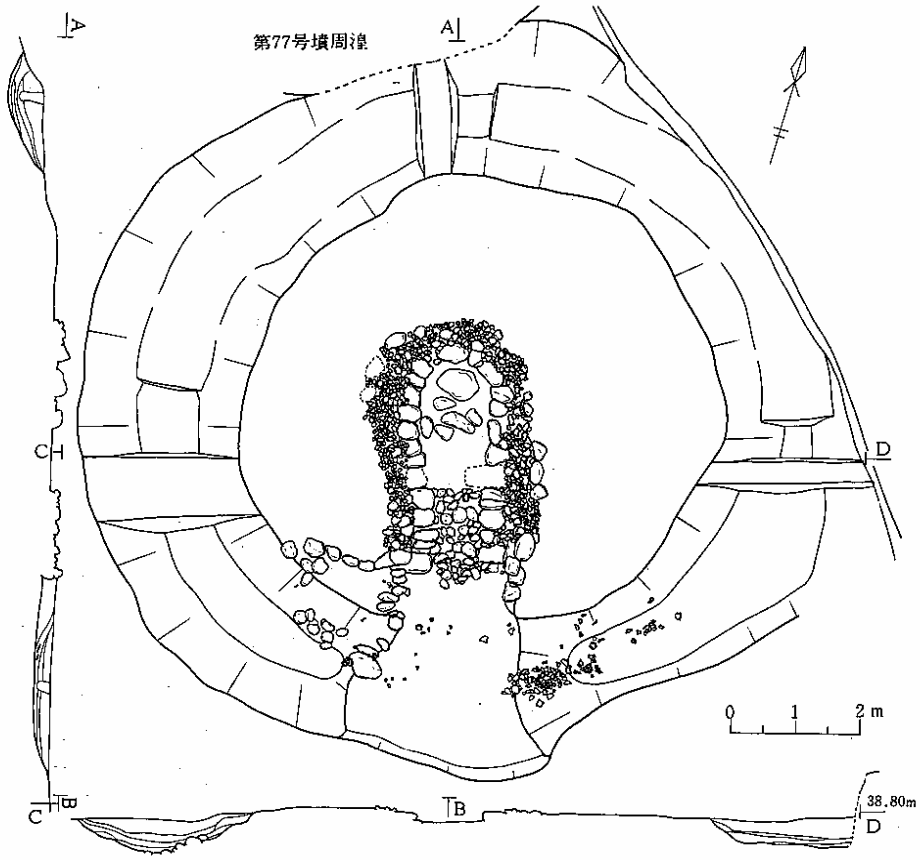
第56図　第260号墳石室・出土遺物

削平により失われている。〈前庭〉推定される西側の羨門前端部から前庭の石組みと考えられる石列が南西方向へ直線的に配置されている。

出土遺物:羨門西側の周湟底面から須恵器甕が1点出土している。口を下にした状態で出土し、体部、底部破片はそれからやや離れた位置から出土している。

第263号墳

確認状況：水田面下15cmの地山面で残存する石室の上面を確認した。石室内でボーリング調査を行ったところ確認面から40cm下に床面敷石が確認された。玄門部の石が抜き取られ玄室内には転落した石室用材と考えられる石が認められるが、攪乱は認められないことから石室内の保存状態は良好と考えられる。周湟は北東部が調査区外に及んでおり確認できなかったが、そ



第57図　第263号墳全景

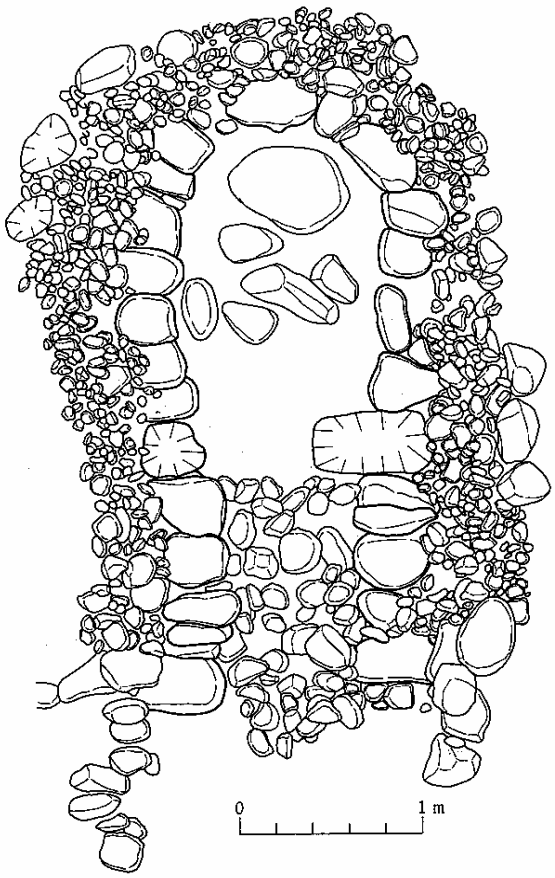
の他については確認し、南半分と堆積土を観察する部分のみを掘り上げた。

主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。〈奥壁部〉は直方体の石材が使用されており、同様の石材が数段積まれていたと推定される。〈羨門部〉にはやや大きめの偏平な石材が使用されている。〈羨道部〉には円礫が無秩序に充塡されその一部は前庭へ崩落している。石室は地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込め外側の線に一致している。〈裏込め〉は円礫が無秩序に充塡されているが縁辺の一部には大きめの石が配置されている。

外部施設：〈周湟〉は内周がほぼ正円形で、その中心は玄室北半部に想定される。外周も確認した範囲では円形を基調としている。深さは西側が東側より深いが、これは東側の地山下層に存在する礫層を避けたためと考えられる。前庭部では途切れる。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなる。〈墳丘〉は削平により失われているが、羨門の左右に袖状の石組みが認められ、この石組みと周湟の間にテラス状の平坦面がある。〈前庭〉羨門前を掘り込んで不整形な

平坦面が形成されている。周湟底面との比高10cm、テラス状の平坦面との比高10cm、推定される石室床面との比高15cmである。テラス状の平坦面から前庭へ下る法面には羨門前端から南へ石が並べられている。

出土遺物：前庭周辺から鉄鏃、刀子破片、土師器、須恵器が出土している。図化できたものは土師器坏7、甕1、須恵器坏5、長頸瓶2、甕3である。土師器坏（第59図3、5～8）、埦、甕、須恵器長頸瓶（2）、甕（3、4、5）は羨門部、の南東の周湟底面から出土している。周湟底面に置かれた状態で出土しているものが多く、明確な流れ込みの状態を示すものはない。長頸瓶（1）は前庭から羨門部の南東周湟底面にかけての広い範囲に破片となって散在していた。土師器坏(4)は羨門南西のテラス状の平坦面上から破片となって出土している。土師器坏（1、2）、須恵器坏（12～16）は前庭の西側の石組み上及び前庭の西部から出土している。このうち土師器坏（1）、須恵器坏（12～14）は、石組み上に伏せた状態で出土している。鉄鏃、刀子破片は羨門部の南西の周湟内側の斜面から出土した。

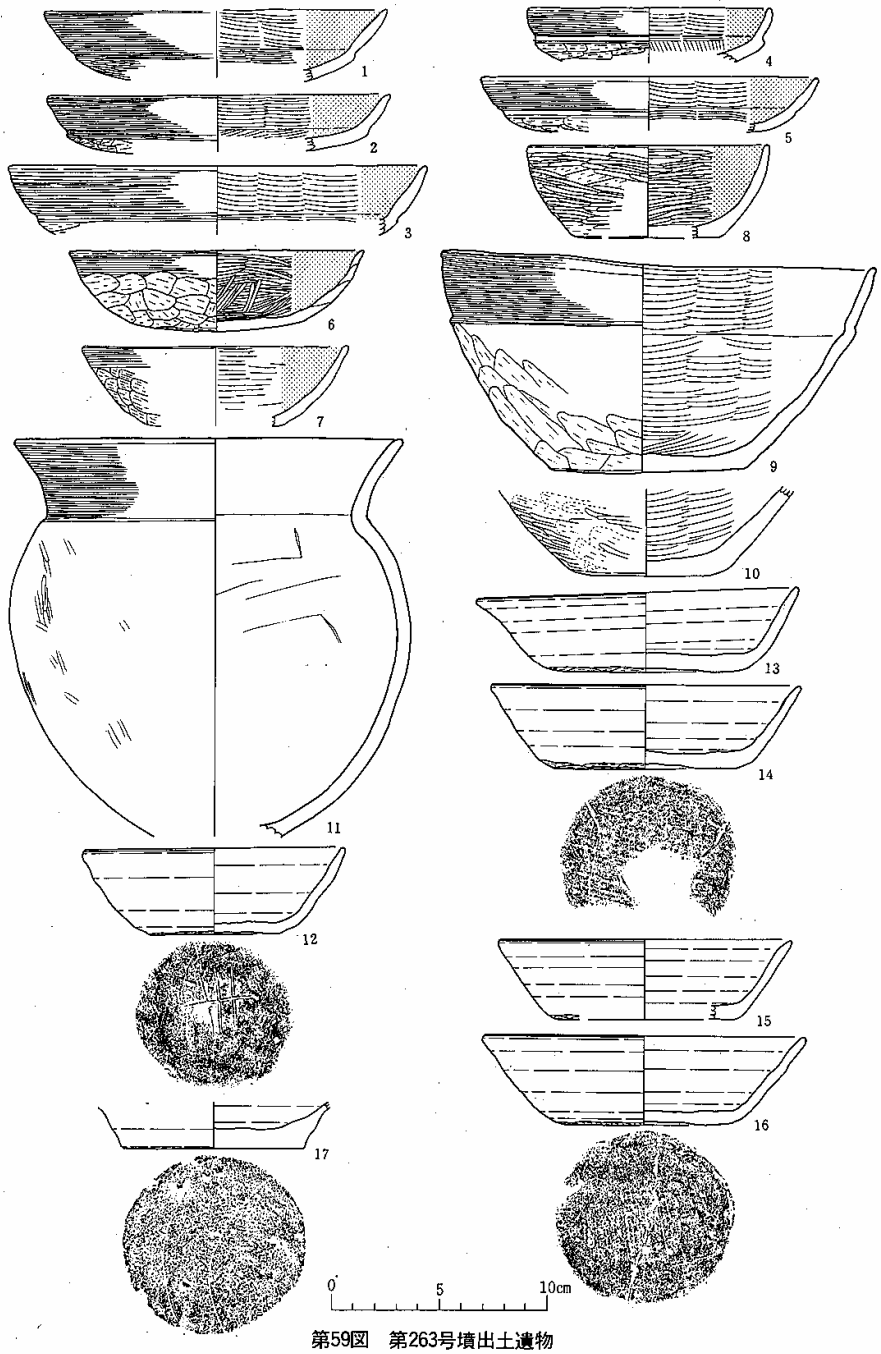


第58図　第263号墳石室

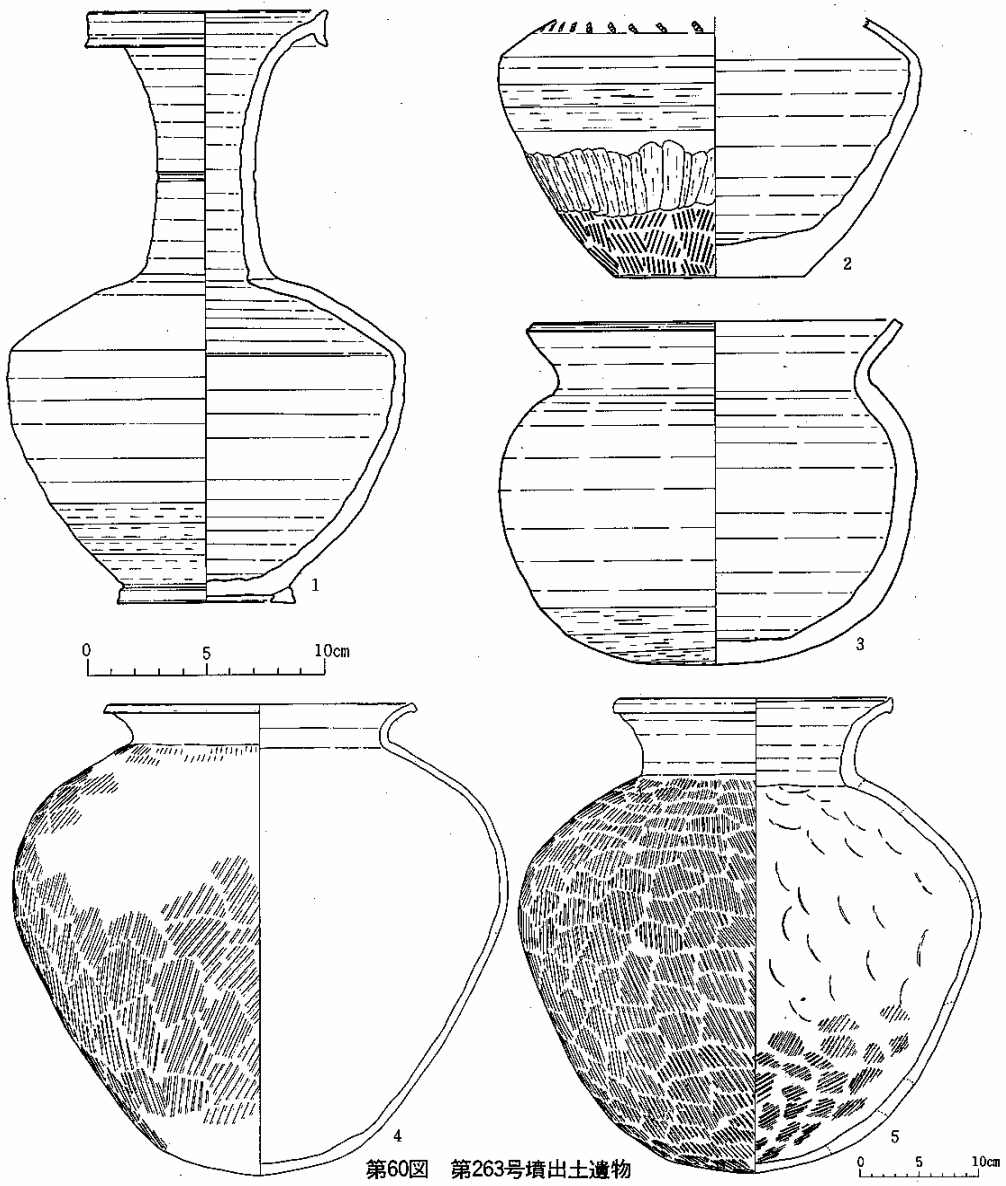
第266号墳

確認状況：水田面下30cmの地山面で残存する石室の上面が確認された。ボーリング調査を行ったところ、確認面から30cm下に床面敷石が確認された。奥壁、玄門、羨門部の側壁をはじめいくつかの石材が抜き取られ、奥壁部には攪乱壙が認められるものの、石室内は攪乱を受けていないことからその保存状態は良好と考えられる。周湟は、遺物が出土した南東部及び堆積土層を観察する部分のみを掘り上げた。

主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。石室内の詳細な構造は不明である。石室は



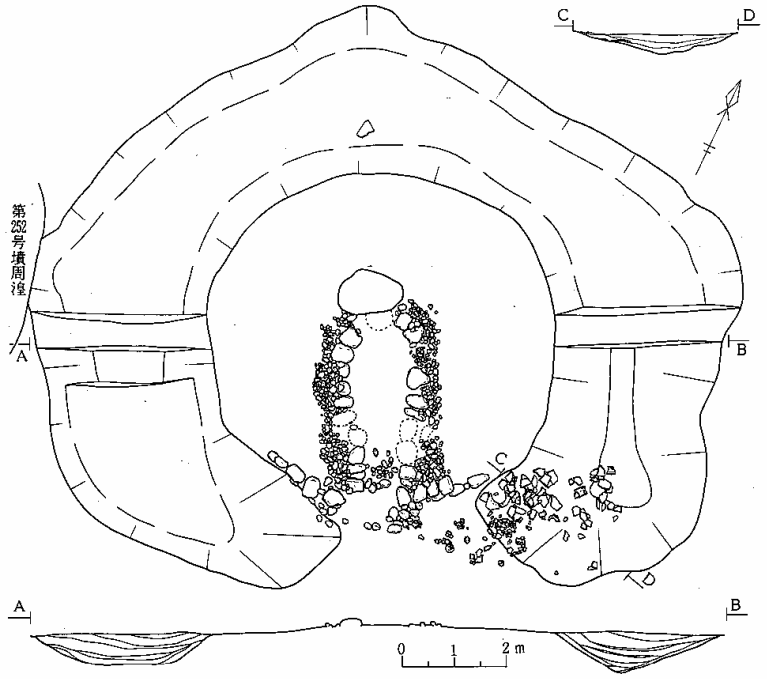
第59図　第263号墳出土遺物

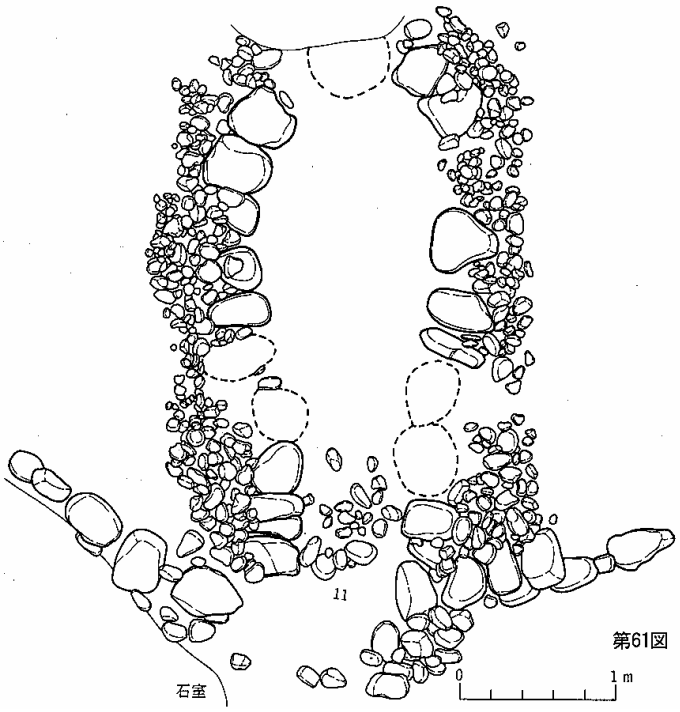


第60図　第263号墳出土遺物

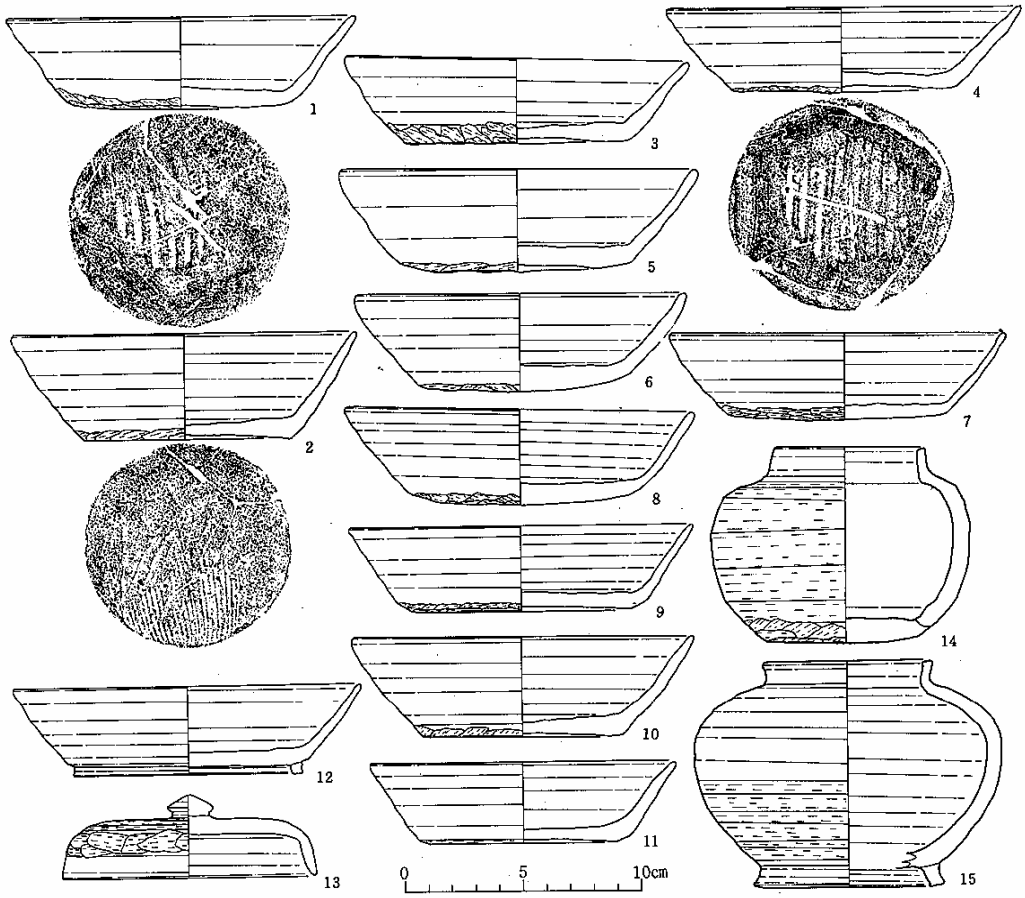
地山を掘り込んで構築されており、〈掘り方〉の平面形態は裏込め外側の線に一致する。

外部施設：〈周湟〉は内周がほぼ正円形で、その中心は玄室北半部に想定される。外周は東西でやや外側に張り出し楕円形を描いており、西北西では隣接する第252号墳の周湟がその一部を破壊している。前庭部では途切れる。深さは東側が西側よりもやや深いが、これは西側の地山の下層に存在する礫層を避けたためと考えられる。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からな





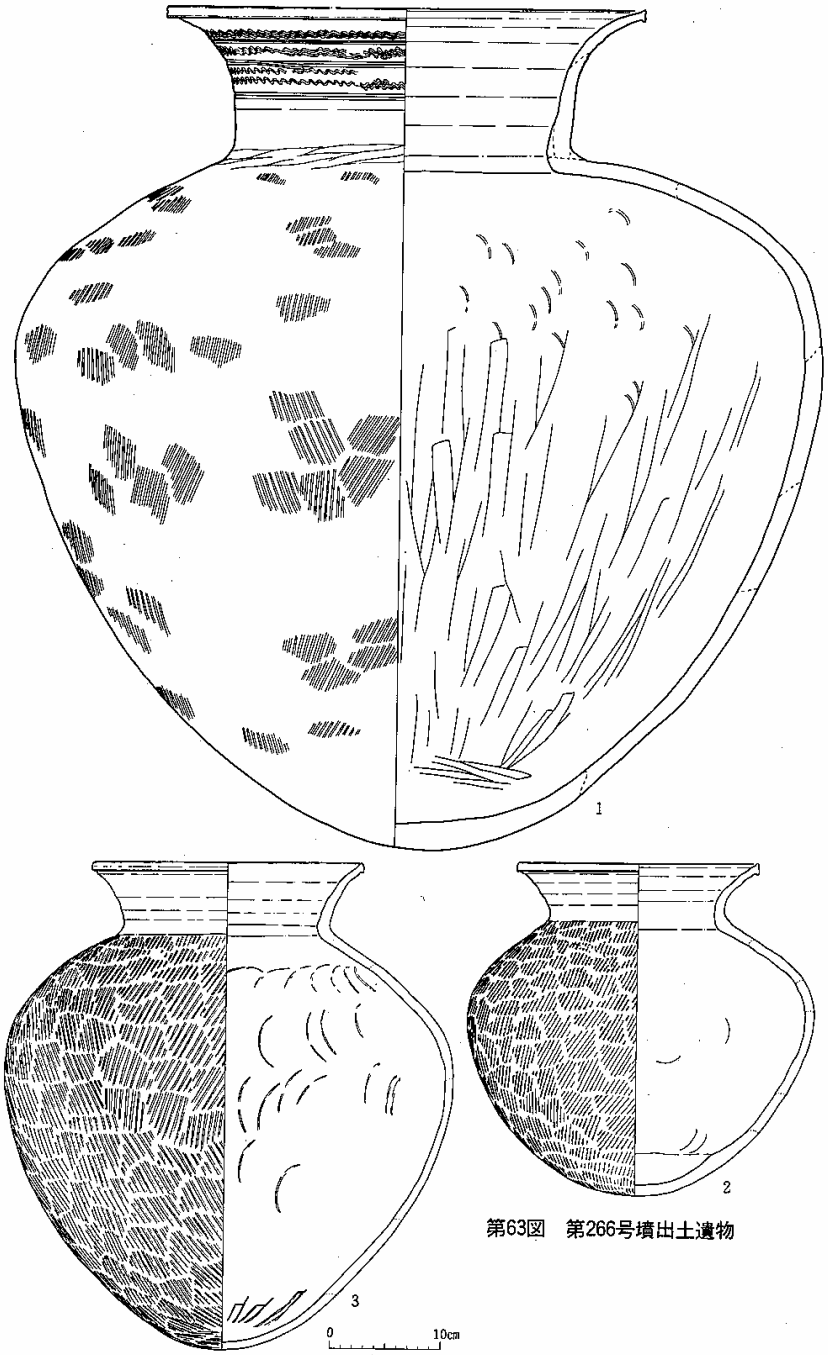
第61図　第 266 号 墳



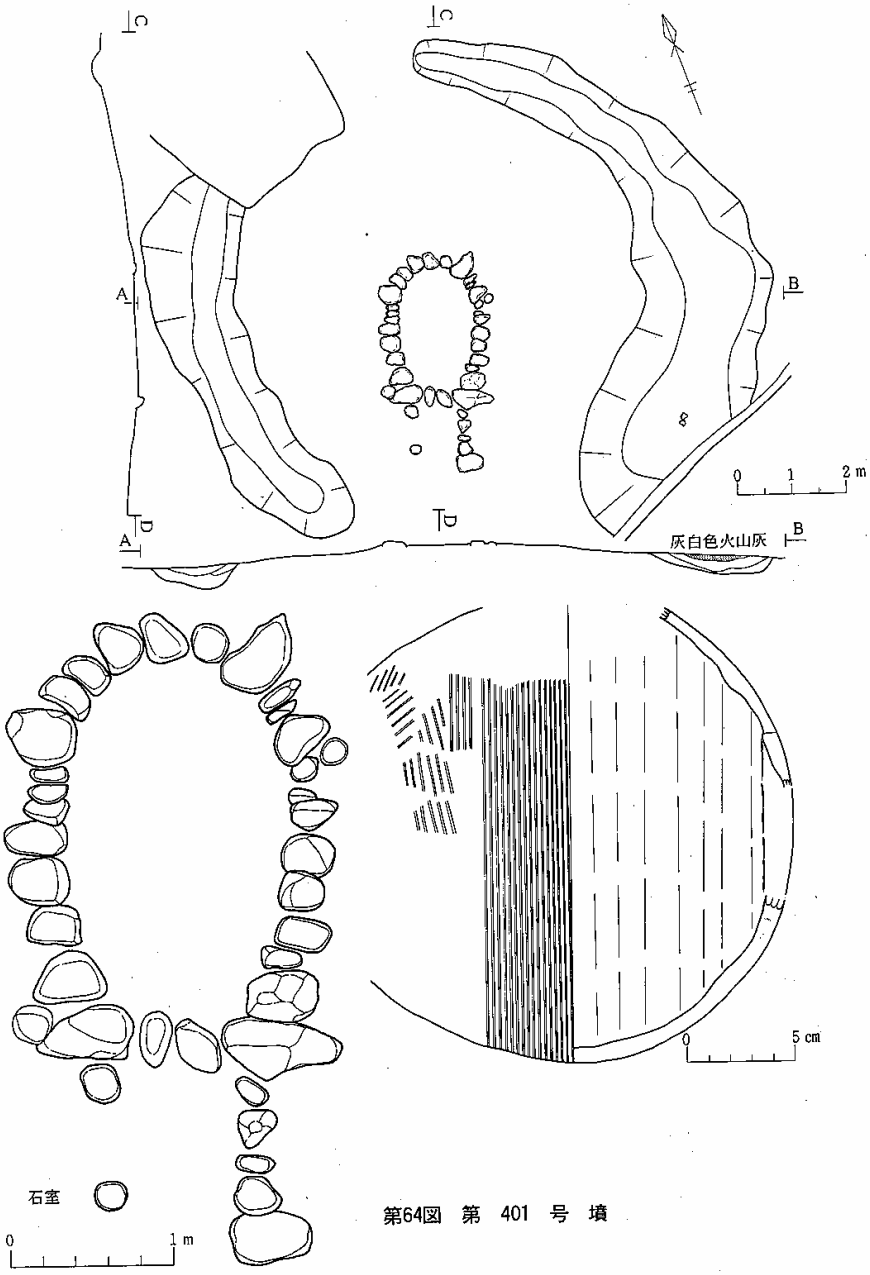
第62図　第266号墳出土遺物

り、灰白色火山灰が最上部に堆積している。〈墳丘〉は削平により失われている。〈前庭〉羨門前を掘り込んで平坦面が形成されている。明確なプランは確認できないが、周湟底面との比高100cm前後で、予想される石室床面のレベルとの比高約20cmである。羨門の左右には袖状に石が組まれている。

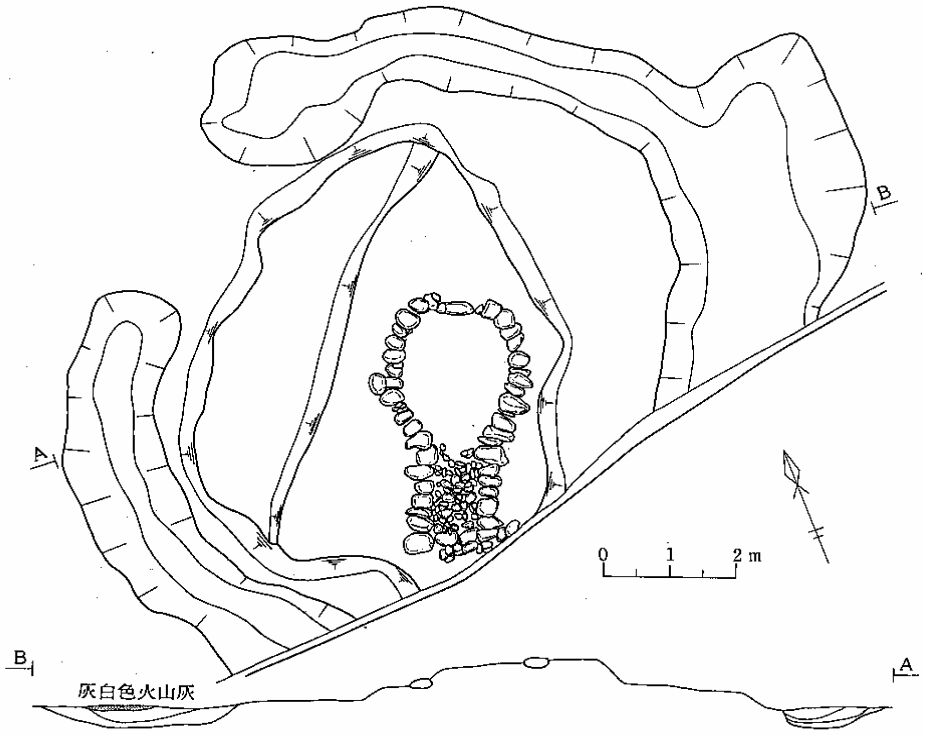
出土遺物：前庭周辺から須恵器が出土している。図示できたものは須恵器坏11点、高台付坏、蓋各1点、短頸壺2点、甕3点である。甕は前庭の東縁部に、墳丘側から1、2、3の順に並んで出土し、1は口縁部が伏せられ、体部、底部は周湟中に流れ込んだ状態で出土している。
これに対し2は底部が前庭に据えられ、体部、口縁部が周湟中に流れ込んだ状態で出土している。小型の器種は前庭の東半から出土している。いずれも完形である。



第63図　第266号墳出土遺物



第64図 第 401 号 墳



第65図　第402号墳全景

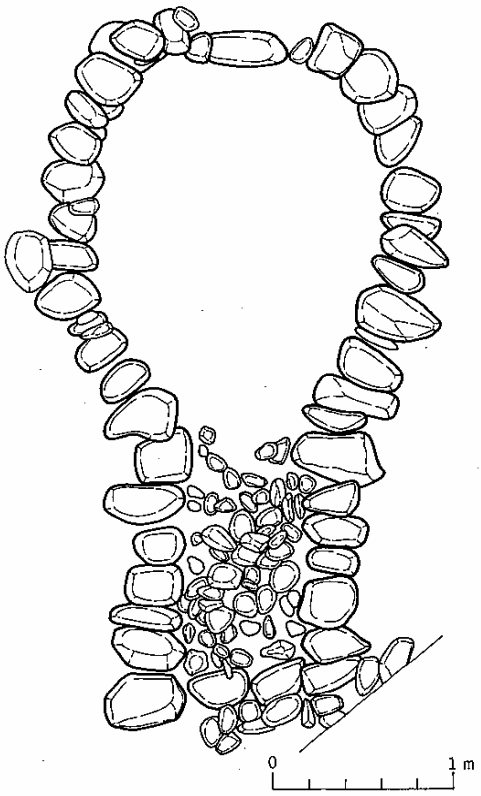
第401号墳

確認状況：畑の耕作土下約30cmの地山面で残存する石室の上面を確認した。玄室内のボーリング調査を行った結果、確認面下5cmに床面敷石の存在が確認された。側壁の羨道西側は抜き取られているが、その他は残存しており、石室の残存状態は比較的良好である。周湟の南東端の一部が花川の堤防下に入り調査できなかったが、他の部分の周湟は全掘した。

主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りを有する。〈奥壁部〉は大きな石を使用せず、側壁用材とほぼ同大の石を用いてカーブをもたせている。〈羨門部〉にはやや大きめの偏平な石が使用されている。〈玄門部〉にはやや大きめで細長い石が使用され、僅かに突出して袖部が形成されている。〈玄門部床面〉には梱石状に2個の石が並列されている。〈玄室部〉内にはシルトが堆積し床面を覆っている。〈羨道部〉はボーリング調査を行ったが下部に敷石は確認されず、閉塞石と考えられる石等も認められないことから、羨道床面、閉塞等に礫は使用されていないものと思われる。〈裏込め〉は確認できず、積み土が石室側壁を直接覆っていると考えられる。

外部施設：〈周湟〉は内外周が石室北半部を中心とする円形で、南部と北西部では途切れている。堆積土は主に褐色系シルトからなり、上部に灰白色火山灰がみられる。〈墳丘、前庭〉は削平により失われたものと考えられる。

出土遺物：羨門東側の周湟底面から土師器、須恵器が出土している。図示できたのは提瓶1点のみである。



第66図　第402号墳石室

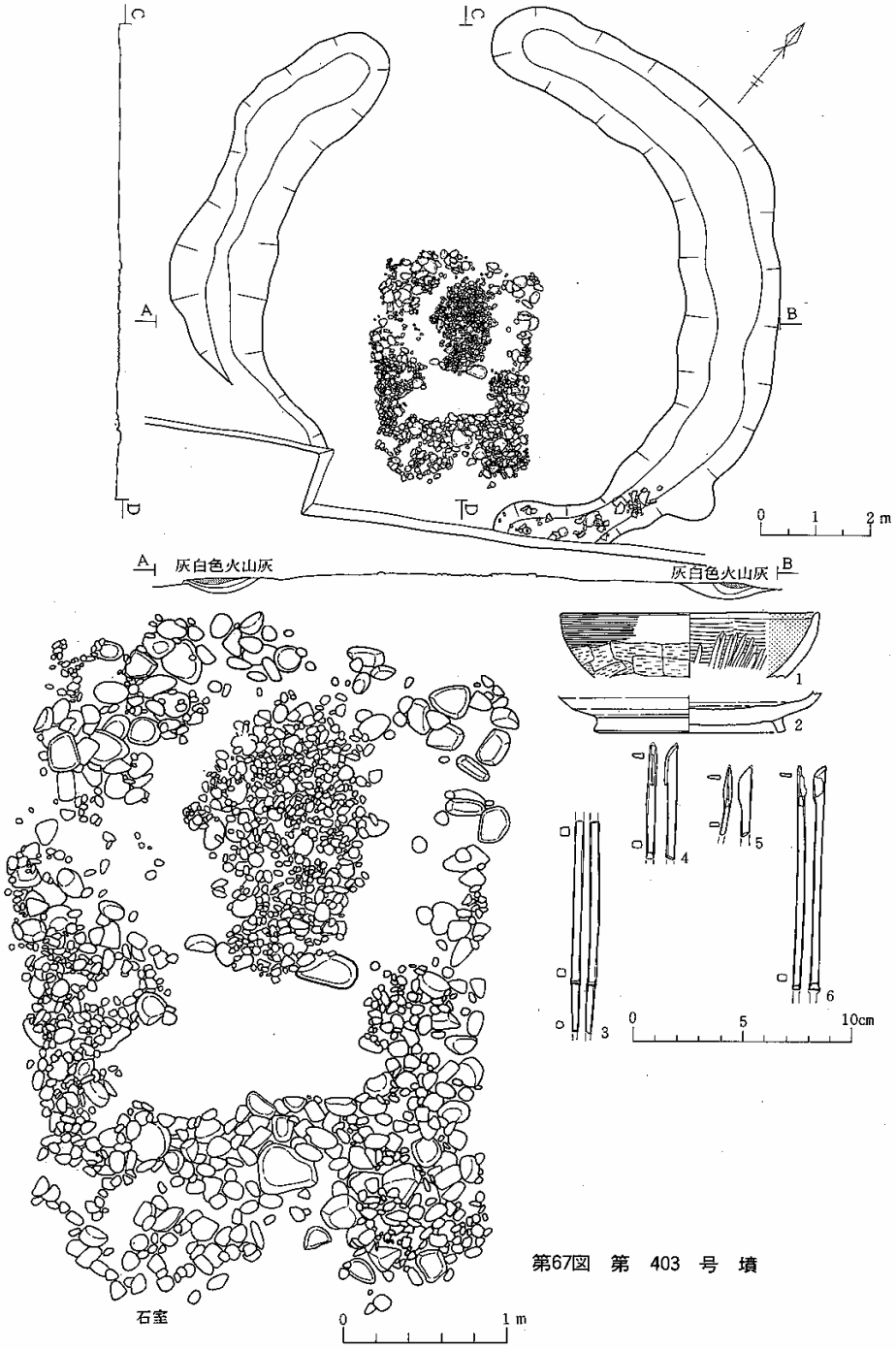
第402号墳

確認状況：近世の墓域で、荒撫地となっていた。表土下約10cmで残存する石室の上面を確認した。床面は確認面からかなり下に存在すると思われるが確認することはできなかった。石室の残存状況は良好で、石室周辺には積み土の一部も残存している。周湟の南部前庭部は花川の堤防下にあり調査できなかったが、その他の部分の周湟は全掘した。

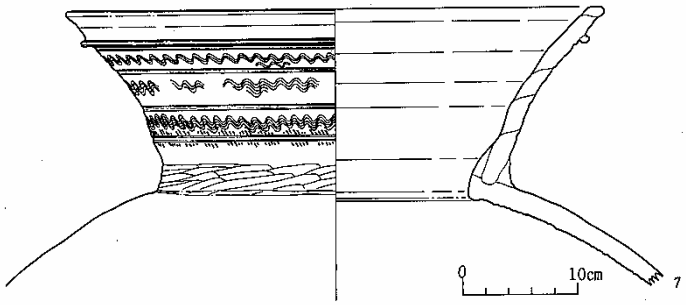
主体部：横穴式石室で玄室部に胴張りをもつ。〈奥壁部〉は偏平な板状の石が立てられていると推定される。〈羨門部〉〈玄門部〉にはやや大きめの石が用いられている。〈玄室部〉には崩落した石室上部の用材と思われる礫、土が堆積している。〈羨道部〉には挙大の礫が無秩序に充塡されているが、羨門部の前端では大きめの石でこれらが押えられている。〈裏込め〉は確認できず、積み土が石室側壁を直接覆っていると考えられる。

外部施設：〈周湟〉は内周が石室北半部を中心とする不整な円形で、外周は東部で張り出し不整形である。深さは、東部でやや深く北・西部で浅くなり、北西の一部で途切れている。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなる。〈墳丘〉は全体の形態、状況は不明であるが、石室周辺には積み土の一部と思われる暗褐色シルトが残存している。

出土遺物：遺物の出土はない。



第67図　第　403　号　墳



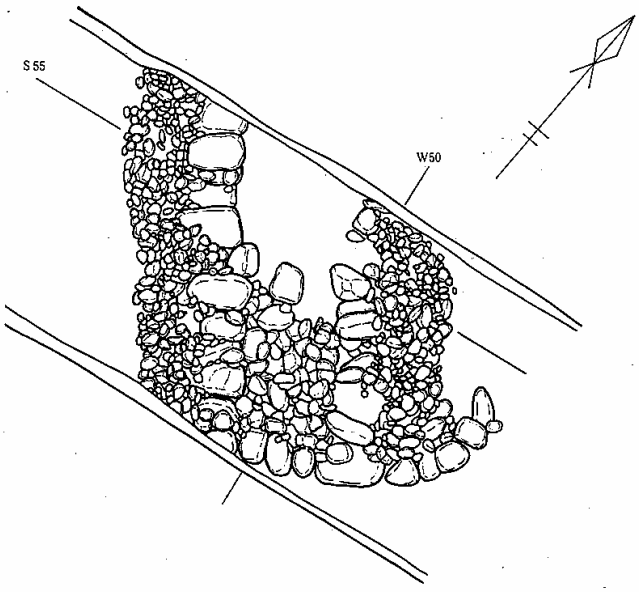
第403号墳

確認状況：畑の耕作土下約30cmの地山面で残存する石室の床面敷石、裏込め石、周湟を確認した。側壁用材は総て抜き取られていた。周湟の東南部、前庭は花川の堤防下にあり調査できなかったが、その他の部分の周湟は全掘した。

主体部：横穴式石室で、玄室部は胴張りプランであったと推定される。残存する石室の最下部は地山を掘り込んで構築されたもので、〈掘り方〉の平面形は長方形を呈する。

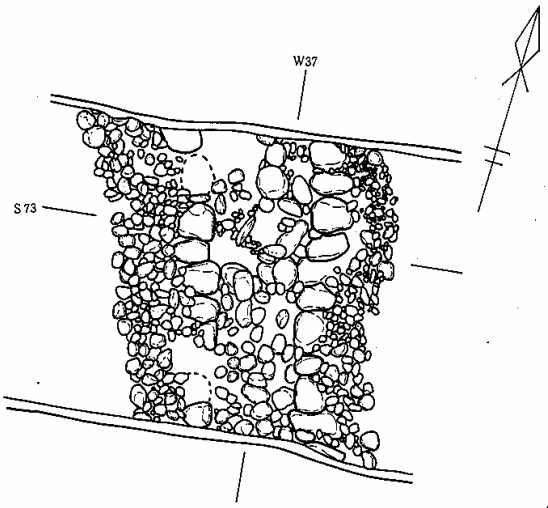
外部施設：〈周湟〉は内外周とも玄室北半部付近を中心とした円形で、前庭部と石室北方部の2ヶ所で途切れるか、もしくは浅くなっている。堆積土は主に褐色系シルト質土壌からなり、上部に灰白色火山灰層が認められる。〈墳丘〉〈前庭〉は、削平により失われている。

出土遺物：〈羨門東側〉の周湟底面、堆積土から土師器、須恵器が出土している。図化できたものは土師器坏1点、須恵器高台付坏1点、同甕1点である。いずれも破片となって、周湟内のかなり広い範囲に流れ込んでいた。〈石室床面〉から鉄鏃破片が出土している。図化できたのは4点のみである。



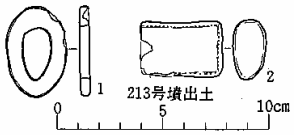
210号墳

位置		S−55m, W−50m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄室〜羨門
確認面		床上40cm
規模	玄室	幅1.15m
	羨道	幅0.8m 長2.0m
用材	側壁	40×60cm
	床	
	閉そく	10×20cm
	裏込め	径5〜10cm
主軸方位		S−32.5°−E
出土遺物		鉄鏃
備考		



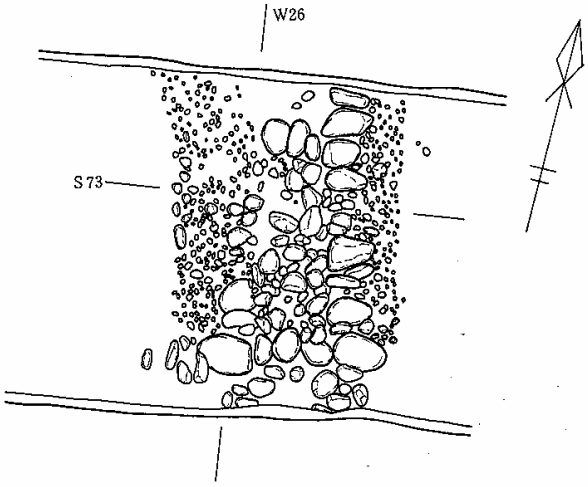
213号墳

位置		S−73m、W−37m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄室〜羨道
確認面		床上5cm
規模	玄室	幅1.0m
	羨道	幅0.7m
用材	側壁	20×40cm
	床	
	閉そく	径15cm
	裏込め	径5〜10cm
主軸方位		S−15.4°−E
出土遺物		鉄鏃 鍔(213−1) さや尻金具(213−2)
備考		



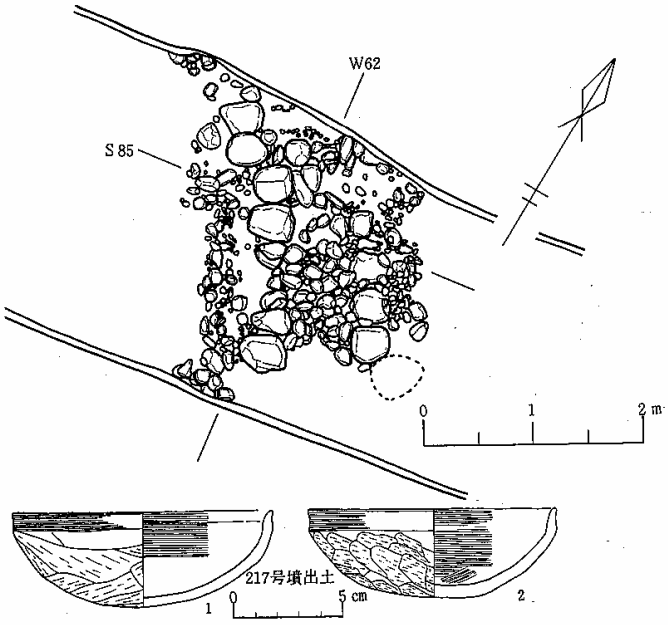
0 1 2m

第68図 第210、213号墳



214号墳

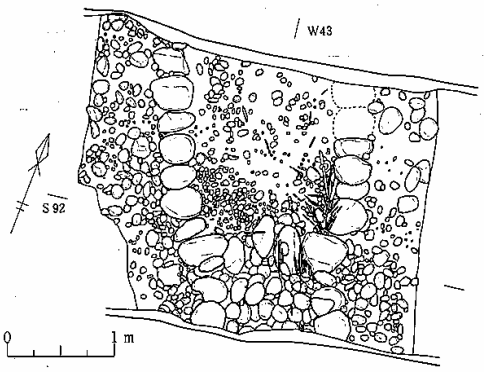
位　置		S－73m、W－26m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		羨道～羨門
確　認　面		床上20cm
規模	玄　室	
	羨　道	幅0.6m　長2.2m
用材	側　壁	20×40cm
	床	
	閉そく	径20cm
	裏込め	径2～5cm
主軸方位		S－13.7°－E
出土遺物		なし
備　考		



217号墳

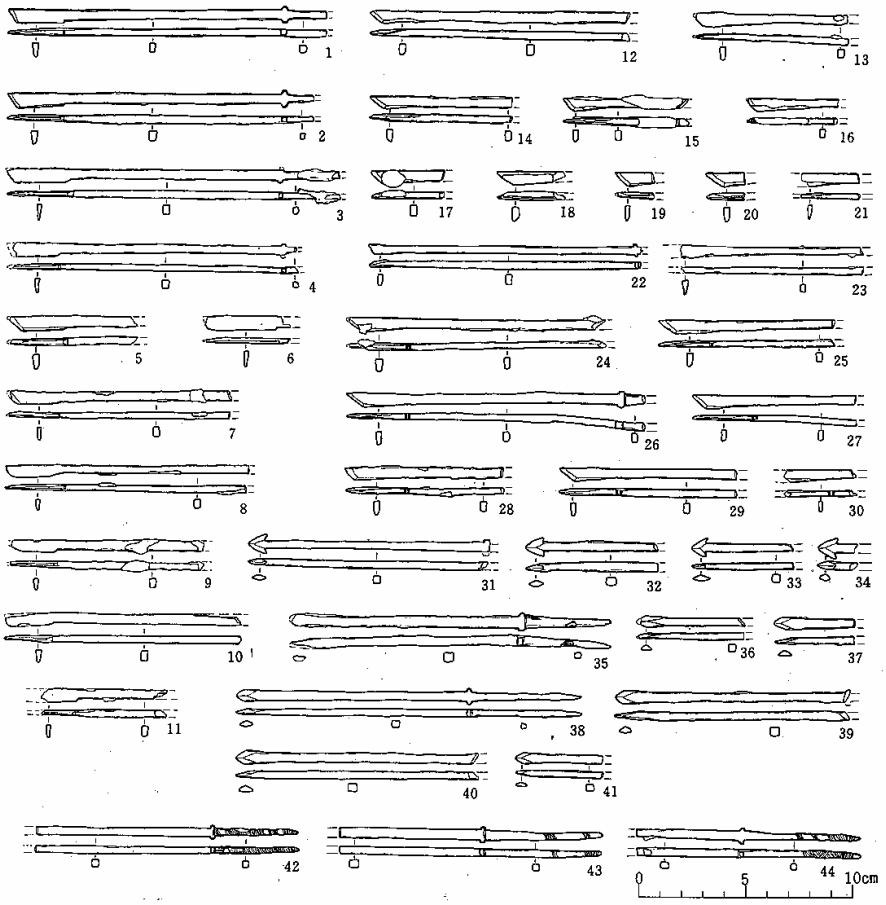
位　置		S－85m、W－62m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄門～羨門
確　認　面		床上60cm
規模	玄　室	
	羨　道	長2.0m　幅0.6m
用材	側　壁	30×30cm
	床	
	閉そく	径10～15cm
	裏込め	径5～10cm
主軸方位		S－31.5°－E
出土遺物		土師器坏(217-1、2)
備　考		

第69図　第214、217号墳

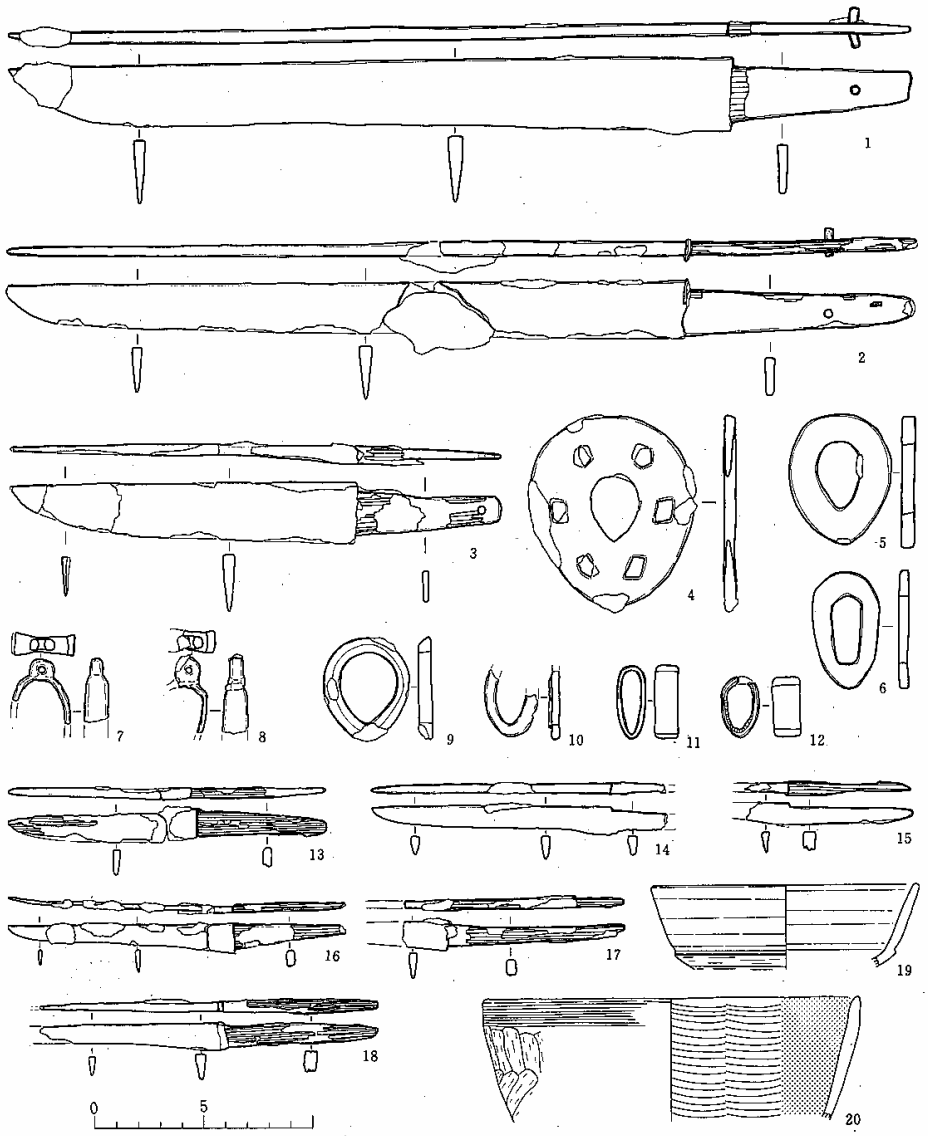


218号墳

位置		S－92m、W－43m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄室～玄門
確認面		床上0cm
規模	玄室	幅1.1～1.35m
	羨道	幅0.8m
用材	側壁	30×30cm
	床	玄室 径3～5cm 羨道 径15～20cm
	閉そく	
	裏込め	径5～10cm
主軸方位		S－18.2°－E
出土遺物		鉄鏃41本以上 刀子6振 直刀3振
備考		

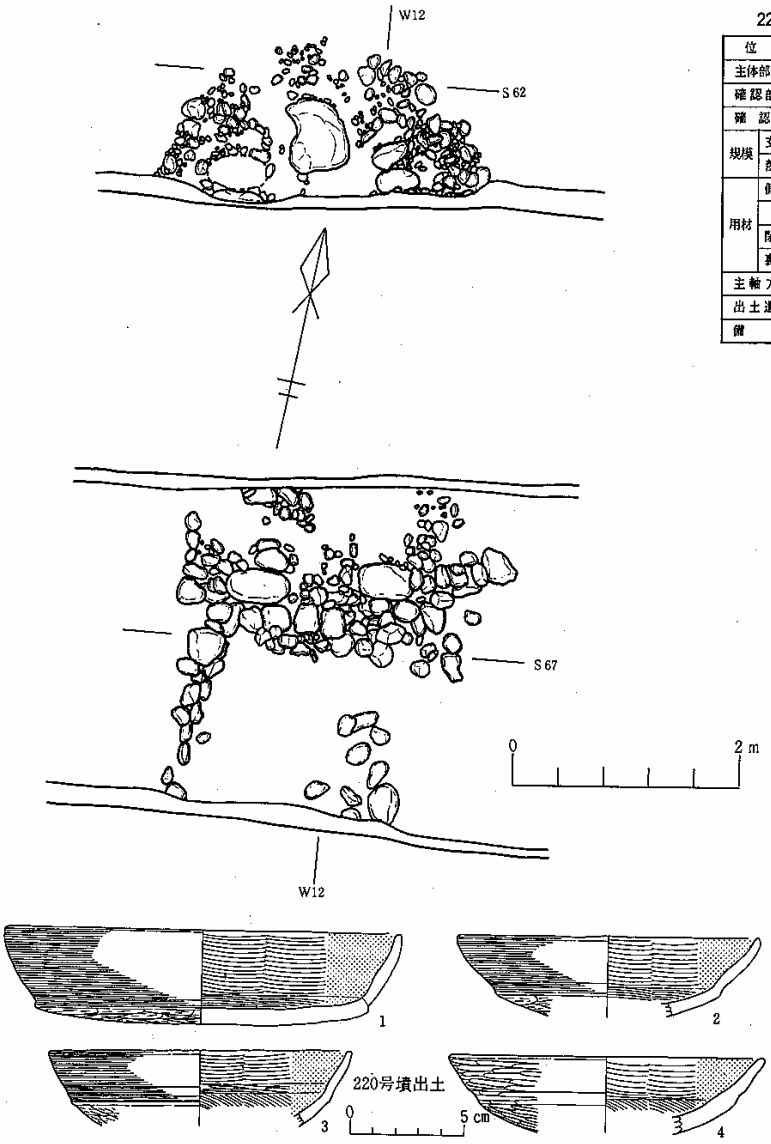


第70図 第 218 号 墳



No	種類	出土地点・層位	特徴	備考	No	種類	出土地点・層位	特徴	備考
1	直刀	玄室南東角床面	平棟、平造、フクラ枯れ、両関	完形、目釘残存	10	把縁金具	玄室中央西床面		上半部欠損
2	直刀	同上	同上	同上	11	組	玄室中央床面		完形
3	直刀	同上	同上	完形、目釘欠失	12	〃	玄室南東角床面		上半の一部欠損
4	鍔	同上	倒卵形、六窓、両打返耳	完形	13	刀子	同上	平棟、平造、フクラ枯れ、両関	鞘、把の木質残存
5	鍔	同上	喰み出し鍔	〃	14	刀子	玄室中央床面	同上	茎尻欠損
6	鍔	同上	同上	〃	15	刀子	玄室床面	両関	刃先欠損、把木質残存
7	吊金具	玄室中央西床面		下半部欠損	16	刀子	玄門柵石上	平棟、平造、フクラ枯れ、刃関	
8	吊金具	同上		〃	17	刀子	玄室床面	平棟、平造 両関	刃先欠損、把木質残存
9	把縁金具	同上		完形	18	刀子	玄室中央床面	同上	刃先欠損、把木質残存

第71図　第218号墳出土遺物



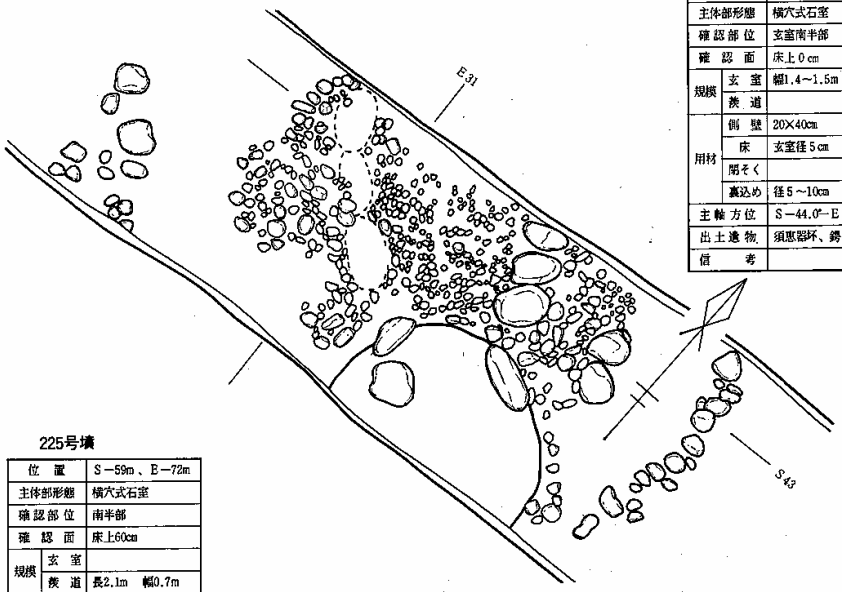
220号墳

位置		S－65m、W－12m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		奥壁、羨門
確認面		床上15cm
規模	玄室	幅1.0m以上
	羨道	幅0.6m
用材	側壁	30×50cm
	床	
	閉そく	
	裏込め	径10cm
主軸方位		S－12.0°－E
出土遺物		土師器坏
備考		

第72図　第　220　号　墳

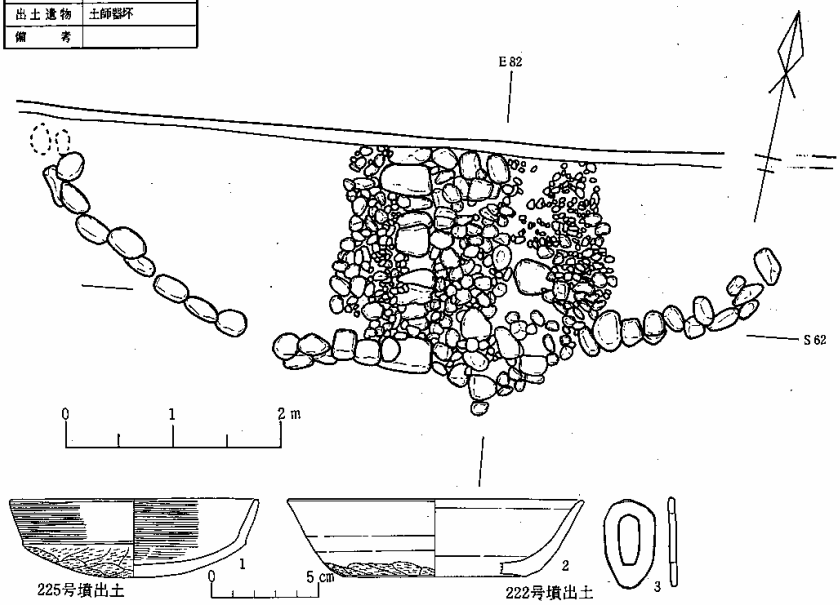
222号墳

位　置		S－43m、E－32m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄室南半部
確　認　面		床上0cm
規模	玄　室	幅1.4～1.5m
	羨　道	
用材	側　壁	20×40cm
	床	玄室径5cm
	閉そく	
	裏込め	径5～10cm
主軸方位		S－44.0°－E
出土遺物		須恵器坏、鍔
備　考		

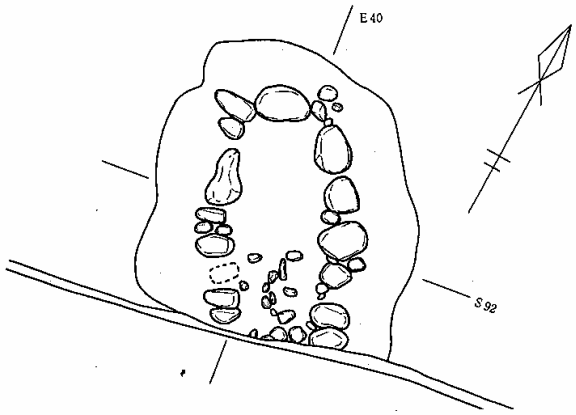


225号墳

位　置		S－59m、E－72m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		南半部
確　認　面		床上60cm
規模	玄　室	
	羨　道	長2.1m　幅0.7m
用材	側　壁	30×50cm
	床	
	閉そく	径10～15cm
	裏込め	径3～15cm
主軸方位		S－6.5°－E
出土遺物		土師器坏
備　考		



第73図　第222、225号墳

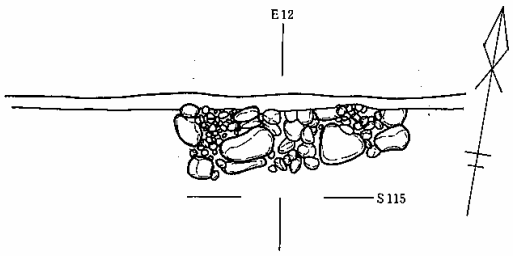


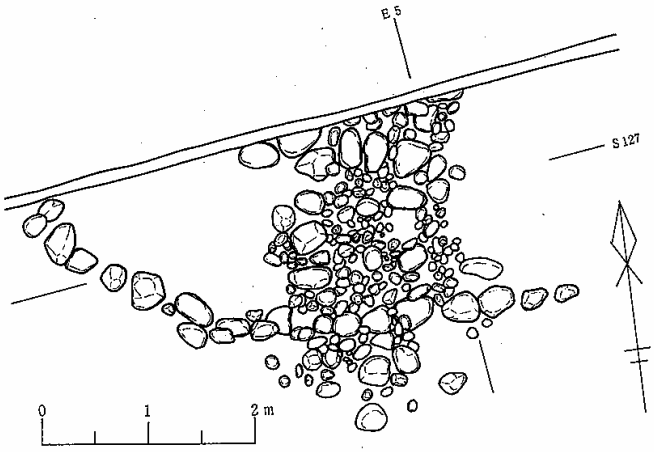
229号墳

位置		S－92m、E－40m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄室部玄門
確認面		床上　cm
規模	玄室	長1.70m
	羨道	
用材	側壁	35×35cm
	床	
	閉そく	径15cm
	裏込め	粗砂、砂礫、シルト
主軸方位		S－25.1°－E
出土遺物		
遺構		

232号墳

位置		S－115m、E－12m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		羨門部
確認面		床上50cm
規模	玄室	
	羨道	幅0.50m
用材	側壁	20×40cm
	床	
	閉そく	径15cm
	裏込め	径5～10cm
主軸方位		S－17.5°－E
出土遺物		
備考		

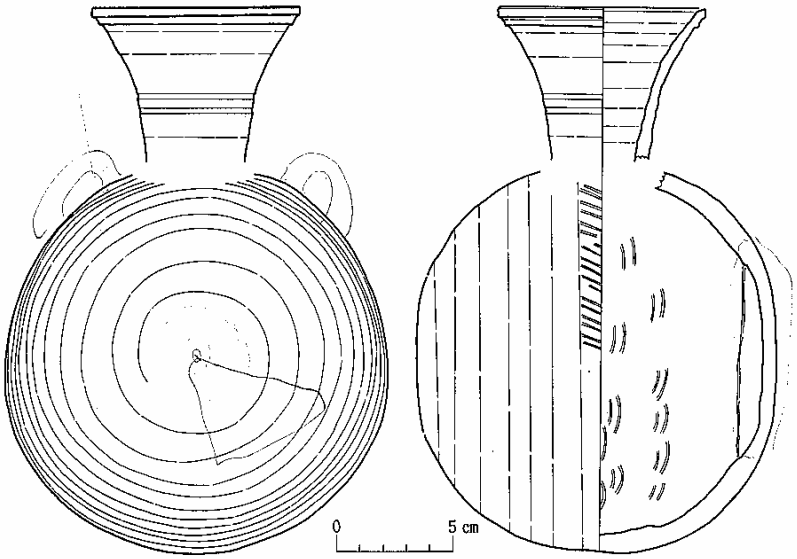




234号墳

位置		S－127m、E－5m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄門、羨道、羨門
確認面		床上40cm
規模	玄室	
	羨道	幅0.55～0.60m 長1.9m
用材	側壁	25×30cm
	床	径10cm
	閉そく	
	裏込め	径10cm
主軸方位		S－5.0°－W
出土遺物		須恵器提瓶・甕・鉄鏃
備考		

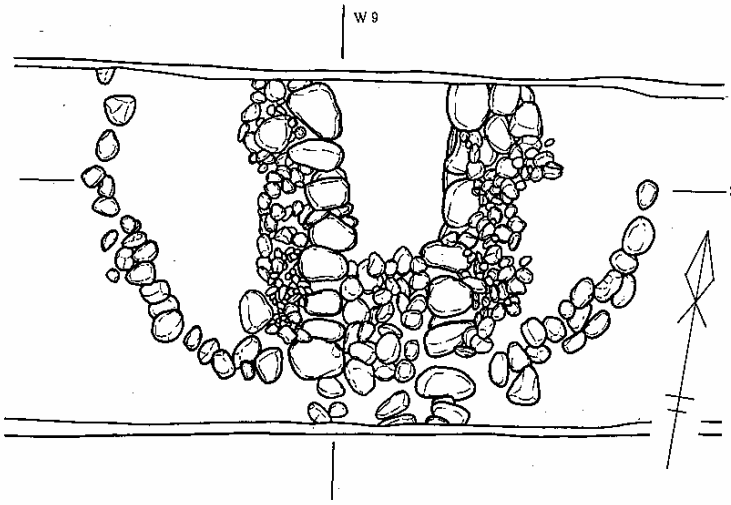
第74図　第229、232、234号墳



第75図　第234号墳出土遺物

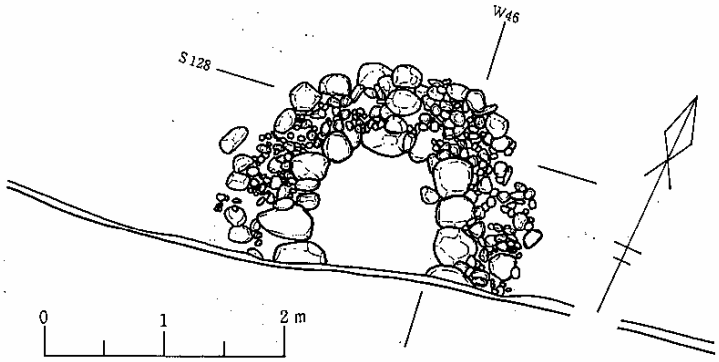
第70図の観察表

No.	種類	出土地点・層位	特徴	備考
1	鏃	玄門東柵石上	片丸、片刃、刃関、カマス、長篦被、棘状突起	茎欠損
2	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃、〃	〃
3	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃、〃	〃
4	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃、〃	〃
5	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃、〃	〃
6	〃	玄室南西角床面	〃、〃、〃、フクラ、	身部のみ
7	〃	玄門柵石上	〃、〃、〃、〃、長篦被	茎欠損
8	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
9	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
10	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
11	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	茎、身先端欠損
12	〃	玄室南東角床面	〃、端片刃、カマス、長篦被	茎欠損
13	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
14	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
15	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
16	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
17	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	茎、篦被欠損
18	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	身部のみ
19	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	身部先端のみ
20	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
21	〃	〃	片丸、端片刃	身部先端欠損
22	〃	玄門東柵石上	カマス、長篦被、棘状突起	茎欠損
23	鏃	玄門東柵石上	長篦被	身部先端欠損
24	〃	玄室南東角床面	片丸、端片刃、カマス、長篦被、刻目	茎欠損
25	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃、〃	〃
26	〃	玄門中央柵石上	片丸、端片刃、カマス、長篦被、棘状突起、刻目	〃
27	〃	玄室南東角床面	〃、〃、〃、〃、〃	〃
28	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
29	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
30	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	身部先端茎欠損
31	〃	〃	両丸、両刃、逆棘、長篦被、棘状突起	茎欠損
32	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
33	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃	〃
34	〃	〃	〃、〃、〃、〃	身部のみ
35	〃	〃	片丸、両端刃、長篦被、棘状突起、尖根	完形
36	〃	玄門東柵石上	〃、〃、〃、〃、	茎欠損
37	〃	〃	〃、〃、〃、〃、	〃
38	〃	〃	〃、〃、〃、〃、棘状突起、尖根	完形
39	〃	玄室南東角床面	〃、〃、〃、〃、	茎欠損
40	〃	玄門東柵石上	〃、〃、〃、〃、	〃
41	〃	玄室南東角床面	〃、〃、〃、〃、	〃
42	〃		〃、棘状突起、尖根	身部欠損
43	〃		〃　〃　〃	茎に繊維残存
44	〃		〃　〃	



235号墳

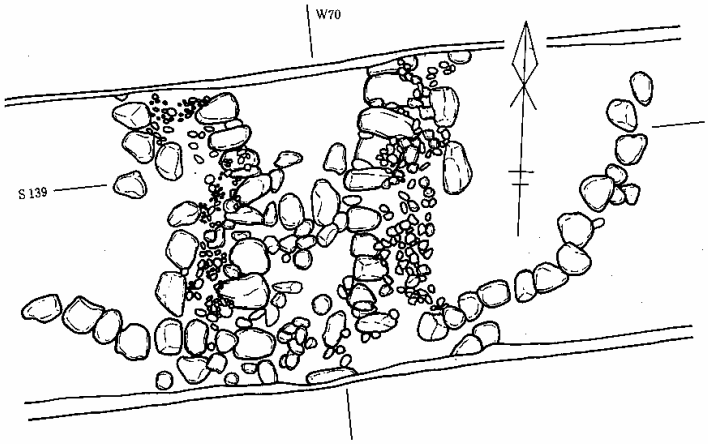
位　置		S－127m、W－9m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄室～羨門
確　認　面		床上40cm
規模	玄　室	幅0.9m
	羨　道	幅0.7m　長1.3m
用材	側　壁	20×30cm
	床	
	閉そく	径15～20cm
	裏込め	径10cm
主軸方位		S－4.5°－E
出土遺物		
備　　考		



237号墳

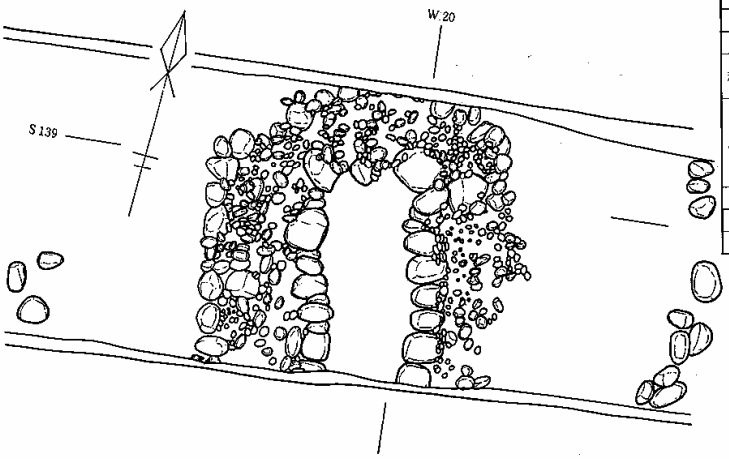
位　置		S－127m、W－46m
主体部形態		(横穴式石室)
確認部位		玄門北半部
確　認　面		床上45cm
規模	玄　室	
	羨　道	
用材	側　壁	30×40cm
	床	
	閉そく	
	裏込め	径5cm
主軸方位		S－18.0°－E
出土遺物		
備　　考		

第76図　第235、237号墳



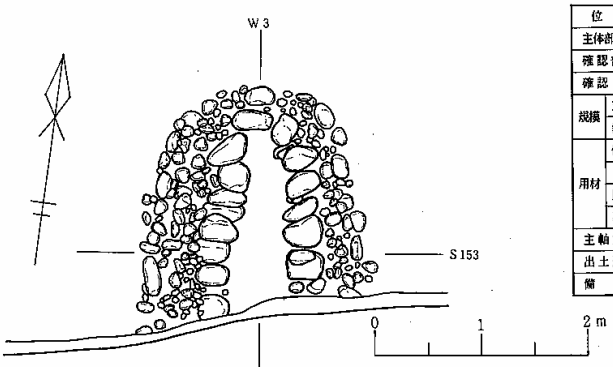
238号墳

位　置		S－139m、W－70m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄室～羨門　葺石
確　認　面		床上30cm
規模	玄　室	幅1.2m
	羨　道	幅0.75m　長1.65m
用材	側　壁	30×50cm
	床	
	閉そく	径15cm
	裏込め	径5cm
主軸方位		S4.0°－E
出土遺物		なし
備　　考		



239号墳

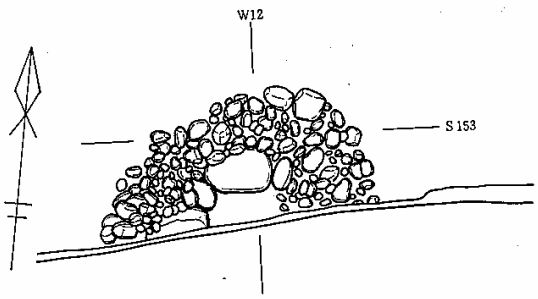
位　置		S－139m、W－20m
主体部形態		不明
確認部位		玄室北半部　葺石
確　認　面		床上30cm
規模	玄　室	幅0.8m
	羨　道	
用材	側　壁	25×40cm
	床	
	閉そく	
	裏込め	径5～10cm
主軸方位		S－13.5°－E
出土遺物		なし
備　　考		



240号墳

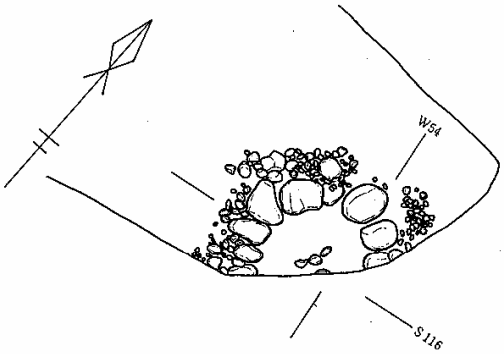
位　置		S－153m、W－3m
主体部形態		不明
確認部位		玄室北半部
確　認　面		床上30cm
規模	玄　室	
	羨　道	
用材	側　壁	20×30cm
	床	
	閉そく	
	裏込め	径5～10cm
主軸方位		S－7.8°－E
出土遺物		なし
備　　考		

第77図　第238、239、240号墳



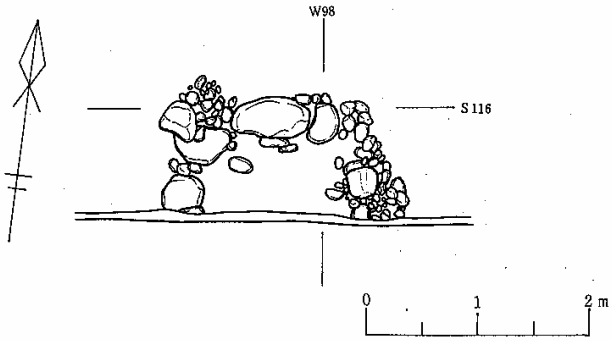
241号墳

位　置		S－153m、W－12m
主体部形態		不明
確認部位		玄室北半部
確認面		床上30cm
規模	玄室	
	羨道	
用材	側壁	
	床	
	閉そく	
	裏込め	径10～20cm
主軸方位		S－9.0°－E
出土遺物		なし
備　考		



242号墳

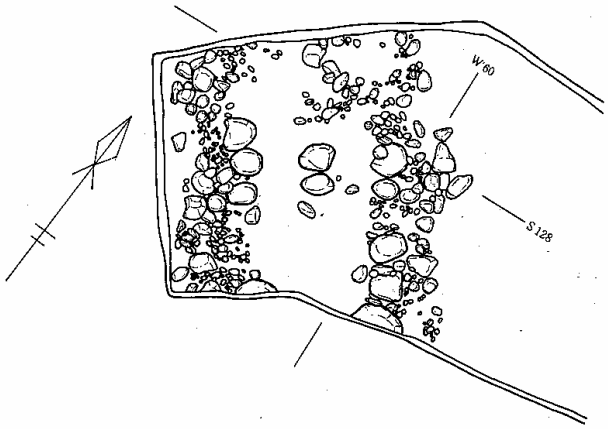
位　置		S－115m、W－55m
主体部形態		(横穴式石室)
確認部位		奥壁部
確認面		床上10cm
規模	玄室	
	羨道	
用材	側壁	30×40cm
	床	
	閉そく	
	裏込め	径3～10cm
主軸方位		S－42.6°－E
出土遺物		
備　考		



243号墳

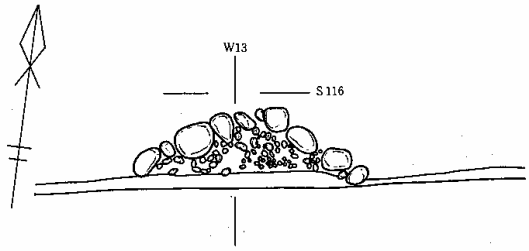
位　置		S－117m、W－99m
主体部形態		(横穴式石室)
確認部位		奥壁部
確認面		床上10cm
規模	玄室	
	羨道	
用材	側壁	30×40cm
	床	
	閉そく	
	裏込め	径3～10cm
主軸方位		S－5.0°－E
出土遺物		
備　考		

第78図　第241、242、243号墳



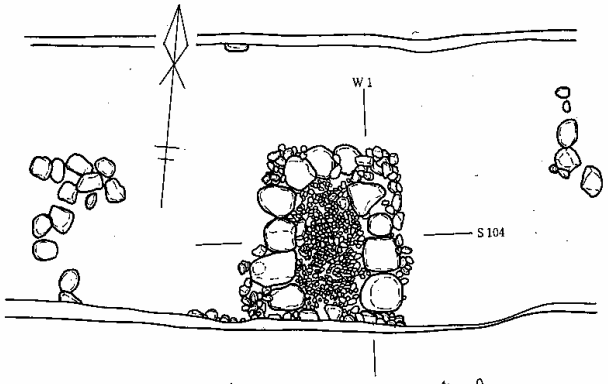
245号墳

位置		S-127m、W-60m
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄門部(?)
確認面		床上 20cm
規模	玄室	
	羨道	
用材	側壁	径30cm
	床	
	閉そく	
	裏込め	径3～30cm
主軸方位		S-34.6°-E
出土遺物		
備考		



264号墳

位置		S-115m、W-13m
主体部形態		(横穴式石室)
確認部位		奥壁部
確認面		床上 cm
規模	玄室	
	羨道	
用材	側壁	
	床	
	閉そく	
	裏込め	径5cm前後
主軸方位		——
出土遺物		
備考		

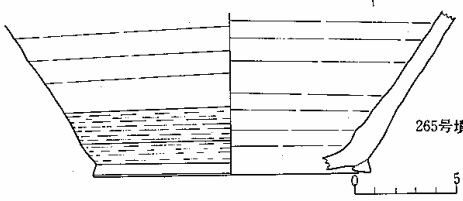


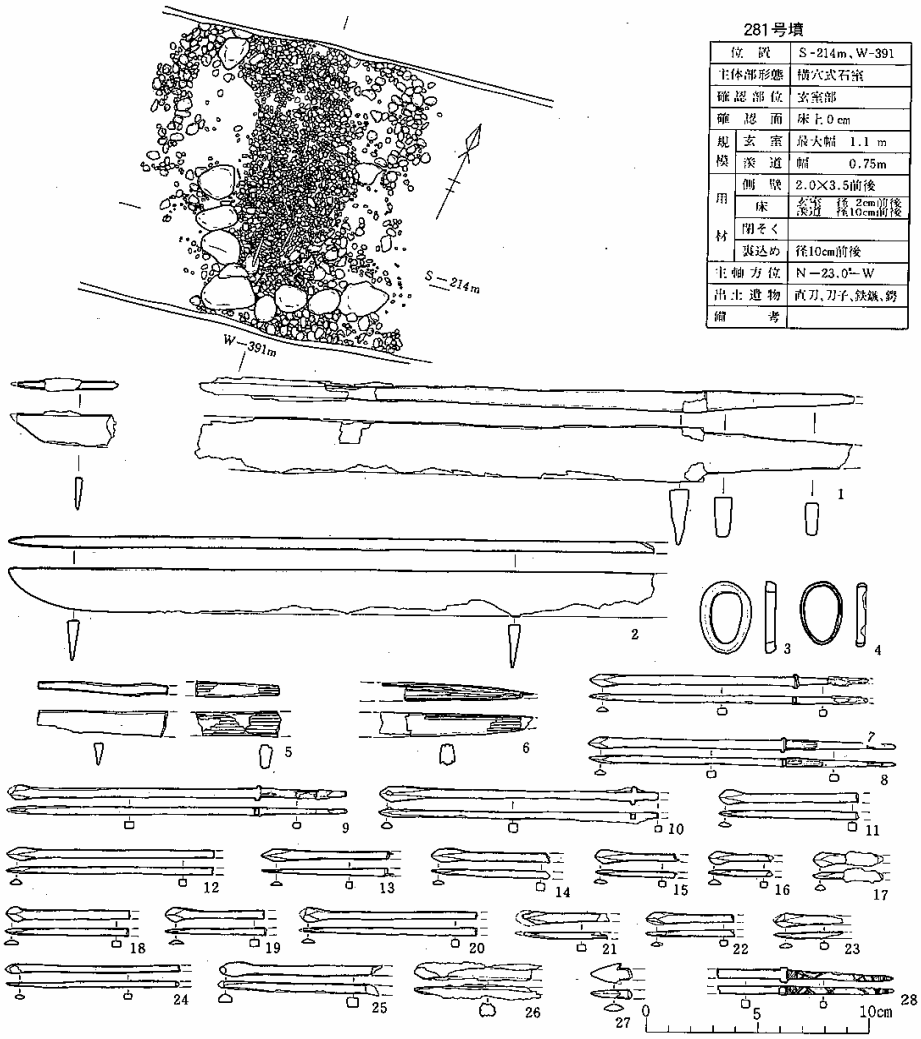
265号墳

位置		S-103m、W-1m
主体部形態		(竪穴式小石室)
確認部位		石室北半部
確認面		床上0cm
規模	玄室	
	羨道	
用材	側壁	30×40cm前後
	床	径2～4cm前後
	閉そく	
	裏込め	10～15cm前後
主軸方位		S-9.1°-E
出土遺物		須恵器壺
備考		

0 2m

第79図　第245、264、265号墳



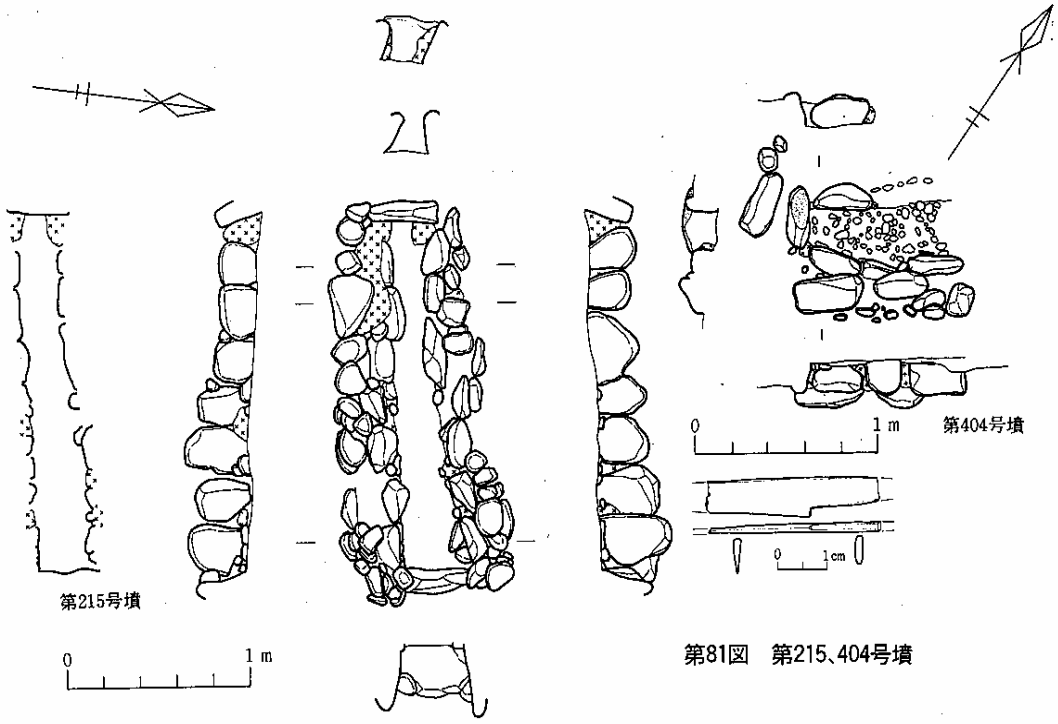


281号墳

位置		S-214m、W-391
主体部形態		横穴式石室
確認部位		玄室部
確認面		床上0cm
規模	玄室	最大幅 1.1 m
	羨道	幅 0.75m
用材	側壁	2.0×3.5前後
	床	玄室 径2cm前後 羨道 径10cm前後
	閉そく	
	裏込め	径10cm前後
主軸方位		N−23.0°−W
出土遺物		直刀、刀子、鉄鏃、鍔
備考		

No.	種類	出土地点・層位	特徴	備考	No.	種類	出土地点・層位	特徴	備考
1	直刀	玄室床面	平棟、平造、カマス、両関		15	鏃	玄室床面	片丸、両端刃、長挫被	
2	直刀	〃	平棟、平造、フクラ結れ、〃		16	〃	〃	〃、〃、〃	
3	把縁金具	〃		青銅製	17	〃	〃	〃、〃、〃	
4	鞘口金具	〃		鉄製、金メッキ	18	〃	〃	〃、〃、〃	
5	刀子	〃	平棟、平造	把部に木質残存	19	〃	〃	〃、〃、〃	
6	刀子	〃		〃	20	〃	〃	〃、〃、〃	
7	鏃	〃	片丸、両端刃、長挫被、棘状突起、尖根	茎に木質残存	21	〃	〃	〃、〃、〃	
8	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃、〃	〃	22	〃	〃	〃、〃、〃	
9	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃、〃	〃	23	〃	〃	〃、〃、〃	
10	〃	〃	〃、〃、〃、〃、〃		24	〃	〃	〃、〃、〃	
11	〃	〃	〃、〃、〃、〃		25	〃	〃	〃、〃、〃	
12	〃	〃	〃、〃、〃、〃		26	〃	〃	〃、〃、〃	
13	〃	〃	〃、〃、〃、〃		27	〃	〃	両丸、両刃、逆棘	
14	〃	〃	〃、〃、〃、〃		28	〃	〃	長挫被、棘状突起、尖根	茎に繊維残存

第80図 第 281 号 墳



第81図　第215、404号墳

第215号墳

確認状況：水田面下30cmの地山面で残存する石棺の上端を確認した。西端の天井石が2個構架された状態で確認されたが、他のものは失われていた。側壁及び妻部壁材は良好に残存している。

主体部：箱式石棺である。地山を掘り込み、その中に板状の河原石により石棺を構築している。裏込めは側壁部にのみ認められ、妻部にはみられない。棺材と裏込めとの間げきには青灰色粘土による目張りが施されている。床面に敷石、張り床はみられず、掘り方底面を直接石棺の床としたものと考えられる。石棺内には暗褐色シルト質土壌が堆積しており、弥生土器の細片、フレイク等が混入していたが、石棺に伴う遺体は発見されなかった。

外部施設：周湟、墳丘とも確認できなかった。

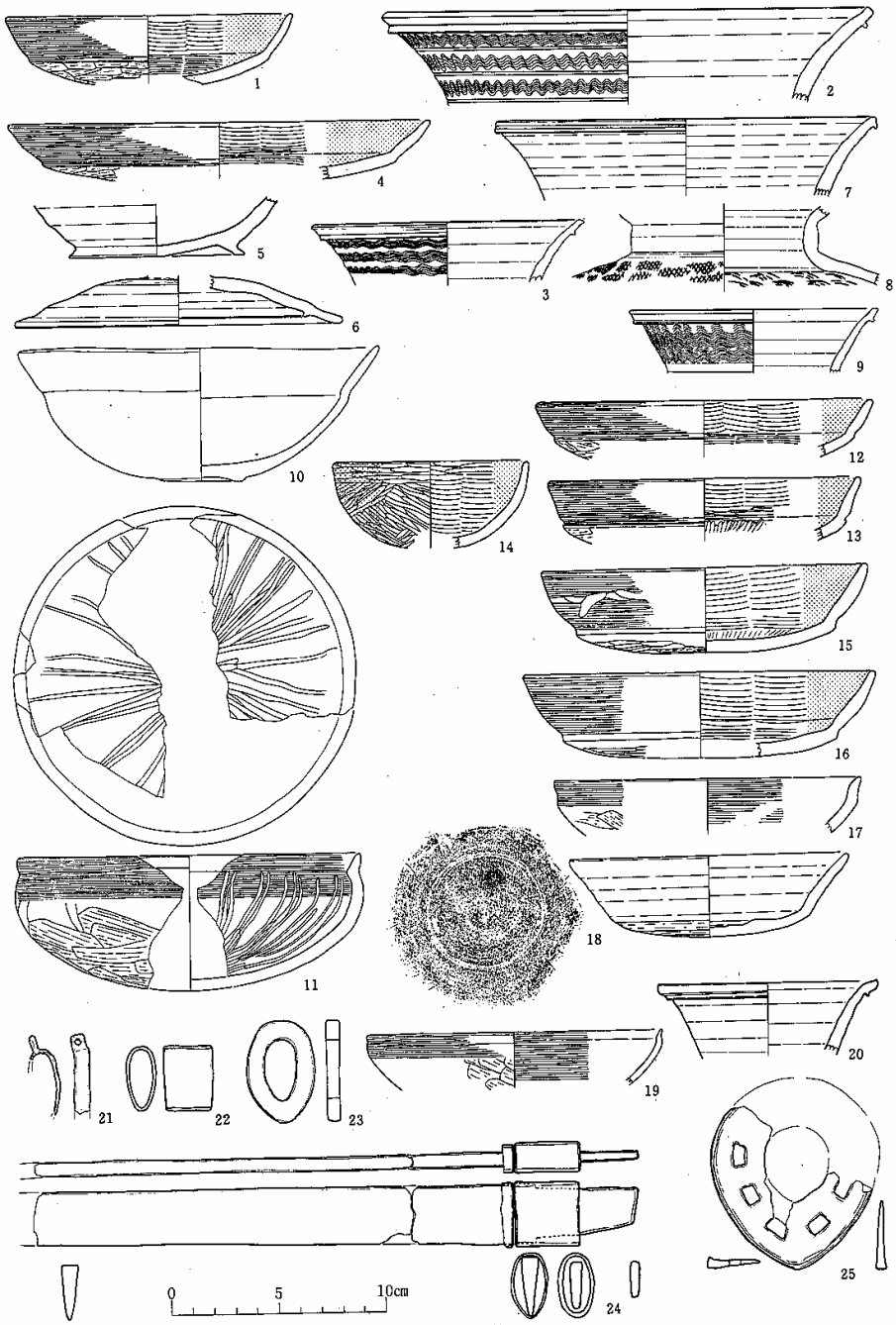
第404号墳

確認状況：畑の耕作土下約30cmの地山面で残存する石棺の上端面が確認された。西半部を残し東半部は破壊されている。天井石も残存していない。

主体部：箱式石棺である。地山を掘り込み、その中に板状の河原石により石棺を構築している。裏込めは側壁部にのみ認められ、妻部にはみられない。棺材、裏込めの間げきには黄褐色粘土による目張りが施されている。床面に敷石がみられるがその状態はまばらである。石棺内には暗褐色シルトが堆積していたが遺体は発見されなかった。

外部施設：確認されなかった。

出土遺物：石棺南側壁下の床面から刀子が出土している。



第82図　トレンチ内各古墳出土遺物

第1表　古墳一覧表

古墳番号	位　置	主体部形態	確認部位	主軸方向	床面標高	古墳番号	位　置	主体部形態	確認部位	主軸方向	床面標高
9	S-253、W-386	――	墳　丘	――	――	2355	S-127、W- 9	横穴式石室	玄室～羨門	S- 4.5°E	39.60m
10	S-253、W-418	――	〃	――	――	2366	S-127、W- 26	(　〃　)	玄室北半部	――	――
11	S-263、W-429	――	〃	――	――	2377	S-127、W- 46	(　〃　)	〃	S-18.0°E	39.60m
12	S-255、W-441	――	〃	――	――	2388	S-139、W- 72	〃	玄室～羨門	S- 4.0°E	40.00m
13	S-270、W-442	――	〃	――	――	239	S-139、W- 20	不　明	玄室北半部	S-13.5°E	39.50m
14	S-282、W-456	――	〃	――	――	240	S-153、W- 4	〃	〃	S- 7.8°E	39.65m
15	S-292、W-446	横穴式石室	全　体	S-32.0°E	――	241	S-153、W- 12	〃	〃	S- 9.0°E	39.60m
16	S-303、W-446	――	墳　丘	――	――	242	S-115、W- 55	(横穴式石室)	奥　壁　部	S-42.6°E	39.90m
35	――	――	――	――	――	243	S-117、W- 99	(　〃　)	〃	S- 5.0°E	40.30m
38	S-144、E- 94	――	墳　丘(?)	――	――	244	S-127、W-109	横穴式石室	羨　門　部	――	――
39	S-132、E- 41	――	墳丘、周溝	――	――	245	S-127、W- 60	〃	玄室部(?)	S-34.6°E	39.80m
40	S-120、E- 35	――	墳丘、周溝	――	――	246	S-97、E-58	〃	全　体	S-25.7°E	39.00m
77	S- 83、E-103	横穴式石室	全　体	S-0°-E	――	247	S-112、E- 54	竪穴式小石室	〃	S-35.0°E	38.70m
93	S-144、E- 33	横穴式石室	全　体	S- 9.5°E	38.90m	248	S-102、E- 47	横穴式石室	〃	S- 1.0°W	39.00m
94	S-100、W- 18	不　明	墳　丘	――	――	欠番	――	――	――	――	――
201	S-15、E-13	横穴式石室	全　体	S-16.1°E	39.60m	250	S-92、E-84	横穴式石室	全　体	S-41.0°E	38.60m
202	S-7、W-5	消　滅	〃	――	――	251	S-73、E-84	〃	〃	S-30.0°E	――
203	S-13、W-17	〃	〃	――	――	252	S-103、E- 84	〃	〃	S- 4.0°E	38.80m
204	S-34、W-29	横穴式石室	〃	S-18.0°E	39.60m	253	S-116、E- 89	〃	〃	S-22.2°W	38.70m
205	S-37、W-11	〃	〃	S-14.3°E	――	254	S-108、E- 71	〃	〃	S- 4.0°E	39.05m
206	S-34、E-10	不　明	周　溝	――	――	255	S-117、E- 47	竪穴式小石室	〃	S-15.0°W	38.60m
207	S-55、W-1	横穴式石室	玄室中央部	――	――	256	S-112、E- 60	〃	〃	S-11.4°E	39.20m
欠番	――	――	――	――	――	257	S-125、E-52	〃	〃	S-13.4°E	38.95m
209	S-54、W-33	横穴式石室	玄室北半部	――	――	258	S-131、E- 57	〃	〃	S-20.0°E	39.00m
210	S-55、W-50	〃	玄室～羨門	S-32.5°E	39.10m	欠番	――	――	――	――	――
211	S-65、W-65	〃	羨　門	――	――	260	S-141、E- 52	横穴式石室	全　体	S-10.0°E	39.15m
212	S-66、W-50	不　明	前　庭(?)	――	――	261	S-143、E- 67	〃	西　半　部	S-19.5°E	――
213	S-73、W-37	横穴式石室	玄室～羨道	S-15.4°E	39.40m	262	S-152、E- 63	〃〃	玄　室　部	S-16.5°E	――
214	S-73、W-25	〃	羨道～羨門	S-13.7°E	39.35m	263	S- 95、E-109	〃〃	全　体	S-14.5°E	38.30m
215	S-79、W-53	箱式石棺	全　体	S-78.6°W	39.35m	264	S-115、W- 13	〃	奥　壁　部	――	――
欠番	――	――	――	――	――	265	S-103、W- 1	(竪穴式小石室)	石室北半部	S- 9.1°E	39.70m
217	S-85、W-62	横穴式石室	玄門～羨門	S-31.5°E	39.05m	266	S-101、E- 96	横穴式石室	全　体	S-26.0°E	38.60m
218	S-92、W-43	〃	玄室～玄門	S-18.2°E	39.65m	267	S-150、E- 19	(横穴式石室)	〃	――	――
欠番	――	――	――	――	――	268	S-102、W- 12	(　〃　)	石室南半	S- 7.5°E	39.20m
220	S-65、W-12	横穴式石室	奥壁、羨門	S-12.0°E	39.20m	269	S-116、W-137	(　〃　)	前　庭　部	――	――
221	S-34、E-39	〃	全　体	S- 9.9°E	38.40m						
222	S-43、E-32	〃	玄室南半部	S-44.0°E	38.90m	301	S-238、W-450	横穴式石室	玄室中央部	――	――
欠番	――	――	――	――	――	302	S-116、W-440	(横穴式石室)	奥　壁　部	――	――
224	S-53、E-46	横穴式石室	全　体	S-11.0°E	38.60m	303	S-178、W-440	〃	玄室中央部	――	――
225	S-59、E-72	〃	南　半　部	S- 6.5°E	38.25m	304	S-214、W-391	〃	玄　室　部	S-23.0°E	42.815m
226	S-73、E-57	〃	玄室中央部	S-24.9°W	――	305	S-228、W-412	不　明	周　溝	――	――
227	S-78、E-71	〃	全　体	S-19.5°E	38.80m	306	S-190、W-409	〃	周溝、前庭	――	――
228	S-79、E-46	〃	玄　室　部	――	――	307	S-287、W-388	〃	周　溝	――	――
229	S-92、E-40	〃	玄室部玄門	S-25.1°E	――	308	S-280、W-401	〃	〃	――	――
230	S-91、E-11	〃	玄室中央部	――	――						――
欠番	――	――	――	――	――	401	S-362、W- 37	横穴式石室	全　体	S-20.0°W	41.45m
232	S-115、E- 12	横穴式石室	羨　門　部	S-17.5°E	――	402	S-379、W- 69	〃	〃	S- 7.0°W	――
233	S-129、E- 23	〃	全　体	S-14.6°E	39.30m	403	S-386、W- 88	〃	〃	S-37.0°E	41.50m
234	S-127、E- 5	〃	玄門羨道羨門	S- 5.0°W	39.70m	404	S-370、W- 95	箱式石棺	〃	S-60.0°E	41.20m

第2表　出土土器一覧表 ①

挿図No.	古墳No.	種　別	分　類	出土地点	挿図No.	古墳No.	種　別	分　類	出土地点
第6図-1	第39号墳	須恵器　坏	BⅡ1a	南東周湟堆積土	第27図-2	第227号墳	土師器　埦	——	周湟南西堆積土
〃 -2	〃	〃　蓋	BⅡ	〃	〃 -3	〃	須恵器　坏	BⅡ2	〃
〃 -3	〃	〃　提瓶	——	〃	〃 -4	〃	〃　高台付坏	——	〃
第8図-1	第77号墳	土師器　坏	AⅠ2a	南東テラス～周湟	〃 -5	〃	〃　蓋	BⅠ	前　庭
〃 -2	〃	〃	AⅠ1a‖ロ	〃	〃 -6	〃	〃　短頸壺	——	〃
〃 -3	〃	〃	AⅠ2b‖イ	南東テラス	〃 -7	〃	〃　甕	B	〃
〃 -4	〃	〃	AⅠ2bⅢ	南東テラス～周湟	第29図-1	第233号墳	土師器　坏	AⅠ2b|	周湟南西底面
〃 -5	〃	〃	AⅠ2b‖イ	前　庭	〃 -2	〃	〃	〃	〃
〃 -6	〃	〃	AⅠ2bⅢ	〃	〃 -3	〃	須恵器高台付坏	C	周湟南東底面
〃 -7	〃	〃	AⅠ2b‖イ	南東テラス～周湟	〃 -4	〃	〃	〃	〃
〃 -8	〃	〃	AⅠ2bⅢ	南東テラス	〃 -5	〃	〃	〃	〃
〃 -9	〃	〃	〃	〃	〃 -6	〃	〃　蓋	BⅢ	周湟南西底面
〃 -10	〃	〃	〃	〃	〃 -7	〃	〃　甕	B	周湟南東底面
〃 -11	〃	〃	AⅢ2a	南東テラス～周湟	第37図-1	第250号墳	土師器　坏	AⅠ1b‖ロ	南東周湟底面
〃 -12	〃	〃	〃	南東テラス	〃 -2	〃	須恵器　長頸瓶	——	〃
〃 -13	〃	〃　鉢	A2	〃	〃 -3	〃	〃　壺	——	攪　乱
〃 -14	〃	〃　壺	——	〃	〃 -4	〃	〃	——	〃
〃 -15	〃	〃　鉢	B	周湟南東堆積土	〃 -5	〃	〃　蓋	BⅢ	〃
〃 -16	〃	〃　高坏	——	〃	第40図-1	第251号墳	土師器　坏	AⅠ2b‖イ	周湟南東堆積土
〃 -17	〃	須恵器　蓋	BⅢ	前　庭	〃 -2	〃	〃	AⅡ	〃
〃 -18	〃	〃	〃	〃	〃 -3	〃	〃	AⅢ2a	〃
〃 -19	〃	〃　広口壺	AⅠ	南東テラス	〃 -4	〃	須恵器　壺	——	〃
第9図-1	〃	〃　壺	——		〃 -5	〃	〃　甕	A	周湟南東底面
〃 -2	〃	〃　広口壺	AⅡ	南東テラス	第43図-1	第252号墳	土師器　坏	AⅠ2b‖イ	前　庭
〃 -3	〃	〃　壺	AⅠ	〃	〃 -2	〃	〃	AⅠ1a‖ロ	〃
〃 -4	〃	〃　広口壺	AⅠ	〃	〃 -3	〃	須恵器　広口壺	AⅡ	〃
〃 -5	〃	〃　甕	A	南東テラス～周湟	第46図-1	第253号墳	土師器　坏	AⅠ1a|イ	周湟南東堆積土
第13図-1	第201号墳	土師器　坏	AⅠ2b‖イ	周湟南東堆積土	〃 -2	〃	〃	AⅠ2b‖イ	〃
〃 -2	〃	〃	AⅠ2bⅢ	〃	〃 -3	〃	〃	〃	〃
〃 -3	〃	〃	AⅢ2b	〃	〃 -4	〃	〃	AⅠ1a‖ロ	前庭　底面
〃 -4	〃	〃　蓋	——	〃	〃 -5	〃	〃	AⅠ1b‖イ	〃
〃 -5	〃	須恵器　広口壺	AⅡ	〃	〃 -6	〃	〃	AⅠ2b‖ロ	〃
第15図-1	第204号墳	須恵器　蓋	A	周湟南東堆積土	〃 -7	〃	〃	BⅡ	周湟南東堆積土
〃 -2	〃	〃	〃	〃	〃 -8	〃	〃	BⅢ	〃
〃 -3	〃	〃	〃	〃	〃 -9	〃	〃　埦	——	前庭　底面
〃 -4	〃	〃	〃	〃	〃 -10	〃	須恵器　甕	B	周湟南西堆積土
〃 -5	〃	〃台付長頸瓶	——	〃	第49図-1	第254号墳	土師器　坏	AⅠ3	南東テラス～周湟
〃 -6	〃	〃　提瓶	——	周湟南西堆積土	〃 -2	〃	〃	AⅠ2b‖イ	〃
第16図-1	〃	〃　甕	A	周湟南東堆積土	〃 -3	〃	〃	AⅠ2c	〃
第17図-1	〃	〃	B	周湟西堆積土	〃 -4	〃	〃	AⅠ1b‖イ	南西テラス
第20図-1	第205号墳	土師器　坏	AⅠ2b|	前　庭	〃 -5	〃	〃	AⅢ2a	南東テラス～周湟
〃 -2	〃	〃	〃	〃	〃 -6	〃	〃	BⅡ	〃
〃 -3	〃	〃	〃	〃	〃 -7	〃	〃	BⅢ	南西テラス
〃 -4	〃	〃	AⅠ3	〃	〃 -8	〃	須恵器　蓋	BⅣ	周湟南東堆積土
〃 -5	〃	〃	AⅡ	〃	〃 -9	〃	〃　高台付坏	A	南西テラス
〃 -6	〃	須恵器　坏	AⅡ1	〃	〃 -10	〃	〃	〃	〃
〃 -7	〃	〃	BⅡ1c	〃	〃 -11	〃	〃	〃	南東テラス～周湟
〃 -8	〃	〃	BⅠ	〃	〃 -12	〃	〃	B	〃
〃 -9	〃	〃	BⅡ2	不　明	〃 -13	〃	〃　長頸瓶	——	南東テラス
〃 -10	〃	土師器　埦	——	前　庭	〃 -14	〃	〃　広口壺	AⅡ	周湟南東底面
〃 -11	〃	〃　高坏	——	〃	〃 -15	〃	〃　長頸瓶	——	〃
〃 -12	〃	〃　甕	——	周湟南東底面	〃 -16	〃	〃　甕	B	南西テラス
〃 -13	〃	須恵器　長頸瓶	——	〃	〃 -17	〃	〃	B	西東テラス
〃 -14	〃	〃	——	〃	〃 -18	〃	〃	A	南西テラス
〃 -15	〃	〃	——	〃	第50図-1	〃	〃	A	南東テラス～周湟
〃 -16	〃	〃　短頸壺	——	〃	〃 -2	〃	〃	B	〃
第21図-1	〃	〃　甕	A	前底　底面	〃 -3	〃	〃	B	〃
〃 -2	〃	〃	A	周湟南東底面	第52図-1	第256号墳	土師器　坏	BⅡ	周湟南東底面
第24図-1	第221号墳	土師器　坏	AⅠ2b‖イ	周湟南東底面	〃 -2	〃	〃	〃	
〃 -2	〃	〃	〃	〃	第53図	第257号墳	須恵器　甕	B	周湟南底面
〃 -3	〃	〃	〃	〃	第56図	第260号墳	〃	C	周湟南西底面
〃 -4	〃	〃	〃	〃	第59図-1	第263号墳	土師器　坏	AⅠ1a|ロ	前庭石組み上
〃 -5	〃	〃　壺	——	〃	〃 -2	〃	〃	AⅠ2a	前　庭
〃 -6	〃	須恵器　広口壺	B	前庭　底面	〃 -3	〃	〃	AⅠ2b‖イ	周湟南東底面
〃 -7	〃	〃　長頸瓶	——	前庭～周湟	〃 -4	〃	〃	AⅠ2b|	テラス南西
〃 -8	〃	〃　甕	B	周湟南東底面	〃 -5	〃	〃	AⅠ2b‖イ	周湟南東底面
〃 -9	〃	〃	B	〃	〃 -6	〃	〃	AⅢ2a	〃
第26図	第224号墳	土師器　坏	AⅠ3	前庭堆積土	〃 -7	〃	〃	〃	〃
第27図-1	第227号墳	〃　蓋	——	周湟南西堆積土	〃 -8	〃	〃	AⅢ2b	〃

第2表　出土土器一覧表 ②

挿図No.	古墳No.	種　別	分　類	出土地点	挿図No.	古墳No.	種　別	分　類	出土地点
第59図—9	第263号墳	土師器　鉢	A1	周溝南東底面	第69図—1	第217号墳	土師器　坏	BⅡ	南東周溝堆積土
〃　—10	〃	〃	B	〃	〃　—2	〃	〃	〃	〃
〃　—11	〃	〃　甕	——	〃	第71図—19	第218号墳	須恵器　坏	AⅠ	石室裏込め内
〃　—12	〃	須恵器　坏	BⅡ1b	前庭石組み上	〃　—20	〃	土師器　鉢	B	〃
〃　—13	〃	〃	〃	〃	第72図—1	第220号墳	土師器　坏	AⅠ3	前庭堆積土
〃　—14	〃	〃	〃	〃	〃　—2	〃	〃	AⅠ2bⅢ	〃
〃　—15	〃	〃	BⅡ1cⅱ	前庭　底面	〃　—3	〃	〃	AⅠ1aⅱイ	〃
〃　—16	〃	〃	〃	〃	〃　—4	〃	〃	AⅠ1bⅰ	〃
〃　—17	〃	壺	——	〃	第73図—1	第225号墳	土師器　坏	BⅠ	前庭　堆積土
第60図—1	〃	〃　長頸瓶	——	前庭～南東周溝	〃　—2	第222号墳	須恵器　坏	BⅡ1	〃
〃　—2	〃	〃	——	周溝南東底面	第75図	第234号墳	須恵器　提瓶	——	前庭　堆積土
〃　—3	〃	〃　広口壺	B	〃	第79図	第265号墳	須恵器　壺	——	不　明
〃　—4	〃	〃　甕	B	〃	第82図—1	第202号墳	土師器　坏	BⅠ2bⅡイ	前　庭
〃　—5	〃	〃	B	〃	〃　—2	第207号墳	須恵器　甕	A	前庭　堆積土
第62図—1	第266号墳	須恵器　坏	BⅡ1c	前　庭	〃　—3	第209号墳	〃	B?	前庭　堆積土
〃　—2	〃	〃	〃	〃	〃　—4	第212号墳	土師器　高坏	——	前庭　堆積土
〃　—3	〃	〃	〃	〃	〃　—5	〃	須恵器　壺	——	〃
〃　—4	〃	〃	〃	〃	〃　—6	〃	〃　蓋	A	〃
〃　—5	〃	〃	〃	〃	〃　—7	〃	〃　甕	B	〃
〃　—6	〃	〃	BⅡ1c	〃	〃　—8	〃	〃	B?	〃
〃　—7	〃	〃	〃	〃	〃　—9	〃	〃	B?	〃
〃　—8	〃	〃	〃	〃	〃　—10				第215号墳周辺
〃　—9	〃	〃	〃	〃	〃　—11	第228号墳	土師器　坏	BⅣBⅣ	石室裏込め内
〃　—10	〃	〃	〃	〃	〃　—12	第231号墳	土師器　坏	AⅠ2bⅡイ	前庭　堆積土
〃　—11	〃	〃	BⅡ2	〃	〃　—13	〃	〃	〃	〃
〃　—12	〃	〃　高台付坏	C	〃	〃　—14	〃	〃	AⅢ1	〃
〃　—13	〃	〃　蓋	BⅠ	〃	〃　—15	第269号墳	土師器　坏	AⅠ2bⅡロ	前庭　堆積土
〃　—14	〃	〃　短頸瓶	——	〃	〃　—16	〃	〃	〃	〃
〃　—15	〃	〃　〃	——	〃	〃　—17	〃	〃	BⅡ	〃
第63図—1	〃	〃　甕	A	前庭～周溝	〃　—18	〃	須恵器　坏	AⅡ2	〃
〃　—2	〃	〃	B	〃	〃　—19	第15号墳	土師器　坏	BⅡ	前　庭
〃　—3	〃	〃	B	〃	〃　—20	〃	須恵器　提瓶	——	〃
第64図	第401号墳	須恵器　提瓶	——	南東周溝底面					
第67図—1	第403号墳	土師器　坏	AⅡ	南東周溝堆積土					
〃　—2	〃	須恵器高台付坏	——	〃					
〃　—7	〃	〃　甕	A	〃　底面					

Ⅳ　古墳についての考察

1　古墳の構造について

古墳の規模、規格、構造を比較検討し、古墳の構築技法、年代等の問題について考察を加える。

〈規模、規格、構造〉

主体部形態には横穴式石室を主体部とするもの（A）、竪穴式小石室を主体部とするもの（B）箱式石棺を主体部とするもの（C）の三類がみられる。A23基、B5基、C2基について、その概要を確認することができた。以下、それぞれの規模、構造の特徴をみてゆく。

A．横穴式石室を主体部とし、いずれも玄室部は胴張りプランをとっている。外部施設として、周湟、前庭、葺石、テラスが確認できるが、墳丘の残存するものが少ないため、葺石、封土、テラス等の状況については不明な点が多い。

①規模、規格（第3表参照）

石室については、石室全長、玄室長、羨道長、玄室最大巾、羨道巾、胴張りの弧の半径、主軸方位等の計測値について、外部施設では周湟内周の半径について、統計的に処理し、比較することが可能である。各古墳の計測値を比較した場合、以下のような特徴が指摘される。

○周湟内周の半径と、石室全長は近似値を示す。

○上記の両数値は、古墳間で格差があるが、3.3m～6.0mの範囲に収まる。

○胴張りの弧の半径は計測値の大小にかかわらず、玄室最大巾にほぼ等しいものと、玄室最大巾を上回るものに大きく分けることができる。

○玄室最大巾、羨道長の計測値は古墳間で格差があるが、一定の傾向は指摘できない。

○羨道巾はいずれの古墳も、0.6m～0.8mの間の計測値に収約され、均一的である。

○主軸方位はＳ－42.6°－ＥからＳ－22.2°－Wの間におさまり、特にＳ－15°－Ｅ前後に集中する傾向がみられる。（第83図参照）

②構造

残存状況に違いがあり、各古墳の構造を一律に比較することはできない。ここでは各部位ごとに確認できた特徴を列挙する。

○石室床面敷石には粒径が大きなもの（第246号墳）と、小さなもの（第204、221、227、253、260、248、403号墳）とがある。羨門、玄門の床の梱石には敷石を並列するもの（第204、221、248、253、401号墳）と、一石を埋置しているもの（第252、254号墳）とがある。奥壁には、大きな石を立てた一石構造のもの（第246、402号墳）、やや大きな石を数段に積み上げた数石構造のもの（第221号墳）、小さめの石を多数用いてカーブをもたせた多石構造のもの（第401

号墳）がみられる。この他、奥壁、玄門、羨門各部の石材が抜き取られているものが極めて多いが、これらは各部に大型の石が使用されていたためと思われる。石材は全て角のとれた河原石のみを用いており、加工された石材はみとめられない。石室裏込めは、砂利を使用したもの（第229、261号墳）、明確な裏込めのないもの（第401、402号墳）、小円礫を使用したもの（前記以外のもの全て）等があり、円礫を使用したものの中には、その外周にやや大きめの石を押さえ石として配置するものが多い。

なお、確認された石室の大多数は明らかに地山をかなり深く掘り込んで構築されており、石室床面が旧表土上にある古墳は確認されていない。この掘り方は平面形アーチ型、もしくは隅丸長方形で、石室入口部では前庭部、あるいは周湟の掘り込みに合流するものと思われる。

○前庭　石室入口部には周湟が浅くなるか、または途切れることによって土橋状の平坦面が形成されている。「ハ」の字状の石組みがみられるもの（第205、250、251、253、254、260、263、77、93号墳）がある。ただし、第248号墳の石室入口部は、周湟が変化せずにめぐっている。

○葺石　羨門の両端から葺石がのびるもの（第233、246、250、251、252、253、263、266、77、93、15号墳）がある。しかし、これが墳丘を全周することが確認できるのは規模の大きな第77、93、15号墳の3基のみで、他のものは南方部のみに確認されている。

○周湟　内周が玄室の北半部に中心を置く円形プランであるのに対し、外周は極めて不整形なものが多く、巾は一定していない。前庭部での状況は前述したが、この他に北東部にも土橋状になる部分をもつもの（第77、401、402、403号墳）がある。

Ｂ竪穴式小石室を主体部とし、いずれも石室は胴張りプランをとっている。外部施設として周湟がある。

①規模、規格（第3表参照）

石室については、石室全長、石室最大幅、胴張りの弧の半径、主軸方位等の計測値について、外部施設では周湟内周の半径について、統計的に処理し、比較することが可能である。各古墳の計測値を比較した場合、以下のような特徴が指摘される。

○周湟内周の半径と、胴張りの弧の半径は近似値を示す。

○上記の両数値は、古墳間で格差があるが、1.3m～3.0mの範囲におさまる。（第3表参照）

○石室最大幅はいずれも50cm前後で平均化されている。

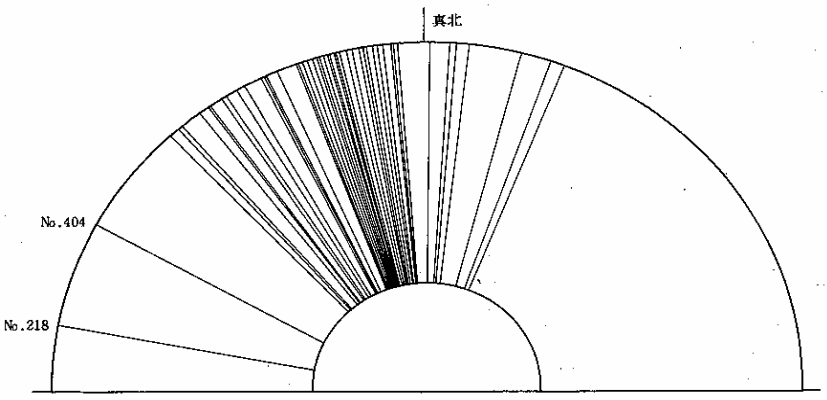
○主軸方位は横穴式石室にみられた傾向と一致する。（第83図参照）

②構造

○石室　床面敷石には細かい円礫が使用されるもの（第258号墳）がある。南北の妻の部分の構造には、北が一石構造のもの（第247、256号墳）、南が一石構造のもの（第255、256号墳）、

第３表　主体部計測表

古墳番号	周溝			主軸方向	石室プラン（単位m）						用材（単位cm）			
	形態内周	外周	内周半径		全長	玄室長	同幅	羨道長	同幅	胴張り弧半径	側壁	石室床石	閉塞石	裏込め
15		—	5.6	S−22.2°−W	5.8	2.95	1.75	2.75	0.7	—	40×50	—	小砂利	径５～10
39	隅丸方形	円	4.8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
77	円	不整	5.3	S− 0°−E	—	—	—	—	0.6	—	—	—	径10～20	径５～15
93	円	円	4.5	S− 9.5°−E	4.6	2.7	0.9	1.9	0.8	—	35×50	—	径10～20	径３～10
201	円	円		S−16.1°−E	—	—	—	—	—	—	—	径３～５	—	径５　10
204	円	不整	4.5	S−18.0°−E	4.5	2.5	—	2.0	—	2.1	20×30	径３～５	—	径５～10
205	円	円	6.1	S−14.3°−E	(5～6)	—	—	2 8	0.6	—	30×50	—	—	—
221	円	円	3.4	S− 9.9°−E	3.1 8	1.62	0.72	1.56	0.55	2.5	30×40	径３～５	径20	径10～15
224	円	円	5.7	S−11.0°−E	—	—	—	1.8	0.6	—	30×30	—	径10～20	径５～10
225	円	不整	4.6	S− 6.5°−E	—	—	—	2.1	0.7	—	30×40	—	—	径５～15
227	円	円	3.9	S−19.5°−E	(3.4)	(2.0)	(1.5)	(1.4)	(0.6)	—	—	径３～５	—	径10～15
233	円	円	3.8	S−14.6°−E	3.5	1.75	1.35	1.75	0.7	1.4	30×40	—	径10～15	径５～15
246	円	不整	5.2	S−25.7°−E	4.4	2.2	1.2	2.2	0.7	2.6	30×45	径10	—	径10～20
247	円	円	3.8	S−35.0°−E	1.2		0.45			1.2	20×30	—	—	径10～15
248	円	不整	3.5	S− 1.0°−W	3.5	2.0	1.2	1.5	0.7	1.2	30×40	径５	—	径５～10
250	円	円	4.0	S−41.0°−E	4.1	2.2	1.15	1.8	0.6	2.6	30×40	—	—	径５～10
251	円	不整	4.0	S−30.0°−E	2.9	1.7	1.25	1.2	0.85	—	30×40	径３	—	径10
252	不整	不整	3.4	S− 4.0°−E	3.5	2.0	1.2	1.5	0.6	1.6	25×45	径５	—	径15
253	—	不整	4.6	S−32.2°−W	3.8	2.15	1.1	1.45	0.65	2.8	40×50	径３	—	径10
254	不整	不整	4.5	S− 4.0°−E	4.2	2.5	1.35	1.7	0.8	1.8	30×50	—	—	径５～10
255	楕円	楕円	2.0×2.4	S−15.0°−W	1.6 8		0.45			2.1	20×30	—	—	径５～10
256	円	円	2.5	S−11.4°−E	1.7		0.5			2.1	20×30	—	—	径５～10
257	楕円	楕円	1.6×2.2	S−13.4°−E	1.7 5		0.5			2.1	20×30	—	—	径５～10
258	円	円	3.0	S−20.0°−E	1.7 5		0.5			3.0	20×30	径５～５	—	径５～10
260	円	円	3.5	S−10.0°−E	(3.5)	—	—	—	—	—	—	径５前後	—	径10～15
261		—	3.7	S−19.5°−E	—	—	—	—	—	—	20×30	—	—	砂
263	円	円	3.8	S−14.5°−E	3.5	2.0	1.1	1.5	0.7	1.7	30×40前後	—	径15×20前後	径５～10
266	円	不整	3.4	S−26.0°−E	3.5	2.0	1.1	1.5	0.6	1.8	25×40前後	—	—	径５前後
401	円	円	3.7	N−20.0°−E	3.7	2.2	1.35	1.5	0.7	2.4	20×30前後	—	—	黒褐色土
402	楕円	円	3.6×4.0	N− 7.0°−E	4.0	2.15	1.6	1.85	0.7	1.6	20×40前後	—	15×15前後	黒褐色土
403	円	円	4.0	N−37.0°−W	3.8	—	—	—	—	—	—	径２～５	—	径10～15



第83図　主体部主軸方位（46基について）

南北とも一石構造と推定されるもの（258）がある。石室裏込めはいずれも小円礫を使用しており、その外周にやや大きめの石をおさえ石として配置したもの（第247号墳）がある。石材は全て角のとれた河原石のみを用いており、加工された石材はみとめられない。

これらの石室はいずれも地山を深く掘り込んで構築されており、石室が地上に出る部分はご

く僅かであったと考えられる。墳丘の有無は確認できないが、浅い周湟が巡ることを考えれば低墳丘があっと可能性が強い。

C　箱式石棺を主体部とし、外部施設はみられない。

①規模、規格

○石棺の内法はいずれも極めて小さく、特に幅は30㎝前後足らずである。

○主軸方位は（A、Bが南北方向に近いのに対し）Cは東西方向に近い。（第83図）

②構造

○いずれも石棺よりもやや大きめの掘り方内に偏平な河原石を縦位にさし込み構築されている。間げきは、青灰色良質の粘土により目張りされている。床には粗い敷石のあるもの（第404号墳）と無いもの（第215号墳）とがある。裏込めは、掘り方と壁材の空間に、偏平な河原石を壁材同様に差し込み、更にその間げきに粘土、シルト、小円礫をつめている。石材は全て角のとれた河原石のみを用いており、加工された石材はみられない。

〈構築技法と年代〉

以上古墳の規模、規格、構造についてみてきたが、これらについて概括的に検討を加えたい。まず、A、B、C三類型の関係についてみると、構造的にはA類が横穴系であるのに対し、B、C類は竪穴系であり、理論的には両者の埋葬方法が全く異質であることになる。しかし各類型の構造を実際に即して検討すると、まず横穴系に分類されるA類型の石室の多くが、横穴系の本来的機能である追葬を可能とする規模、構造から著しく逸脱していると考えざるを得ない。つまり石室自体が小規模のものが多いこと、羨道幅がいずれも狭溢であり、円礫が羨道内に充塡されていること等は、羨道が形骸化し、追葬の機能を失っていることを示すものと思われる。（註1）

次にB類についてみると、基本的構造が竪穴系であることは明白であるが、細部構造において、A類との強い類似性がみとめられる。つまり石材を横積みにしていること、胴張りプランであること等の要素は、B類がA類の変化形態、もしくは退化形態であることを示すものと思われる。出土土器の特徴やB類の古墳が一区域内に集中し、その周囲にA類の古墳が分布している状況からみると、これらB類が、A類と共存する主体部形態である可能性がより強い。（註2）

C類は石材の使用方法、目張り、東西の主軸方位等、A、B類とは全く異質の特徴をそなえており、A、B類との脈絡は全くたどれない。

以上のように、A、B類は構築技法の諸面から強い関連性をもち、むしろ両者の相違は、A類内部にみられる規模、構造の多様性の中で理解されるべきものと考えられる。これは出土土器の特徴、年代観に照らした場合でも矛盾は生じない。これに対しC類は極めて異質でありそ

の年代、系譜についてはA、B類との間に大きな隔りを認めざるを得ない。そこでこれらの系譜関係を、周辺地域の様相の中で位置付けてみたい。

A、B類にみられる最も大きな構造上の特徴は「胴張りプラン」である。高塚群集墳の石室にみられる胴張りプランは、北関東西部を中心に東日本各地でもその類例が報告されている。宮城県内でも本古墳群以外の例として、名取市安久諏訪古墳、古川市塚原古墳群（佐々木:1970）、同日光山古墳群（佐々木：1972）、大和町鳥屋古墳群、白石市鷹ノ巣古墳群（志間：1972）などで確認され群集墳内の主体部形態として定着している状況がうかがえる。ただし、東北北部地域、北陸から山形にかけての日本海側の地域では胴張りプランはみとめられず、本古墳群周辺の地域が、胴張りプランのみられる北限地域になっている一部（註3）年代的には7世紀中葉から8世紀中葉を中心とした時期に比定され後期群集墳の中でもより後出の形態的特徴として理解されている。（註4）

C類にみられる構造上の特徴として、石材を縦位に使用し、間げきを粘土で目張りすることがあげられる。このような特徴は、弥生時代以降の埋葬施設に広くみられるものであるが、第215号墳にみられるような内法が人体にほぼ合致する極めて簡素な箱式石棺の形態をとるものとして宮城県内では南部の丸森町台町古墳群、白石市鷹ノ巣古墳群に類例が認められる。出土遺物が乏しく必ずしもそれぞれの年代的位置付けは明確でないが、鷹ノ巣18号墳箱式石棺外からは石製模造の曲玉、臼玉、有孔円板などが出土し5世紀代に属すると考えられ、その他のものも、石棺の構造から5〜6世紀代に位置付けられている。しかし、上記両古墳群内の箱式石棺は、墳丘盛り土内に棺を構築しており、本古墳群のものが地山を掘り込んで構築されているのとは大きく異っている。箱式石棺が地山を掘り込んで構築されているものとしては山形県山形市お花山古墳群に類例がみられる。お花山古墳群では主体部が木棺直葬で周湟が巡るもの、主供部が大形の偏平な礫を用いた箱式石棺で周湟がみられるもの、主体部が小形の箱式石棺でその掘り方が非常に浅いもの、の3種の古墳が計18基確認されている。これらの主体部はいずれも地山を掘り込んで構築されており、出土遺物、構造などから木棺直葬が6世紀代、箱式石棺が7世紀代で、小形の箱式石棺は7世紀末にそれぞれ位置付けられている。本古墳群のC類について明確な年代を与えることはできないが、以上の類例からみた場合、やや古い様相をもつものの、7世紀末まで降る可能性も考えておきたい。A、B類と、C類との関係は本古墳群の群構成を考える上で非常に大きな問題となるが、C類は2例にすぎず、今後の類例の増加を待って検討すべき課題である。

註1. 昭和26年、東北大学考古学研究室によって発掘調査の行われた上郷105、135号両古墳では玄室内から2体分の人骨が検出されている。（氏家：1977）しかし、今回の調査では鑑定可能な人骨が検出されず追送を示す事実は確認できなかった。

註2. 宮城県仙台市安久東遺跡では地山を掘り込み、河原石を小口積みにした全長1.8m前後で玄室、羨道の区別のない横穴式の小型石室が4基確認されている。（岩渕：1976）胴張りはみられないものの本古墳群の竪穴式小石室としたものに極めて類似した構造である。

註3. 岩手県盛岡市太田蝦夷塚古墳群中に胴張りプランをとる石室があるとされる（岩手史学研究第18輯）が詳細は明らかでない。

註4. 胴張りプランをとる横穴式石室については、特にその分布の濃密な西関東地域での成果、年代観を参考にした。本古墳群にみられる前庭の付設、羨道の形骸化などの特徴は、この年代幅の中でも更に後半に位置付けられる要素として理解されている。

2　出土土器について

検出された88基の古墳のうち、土器の出土が確認された古墳は50基ある。古墳毎に若干の相違のみられるものの、その大半の出土状況には類似性がある。

(1)　土器の出土状況

50基の古墳の内部主体による内訳は、横穴式石室48基、竪穴式小石室2基である。

横穴式石室墳の場合の大部分は、前庭部もしくはこれに隣接するテラスや周湟内から出土している。周湟内出土のものには、底面上、堆積土中出土の二者がある。前庭、テラス部分からの土器は完形のものである場合が多く、さらに第205号墳の大甕のように明らかに据えたと考えられるものもある。また、周湟内堆積土出土土器は破片である場合が多いが、それらはいずれも流れ込んだ状態を示しており、それらには前庭、テラス部分の土器と接合関係にあるものもある（77、266号墳等）、このようなことから、前庭、テラス部分の土器は原位置の状態であり、周湟内堆積土の土器はその一部がのちに移動したものであるとみることができ、三者の土器は本来的には一括遺物であった可能性が高い。そして、その出土位置が、石室入口部分に限られるという点から、葬送儀礼に直接的にかかわる土器、すなわち供献土器であると考えることができる。そしてその在り方から、大甕を入口脇部分に据え、その周辺や中央部に坏などの小形品を置いたとみられる。また、大甕は入口左右に配す例と右側にのみ配す例とがあるが、後者の例が多い。（204、251、266号墳など）

これらとは別に周湟底面から出土している土器がある（204号墳）。それらは完形品である場合が多く、また位置的に前庭部とはやや離れているなど若干様相を異にする。これが前庭、テラス部分から偶然に転落した結果であるのか、あるいは入口部分とは別の儀礼的行為の反映であるのかは明らかでないが、いずれにしても周湟南側部分という入口周辺部にあたることや、すでに述べたように石室の構造上追葬が考えられないとみられることから、葬送儀礼に伴う一括遺物であることに変わりはないであろう。なお、“供献”の具体的内容として、227号墳の土師器埦のように底部穿孔を施し、明らかに仮器とした例や263号墳の須恵器長頸瓶のように、

その破片がかなり広い範囲に散っている例などもあり、その行動にはいくつかの種類があったと考えられる。

竪穴式小石室墳の場合も出土位置は周湟南側部分である。竪穴石室の石室構造が横穴式石室と類似する点が多く、また配置上横穴式石室墳と共存していた可能性が強い点を考慮すれば、やはり供献土器としての性格が与えられるであろう。

なお、出土土器の中には、石室裏込め内から出土したもの（218、221、228号墳）もある。それらは石室構築時にそれ以前の土器が混入したもので、古墳との直接的関連はないが、石室構築の年代的上限を示すものである。年代的な点については、他の土器をも含めて後に述べる。

(2)　出土土器の分類

前項で述べたように、出土土器は各古墳毎には共伴関係にあるものであり、また、その年代は直接的に古墳の年代を示すものである。各古墳毎にその種類や組み合せは多様であるが、共通する部分も多く本項では、それらを分類、整理して年代的検討を行うこととする。

出土土器は土師器、須恵器である。中には細片化しているため接合不能のものもあるが、図示できた土器は36基（横穴式石室墳34、竪穴式小石室墳2基）分の土師器92点、須恵器104点の計196点である。

〔分類〕

〔土師器〕

坏、高坏、甕、鉢、埦、蓋、壺がある。坏が最も多い。

坏　75点ある。内面の器面調整の点で、ヘラミガキ、黒色処理が施されるものとナデ調整によるものとの二者がある。両者は器面調整のみならず、器形的にも顕著な相違を示す点が多い。前者が63点、後者が12点ある。

A．内黒坏　器内外面に巡る。段もしくはくびれの有無やその形態の違いによって次の三者にわけられる。

Ⅰ．器内外に段やくびれが巡るものである。段の位置がさらに、1．器中位付近のもの、2．下半部のもの、3．下端のものの三者がある。1が相対的に器高が高く、底部も丸底であるのに対して、3は偏平であり、特に3では底部は平底風となる。1にはさらに内面のくびれによる差異が認められ、段というよりはむしろ稜となり、稜を境として内面が2段に内弯するような器形もある。段以上の形態は外傾もしくは内弯しており、内弯するものの中では体部から連続的に内弯するもの、口縁上部で再び小さく内弯するものなど細部では変化がみられる。なお、段以上が外反するもの（Ⅰ2C類）が例外的に1点ある。小片のため明確でないが、残存部分から推して高坏である可能性もある。他に特殊なものとして、口縁下部外面に幅広の沈線が巡

るもの（Ｉ１ａ ｉイ類）が1点ある。次に外面の器面調整についてみると、1では10点中、口縁、体、底部あるいは全面のいずれかにヘラミガキが施されているものが8点認められるのに対し、2では37点中3点のみで他は口縁部横ナデ､以下はヘラケズリ調整である｡3は4点のみであるが、いずれも横ナデ､ヘラケズリである｡このように､1が外面ヘラミガキ調整が主であるのに対し、2、3は横ナデ、ヘラケズリ調整を主とするという違いがみられ、その意味では2、3は類似性の強い土器群であると考えられよう。

Ⅱ．口縁部外面に稜が形成され、口縁部が短く外反するものである。

3点ある。口縁部破片のみのものもあり、全体的な器形は明らかでないが、Ｉに比してやや深めの坏である。口縁部外面には横ナデ、以下にはヘラケズリ調整が施されており、内黒であるという点を除けば、器形、外面の器面調整は後に述べるＢ．ナデ調整の坏に近似している。

Ⅲ．段、その他のくびれがみられないものである。

1．丸底のもの。2．平底のものがある。丸底のものは1点のみである。口縁部が直立気味となる器高の高いやや小形のもので埦として取り扱うのが適当とも思われる器形である。外全面にヘラミガキが施されている。平底のものは8点あるが、外面の器面調整の違いによる二者（ａ：横ナデ、ヘラケズリ、ｂ：ヘラミガキ）がある。

Ｂ．ナデ調整の坏　器面を巡る段や稜の位置、形態の差異による以下の4類がある。

Ｉ．器下半部の内外に段が巡るもので、段以上は外傾する。1点のみである。器形的には内黒坏Ｉ2類に近い。外面の調整は横ナデ、ヘラケズリである。

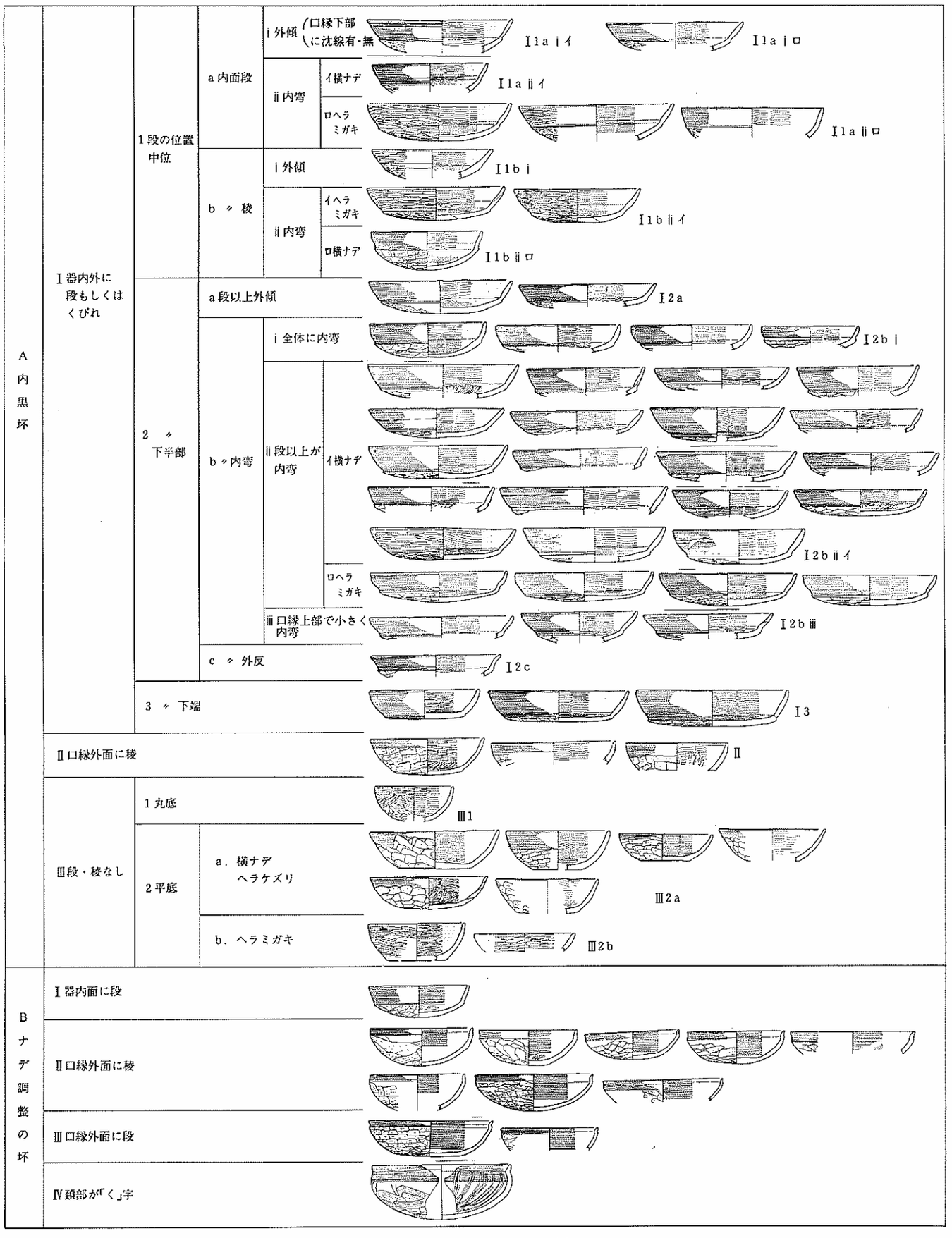
Ⅱ．外面口縁部下部に稜が形成され、以上は短くのびて外反する。また、端部に向うに従って器壁は薄くなる。8点出土しており、Ｂ類では最も多い。底部は丸底で外面の調整は稜を境として以上が横ナデ、以下がヘラケズリである。また、外面に丹の塗られた土器が1点ある。

Ⅲ．外面口縁下部に沈線的な鋭い段が巡り以上が短く外傾するものである。2点ある。底部形態の明らかなものでは平底気味である。外面の器面調整は段を境として横ナデ、ヘラケズリである。

Ⅳ．頚部で「く」字状に屈曲して口縁、体部が区別されるものである。1点のみである。丸底である。外面は口縁部から体上部まで横ナデ、以下にヘラケズリが施されている。また、内面には放射状の暗文が施されている。

高坏　3点出土しているが、全体形を知り得るのは1例のみである。坏部は内黒で、内外に段が巡り、外面は横ナデ、ヘラケズリ調整のものであり、その特徴は基本的には内黒坏ＡＩ2類と同様である。脚部は太く中空で低いほぼ円筒形をなし、裾部は直角的に大きく開くものと外反して開くものとがある。

埦　口縁部が直立もしくは内弯し、底部が丸底もしくは丸底と考えられるものを埦とした。



第84図　土師器坏の分類

3点あり、いずれも内黒のものであるが、器形的特徴は各様である。

227号墳出土のものは底部がやや平底気味であるが、ほぼ半球形の器形で、外全面にもヘラミガキ、黒色処理が施されている。253号墳出土のものは頚部外面に段が巡るもので口縁部は内弯し外面にはヘラミガキが施されている。205号墳のものも内弯気味の口縁部をもつものであるが、外面は横ナデ、ヘラケズリによる調整が加えられている。

蓋　2点ある。いずれも内外面ともにヘラミガキ、黒色処理が施されたものである。天井部からなだらかに口縁部へ移行し、特に明確な口縁部はつくり出されない。全体形の明らかなものでは宝珠形のツマミがつく。なお、227号墳出土の蓋は、同墳出土の埦と法量、器面調整に類似性があり、両者は組み合うものであると考えられる。

鉢　平底で体、口縁部が外傾するものを鉢とした。4点ある。いずれも内黒である。A．頚部に段の巡るものと、B．体部から直線的に口縁部へ至るものとがあるが、両者ともに外面の調整は横ナデ、ヘラケズリである。なお、底部のみの破片で外面にヘラミガキが施されているものがある。頚部に段の巡るものはさらに大小（A1、A2）の別があり、小形のもの（77号墳出土）は全体形としては鉢として扱うには不適と思われるものであるが、便宜上本類に含めた。

甕　2点ある。口縁～体部下半までのものと、体部下半以下の破片である。いずれも体部は球形に膨むと思われる器形のもので、体部外面はヘラミガキ、内面はヘラナデ調整である。

壺？2点ある。小形のものである。頚部に水平に近い段をつくりだし、口縁部が外傾気味に短くのびるもの（221号墳）とく字状に屈曲して口縁部が外傾するもの（77号墳）とがある。

前者は底部が欠損しているが、短頚壺に近く、後者は丸底でいわば坩あるいは坏に近い。両者とも外面は横ナデ、ヘラケズリ調整、内面は前者では横ナデ、後者ではヘラミガキ、ナデ調整が施されている。

〔須恵器〕

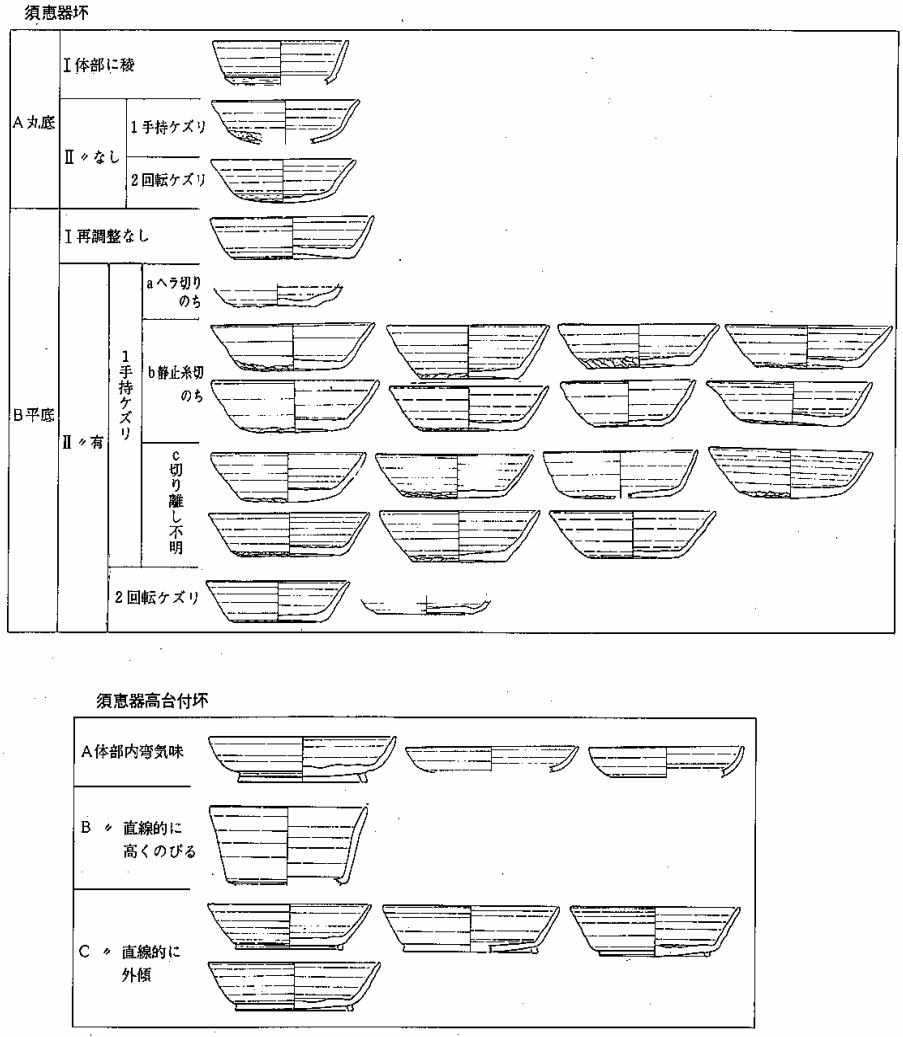
坏、高台付坏、蓋、壺、甕がある。坏、高台付坏、甕が量的にまとまっている。

坏　25点ある。底部形態がA．丸底のものと、B．平底のものとがある。

A．丸底のもの。Ⅰ．口縁、胴部と底部間に段が巡るものと、Ⅱ．巡らないものとがある。

Ⅰ．1点のみである。段以上の口縁部は直線的に外傾し、以下は回転ヘラケズリによって仕上げられている。

Ⅱ．2点ある。底部と口縁、胴部間は器形の変換点である稜によって区別される。いずれも、口縁部は外反する。底部仕上げは、1．手持ちヘラケズリによるものと、2．回転ヘラケズリによるものとがある。



第85図　須恵器坏・高台付坏の分類

B．平底のもの。さらに底部の切り離し後の再調整の有無によって区別される。

Ⅰ．底部は切り離されたままで再調整が加えられないものである。1点のみである。ヘラ切り技法によって切り離されている。口縁、胴部はほぼ直線的に外傾している。

Ⅱ．再調整が加えられるものである。再調整が、1．手持ちヘラケズリによるもの、2．回転ヘラケズリによるものの二者がある。

1．再調整が加えられてはいるが、以前の切り離し技法が明らかなものがあり、その違いによって、a．ヘラ切り技法によるもの。b．静止糸切り技法によるもの。c．切り離し技法の不明なものの三者がある。

aは1点のみである。底部のみの破片である。切り離し後、底全面に再調整が加えられている。bは8点あり、坏中では最も多い。再調整は底部周縁から胴下部に加えられており、底中央部には切り離し痕が残されている。胴、口縁部はほぼ直線的に外傾する。cは全面に再調整が加えられ切り離し技法の不明のものである。7点あり出土量はbに次ぐ。さらに、底部が丸底風のもの（ⅰ）と平底のもの（ⅱ）との二者があり、胴、口縁部は前者が内弯気味に、後者が直線的に外傾する傾向もみられるが判然としたものではない。他に底部の周縁部のみが残存する破片のため、上記の類別に加えられないものが2点ある。

2．回転ヘラケズリ再調整は、底全面に加えられており、切り離し技法は不明である。3点ある底部が丸底風のもの（a）と平底のもの（b）とがあり、aでは胴、口縁部は内弯気味に立ち上がる。

高台付坏　10点ある。坏部の形態により、口縁、胴、底部が、A．内弯して立ち上がるもの。B．高くのびて外傾するもの。C．直線的に外傾するものの三者がある。Aは低平な器形であり、また、Bは小形の体とでもいうような器形である。底、台部の明らかなものはA類で1点、C類で4点の計5点あり、いずれも丸底状をなす。A類では底外面はナデ調整が施されており、切り離し技法等は不明である。C類は回転ヘラケズリ再調整が加えられているが、切り離し技法としてのヘラ切り痕跡が観察できるものが3点ある。残る1点は底中央部が欠損しているが、器形的な特徴からみて、おそらく同様の技法のものと考えられるものである。台はいずれも低く、外方にのびるもので、底部周縁よりやや内側につけられている。他に底部以下の破片のため上記の類別に加えられないものが2点ある。

蓋　11点ある。量的には多いが完形のものは少ない。大きくカエリの有無によってわけられる。

A．内面にカエリをもつものである。5点あるが、いずれも破片で全容の知られるものはない。天井部が丸味をおびるやや高い器形である。ツマミ部の明らかなものは宝珠形である。なお、この土器は口縁部まで残存しないが同一個体と考えられるカエリをもつ口縁部破片がある。

B．内面にカエリをもたないものである。口縁部の形態による4種がある。

1．水平な天井部から垂直に長い口縁部が下るものである。1．ほぼ直角に近いものと、2．やや丸味を帯びて口縁部がわずかに外側に開くものとがある。各1点ずつである。前者はツマミ部は欠損している。形態的に短頸壺と組むと考えられるものである。後者は宝珠形のツマミをもち天井部外面には回転ヘラケズリ、口縁上部外面には手持ちヘラケズリ再調整が施されている。

Ⅱ．天井部から丸味をもって、なだらかに口縁部へ移行するものである。天井部が欠損している。1点のみである。

Ⅲ．口縁端部外面が直角に近く屈曲し、対応する内面に浅い凹線を巡らして口縁部をつくり出すものである。4点ある。天井部から直線的に口縁部へ移行するやや器高の高いもの（1）と天井部が水平な低平な器形のもの（2）とがある。前者にはリング状のツマミがつけられ、後者にはリング状のものと低い宝珠形のものとの二者がある。

Ⅳ．段差をもって屈曲し、さらに外方につまみ出された口縁部をもつものである。1点のみである。ツマミは全体形は低い宝珠形に近いともいえるが中央部にたかまりなく凹んでいる。

長頸瓶　9点出土しており、完形又は完形に近いものが4点ある。しかし、破片のものが多いこともあって、それらを類別するような要素は抽出できない。口縁部の形態についてみれば、口縁下部に明瞭な段（204、250号墳）や隆帯（205号墳）の巡るものと、それがみられないものの別があり、また、頚部についても1～2条の沈線が巡るものとそれがみられないものとがある。胴別の形態についても、肩部で角ばって鋭く屈曲するものとなだらかに移行するものとがあり、また、胴部に平行沈線による区画帯を巡らし、内部に櫛歯列点文を施しているものがある。完形のものでは、いずれも高台が付き胴下部から底外面にかけて回転ヘラケズリが施されているものが多い。

短頸壺　4点出土している。いずれも完形で大小の別があり、また、それぞれ高台が付されるものとそうでないものとがある。

広口壺　9点出土している。体部がA．そろばん玉状あるいは楕円形を呈するものと、B．ほぼ球形を呈するものとがある。

A．にはさらに、1．肩部に鋭い稜をもって屈折するものと、2．丸味をもって屈曲するものとがある。いずれにも大小の別があり、さちにそれぞれに肩部に沈線が施されるものがある。口縁部底部形態が明らかなものについてみれば、1は大形のものでは外反して長くのびる口縁部を有し高台が付されており、2は外傾する口縁部を有し底部は平底である。1の小形のものも平底である。

B．胴部が球形をなすものである。頚部で屈曲し外傾する口縁部をもつが口縁はA2類に比べれば短い。A、B類とも体下半部から底部へかけて回転ヘラケズリ再調整が多い。

以上の他に、体下半部のみの破片のために類別できない壺の破片がいくつかある。

提瓶　5点ある。全容の知れるものは2点で、いずれも吊手はみられない。他は口縁部、頚部から体部にかけて、体部の破片である。

甕　1点出土している。底部形態の明らかなものはいずれも丸底である。大・中・小の別がある。

A．口径40－55cm、器高70－100cmほどの大甕である。口縁部形態は、端部が上・下につまみ出されるもの、下方につまみ出されるもの、下部が隆帯によってつくり出されたもの、さらに、口縁部とは別にさらに下方に隆帯が巡るものなど各種があるが頚部の状態に大きな特徴がある。頚部には1～2本の沈線列が数段巡らされ、その間に波状文や櫛歯列点文が施されているものが大半である。沈線列のみられないものも1点あるが、波状文は複数段に施されている。体部は外面にはタタキ目（平行、格子）、内面にはあて目（同心円）、やナデ痕が認められる。

B．中形のものである。口径17－28cm、器高30－45cmほどのものであるが、器高40cm前後のものが多い。口縁部形態はA類と同様、多様であるが、相対的には端部が下方につまみ出されたやや単純なものが多い。頚部に波状文が施されるものもあるが、大半は無文である点でA類とに相違がある。波状文が施されるものについても沈線列は巡らない。

一方、体部については胴上半部に3－6条前後の沈線が巡るものと、それがみられないものとがあり、後者が多い。外面には格子タタキ目、内面には同心円あて目が多く認められている。また、外面には平行タタキ目の後帯状に数条、回転刷毛目が施されているものも1点ある。

C．小形のものである。1点のみである。口径16、器高25cmほどである。口縁部は外反し、胴上部には回転刷毛目、下部には格子タタキ目が施されている。内面はナデ調整である。小形のものは例が少なく、B．中形のもののうちでも小さめのものとの法量的差異は明瞭ではない。特に口径の違いはBとCでは多分に連続的であり区分はあいまいである。

(3)　出土土器の組み合わせと年代

類別された土器の古墳毎の出土一覧を第4表に示した。その状況は各古墳各様であり、多種多様の土器を出土した第205、254、263、77号墳などに対し、1点のみの出土の古墳（第202・209号墳など）も多くある。また第204、266号墳のように多量の須恵器を出土しながら土師器がみられない例もある。これは各古墳に対する後世の破壊の度合の差が大きく影響していることはいうまでもないが、同時に供献土器としての性格の反映であることが十分考えられる。たとえばこのことは、一般集落においては土器組成の重要な柱となる土師器甕の出土が極端に少ないという事実にも明確にあらわれているといえよう。

このように本遺跡出土の土器群はすでに資料的に大きな制約を含むものではあるが、そのこ

とを前提とした上で、量的に恵まれた数種の器形をもとにして土器群のもつ内容や組み合せ、年代について検討を行うことにする。

〔土師器について〕

土師器には系統を異にする数種の土器が含まれていると考えられ、特に坏において顕著にその違いを見い出すことができる。

坏にはＡ：内黒のものとＢ：内面ナデ調整のものとがあることはすでに述べた。両者は技法的にも器形的にも異なっている。結論的にいえば、内黒坏は東北地方、すなわち在地の土器であり、ナデ調整の坏は関東地方の土器の系統に属するものである。

さらに内黒坏の中でも同様な差異が認められる。まず内黒坏Ⅱ類についてであるが、口縁部外面に稜が形成され、口縁部が短く外反する器形であり、その器形的特徴は在地の土器の系統というよりはむしろナデ調整の坏ＢⅡ類に一致している。つまり内黒という技法を別にすれば関東地方の系統に属しているといえる。類例が少なく断定はできないが、いわば関東、東北両系統の折衷の結果生じた土器である可能性が強いと考えられる。このことについてはＢ類に含まれながら器形的特徴がＡ類に近似しているＢＩ類についてもいえるかも知れない。次にＡＩ1、ＡＩ2・3類においても差異が認められる。1類は器高が高く外面の器面調整がヘラミガキを主体とするものであり、2・3類は低い器形で横ナデを主体とするものである。この違いはすでに御駒堂遺跡で指摘がある（小井川、小川：1982）ように東北南部地域と北部地域との地域差と考えられ、出土量比（1類：10点、2・3類41点）からみて本遺跡は南部地域の土器圏に含まれることになろう。ただしこの差異は、1類においても横ナデ技法のものが、2・3類においてもヘラミガキ技法のものがそれぞれ少数ではあるが含まれており、また 2ｂⅱ類では器形的には全く同一であるにもかかわらず技法が異なっているというように画然と区別されるものではない。したがって各個体では多くの不明瞭さを残しているものの、2・3類がいわば純粋の在地の土器ということになる。他の坏ＡＩ3 類や高坏、埦、蓋、鉢、甕、壺についても横ナデ、ヘラミガキ技法のものがあり、南北それぞれの系統に属するものが存在すると考えられるが出土数が少なく、また前述したように現段階での個々の識別は困難でありそれらについての検討を加えることはできない。

坏ＡＩ2・3類で最も多くを占めるのは2ｂⅱ4類で、他は少量である。このあり方は2・3類を出土した多くの古墳でのあり方と同様である。そしてこのような各古墳における在地の土師器坏の特徴や組成と共通性によって、それらはほぼある一定の年代幅の中において組み合せ関係が成立する一括の土器群であると考えることができる。

なお、やや異なった組成を示すものとしてＡＩ2ｂｉ類のみを2点出土した第233号墳、ＡＩ2ｂⅱロ類のみを2点出土した第269号墳、ＡＩ2ⅲ類を多量に出土した第270号墳がある。ただ

※（ ）石室裏込め出土土器
※※〈 〉攪乱中より出土土器
※※※ 図示不能の土器
この他図示したものでも分類不能のものは除いてある。

第4表　各古墳出土土器一覧表

分類 / 古墳No	土師器																														須恵器																										
	坏																						高坏	埦	蓋	鉢			甕	壷	坏										高台付坏			蓋					長頸瓶	短頸壺	広口壺			提瓶	甕		
	A																		B							A		B			A			B							A	B	C	A	B						A		B		A	B	C
	Ⅰ														Ⅱ	Ⅲ			Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ				Ⅰ	Ⅱ				Ⅰ	Ⅱ		Ⅰ	Ⅱ										Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ			Ⅰ	Ⅱ					
	1							2						3		1	2															1	2		1				2																		
	a				b			a	b				c				a	b																	a	b	c		a	b																	
	i		ii		i	ii			i	ii		iii																									i	ii																			
	イ	ロ	イ	ロ		イ	ロ			イ	ロ																																														
15																				1																														1				1			
39																																			1											1								1			
77				1				1		3		5					2						1				1	1		1																	2				3	1			1		
201										1		1						1							1																											1					
202										1																																															
204																																												4					1					1	1	1	
205									1	2				1	1								1	1					1			1		1			1		1					※※※1					3	1					2		
207																																																							1		
209																																																								1	
212																							1																					1												3	
217																				2																																					
218																												※(1)			※(1)																										
220			1		1							1		1																																											
221										4																				※(1)																			1				1			2	
222																																						1																			
224														1																																											
225																			1																																						
227																								1	1														1						1					1						1	
228																						※(1)																																			
231										2						1																																									
233									2																																		3				1										
234							1																																								※※〈1〉							1			
250							1																																										1								
251										1					1		1																																						1		
252				1						1																																										1					
253	1			1		1				2	1									1	1			1																																1	
254						1				1			1	1			1			1	1																				3	1						1	2			1			2	4	
256																				2																																					
257																																																								1	
260																																																									1
263		1						1	1	2							2	1								1		1	1							3		2											2				1			2	
265																																																									
266																																				5	3	2		1			1		1					2					1	2	
269											2									1													1																								
401																																																						1			
403															1																																								1		
計	1	1	1	3	1	2	1	2	4	20	3	7	1	4	3	1	6	2	1	8	2	1	3	3	2	1	1	3	2	2	1	1	1	1	1	8	4	5	2	1	3	1	4	6	2	1	4	1	10	4	3	4	2	5	10	18	1

し第270号墳では2ｂⅱイ類も多出土している。また第269号墳の場合はヘラミガキの土器である。第233号墳では他の類の出土がないために不明な点が多いが少なくても同類は他の古墳（第205、263号墳）では共伴関係にある。このような違いについては、組成上の欠落、または古墳の個性の差、あるいは年代差など多くの要因が考えられるが、そのことについてより詳しく検討するにはやはり出土総量が不足しており十分な解釈を与えることはできない。しかし遺構としての類似性や後に述べるその配置の状況からみて、仮りに年代差があったとしてもその差はごくわずかであり、むしろそのことを除いた他の要因を想定することがより妥当であると思われる。

次にこれらの土器の年代について検討したい。器形的特徴として口縁部が外傾もしくは内弯するという点があげられる。総体的にみた場合この特徴は栗囲式（氏家・桑原：1976）より後出するものであり、さらに栗囲式の新しい段階のものとされる名取市清水遺跡第Ⅴ群土器（丹羽、小野寺、阿部：1981）よりも新しい要素であると考えられる。またともに内弯する坏を主体とするが国分寺下層式とされる糠塚遺跡第1群土器（小井川、手塚：1978）とは後にのべるように共伴する須恵器において違いがあり、その段階よりは遡るものである。そして清水遺跡第Ⅴ群土器は7世紀後半、糠塚遺跡第1群土器は8世紀後半と考えられているから、本遺跡の土器は8世紀前半の段階のものということになる。註1

この段階に含まれる土器としては蔵王町塩沢北遺跡第2群土器（小川淳一：1980）、高清水町観音沢遺跡出土土器（加藤、阿部：1980）、田尻町日向前横穴古墳羨道・前庭部流入土出土土器（早坂春一：1981）、志波姫町御駒堂遺跡第Ⅱ群土器（小井川、小川：1982）などがあり、それらと本遺跡の土器とは器形、調整技法ともに共通している。しかし塩沢北遺跡が8世紀初頭頃、観音沢、御駒堂遺跡が奈良時代前半、8世紀前半、日向前横穴古墳は観音沢遺跡よりわずかに古い様相を示すというようにそのうちにはさらに年代差があると考えられるが、現時点においては坏の特徴によってそれを明確に規定することは困難であり、本遺跡では土師器坏としては8世紀前半というやや広い年代幅を考えたい。

内黒坏から導かれる年代とは別に、ナデ調整の坏による年代の推定が可能である。この土器は関東地方の鬼高式最終末期ないし真間式初頭期の特徴をもつ土器である。

この種の土師器坏は近年県内での資料が増加しており、ＢⅡ類に類似するものは仙台市郡山遺跡（木村、青沼、長島：1981）、清水遺跡、御駒堂遺跡、ＢⅢ類に類似するものは日向前横穴古墳からの出土が知られている。それらについては、関東地方の編年の成果や各遺跡において共伴する他の土器の検討などによってごくわずかな相違はあるもののほぼ7世紀末から8世紀初頭という年代が与えられている。さらに最近その成果の一部が明らかにされた古川市名生館遺跡（高野、仲田：1983　第9回古代城柵官衙遺跡検討会発表要旨）でも多賀城創建瓦を焼成し

た田尻町木戸窯跡群（宮城県教委：1975）の須恵器と類似する須恵器坏を出土するＣ期の遺構よりもさらに遡るＢ期の遺構からの出土が知られており、やはり7世紀末から8世紀初頭の年代が考えられている。

以上のことから、本遺跡出土の土師器の年代はさらに限定できるとみてよい。

なお、ＢⅡ類に類似するＡⅡ類についても折衷的な要素をもつものと理解すれば同様の年代が考えられる。東北北部の系統と考えられる土器についても、同地方の編年研究はまだ十分に確立されているとはいえずその成果に拠ることはできないが、各古墳における共伴関係によって同様の年代を与えることができる。

〔須恵器について〕

須恵器は壺・甕といった大形品は量的に多く、多数の古墳から出土がみられるのに対し、坏等の小形品は限られた小数の古墳から出土している。このような出土状況は土師器とは対称的で、両者の関係はいわば供膳用の器形は土師器、貯蔵用の器形は須恵器という興味深い傾向さえうかがわれるようである。しかしながら、須恵器大形品は出土量は多いが各個体それぞれに個有の形態を示しており、それらを総合した特徴による組成の検討は難しい。甕についても法量による類別とその各類別に伴う細部器形や文様上の特徴の傾向は抽出できたが、それは器形の相違によるもので、それぞれ共伴関係にあるものが多く、また甕という器形のもつ年代的存続性を考慮すれば、組成検討のための基準として扱うには多くの問題点が残ると考えられる。したがって須恵器については、量的には少ないがある程度年代推定が可能と思われる坏・高台付坏・蓋についての検討を中心に述べることにする。

坏には丸底のものと平底のものとがあり、後者が多い。丸底のもののうちＡⅡ2類と特徴を同じくするものは、8世紀初頭に位置付けられている福島市小倉寺高畑窯跡（工藤：1969）出土土器に類例を見い出すことができる。また手持ヘラケズリ再調整ではあるがＡⅡ1類も器形的には近似している。平底のものでは静止糸切後手持ヘラケズリ再調整の坏（ＢⅡ1ｂ類）が最も多い。この技法の坏の類例としては、県内では本遺跡の東南方3㎞の色麻町日の出山窯跡群Ａ地点出土土器（岡田・工藤他：1970）がある。同窯跡は多賀城創建の瓦を焼成した窯跡であることから8世紀前半の年代が与えられている。他の平底の坏の多くについても前記した年代内に含まれると考えられるものである。ただし1点のみの出土ではあるが、ヘラ切り無調整の坏（ＢⅠ類）は技法上それより後出すると考えられるものである。しかし丸底の坏であるＡⅠ類などと共伴関係にあり、その年代については後に述べる。

高台付坏ではＣ類が量的に多い。台が底部周縁よりやや内側につくもので、日の出山窯跡より古く8世紀初頭頃と考えられている涌谷町長根窯跡群Ａ地点出土土器（佐々木：1971）に類似している。Ａ・Ｂ類については必ずしも明確な類例を見い出し得ないが、両者は共伴関係にあ

り、また共伴する土師器坏（ＢⅡ・Ⅲ類）によって年代の推定が可能である。

蓋にはカエリのあるものとないものとがある。一般的にはカエリをもつものが古いとされ、本遺跡においても両者の共伴関係はない。しかしカエリをもたない蓋についてみれば、ＢⅢ類と高台付坏Ｃ類（第233号墳）、ＢⅠ類と高台付坏Ｃ類（第266号墳）、ＢⅣ類と土師器坏ＢⅡ・Ⅲ類（第254号墳）というように、8世紀初頭頃と考えられる他の土器と共伴している。また小片のため図示できなかったが、カエリのある蓋も第205号墳において丸底坏ＡⅡ2類、土師器坏ＡⅡ類と共伴している。そしてこのようなあり方は、カエリのある蓋とない蓋が共存する小倉寺高畑窯跡のあり方とむしろ似ているといってよいであろう。

このようにみると、先に年代を保留した第205号墳出土の坏ＢⅠ類についても、他の共伴土器の年代に従うべきであると考えられる。さらに8世紀前半とした静止糸切後手持ヘラケズリ再調整の坏（ＢⅡ1ｂ類）についても高台付坏Ｃ類との共伴と、須恵器窯跡調査例の不足から生ずる組成推定の不十分さを考慮すれば、さらに遡った年代を与える方が妥当であると考えられる。

以上のように本遺跡出土土器について、その年代推定が可能なものはいずれも多賀城創建を下限とする7世紀末から8世紀初頭というきわめて限定された年代が与えられた。そして年代推定の可能な土器を含む第205、253、266号墳などの土器を総合すれば、ほとんどすべての土器がその分類項目に含まれている。このようなことから本遺跡の土器群は7世紀末から8世紀初頭という年代幅内の土器の内容を示していると考えられる。しかしながら、先にも述べたように本遺跡の土器はある資料的限界をもっていると考えられるものであるから、この内容を他の遺跡にまで敷衍することはできない。むしろ本遺跡の場合の方が古墳の供献土器という点で特殊な内容であるといえるかも知れない。また年代幅もあくまでも本遺跡に限られることであって、土器の存続年代と必ずしも一致するものではないようである。したがって本遺跡の土器群のもつ意味等については今後この時期の集落跡等各種の遺跡が調査された時点においてその成果により改めて検討されるべきであると思われる。

なお、古墳石室内裏込中から出土した土器については、それぞれが個有の特徴をもち、また共伴関係についても不明であることから検討は行わなかった。しかし仮に年代差があったとしても、共献土器群のもつ年代から大きく逸脱するものではないであろうということは遺構の面での検討によって推定できる。

註1　8世紀前半の土師器型式名として栗囲式Ⅱ類が設定されたり、国分寺下層式の範囲で扱かおうとする考えがあるが、御駒堂遺跡の報文でも述べられているように明確にされてはいない。したがって、ここでは特に型式名は用いない。

註2　ＢⅡ・Ⅲ類間では、日向前横穴古墳の報文で指摘されているように若干の年代差があると考えられる。また清水遺跡ではＢⅡ類に類似する土器は同遺跡第Ⅴ群土器に含まれているために7世紀後半の年代が与えられている（ただし報告者は第Ⅴ群土器がさらに細分される必要性を述べている）。

3　副葬品について

今回の調査で石室の床面を精査したものは第201、218、221、227、246、248、251、253、258、260、265、304、403、404号墳の計14基で、このうち第218、304、号墳はトレンチ内で玄室床面の一部が確認されたものである。これらはいずれも石室下部にまで削平の影響が及び、床面の残存状態の悪いものであり、石室内の保存状態の良好なものについては精査を行っていない。したがって副葬品の実態について必ずしも良好な資料を得てはいないが鉄製武器類を主として、その内容の一部を把握することができた。ここではそれらのもつ内容、特徴について整理し、検討を加えたい。

直刀：第213、218、221、244、246、253、265、304号墳から刀身、金具類が出土している。完形品として第218号墳出土の3振がある。破片資料を含めいずれも平棟、平造りで、切先はフクラ枯れ、両関のもののみがみられる。金具類には第218、265、304号墳出土の責金具のように金銅製、金メッキの施されたものがやや多くみられる。鍔には倒卵形で六～八窓の透しのあるものと、所謂喰み出し鍔とがみられるが、これら鍔の種類に対して把頭に特殊な形態をもつものはみられない。第253号墳出土の鍔には銀象がんの渦文が施されている。

刀子：第218、221、258、304、404号墳から出土している。いずれも平棟、平造りで刃関のみのものと両関のものがあり、切先はフクラ枯れのもののみがみられる。

鏃：第218、221、248、253、304、403号墳から図示できるものが出土している。この他破片は多数の古墳からも出土している。いずれも小さな刃部から長い篦被が伸び、棘状の突起を経て尖根の茎に至る形態のもので、他の形態の鏃はみられない。刃部の形態に変化があり、片丸、片刃、片関のつく刀子のような形態のもの、片丸、端刃でナギナタのような形態のもの、片丸、両端刃でヤリガンナのような形態のもの、両丸、両端刃で腸抉の付く三角形のものなどがみられる。篦被はいずれも断面長方形、正方形で、茎にコイル状に繊維が残るものが多くみられ、その上に更に木質の残るものもみられる。

金環：第201号墳から1点だけ出土している。金銅地で金ぱくが張られている。

以上が今回の調査により出土した副葬品の内容であるが、第218、221、304号墳では、石室内の保存状態が良好で副葬品の元位置、組成を把握することができた。これをみると、まず数量的には第218号墳、直刀3、刀子6、鏃44、第221号墳、直刀1、刀子3、鏃6、第304号墳、直刀2、刀子2、鏃20である。出土位置はいずれも玄室南東部付近に集中している点が注目される。第218号墳の鏃は刃部形態に5種類を含むが、形態ごとに出土位置にまとまりがみられる点で注目される。更に、第221、304、218号墳の順で、各器種の数量に格差のあることがうかがえるが、その要因を検討することは上記の諸点と並んで今後の課題とされる。

さて、これらの副葬品の内容をみた場合、その特徴として装飾品が少なく、武器類も実用的

なものによって占められていることが指摘される。具体的には玉類、耳環類が過去の出土例を含めいずれも数例にすぎないこと、直刀も、銀象がんの施された鍔が1点みられるものの把頭に儀礼刀的な特殊な形態をもつものがみられないこと、鏃の形態にも、身部が大型で装飾的な要素をもつものがないことなど、副葬品の内容として実用的な武器の豊富さが目立っている。

このような副葬品の内容を周辺諸地域の状況と比較すると、岩手県花泉町杉山古墳群、金ヶ崎町西根古墳群、江釣子村八幡、猫谷地、五条丸古墳群、和賀町長沼古墳群、花巻市熊ノ堂、蝦夷森古墳群、盛岡市太田蝦夷塚古墳群など、岩手県内各地の古墳群においては直刀、鉄鏃などの武器類とともに玉類が豊富に出土し、さらに和胴開珎、蕨手刀、銙帯金具などが出土している。宮城県北部の栗駒町鳥矢ヶ崎古墳群、河北町和泉沢古墳群、（佐々木：1972）桃生町山田古墳、古川市日光山古墳群などでも玉類・蕨手刀・銙帯金具などが出土し、岩手県地方に類似した様相を示していると考えられる。宮城県南部地域の名取市山囲古墳、白石市鷹の巣古墳群、丸森町台町古墳群などでは玉類、鏡、釧、馬具などが武器類とともに出土している。両者の間に時間的な差のあることも明らかであるが、これらを本古墳群の副葬品の内容と比較した場合、本古墳群の副葬品の内容の特徴がより鮮明になるものと考えられる。今後本古墳群内で上記の特殊な副葬品が出土する可能性も十分考えられるが、第218、221、304号墳で確認された実用的な武器類の副葬が頻度としてそれら特殊な副葬品をもつ古墳を大きく上回ることは今回の調査によりかなり顕著になったと言える。

4　群構成と被葬者の性格

色麻古墳群を構成する古墳は、現在までの記録、調査結果を総合すると300基をはるかに上回る数となることが確実となった。（註1）これらの古墳は花川をはさんで南岸の高野支群に100基前後、北岸の上郷支群に200基前後が分布するものでこの他に、現在では確認できないが上郷支群の西方に高台堂支群が分布していたといわれる。古墳の形態、規模については前方後円墳、方墳、大型円墳などは確認されておらず、その大半は径10m前後の小円墳からなると推定されている。主体部形態についても、上郷、高野両支群とも玄室部に胴張りプランをもつ河原石積み横穴式石室が主であると考えられている。今回の調査は上郷支群の古墳分布地域の南西部について行われたものであり本古墳群全体からみれば極く一部分にすぎない。しかし上述したように本古墳群は、過去の調査結果などからみてかなり均質的な古墳により構成されていると考えられるので、今回確認された88基の古墳について検討することは本古墳群の群としての性格を把握する上で意義のあることと思われる。したがってここでは、古墳の分布状況、古墳の規模、構造、年代、出土遺物の特徴を総合的に検討し、群の構成、被葬者の性格について考察を加えたい。

〈群構成〉

北東地区東端の面的な確認を行った地域を中心として群の構成について検討する。

まず、古墳の年代をみると、古墳の前庭周辺出土の土器については7世紀末から8世紀初頭という極めて限定された年代が想定された。これらの土器が供献的な性格をもつことからすれば、土器を出土した古墳は、7世紀末から8世紀初頭に位置づけることができる。一方、これらの土器が出土した古墳も含め、各古墳についてその構造を比較すると細部においては各古墳で多様な要素がみられるものの、石室のプラン、石材の使用方法などの基本要素は、いずれの古墳とも類似した特徴を備えており、そこに大きな時期差が存するとは考え難い。これらの年代観を念頭に置いて各古墳の前後関係を横穴式石室墳、竪穴式小石室墳にみられる周湟の関係で検討してみると各古墳の周湟の中には隣接する古墳を避けたような形状を示すもの（回避と呼ぶ）隣接する古墳同志の周湟が重複するもの（重複と呼ぶ）などがみられる。これらの周湟の関係を検討し、各古墳の新旧関係を整理すると重複するものでもその重複部分はいずれもごく僅かにすぎず、回避関係にあるものでも双方が回避したような状況のものが多くみられる。（第252号墳と第253、254号墳など）、また、回避、重複の関係にないものでも隣接する相互の周湟の間隔が1m足らずの例が多い。（第204と205号墳、第263と266号墳、第39と40号墳など）これらの状況は隣接する古墳間の時期的な隔りが小さく、空間地をあけずに連続的に造営された結果生じたものと考えることができよう。

次に古墳の位置関係についてみると、規模のほぼ等しい古墳が3〜4基単位で東西方向に直線的に並ぶ傾向が指摘できる。（№263→266→252→254号墳、№77→250→246号墳など）。さらに竪穴式小石室墳が一区域に集中するなど各古墳の配置には一定のまとまりがみられる。これらの古墳のまとまりが所謂「小支群」、「単位支群」の概念にあてはまるか否かについて即断することはできないが、いずれにしても各古墳が、群全体の中で、その墓域の設定に関して何らかの規制を受けているものと考えることはできる。

さて、本古墳群を構成する古墳の大半が胴張り型横穴式石室を内部主体とする計10m前後の円墳であることは今回を含め、現在までの調査成果から明らかであり、上記のような群構成の特徴が本古墳群の広い範囲に及ぶ可能性は十分考えられる。つまりこのように小規模均質な古墳が、短期間に、配置に規制を受けつつ、連続的に造営されるという点は本古墳群のもつ大きな特色であると言える。また、本古墳群は、その群の規模が大きいという点でさらに特殊な性格をもつものと考えられる。このような群構成、群の規模の問題は、被葬者集団の性格に深く関係するものと考えられるので、以下、個々の古墳の構造上の特徴、出土遺物などから被葬者集団の性格について検討を加えたい。

〈被葬者の性格〉

まず、供献土器についてみると、その内容は県内の横穴古墳の羨道、前庭などにみられる土器群と類似した器種構成を示しており、墓前における儀礼が、横穴古墳のそれとほぼ共通した内容をもつものであったことが理解できる。この中で特に注目されるものとしては関東地方の形態、製作技法の特徴をもつ内面ナデ調整の土師器坏がある。今回の調査では第217、221、225、228、253、254、256、269、15号墳の計9基の古墳から出土したが、この他にも所属不明の小破片が何点かみられ、比較的多くの古墳がこれらの土器をもつことが確認された。しかし、これらの土器のあり方をみると第217、253、254、256号墳では、それぞれ法量のほぼ等しいものが2個体ずつ周湟内から出土し、第221、228号墳で石室裏込め内から、やや特殊な器形のものが各1点出土しているにすぎない。これに対し在地系の内面黒色処理された土師器坏はより多くの古墳で数個体から十数個体ずつ出土し、量的には内黒のものがはるかに多い。これらの土器の供献行為の内容は不明であるが、上記のような坏類の在り方は被葬者に関東地方に関わりのある人がいたことを示すものであろう。

須恵器の中では甕の豊富さが注目されるが、このうち口径22cm、器高44cm前後の中型のものは、古墳の規模にかかわらず出土しているのに対して、口径44cm、器高88cm前後の大型のものは第204、205、251、254、266、403、77などの比較的規模の大きなものから出土しており、しかもこれらの古墳の供献土器は器種、個体数が豊富であるという傾向をもつ。このように古墳の規模、供献土器の間には少なからず相関関係をみとめることができ、ここに被葬者の階層性が間接的に反映されていると考えることもできる。

副葬品については、装飾品が少なく実用的な武器類が豊富であるという特徴を指摘した。この点については時期的な観点から、副葬品の組成について再検討を加える必要もあるが、第218、221、304号墳で確認されたまとまった数の武器の副葬は、被葬者が一定の武力的な役割を担っていたことを示唆するものと考えられ、装飾品、馬具、帯金具、儀杖刀などを出土する古墳の被葬者とはやや異なった性格を有するものと考えられる。

各古墳の規模については、横穴式石室墳の周湟内周径＝石室長に格差があり、計測値からいくつかの規模に分かれる可能性があるがこれは先述したように供献土器の出土状況によってもその一部を検証することもできる。しかしこれらの格差はむしろ微妙であり、著しく突出した規模、特徴ある副葬品をもつ古墳は現在までのところ確認されていない。したがって、各古墳間に想定される階層の差、性格の相違はさほど大きなものであるとは考えられない。ただし、竪穴式小石室墳については横穴式石室墳に比して規模がかなり小さく、構造も簡素で、出土遺物も少ないなどの点から、やや異なった被葬者の性格を想定することもできよう。

一方主体部の構造については、玄室部の確認された横穴式石室、竪穴式小石室のすべてが胴張りプランであるという点が注目される。先に述べたように胴張り型横穴式石室は宮城県内の

いくつかの後期群集墳内でも確認されており、胴張りプラン自体は特に異質なものとは言えない。しかし、群構成の問題とも関連して、本古墳群のように胴張り型の横穴式石室を内部主体とする均質的な円墳群が主体となる群集墳は周辺地域にはみられず、北関東西部に極めて類似した様相をもつ群集墳が集中的にみられる。（註2）先述した関東系の土器の存在を考慮するならば古墳の構造、群構成にみられる北関東西部諸地域との類似性は、本古墳群の形成自体がそれらの地域と何等かの関係を有する可能性を示唆していると言えよう。

今回の調査の成果をもって、色麻古墳群全体の性格を規定することはできないが、群の形成が極めて急激であること、関東地方に関わる要素をもつことなどからみて、本古墳群形成の背景に外的な要因が大きく作用している可能性は否定できない。しかも供献土器によって示された7世紀末から8世紀初頭という年代は、本古墳群周辺地域に「色麻柵・玉造柵」が造営される時期、「日の出山窯跡」で多賀城創建瓦が焼成される時期に極めて近接しており本古墳群の被葬者集団が、これら周辺の状況に深く関わりをもった可能性も否定できない。群の規模が大きいことや、群を構成する古墳の大半が7世紀末から8世紀初頭を中心とした時期に位置付けられる均質な小円墳群であることなどの特徴は、このような被葬者集団の性格を示すものと考えられる。

註1. 明19年作成の地籍図、昭和25年、東北大学考古学研究室作成の古墳分布図を参考とし今回の調査成果から検討すると大半の古墳は上部を削平され水田下に下部構造のみが遺存しているものと考えられる。現在地上で墳丘を確認できるものは上郷地区では50基前後にすぎないが、これらはいずれも規模の大きなものである。

註2. 埼玉県大里郡川本町鹿島古墳群、同児玉郡美里村塚本山古墳群、群馬県藤岡市東平井古墳群など、埼玉県大里郡、児玉郡、群馬県藤岡市にかけての地域に集中している。

Ⅴ　古墳以外の遺構と遺物

遺構は、住居跡8軒、火葬墓4基、土壙2基、畝状遺構が検出され、遺物は、土器、石器類が出土している。

1　住居跡

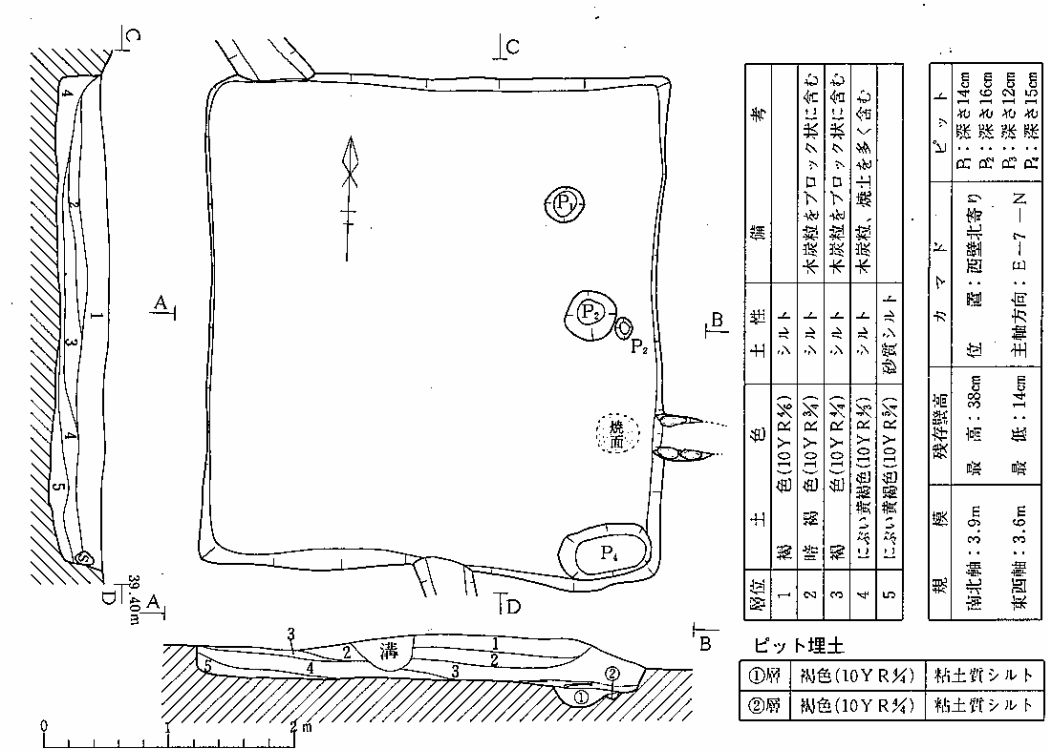
検出された8軒のうち、1～5号住居跡は、北東地区の大地の南縁に、11～13号住居跡は南地区の微高地状に、それぞれまとまって分布する。

第1号住居跡

〔位置〕　第93号墳の南側に位置し、第93号墳の前庭及び周湟の一部を破壊して作られている。

〔構造・特徴〕　平面形はほぼ正方形で、南東壁には石組みのカマドが付設されている。明確に柱穴、周溝は確認できない。住居跡内の堆積土には、おびただしい炭化材、焼土粒が含まれている。壁面には、しがらみ状の炭化材がみとめられる。

〔出土遺物〕　住居跡床面から土師器、須恵器が出土している。図化できたものは、土師器坏1点、甕9点、須恵器坏1点である。



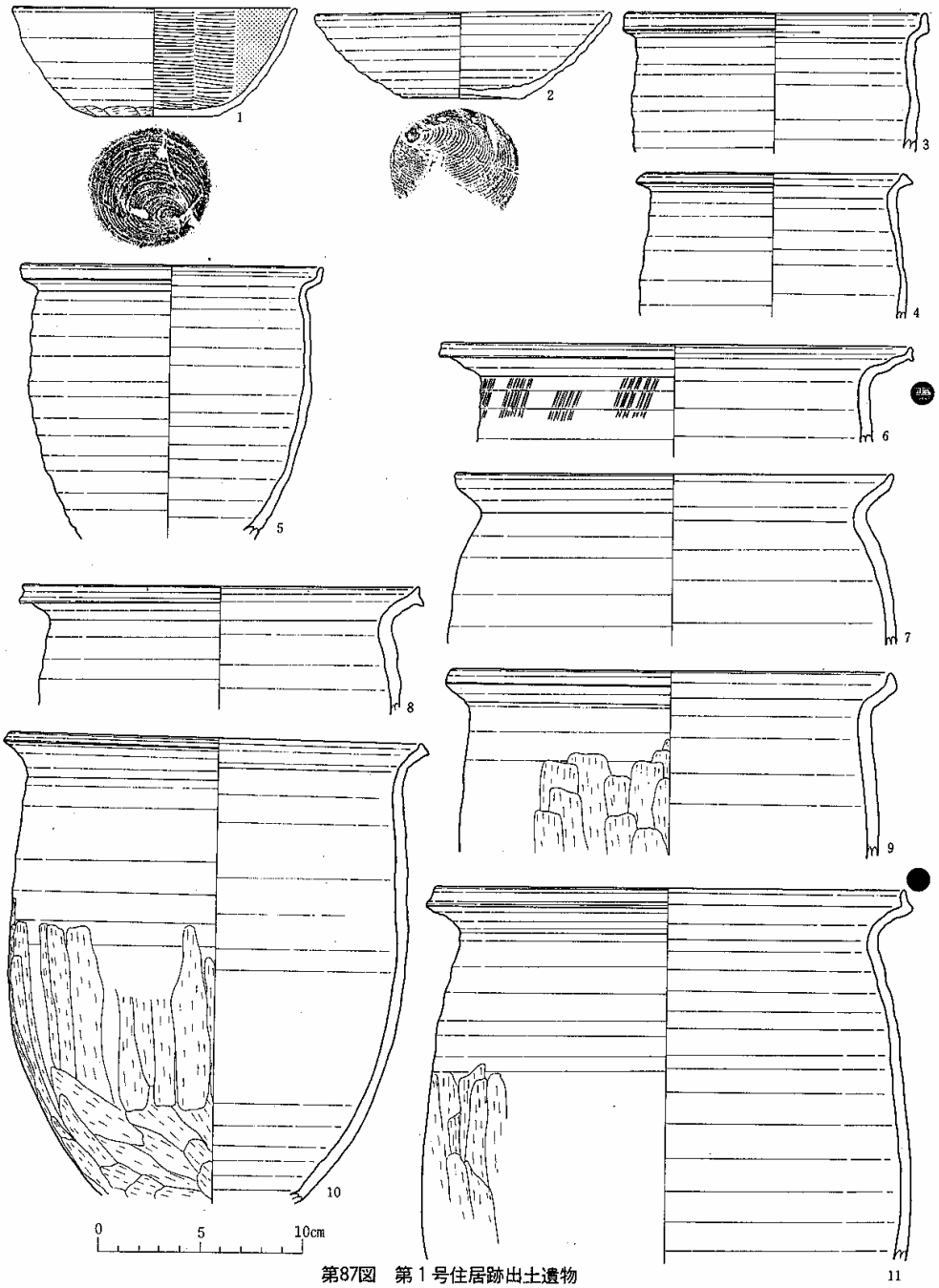
層位	土色	土性	備考
1	褐色(10YR4/6)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭粒をブロック状に含む
3	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭粒をブロック状に含む
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	木炭粒、焼土を多く含む
5	にぶい黄褐色(10YR4/3)	砂質シルト	

規模	残存壁高	カマド	ピット
南北軸：3.9m 東西軸：3.6m	最高：38cm 最低：14cm	位置：西壁北寄り 主軸方向：E－7－N	P1：深さ14cm P2：深さ16cm P3：深さ12cm P4：深さ15cm

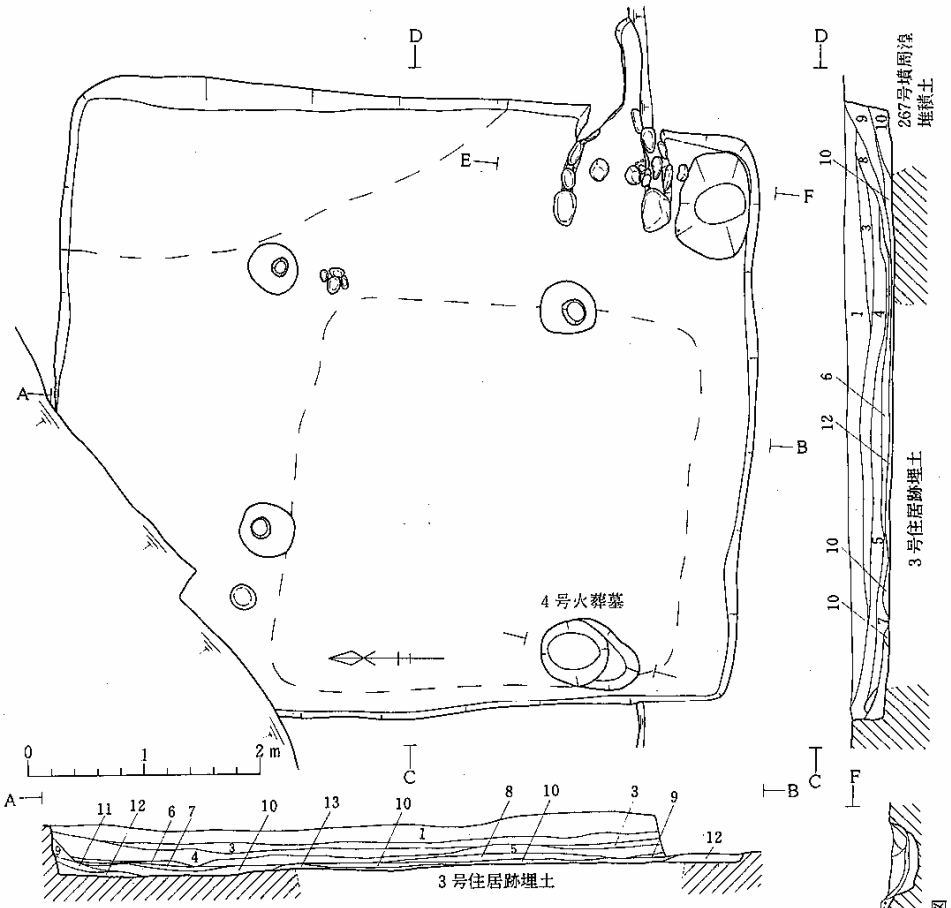
ピット埋土

①層	褐色(10YR5/4)	粘土質シルト
②層	褐色(10YR5/4)	粘土質シルト

第86図　第１号住居跡



第87図　第１号住居跡出土遺物

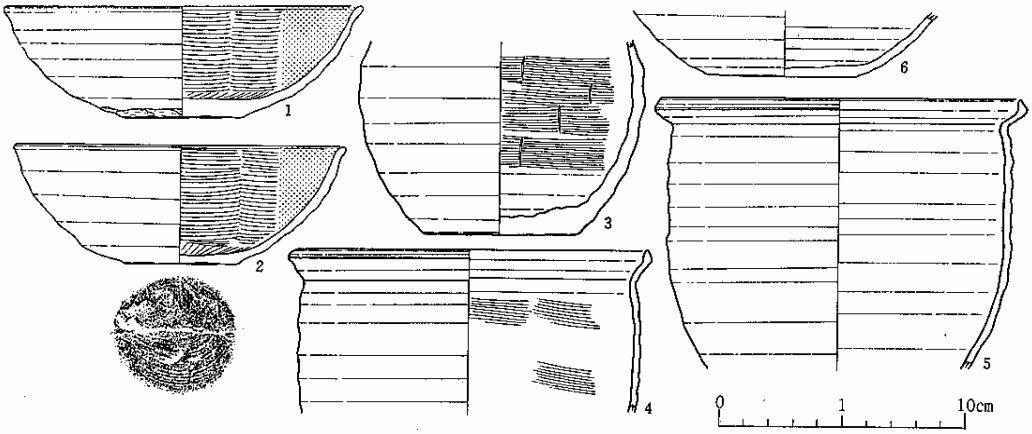


層位	土色	土性	備考	層位	土色	土性	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト		9	褐色(10YR4/4)	シルト	木炭粒を含む
2	黄褐色(10YR5/8)	シルト		10	灰白色(10YR8/2)	シルト	灰白色火山灰
3	褐色(10YR4/4)	シルト		11	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	木炭粒を含む
4	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭粒を含む	12	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト	
5	にぶい黄褐色(10YR5/3)	シルト		13	褐色(10YR4/4)	シルト	
6	黒褐色(10YR3/2)	シルト		14	褐色(7.5YR4/4)	シルト	
7	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭粒を少量含む	15	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト		16	褐色(7.5YR4/4)	シルト	

第88図　第２・３号住居跡

土師器坏（1）はロクロ使用で、体部下端に手持ヘラケズリが加えられ、底部に回転糸切り痕を残す。甕（3～11）はロクロ使用で、小型（3～5）と大型（6～11）とがあり、6には平行叩き目がみられ、9～11にはヘラケズリが加えられている。

須恵器坏（2）は底部に回転糸切り痕を残し再調整はみられない。



第89図　第２号住居跡出土遺物

第2号住居跡

〔位置〕　第267号墳の西側、第1号住居跡の西方10mに位置し、第267号墳の周湟の一部と第3号住居跡を破壊して作られており、また第4号火葬墓をも破壊している。

〔構造〕　平面形はほぼ正方形で、南東壁には石組みのカマドが付設され、南東隅には貯蔵穴状の土壙がみとめられる。床面には掘り方を伴う主柱穴が三ヶ所確認されるが、南西部にこれらに対応するものはみとめられない。カマドは石材、粘土により側壁を作り、燃焼部内に棒状の石材を二本、支脚状に直立させている。

〔特徴〕　住居内の床面直上に灰白色火山灰が堆積している。本住居跡の北東部の壁、床面は第267号墳の西側の周湟堆積土からなる。

〔出土遺物〕　床面、カマド内より土師器、鉄製品、鉄滓が出土している。図化できたものは、土師器坏2点、甕3点、須恵器坏1点である。

土師器はいずれもロクロ使用である。坏（1、2）は底部に回転糸切り痕を残すが、1の体部下端には手持ヘラケズリが加えられている。甕（3～5）はいずれも小形である。

須恵器坏（6）は底部に回転糸切り痕を残し再調整はみられない。

第3号住居跡

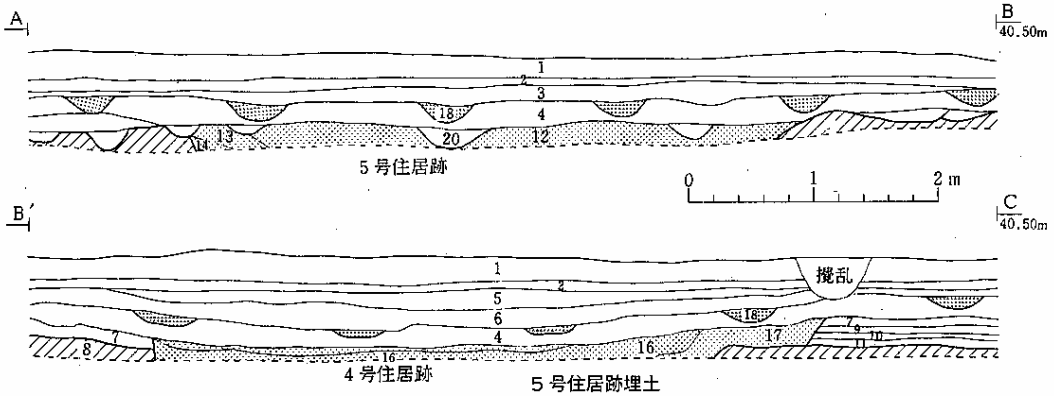
〔位置〕　前述の第2号住居跡床面下に埋没している。

〔構造・特徴〕　平面形は正方形である。存在のみを確認し精査は行わなかったが、第2号住居跡の柱穴内の状況から、本住居跡の床面は第2号住居跡床面の約50㎝下にあることが確認された。

〔出土遺物〕　なし。

第4・5号住居跡

〔位置〕　第2号住居跡の西方15mに第4号住居跡、その更に西方5mに第5号住居跡が位



畝状遺構① 堆積土

住居跡埋土

層位	土　　色	土　性	備　考
1			水田耕作土
2			水田床土
3	黒褐色(10YR3/3)	シルト	
4	褐　色(10YR4/4)	シルト	
5	黒褐色(10YR3/2)	シルト	
6	暗褐色(10YR3/3)	シルト	
7	暗褐色(10YR3/4)	シルト	
8	褐　色(10YR4/6)	砂質シルト	地山
9	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	
10	褐　色(10YR4/4)	砂質シルト	
11	暗褐色(10YR3/4)	砂質シルト	

5号住居跡埋土

層位	土　　色	土　性	備　考
12	暗褐色(10YR3/4)	シルト	木炭粒を含む
13	黒褐色(10YR3/2)	シルト	木炭粒を含む
14	褐　色(10YR4/6)	粘土質シルト	

4号住居跡埋土

層位	土　　色	土　性	備　考
15	褐　色　(10YR4/4)	シルト	
16	暗褐色　(10YR3/4)	シルト	
17	暗褐色　(7.5YR3/3)	シルト	カマド

畝状遺構①

層位	土　　色	土　性	備　考
18	にぶい黄橙色(10YR6/3)	シルト	

畝状遺構②

層位	土　　色	土　性	備　考
19	褐　色(10YR4/6)	粘土質シルト	

第90図　第４・５号住居跡

置する。

〔構造・特徴〕　両者ともトレンチ内に住居跡の南半部が現われたもので、その全容は不明であるが、第4号住居跡の南東壁には、石組みを伴なうカマドがみとめられる。

〔出土遺物〕　なし。

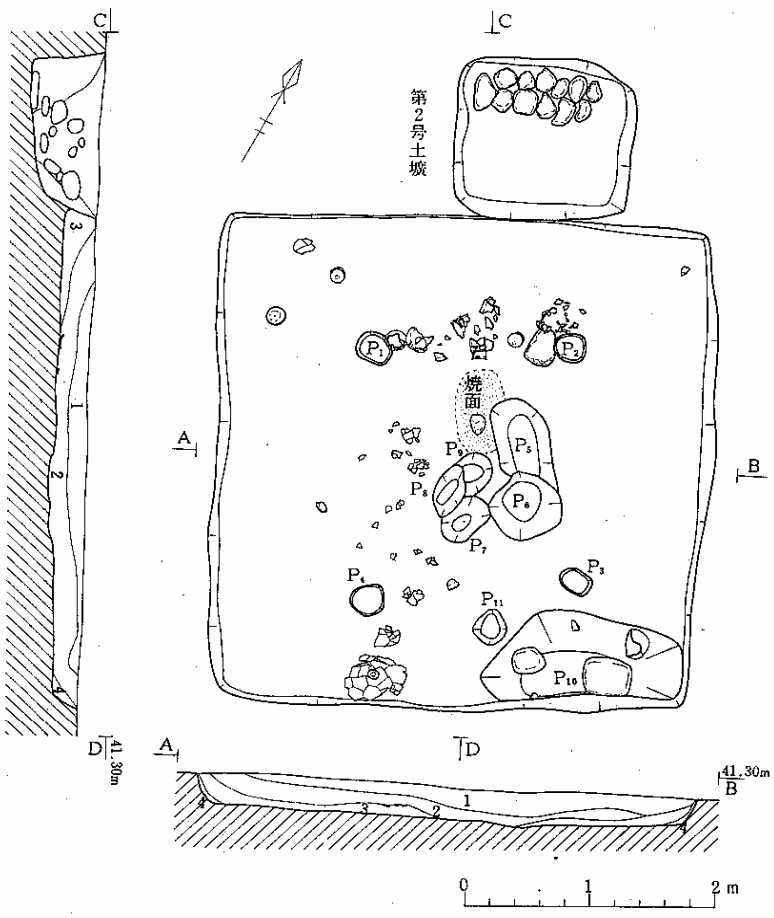
第11号住居跡

〔位置〕　第402号墳と第403号墳との間の空間地に位置し、第12号住居跡の西方2mに隣接する。

〔構造・特徴〕　平面形は正方形で、床面には掘り方を伴なう主柱穴が4本確認された。住居跡中央の床面の一部には焼け面がみとめられ、それに隣接して浅い凹みがある。更に南東隅にも浅い土壙状の凹みがみられ、その中央床面には偏平な河原石がある。

〔出土遺物〕　床面、堆積土より土師器・黒曜石製剥片が出土している。

坏（1、2）はいずれも丸底で、体部中位外面に段、内面に稜をもち口縁部が大きく外傾している。（1）は底部が偏平な丸底で、中央からややはずれた位置に穿口がある。段以上は直

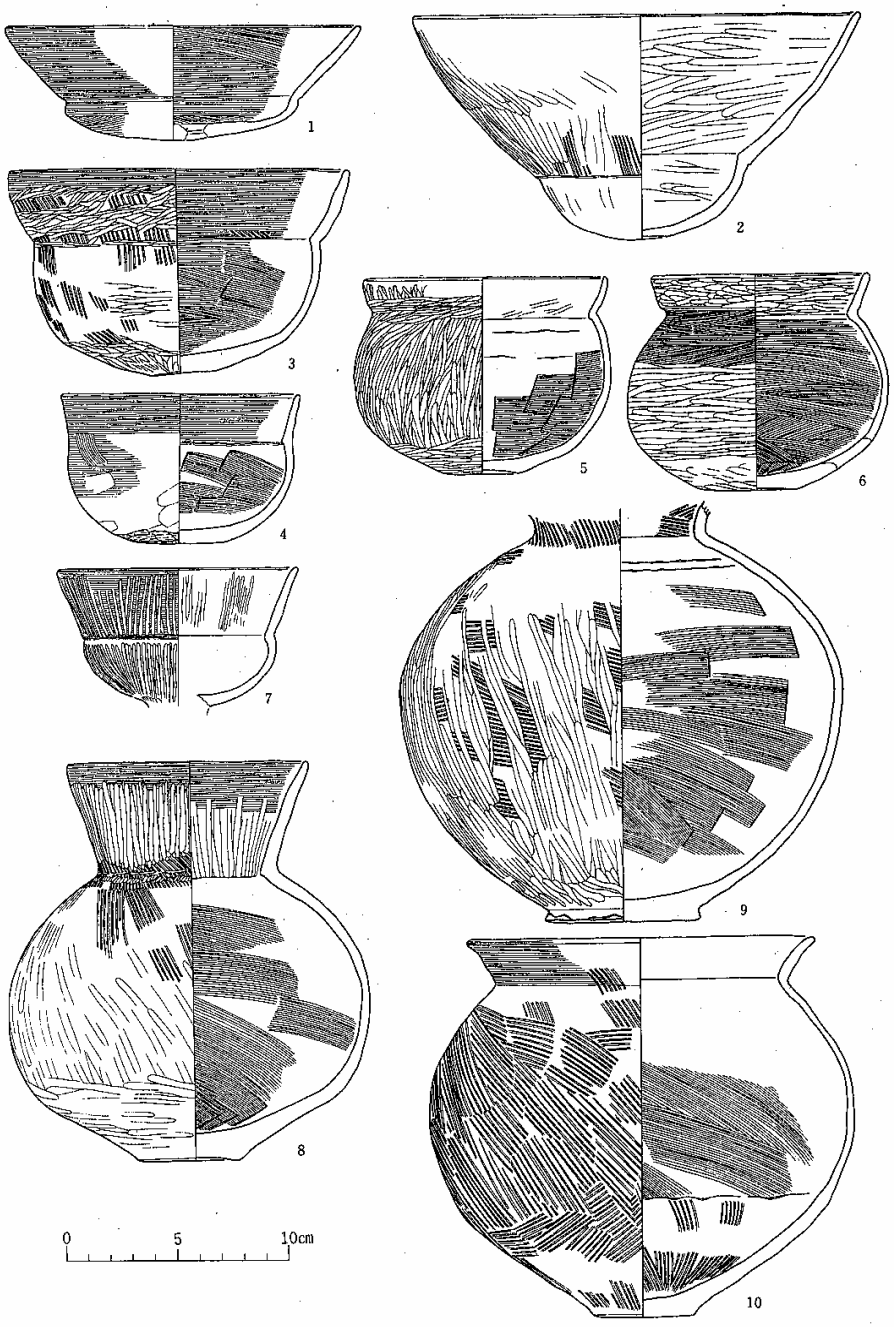


規模	残存壁高	柱穴	備考
南北軸：4.2m 東西軸：4 m	最高：31cm 最低：12cm 最低：12cm	4個 P_1：深さ47cm P_2：深さ19cm P_3：深さ43cm P_4：深さ38cm	

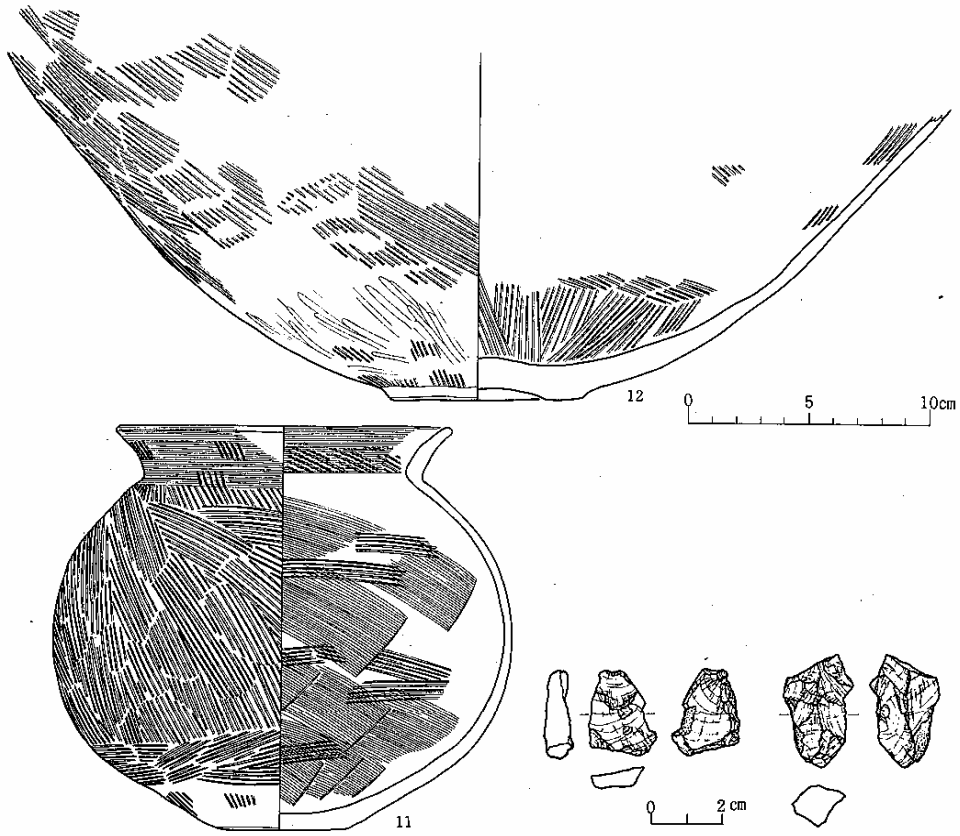
層位	土色	土性	備考
1	褐色(10YR3/4)	シルト	
2	暗褐色(10YR3/3)	シルト	下部で木炭粒を含む
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	多量の木炭粒、少量の焼土含む
4	暗褐色(10YR3/4)	シルト	

第91図　第11号住居跡

線的に外傾する。(2) は、底部が小さな半球形で底部中央が凹んでいる。段以上は内弯気味に外傾する。埦 (3、4、5、6) は、体部上位でくびれ、内面に段、稜が形成される。底部は上げ底になるもの (3、5、6) と、平底になるもの (4) がある。高坏 (7) は、脚部が欠損しているが坏部は坏の基本的な形態的特長を共有している。内外面に朱彩が施されている。壺 (8、9) は平底で、体部中位に最大径がある。(8) は体部下半で変化し直線的に底部に至る。口縁部は直線的に外傾している。(9) は口縁部が欠損しているが、体部はほぼ球形で朱彩が施されている。(12) は大型の壺で、底部は小さな平底で、上げ底である。甕 (10、11) は小さな平底で、体部中位に最大径をもち、体部下半で変化して直線的に底部に至る。頸部で「く」の字状にくびれ、口縁部は肥厚し、外反気味に外傾する。



第92図　第11号住居跡出土遺物



第93図　第11号住居跡出土遺物

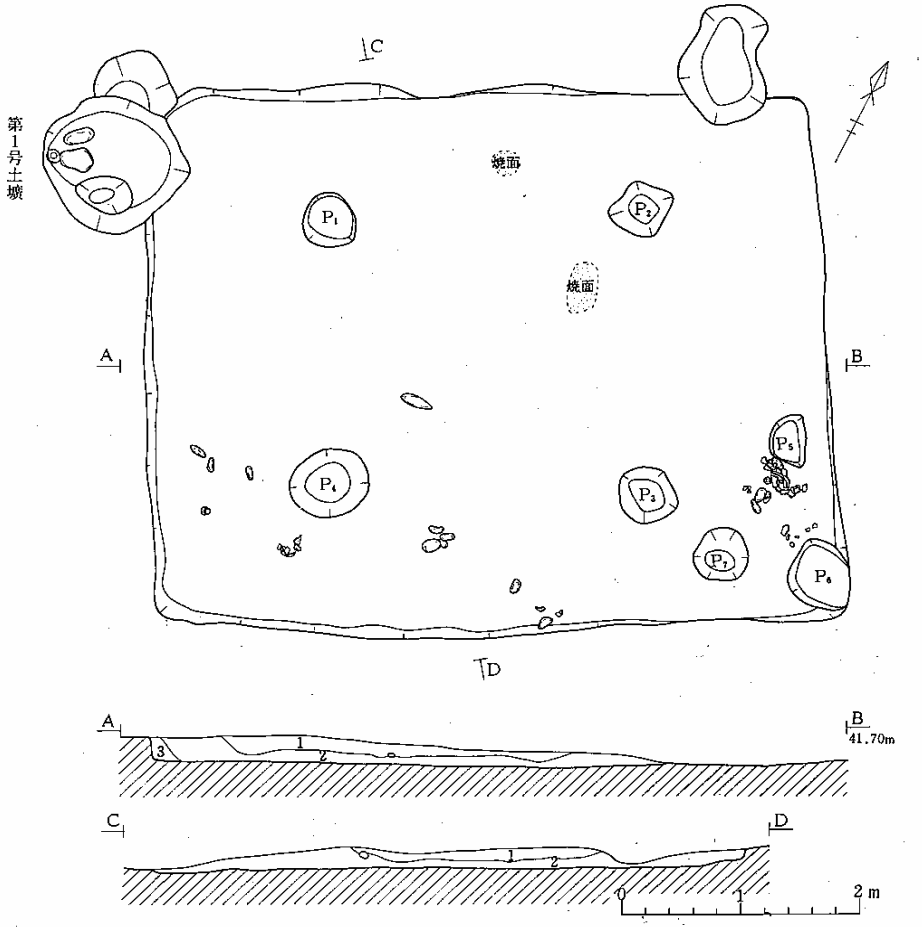
第12号住居跡

〔位置〕　第401号墳の北側に位置する。

〔構造・特徴〕　平面形は長方形で、床面には4本の主柱穴が確認される。住居跡中央の床面の一部に焼面がみとめられる。

〔出土遺物〕　床面堆積土より土師器が出土している。図化できたものは、土師器甕1点、小型土器（高坏形、埦形）2点である。

高坏、埦（第95図－1、2）は小型で、祭器的なものと考えられる。甕（3、4）はいずれも体部中位に最大径をもち（4）は底部を欠損しており、頸部は「く」の字状にくびれ、口縁部は外反気味に外傾する。（3）は底部がヘラケズリされ平底風の丸底で、頸部で「く」の字状にくびれ、口縁下部には弱い段をもっている。



層位	土色	土性	備考
1	褐色土(10YR⅘)	シルト	
2	黒褐色土(10YR⅔)	シルト	
3	黒褐色土(10YR⅔)	シルト	1次崩壊土、地山ブロックを含む

規模	残存壁高	柱穴	備考
南北軸：4.8m 東西軸：5.7m	最高：23cm 最低：0cm	4個 P1：深さ34cm P2：深さ27cm P3：深さ20cm P4：深さ22cm	南東コーナーに土器の集中とピット3個焼面がP1、P2間に2個所検出された

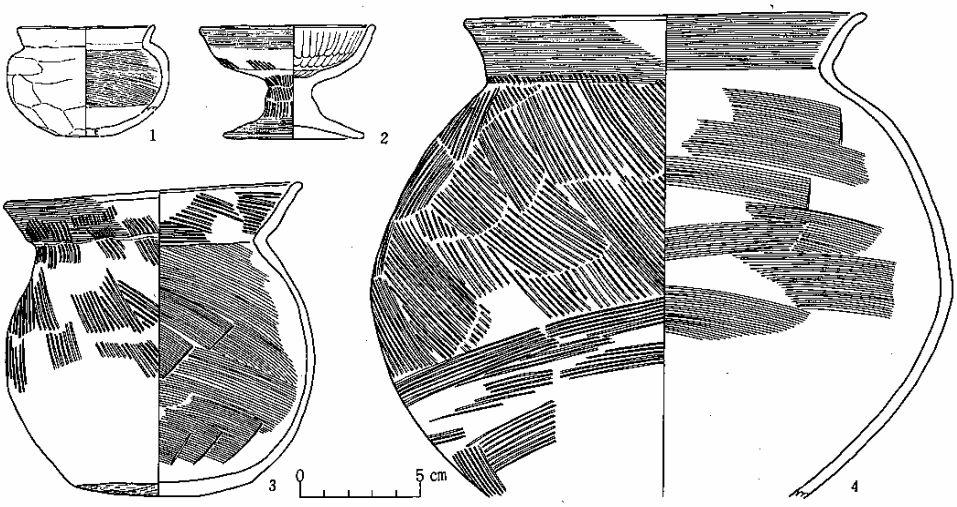
第94図　第12号住居跡

第13号住居跡

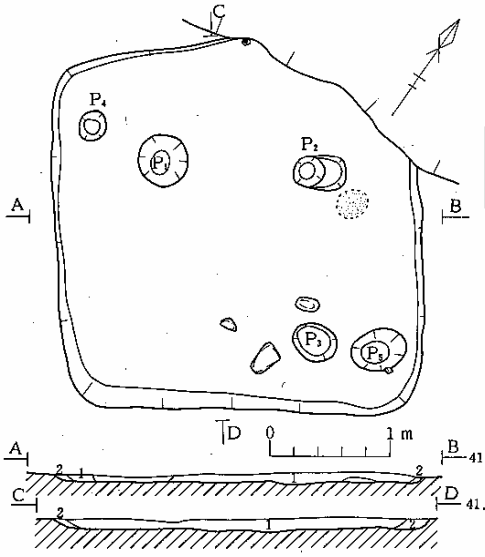
〔位置〕　第403号墳の北西に位置し、住居跡の北東隅は第403号墳の周湟によって破壊されている。第7号住居跡の西方約4mにあたる。

〔構造・特徴〕　平面形は正方形で、床面に主柱穴が4本確認された。

〔出土遺物〕　床面、堆積土から土師器が出土している。図化できたものは器台1点のみである。受皿部、脚部とも欠損している。脚部は中空で円錐台状に開き3個の円窓がみられる。



第95図　第12号住居跡出土遺物

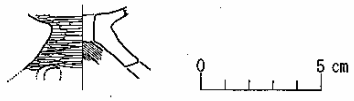


層位	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	崩壊土層、木炭片・褐色土ブロックを含む
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	褐色土ブロックを含む

13号住居跡観察表

規　　模	残存壁高	柱　　穴	備　　考
南北軸：3.16m 東西軸：2.76m	最　高：10cm 最　低：0cm	3個	P_1、P_3脇にピット、 P_3脇に焼土

13号住居跡出土土器



第96図　第13号住居跡

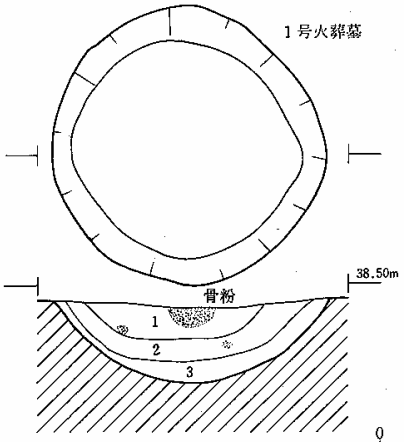
2. 火葬墓

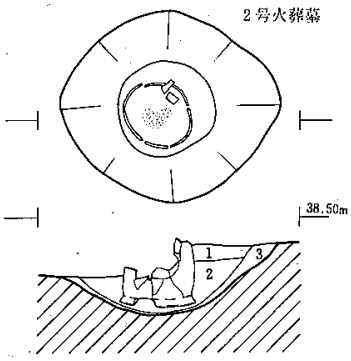
発見された四基は、いずれも北東地区台地上に位置する。

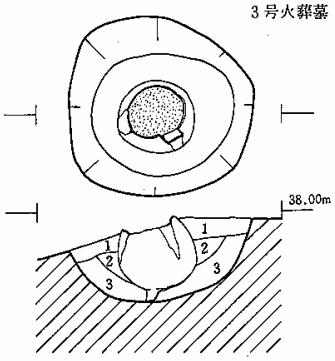
第1号火葬墓

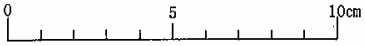
〔位置〕　第225号墳の北東に位置し、第2号火葬墓の東側約1mに隣接している。

〔構造・特徴〕　平面形は円形で、すり鉢状の土壙内に木炭を多量に含む土層、骨粉がみとめられる。骨粉は最上層の中央部にまとまっており、その状況からみて本来は袋状の有機質の









第1号火葬墓

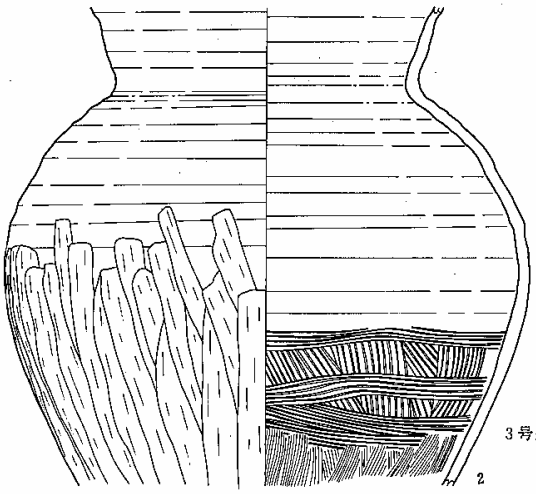
層No.	土色	土性	混入物など
1	10YR3/3黒褐色	シルト	木炭
2	10YR3/3暗褐色	サンデーシルト	木炭
3	10YR4/6褐色	サンデーシルト	

第2号火葬墓

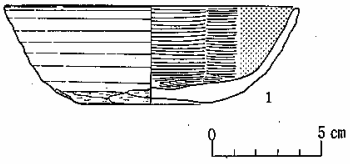
層No.	土色	土性	混入物など
1	10YR3/3暗褐色	シルト	
2	10YR3/3暗褐色	サンデーシルト	木炭
3	10YR5/5にぶい黄褐色	サンデーシルト	

第3号火葬墓

層No.	土色	土性	混入物など
1	10YR5/5にぶい黄褐色	サンデーシルト	
2	10YR3/3黒褐色	サンデーシルト	木炭
3	10YR3/3黒褐色	サンデーシルト	木炭



3号火葬墓出土



(土壙1出土)

第97図　火葬墓、土壙1出土遺物

容器に収められていたものと考えられる。上部は削平により失われている。

〔出土遺物〕　なし

第2号火葬墓

〔位置〕　第1号火葬墓の西方約1mに隣接する。

〔構造・特徴〕　平面形は円形で、すり鉢状の土壙内中央に火葬骨を収めた土師器甕が倒立の状態で埋置されていた。甕の口縁は土壙底面からやや浮いていたが、内部の骨片は口縁外部に流出しておらず、本来は有機質の蓋が存在したものと考えられる。上部構造は削平により失われている。

〔出土遺物〕　火葬骨と、これを収めた土師器甕が出土している。火葬骨は成人骨である。土師器甕は調査中盗掘され紛失し、図化できなかったがロクロ使用の長胴の甕であった。

第3号火葬墓

〔位置〕　第247、第248、第255、第27号墳に囲まれた空間地に位置する。

〔構造・特徴〕　平面形は円形で、すり鉢状の土壙内に火葬骨を収めた須恵器甕が倒立の状態で埋置されていた。甕の口縁は欠損しているが、意図的なものではない。内部の火葬骨は、甕の口縁外に流出しておらず、本来は有機質の蓋が存在したものと考えられる。上部構造は削平により失われている。

〔出土遺物〕　火葬骨と、これを収めた須恵器甕が出土している。火葬骨は小児骨である。須恵器甕は底部・口縁を欠き、最大径が体部上半にあって口縁部が外傾する。

第4号火葬墓

〔位置〕　第2号住居跡内の南西隅床面で検出された。

〔構造・特徴〕　大部分が、第2号住居跡により破壊され、浅い皿状の土壙下部がかろうじて残存していた。土壙内には木炭を多量に含む土層、骨粉がみとめられた。骨粉は散漫であるが、土壙中央部に比較的まとまっていた。

〔出土遺物〕　骨粉以外の出土遺物はない。

3. 土壙

第1号土壙

〔位置〕　第12号住居跡の北西隅の一部を破壊して構築されている。（第94図参照）

〔構造・特徴〕　平面形は隅丸方形で、土壙底面に偏平な川原石が敷かれている。

〔出土遺物〕　底面敷石上に、口縁部を下にして完形の土師器坏が出土した。ロクロ使用で体部下端に手持ヘラケズリが加えられ、底部に回転糸切り痕を残している。（97図）

第2号土壙

〔位置〕　第11号住居跡の北側壁の一部を破壊して構築されている。(第91図参照)

〔構造・特徴〕　平面形は方形で、土壙底面に偏平な川原石が敷かれている。

4. 畝状遺構

上部畝状遺構

〔位置〕　北東地区の西南部に広がっている。広がりの範囲は確認できなかった。確認面は水田耕作土直下で、部分的に黒色シルト質土壌により覆われる部分もみとめられる。

〔構造・特徴〕　断面U字形で、ほぼ南北に軸線をとる溝状の掘り込みが平行に約1mの等間隔で並列している溝状の刷り込み内には灰白色火山灰が堆積している。

〔出土遺物〕　土師器、須恵器、赤焼き土器の細片が溝状の掘り込み内堆積土から出土しているが図示できるものはない。

下部畝状遺構

〔位置〕　第4・5号住居跡付近で一部確認された。上部畝状遺構の約20cm下層に在る。広がりの範囲は確認できなかった。

〔構造、特徴〕　断面U字形で、軸線が南東、北西に偏した溝状の掘り込みが平行にほぼ1.5m前後の等間隔で並列している。溝状の掘り込み内には褐色クレイ質シルトが堆積している。

〔出土遺物〕　土師器の細片が溝状の掘り込み内堆積土から出土しているが図示できるものはない。

5. 住居跡、火葬墓、土壙、畝状遺構の考察

これらの諸遺構について、その年代を出土土器の特徴を中心として検討していきたい。この遺構のなかで土器が出土しているのは第1・2・11・12・13号住居跡、第2・3号火葬墓、第1号土壙である。

土器は土師器と須恵器であり、土師器はロクロを使用しているものと、使用しないものとがある。

(1)　ロクロ不使用の土師器

第11・12・13号住居跡から出土している。この3軒出土の土器はロクロを使用しない点以外にも共通点が多く、一群の土器として同一時期に比定される特徴を備えている。そしてその類例は蔵王町大橋遺跡（太田：1980）、志波姫町鶴ノ丸遺跡（手塚：1981）があげられ、塩釜式（氏家：1957）とされている。

県内の塩釜式土師器については、土器群の内容を比較検討することによって大橋・鶴ノ丸遺

跡例が、名取市西野田遺跡（丹羽：1974）や古川市留沼遺跡（手塚：1981）の出土土器群より先行する可能性が指摘されている（丹羽：1974、1983、手塚：1981、太田：1980）。これに従えば本遺跡の第11・12・13号住居跡出土の土師器は塩釜式の中でもより古い段階に位置付けられ、また住居跡の年代も同様のことがいえる。

(2)　ロクロ使用の土師器および須恵器

ロクロ使用の土師器は表杉ノ入式（氏家：1957）に比定され、それが出土している第1・2号住居跡、第2号火葬墓、第1号土壙も同期に属すると考えられる。なお各遺構の土器を比較した場合、相違点もみられるので表杉入式内においてさらに時期の異なる可能性がある。

須恵器は坏・甕が各1点出土している。坏は第1号住居跡において上記の土師器と共伴している。甕は第3号火葬墓から出土しており、土師器と共伴していないが、土器の特徴から平安時代（表杉ノ入式期）のものとみられる。

このほか土器の出土していない第3、4、5号住居跡、第1、4号火葬墓、第2号土壙、上、下部畝状遺構については明確な年代的位置付けは困難であるが、構造、重複関係、火山灰などからおおよその年代を想定することができる。まず、上部畝状遺構は、溝状の掘り込み内に灰白色火山灰が堆積している。本遺跡においては、この他に第77号墳周湟堆積土最上層、第2号住居跡床面直上にも灰白色の火山灰が堆積しており、これらはいずれも、ほぼ純粋な火山灰の堆積層である。（山田：1983本書収録）。したがって上部畝状遺構の年代は、床面直上に火山灰の堆積がみられる第2号住居跡の年代に近いものと考えられる。(註1) 下部畝状遺構は、上部畝状遺構の約20㎝下に存し、溝状の掘り込み内堆積土からロクロ使用の土師器の細片が出土している。また第5号住居跡堆積土を掘り込んでいる。したがって下部畝状遺構は上部畝状遺構よりも古く、第5号住居跡よりも新しいもので、堆積土出土の土器は本遺構の年代の下限を示すものと考えられる。

第2号土壙は方形でほぼ垂直に掘り込まれ、底面に偏平な河原石が敷かれているが、この構造は第1号土壙に共通するものであり、両者の性格、年代に大きな差はないものと考えられる。

第4号火葬墓は第3号住居跡堆積土を掘り込んで作られ、第2号住居跡によって破壊されていることから、第2号住居跡よりも古く、第3号住居跡よりも新しい。第1、4号火葬墓は、すり鉢状の土壙、火葬骨を有する点で第2、3号火葬墓と共通する構造をもつが、木炭を多量に含む層、土器に納骨されていないことなどの点で異なっている。

第3号住居跡は第2号住居跡、第4号火葬墓よりも古く、第4、5号住居跡は上部畝状遺構よりも古く、さらに第5住居跡は下部畝状遺構よりも古い。

以上のことを整理すると、上、下部畝状遺構、第2号土壙は平安時代のものと考えられ、第1、第4号火葬墓、第3、4、5号住居跡は平安時代、もしくはそれ以前のものと考えられる。

註1. この火山灰については土壌学上の検討によれば宮城県北部を中心に分布する灰白色火山灰と同一のものであるとされる。（庄子、山田：1983本書所収）この火山灰の降下年代については、古川市衰口沼におけるC^{14}年代をもとにAD800年以降の年代が示されている。（庄子、山田:1979）　さらに陸奥国分寺七重塔焼失年代との関係から10世紀前半頃の年代を与える見解が出されている。（白鳥：1980）これらに対して住居跡内堆積土の観察から、降下回数、年代をめぐって問題も提起されている。（小井川：1982）本遺跡における火山灰は、確認された古墳の周湟のうち、浅いもの、上部が削平されたものなどを除き、多数の周湟の堆積土上層部で確認されている。これに対し、住居跡内に堆積がみられたものは第2号住居跡のみであり、同じ表杉ノ入式期に属する第1号住居跡ではみとめられなかった。

6. 弥生時代の遺物

第215号墳周辺、第402号墳周辺の二地域において弥生土器、石器、フレイクが出土している。遺構は確認されなかったが、第215号墳周辺では水田耕作土下の黒褐色シルト質土層に土器、石器、フレイク類が、（第98図1～18）第402号墳周辺では畑耕作土下の暗褐色シルト質土層に土器、フレイク類が（第98図19～21）包含されていた。両地域出土の土器は器形、文様の特徴において様相を異にしている。

〈第215号墳周辺出土遺物〉土器はいずれも破片資料で、器種の判別できるものには甕（第98図1、4）壺（同2、5）蓋（同7、12）があり、文様、地文、器形の特徴として以下のようなものがみられる。なお地文のみの破片資料については説明を割愛する。

第1類：平行施文具によって文様が施文されるもの。

a．2本1単位の平行沈線：連弧文（2～6、9）、連続山形文（7）、渦巻文（2）三角文（8）がある。壺頚部（2、5）に粘土紐貼り付けによる突帯の巡るものがみられる。4は口縁部に突起をもち、内外面に連孤文か施されたものである。

b．3本1単位の平行沈線：連弧文（1、10～12）、連続山形文（13）がある。1の甕は肩部がやや張り、口頚部は内傾した後外傾するもので、口縁部は丸くおさまる。

c．4本1単位の平行沈線：連孤文（15）がある。

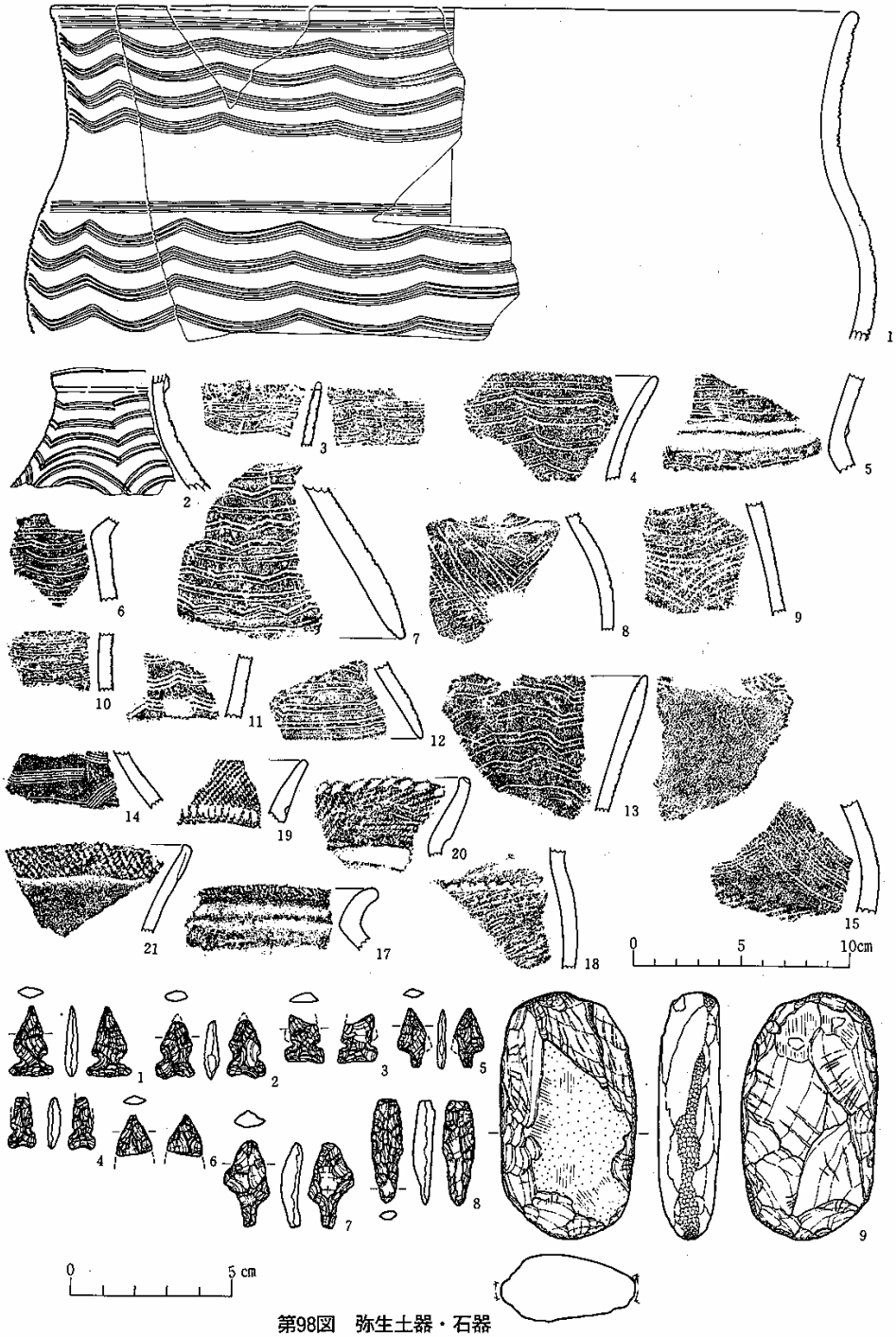
d．5本1単位の平行沈線：連孤文（14）がある。

第2類：地文のみのもの。

いずれも甕の破片で、頚部は無文で、口唇部に刻目のあるもの（17）、肩部に紋絡文のあるもの（18）がある。

石器は石鏃、石錐、敲打痕のある石器等がある。

石鏃：アメリカ式石鏃4点、（第98図1～4）、有柄鏃2点（同5、7）先端部破片1点（6）がある。石材は、アメリカ式石鏃、先端者破片が黒曜石製、有柄鏃が頁岩製である。


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
17
18
19
20
21
0
5
10cm
1
2
3
4
5
6
7
8
9
0
5 cm

第98図　弥生土器・石器

石錐：棒状のもの1点がある。頁岩製である。(8)

敲打痕のある石器：周縁のほぼ全体に敲打痕がみとめられるものである。(9)

〈第402号墳周辺出土遺物〉土器はいずれも破片資料で、器種の判別できるものはない。文様、地文、器形の特徴として、有段口縁（第98図19～21）で口縁の段上に単節縄文が施され、頚部が無文のものがある。（20）は口唇部に刻目状の連続刺突、(19)は口縁の段下端部に連続刺突がそれぞれ施されている。他の破片資料としては無文、縄文地文のものがあるが、文様をもつものはない。

以上の土器、石器をみると、まず第215号墳周辺出土の第1類ａ、ｂは、器形、文様の特徴から宮城県の弥生土器編年における「十三塚式」に比定することが可能であり、また第2類の甕、石器類については「十三塚式」期を中心としてその前後の時期にみられる特徴を備えたものである。第1類ｃ、ｄについては厳密には「十三塚式」の型式内に含まれるものではないが、基本的な施文方法、文様構成はａ、ｂのそれに共通するもので、ａ、ｂ類と型式的に大きな隔絶があると考えることはできない。これらのことから№215号墳周辺出土の弥生土器、石器については、「十三塚式」期に位置付けることが可能である。

次に№402号墳周辺出土の土器については厳密に型式比定することはできないが、有段口縁連続刺突などの器形、文様の特徴は、東北南部の弥生土器編年における「天王山式」の系統に属し、その中でもかなり後出的なものと考えられる。

Ⅵ まとめ

1　今回の調査対象地区は色麻古墳群上郷支群の古墳分布地域の南西部にあたる。

2　古墳は、調査対象地区北側に広がる洪積台地上と、南側の花川北岸の島状の微高地上に分布している。

3　古墳は、その大半が削平により墳丘を失っており、地上から古墳の存在を確認することができなかったが、水田下に石室の下部、及び周湟が残存していることが確認された。

4　確認された古墳は北東地区の台地上で68基、北西地区の台地上で16基、南地区の微高地上で4基の計88基であるが、北東、北西両地区の古墳分布は対象区外にも及び、しかも密集した在り方を示しており、その分布範囲、古墳の実数の全容を把握することはできなかった。

5　主体部には横穴式石室（23基）、竪穴式小石室（5期）、箱式石棺（2基）がみられ横穴式石室、竪穴式小石室は、いずれも胴張りプランである。

6　横穴式石室墳、竪穴式小石室墳には周湟が巡っており、その内周の形態からみて横穴式石室墳はいずれも径10m前後の円墳、竪穴式小石室墳は径5m前後の円墳であったと考えられる。

7　横穴式石室墳の前庭周辺、竪穴式小石室墳の石室南側から供献用と考えられる土器を出土する古墳が多く、その中には、関東地方の形態、製作技法の特徴を有する土師器坏が出土したものもある。

8　副葬品は、鉄製武器類が多く、装飾品としては金環が一点発見されたにすぎない。

9　確認された古墳のうち、群を主に構成する横穴式石室墳、竪穴式小石室墳については、古墳の構造、出土土器の特徴などから7世紀末～8世紀初頭を中心とした年代に位置付けられ、群の形成は短期間に急激に進められたと考えられる。

10　古墳以外に弥生時代、古墳時代前期、平安時代の遺構、遺物が検出されている。

11　北東地区の第215号墳周辺からは弥生時代「十三塚式期」の土器、石器、フレイクが出土し南地区の第402号墳周辺からは弥生時代「天王山式系」の土器が出土している。

12　南地区では古墳時代前期（塩釜式期）の住居跡が3軒検出されている。

13　北東地区の台地の南縁部には5軒の竪穴住居跡が検出され、このうち精査を行った2軒は、平安時代に属し、他の3軒も平安時代、もしくはそれ以前のものと考えられる。

14　北東地区の古墳の空間地に点在して4基の火葬墓が検出された、このうち2基は納骨用の土器を伴っており、その特徴から平安時代のものと考えられ、他の2基も平安時代に属するものと考えられる。

15　北東地区の南西部では溝状の掘り込みが平行に等間隔で並ぶ畝状遺構が上、下2面検出さ

れた。いずれも平安時代に属するものと考えられる。

16　南地区に底面に敷石を伴う方形の土壙が2基検出された。いずれも平安時代のものと考えられるが、その性格は明らかでない。

引用・参考文献

穴沢昧光（1972）：「東北南部における胴張りプランの横穴式石室とその問題」『福島考古』13号　福島考古学会

甘粕　健（1982）：「東日本における群集墳の総合的研究」昭和56年度科学研究費補助金研究成果報告書

阿部　恵（1980）：「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和54年度）　宮城県教育委員会

伊東信雄（1952）：「宮城県上郷古墳群」『日本考古学年報』8　日本考古学協会

岩渕・田中（1976）：「安久東遺跡発掘調査概報」　仙台市教育委員会

氏家和典（1977）：「仙台平野における横穴式石室古墳について」『研究紀要』Ⅳ　宮城県多賀城調査研究所

梅沢　他（1981）：「東平井古墳群」群馬県昭和55年度遺跡詳細分布調査実績報告書　群馬県教育委員会

岡田　他（1970）：「日の出山窯跡群」　宮城県教育委員会

小川淳一（1980）：「塩沢北遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅲ　宮城県教育委員会

加藤・阿部（1980）：「観音沢遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書（4）　宮城県教育委員会

金井塚良一（1972）：「北武蔵の古墳群と渡来氏族ー吉士氏の動向」『歴史読本』8月号

木村　他（1981）：「宮城県仙台市郡山遺跡Ⅰー昭和55年度発掘調査概報ー」　仙台市教育委員会

草間・玉川（1974）：「長沼古墳」　岩手県　和賀町教育委員会

工藤雅樹（1969）：「福島市小倉寺高畑遺跡発掘調査報告」　福島県　福島市教育委員会

小井川・手塚（1978）：「糠塚遺跡」宮城県文化財調査略報　宮城県教育委員会

小井川・小川（1982）：「御駒堂遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ　宮城県教育委員会

佐々木茂楨（1970）：「古川市塚原古墳群」　宮城県　古川市教育委員会

（1971）：「長根窯跡」　宮城県　涌谷町教育委員会

（1972）：「日光山古墳群」　宮城県　古川市教育委員会

（1972）：「和泉沢古墳群」　宮城県河北地区教育委員会

柴田俊彰（1975）：「胴張り型横穴式石室の形態について」『福島考古』16号　福島考古学会

志間泰治（1972）：「鷹ノ巣古墳群発掘調査概報」　宮城県　白石市教育委員会

玉川一郎（1982）：「早稲田古墳群」母畑地区遺跡発掘調査報告Ⅸ　福島県教育委員会

丹羽・阿部・小町寺（1981）：「清水遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書（5）宮城県教育委員会

早坂春一（1981）：「日向前横穴古墳」　〃　〃

平川　南（1978）：「古代東北城柵の特質についてー建部との関連を中心としてー」『東北歴史資料館研究紀要』第4巻　宮城県　東北歴史資料館

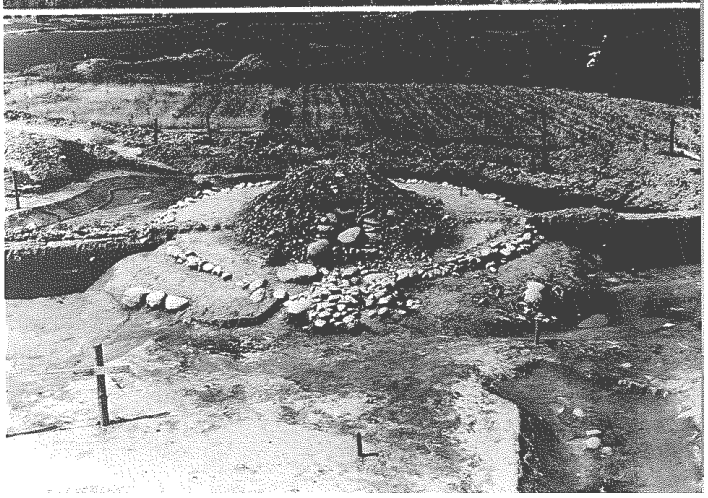
古川一明（1982）：「色麻古墳群」宮城県営圃場整備等関連遺跡詳細分布調査報告書（昭和57年度）
宮城県教育委員会
埼玉県教育委員会（1977）：「塚本山古墳群」埼玉県埋蔵文化財発掘調査Ⅵ
（1972）：「鹿島古墳群」　〃　Ⅰ
埼玉県遺跡調査会（1980）：「広木大町古墳群」埼玉県遺跡調査会報告第40集
山形県教育委員会（1982）：「お花山古墳群」現地説明会資料

写　真　図　版

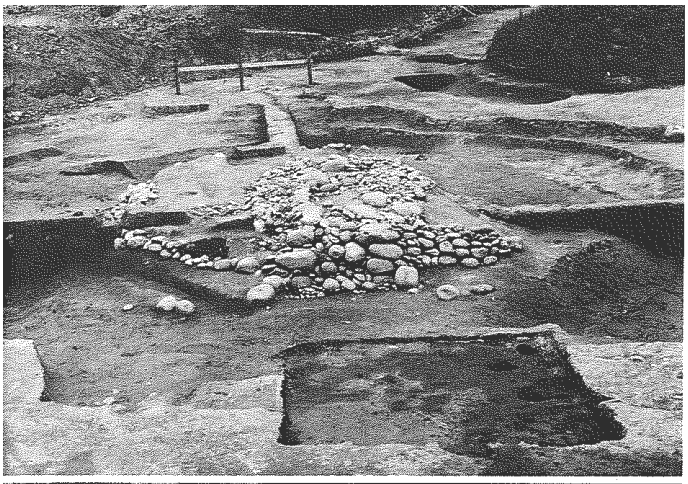
遺跡遠景
（西方上空より）

第15号墳

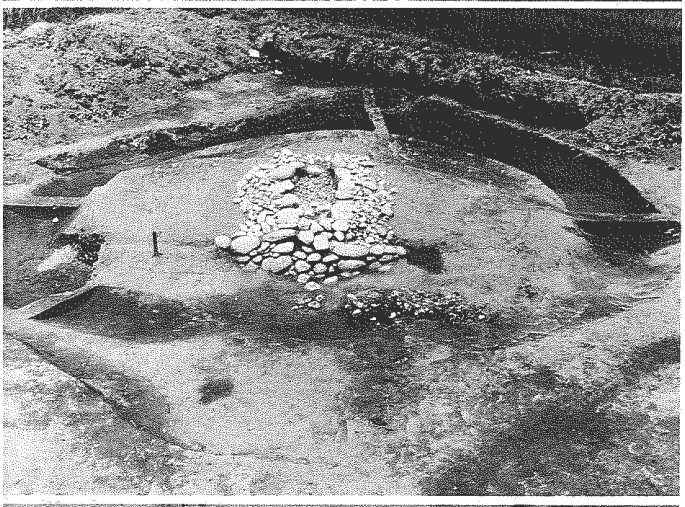
第77号墳



図版 1



第93号墳－第１号住居跡

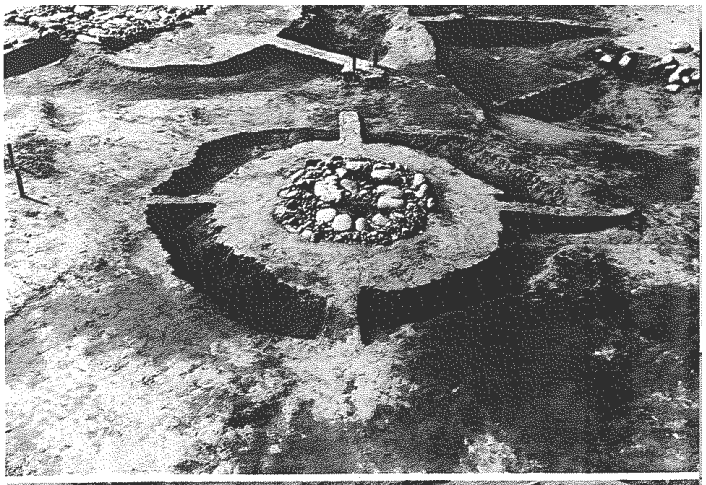


第221号墳

第254号墳

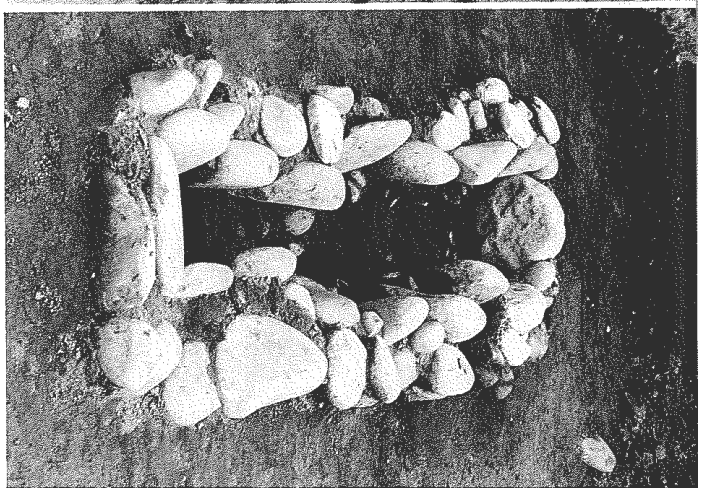
図版２

第247号墳



第258号墳

第215号墳



図版３

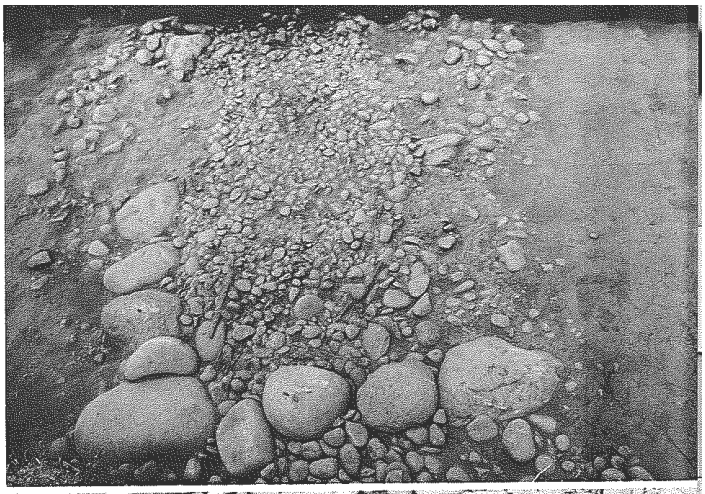
第404号墳

第234号墳

第210号墳

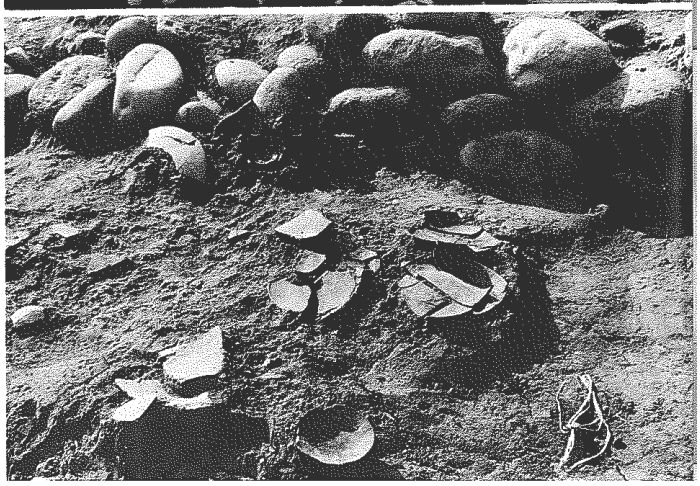
図版４

第304号墳
鉄器出土状況

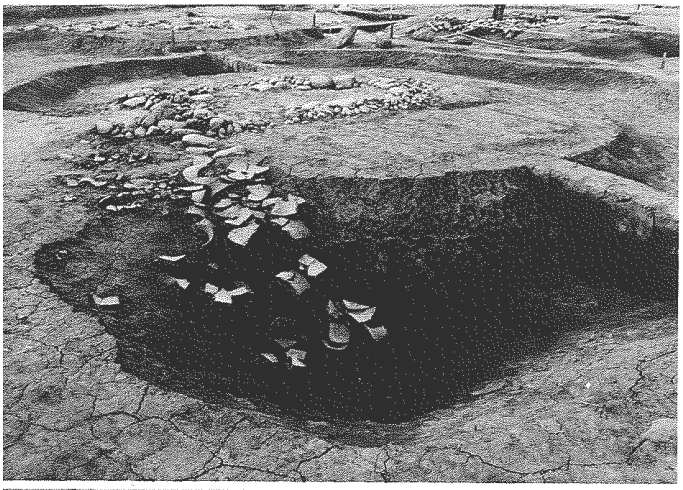


第253号墳
前庭の土器の出土状況

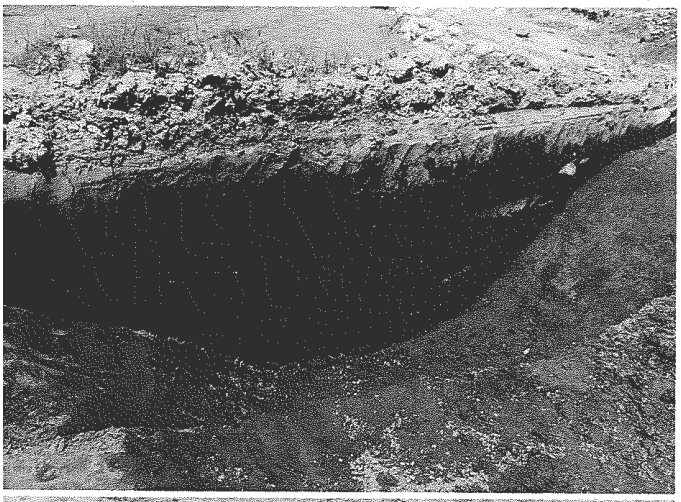
第77号墳テラスの
土器の出土状況



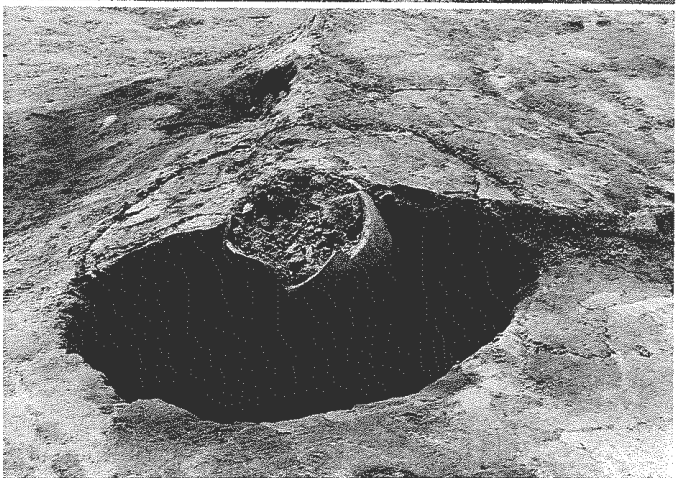
図版５



第266号墳
土器出土状況



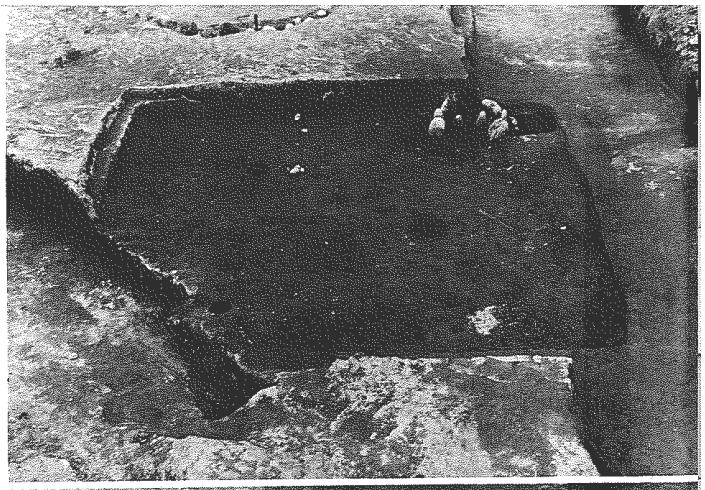
第77号墳
周湟堆積土断面



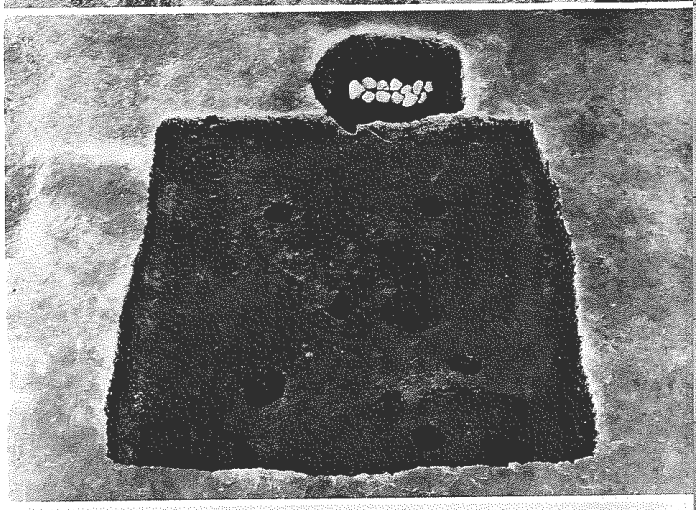
第３号火葬墓

図版６

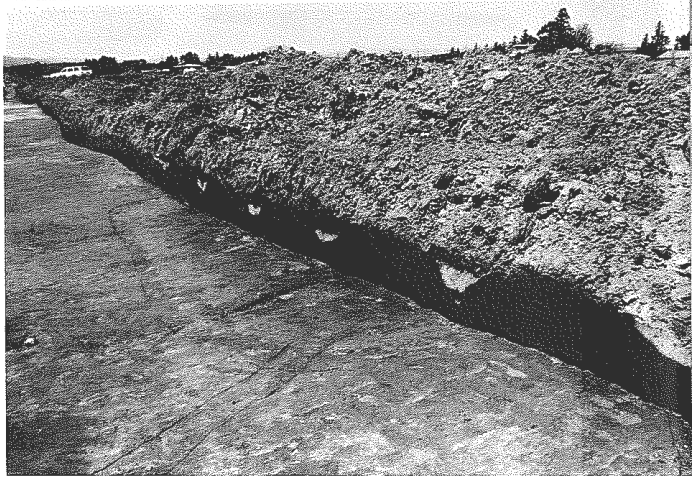
第２号住居跡



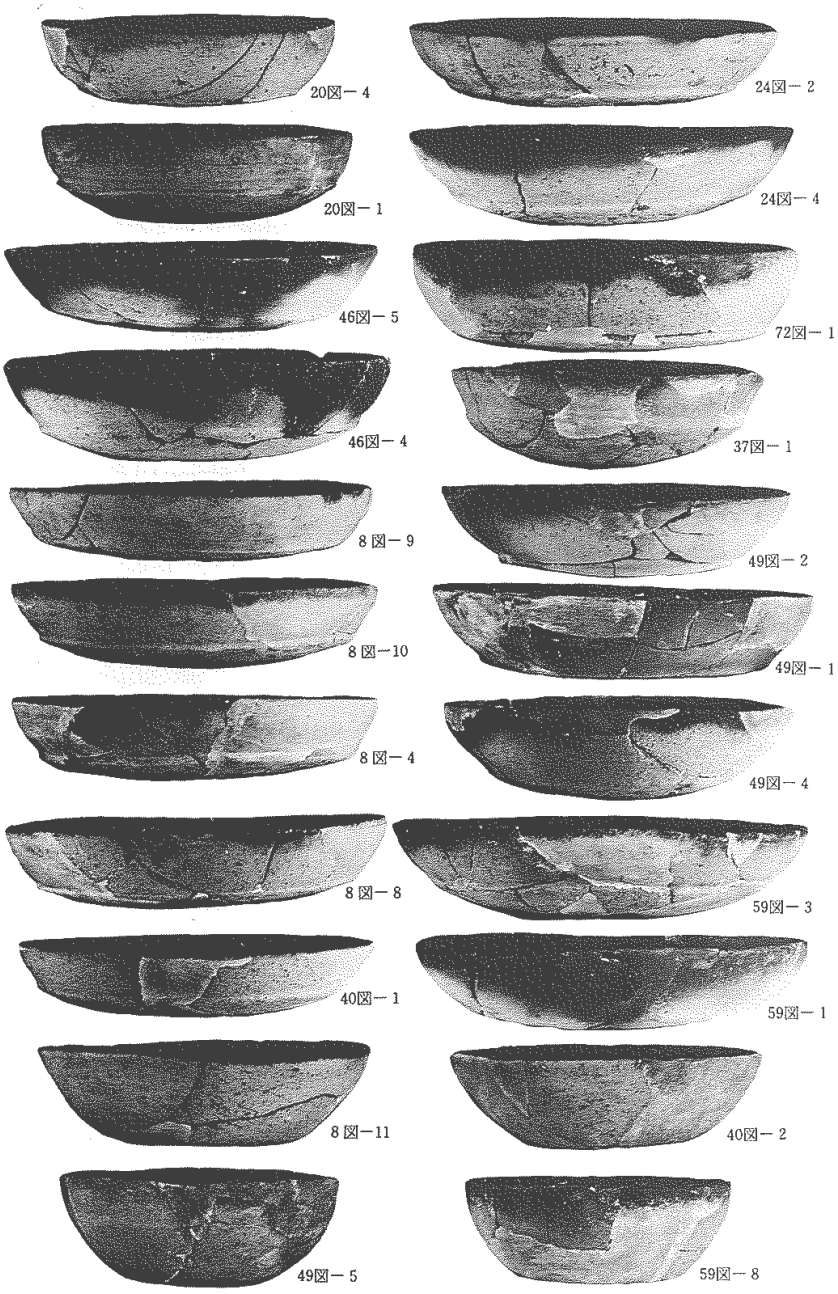
第11号住居跡、
第２号土壙



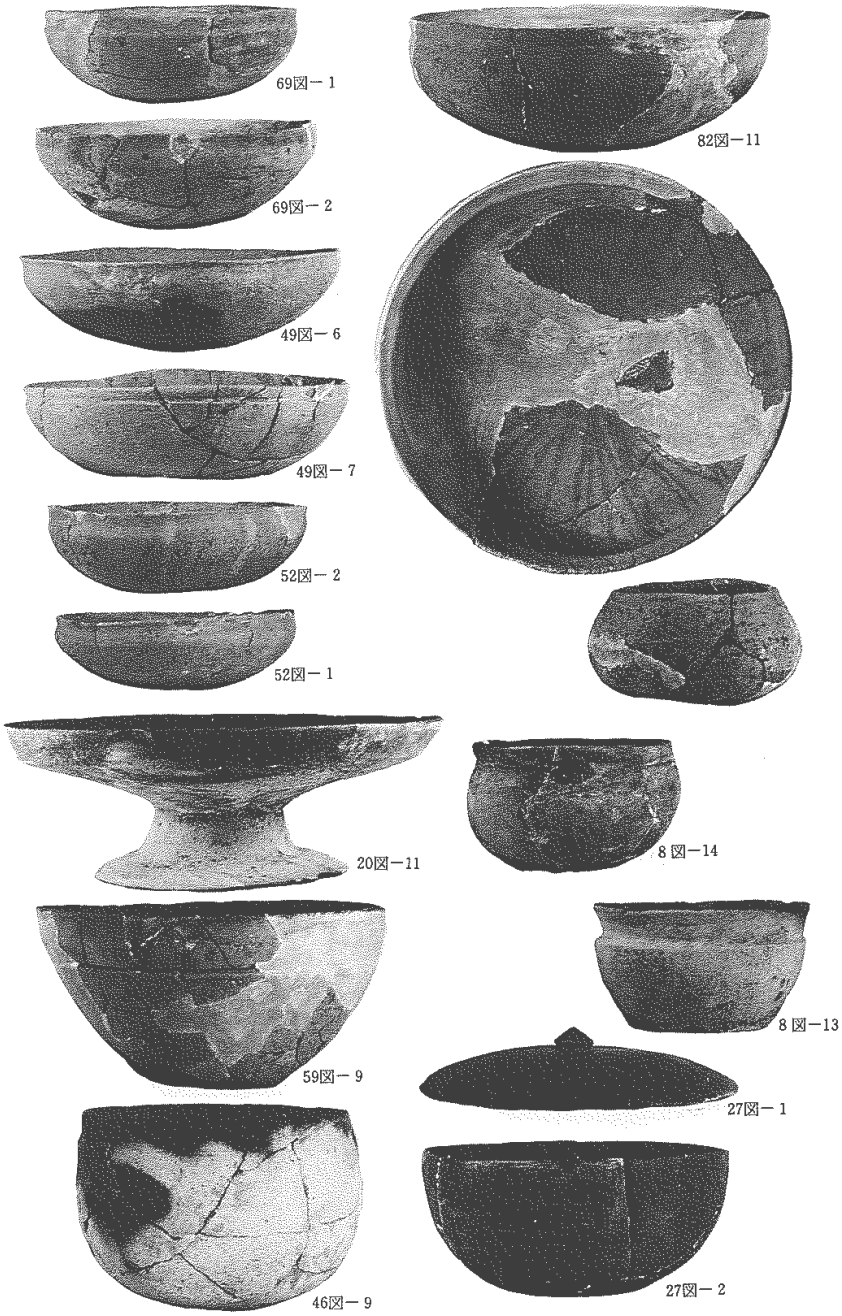
第５号住居跡、
上、下部畝状遺構



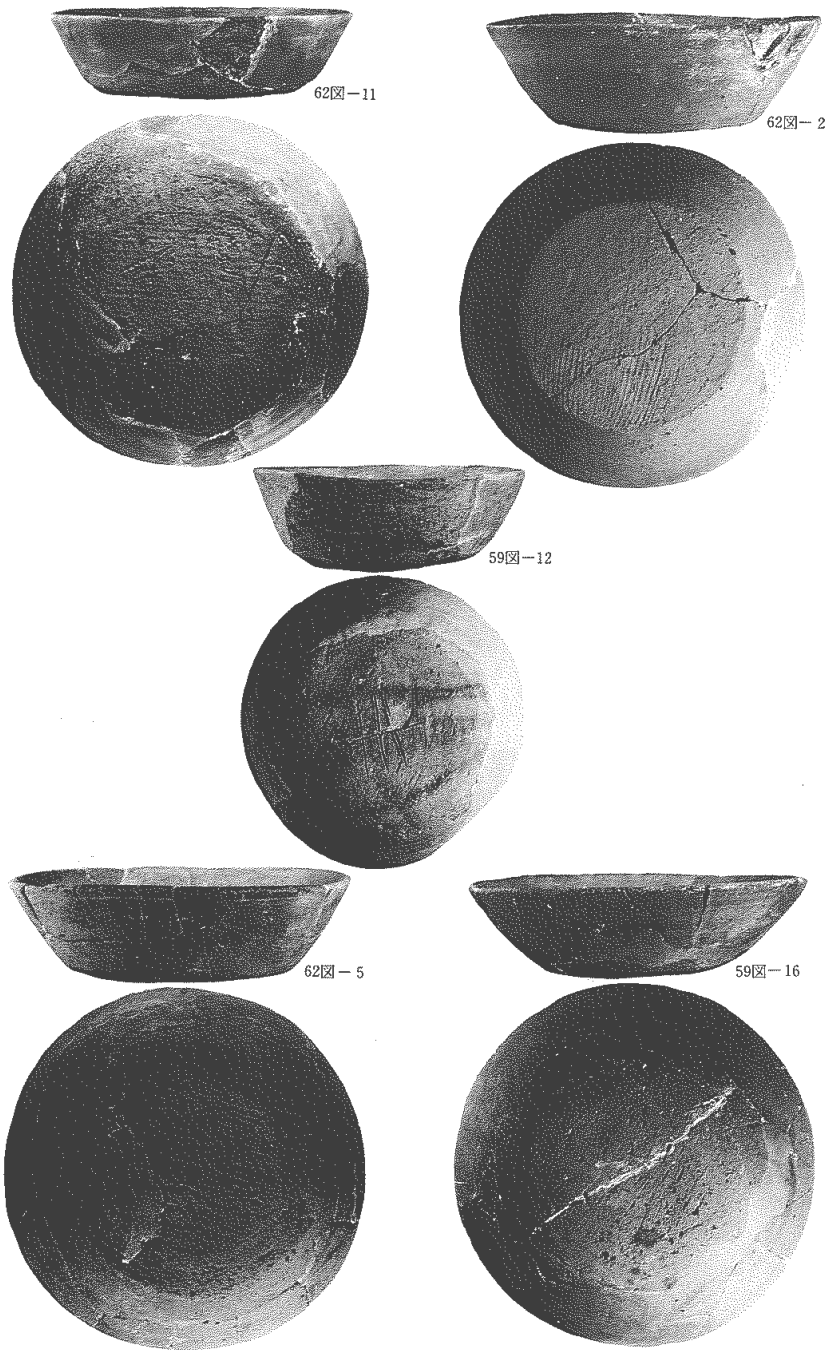
図版７



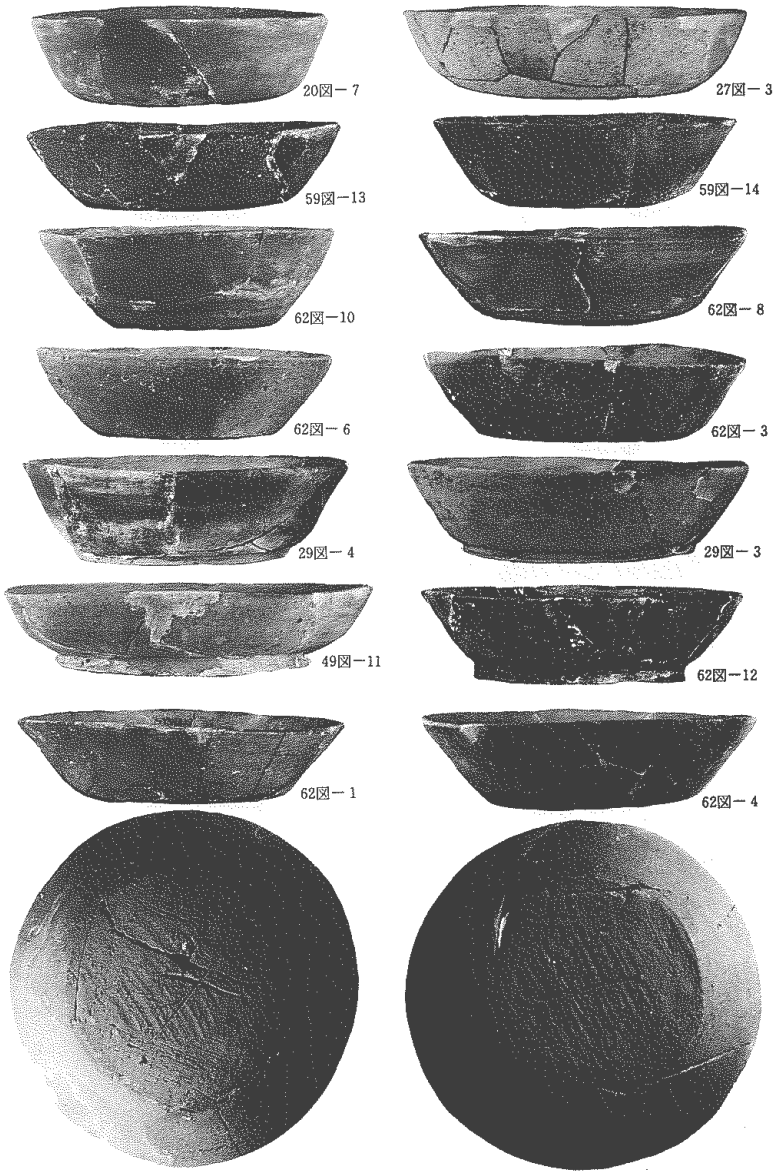
図版８　各古墳出土土師器坏



第９図　各古墳出土土師器

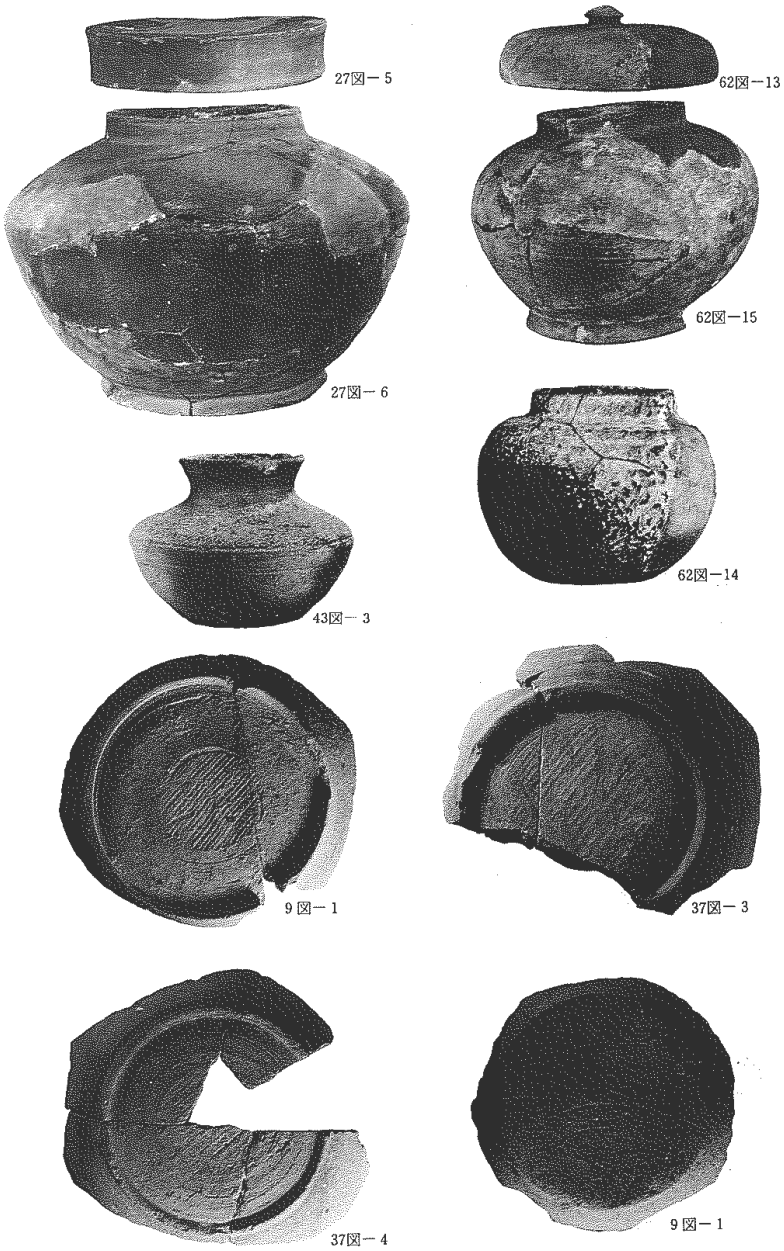


図版10　各古墳出土須恵器坏



図版11　各古墳出土須恵器坏

図版12　各古墳出土須恵器壺



図版13　各古墳出土須恵器壺

図版14　各古墳出土須恵器甕（A類）

60図－5

53図

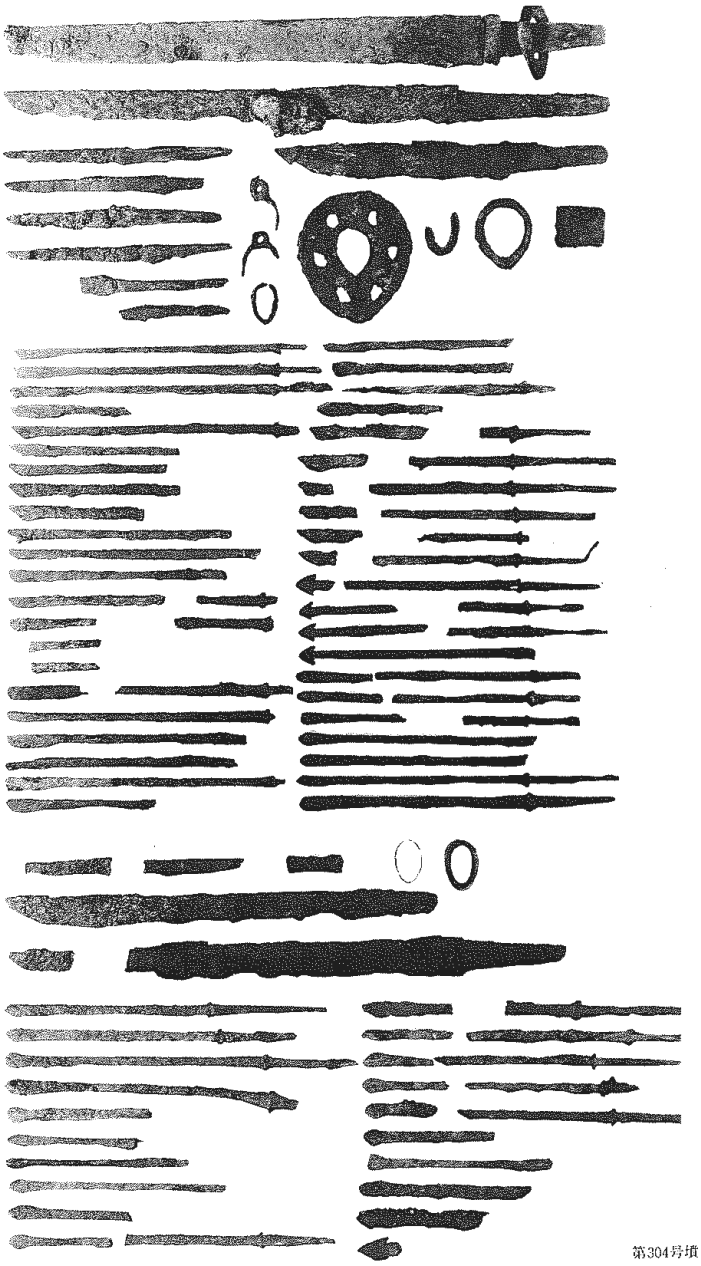
64図－4

63図－3

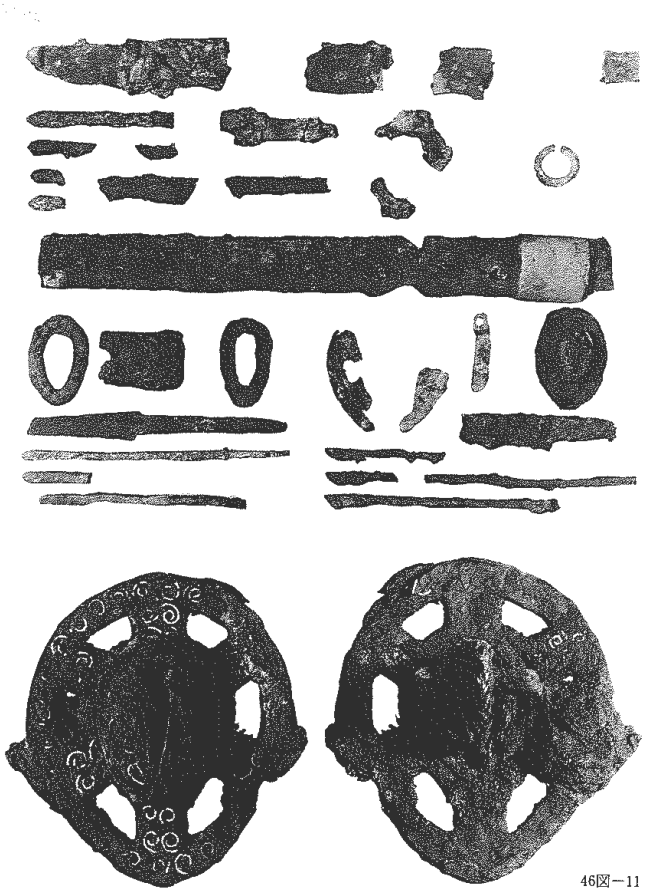
50図－2

図版15　各古墳出土須恵器甕（B類）

図版16　各住居跡出土の土器



図版17　各古墳出土鉄器



図版18　各古墳出土の鉄器類

(2)　蝦夷塚古墳群
黒沢館跡

調査要項

遺跡記号：ＨＦ（宮城県遺跡地名表登載番号　31011、31034、31035）
遺跡所在地：宮城県加美郡色麻町黒沢字大塚・同字中館・同字北館
調査期間：昭和57年6月1日～昭和57年9月8日
調査主体者：宮城県教育委員会
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
調査員：狩野　正昭・斉藤　吉弘
阿部　　恵・菊地　逸夫
調査対象面積：160,000㎡
発掘面積：蝦夷塚古墳群　5400㎡
黒沢館跡　　3300 ㎡

目　　次

Ⅰ　遺跡の位置と立地 169
Ⅱ　調査の経過 169
Ⅲ　調査の成果
　1. 蝦夷塚古墳群 169
　2. 館跡の調査 179

Ⅰ　遺跡の位置と立地

蝦夷塚古墳群、中館跡、北館跡は色麻町黒沢字大塚、同字上館、同字北館に所在し、色麻町役場の北西約2.3kmに位置する。

色麻町北東部の地形をみると、奥羽山脈から東へのびる丘陵地帯（加美丘陵）を開析して、鳴瀬川の支流である保野川、木戸川、深川、花川などの河川が東流しており、その流域には扇状地性底地が形成されている。

3遺跡の立地する上黒沢地区は、加美丘陵東端と木戸川流域の扇状地性底地の両地域にわたり、標高は55～40mである。扇状地性底地に張り出す小丘陵は東へ傾斜する平坦な面となっており、木戸川流域の扇状地は北東にゆるやかに傾斜している。扇状地の地形に明瞭な変化は認められないが、数本の水路が西から東に流れ、一部小さな谷状の地形がみられる。調査対象である中館跡は木戸川南側の丘陵端に位置し、蝦夷塚古墳群と北館跡は、木戸川北側の扇状地に位置する。

Ⅱ　調査の経過

調査は色麻町北部地区県営ホ場整備事業に伴い昭和57年6月1日から調査を開始した。

中館囲は館跡の範囲確認を目的とし、用排水路、道路、館の周辺部分に任意にトレンチを設定した。その結果、地山面で、堀（1～3号）、土壙（1基）、掘立柱痕跡を検出した。

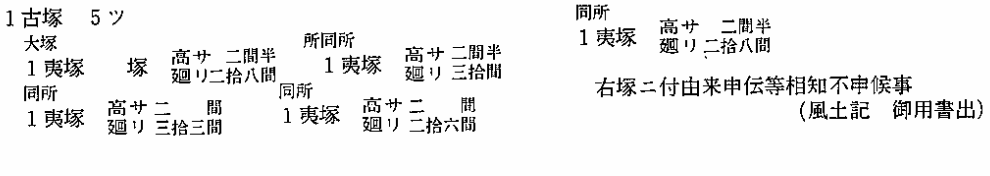
北館囲・大塚囲では北館跡の範囲確認、蝦夷塚周辺の古墳の確認を目的とし、水路、道路、周辺部分に軽視線と直交するトレンチを設定した。調査の結果、北館地区の地山面で長方形にめぐる堀と、その内側で掘立柱痕跡、大塚囲地区の地山面で古墳の周溝（1～4号）と、火葬墓（1基）を検出した。

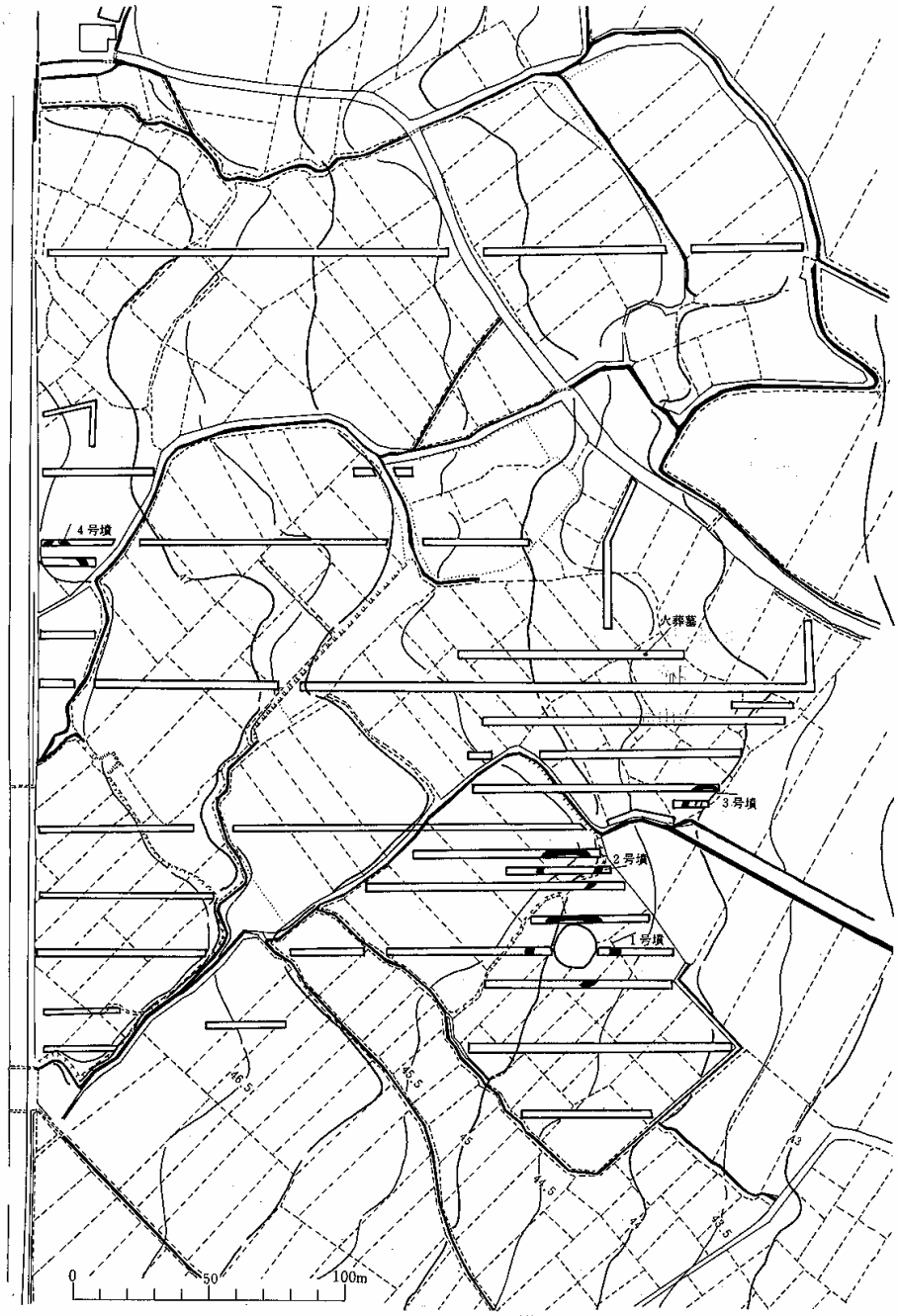
調査の結果、両地区とも盛土を行うことになり、9月8目で終了した。なお、中館囲と北館囲については館の立地する部分の$\frac{1}{500}$一の地形測量を行った。

Ⅲ　調査の成果

1．蝦夷塚古墳群

木戸川北側の扇状地に立地するが、蝦夷塚1基認められるだけで、他にあったと伝えられる古墳は、開田によって墳丘は失われている。





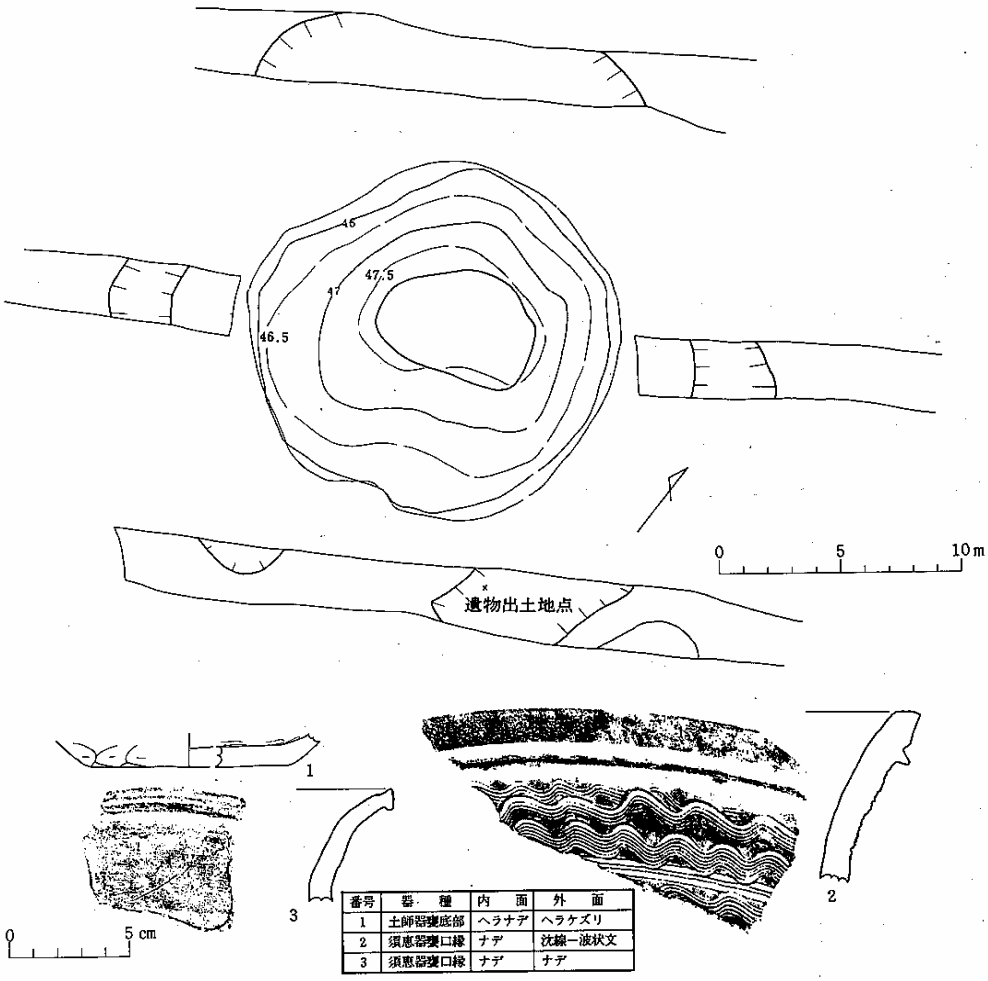
第１図　蝦夷塚古墳群遺構配図

1号墳

墳丘が径約15m、高さ約2.5m残っているが、墳丘の周囲は耕作のため本来の規模より小さくなっている。墳丘の南側に羨道が認められ、水田下で周溝を確認した。周溝の幅は約4～5mであり、外径は27～28m、内径は22～23mである。周溝は墳丘の南側で約4m途切れて橋梁状になり前庭部へ続いていく。前庭部東側の周溝堆積土から土師器甕底部と須恵器甕（口縁部、体部）の破片が出土している。

2号墳

周溝が確認され、南側が途切れて橋梁状になっており前庭部に続いていく。周溝の幅は約3mであり、内径で18～19mである。前庭部で須恵器（坏、短頸壺）が出土している。

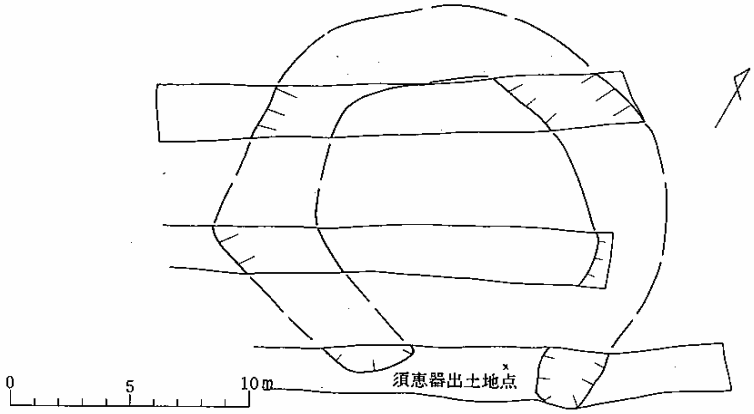


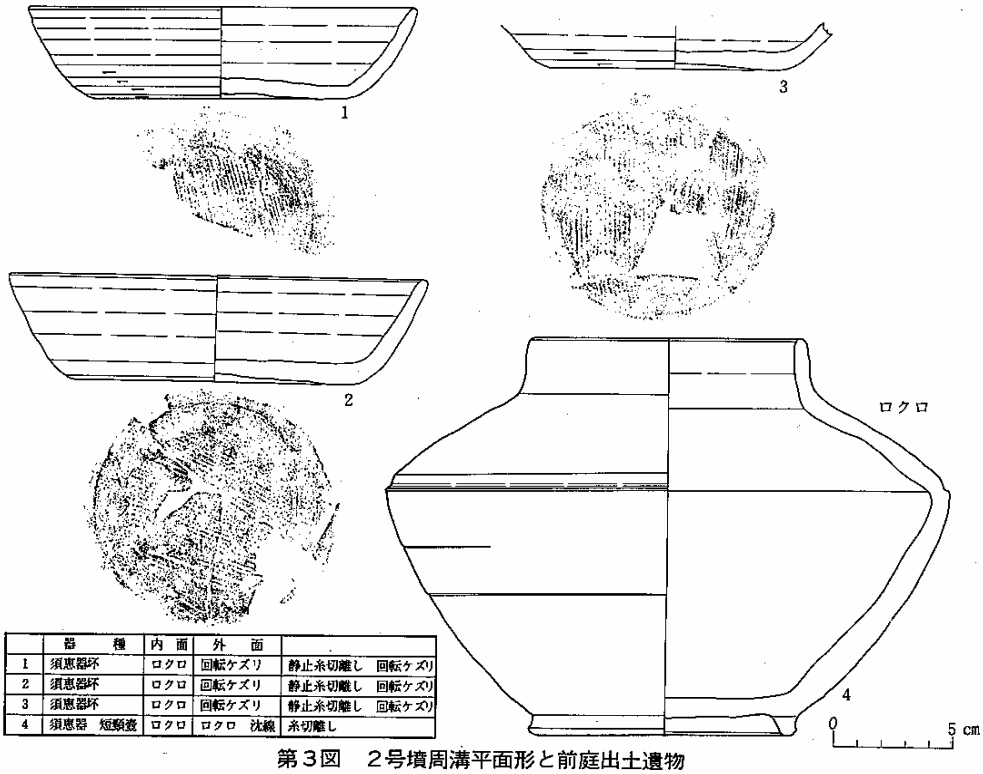
番号	器種	内面	外面
1	土師器甕底部	ヘラナデ	ヘラケズリ
2	須恵器甕口縁	ナデ	沈線一波状文
3	須恵器甕口縁	ナデ	ナデ

第２図　１号墳周溝と出土遺物

3号墳

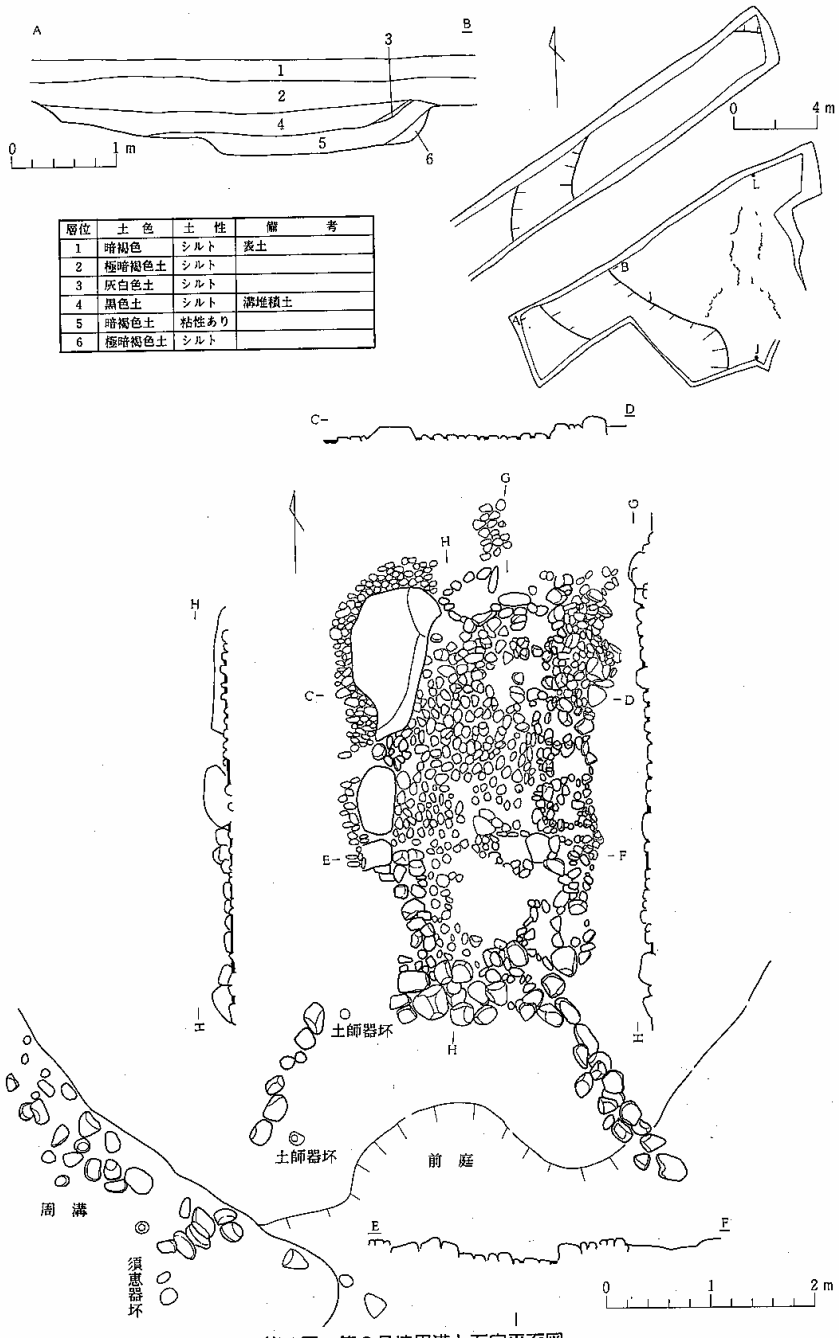
地山と旧表土上面で周溝と主体部が検出された。主体部は石室と羨道がみられ、最下段の左側壁と床面の一部が残っている。奥壁、右側壁はなく抜き取り痕が認められることから、石室





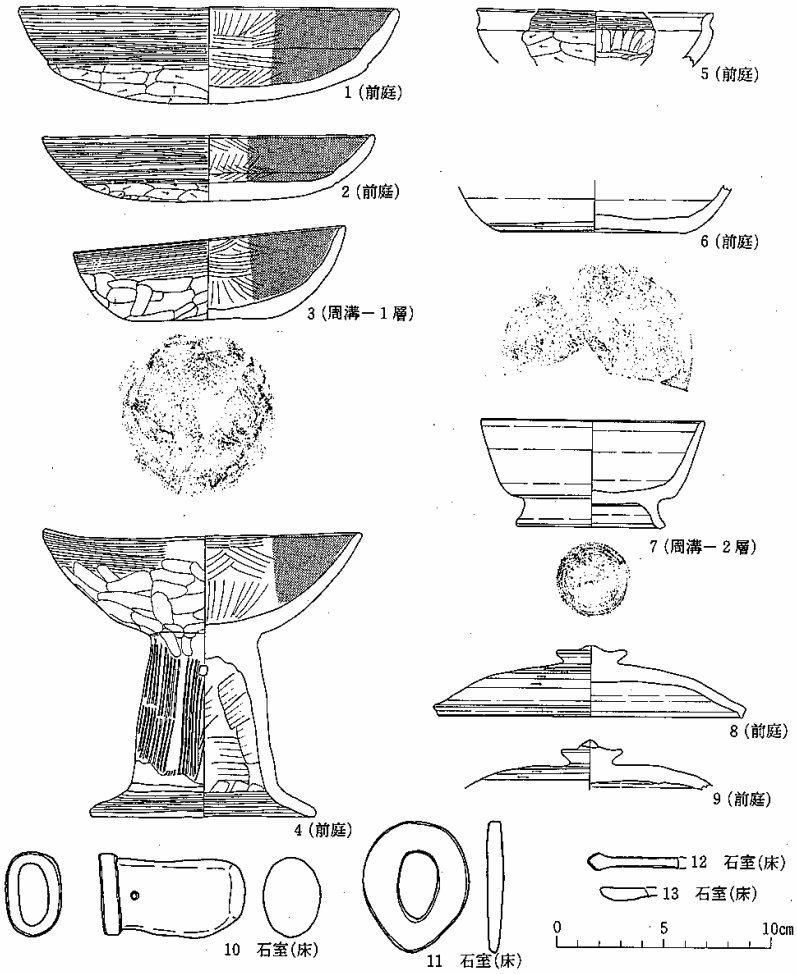
	器　種	内　面	外　面	
1	須恵器坏	ロクロ	回転ケズリ	静止糸切離し　回転ケズリ
2	須恵器坏	ロクロ	回転ケズリ	静止糸切離し　回転ケズリ
3	須恵器坏	ロクロ	回転ケズリ	静止糸切離し　回転ケズリ
4	須恵器　短頸壺	ロクロ	ロクロ　沈線	糸切離し

第３図　２号墳周溝平面形と前庭出土遺物



層位	土色	土性	備考
1	暗褐色	シルト	表土
2	極暗褐色土	シルト	
3	灰白色土	シルト	
4	黒色土	シルト	溝堆積土
5	暗褐色土	粘性あり	
6	極暗褐色土	シルト	

第４図　第３号墳周溝と石室平面図



	器種	内面	外面	底部	備考
1	土師器坏	ミガキ・黒色処理　稜有	ヨコナデ　沈線有	手持ヘラケズリ	
2	〃	ミガキ・黒色処理　稜有	ヨコナデ　沈線有	手持ヘラケズリ	
3	〃	ミガキ・黒色処理	ヨコナデ・手持ヘラケズリ	糸切離し　手持ヘラケズリ	
4	土師器高坏	ミガキ・黒色処理	ヨコナデ・手持ヘラケズリ		脚部(外面ハケメ→ヨコナデ)(内面ヘラナデ→ヨコナデ)
5	土師器坏	ヨコナデ・ミガキ　稜有	ヨコナデ・手持ヘラケズリ　稜有		
6	須恵器坏	ロクロ	ロクロ　・回転ヘラケズリ	ヘラ切り　回転ヘラケズリ	
7	須恵器高台付坏	ロクロ	ロクロ　・回転ヘラケズリ	ヘラ切り　回転ヘラケズリ	
8	須恵器蓋	ロクロ	ロクロ　回転ヘラケズリ		
9	〃	ロクロ	ロクロ　回転ヘラケズリ		

第5図　3号墳出土遺物

は中央がやや張り出す胴張りと思われるが、正確な規模は不明である。羨道は石室部分から前庭部にかけて狭くなっていき、羨道の入口から前庭部の南側に扇状に礫が並んでいる。開口方向はＥ－3°－Ｓである。

周溝は西側部分だけ確認されており、幅3.6m、深さ0.5mである。また、周溝は石室の南側で途切れており橋梁状になっている。堆積土は4層認められ3層に灰白色土が流入している。

石室の床から鉄鏃・鉄製把頭・鐸、前庭部から土師器（坏、高坏）・須恵器（坏、蓋、瓶）・周溝堆積土中から須恵器（高台付坏、蓋、甕）が出土している。

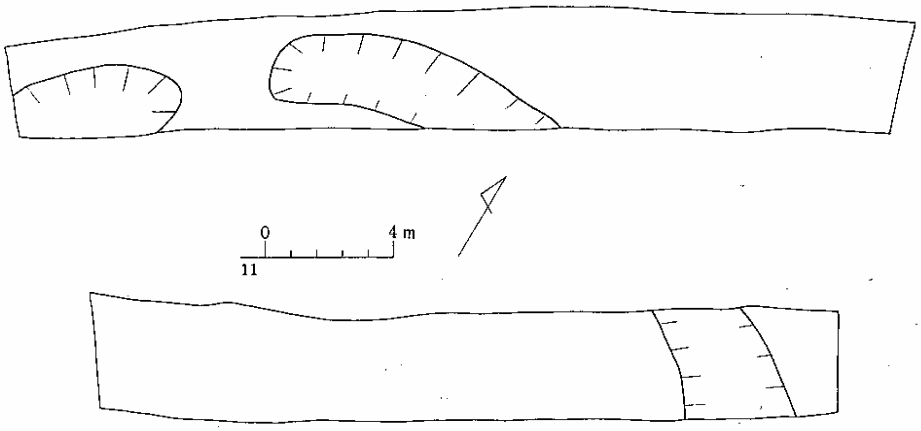
4号墳

周溝の北側が確認できたが規模については不明である。周溝の幅は約3mである。

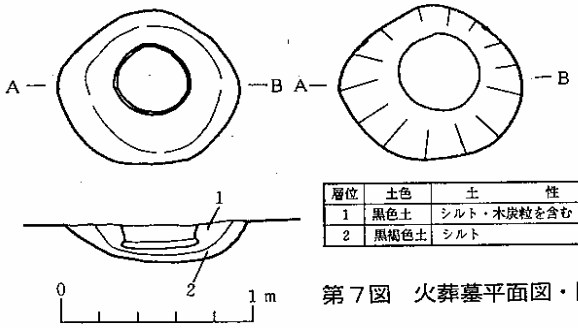
火葬墓

地山面で確認したものである。土壙の平面径は円形で、径1m、深さ20cmである。

内部施設は倒位に埋められた土師器甕である。体部上半から口縁が残っている。ロクロ使用の甕であり、口縁部が体部から直角に折れまがり、口縁端が上方にひき出される。体部中頃から縦位のヘラケズリがみられる。

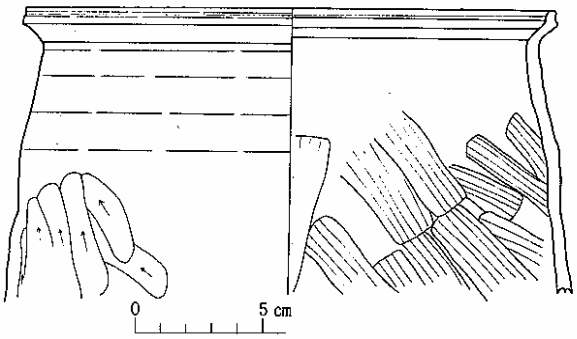


第６図　４号墳周溝平面図



層位	土色	土　　性
1	黒色土	シルト・木炭粒を含む
2	黒褐色土	シルト

第７図　火葬墓平面図・断面図



第８図　火葬墓出土甕

（出土遺物の特徴と年代）

遺物は1・2・3号墳の前庭・周溝から出土しており、土師器（坏、高坏）・須恵器（坏、壺、甕）などがある。これらの中で形態のわかるものについてみると、形態・技法に次のような特徴がみられる。

A．土師器

坏

1類、ロクロ不使用である。底部は丸底で体部下半に沈線がある。口縁部は開きぎみに立ち上がり、口縁端は丸味がある。内面にわずかであるが稜がみられる。外面は底部ヘラケズリ、口縁部横ナデ、内面はヘラミガキと黒色処理がされている（第5図1・2）。

2類、ロクロ使用の坏で糸切離しの痕がある。底部から外傾して立ち上がり、口縁端がわずかに外反する。底部外面と体部下端に回転ヘラケズリがみられる（第5図3）。

3類、ロクロ不使用である。底部は丸底で、体部上半に稜がある。口縁部は内弯しながら立ち上がり、口縁端は丸味がある。外面は底部ヘラケズリ、口縁部横ナデで、内面はヘラミガキである（第5図5）。

高坏

坏部はやや内弯しながら立ち上がり、口縁端はやや丸味がある。脚部は中央がややふくらみ、「く」の字に開く短い裾部がつく。脚部は空洞になっており、脚柱の中央に約5㎜の方形の孔がある。坏部の外面はヘラミガキと横ナデ、内面はヘラミガキと黒色処理がされている。脚柱部外面は縦位のハケ目、裾は横ナデが施されており、内部は巻き上げの後にヘラ調整がされている（第5図4）。

B．須恵器

坏

1類、底部から外傾して立ち上がり口縁端は丸味がある。静止糸切離しで底部周辺と体部下

端に回転ヘラケズリがみられる（第3図1・2・3）。1は体部の中頃まで、2・3は体部下端がヘラケズリされている。

2類、底部から外傾して立ち上がる、口縁部は不明である。回転ヘラ切り離しで、底部周辺と体部下端に回転ヘラケズリがみられる（第5図6）。

高台付坏

底部から外傾して立ち上がり、口縁端は丸味がある。底部外面はヘラ切りの後、周辺にヘラケズリを行っている。外面の体部下端にもヘラケズリが行われている（第5図7）。

蓋

つまみと身からなる。つまみは擬宝珠状をしており、中央はさほど高くない。身はかえりの部分がやや内側につまみ出されている。天井部は全体的に回転ヘラケズリが行われている（第5図8）。

短頸壺

肩部に最大径がある。体部は底部から外傾して立ち上がり、肩部で「く」の字形に内傾して口縁下端にいたる。口縁部は肩部よりやや外反ぎみに立ち上がり、口縁端は丸味がおびる。高台部は外側に張り出して底部はやや平坦である。肩部に一条の波線がめぐる。底部外面はヘラケズリが行われている（第3図4）。

甕

口縁部破片で体部は不明である。

1類、肩部から口縁部が外反して立ち上がり、口縁端は平坦である。口縁上半に突帯がめぐり、中央に三条一対の沈線がある。沈線の上と下に2～3段の波状文が描かれる（第2図2）。

2類、外反して立ち上がり、口縁端部が屈曲して上方にひきだされている。内・外面とも横ナデがされている（第2図3）。

C．鉄製品

円頭把頭：ほぼ中央に直径約5㎜の懸緒孔があり、幅6㎜の把縁がついている。断面形は楕円形である。長さ6.6㎝、幅3.7㎝、厚さ0.3㎝である。

鐸：倒卵形をした無窓のもので、茎穴はクサビ形をしている。長茎6㎝、短茎4.9㎝、厚さは耳部で5㎜、茎穴部で3㎜である。

鉄鏃：完形のものはない。先端部が片刃とノミ状のものがある。

（遺物の年代）

確認を行った1号・2号・3号墳の前庭、周溝から出土した遺物の特徴について記したが、これらについて所属時期について考えたい。

土師器

土師器坏1類とした土器の例としては御駒堂遺跡の内黒坏Ⅰ3ｂ類などに類例がみられる。御駒堂遺跡では7世紀末～8世紀初頭に位置づけている。

土師器坏2類とした土器の例としては、各遺跡の表杉ノ入式に認められ平安時代とされるものである。清水遺跡などの土師器第Ⅷ群土器の2ａ類で平安時代前半の時期と考えられているものもあり、平安時代前半に来る可能性もある。

土師器坏3類とした土器の例としては御駒堂遺跡の真間式土器系Ⅲ2ｂ類に類例がみられ、7世紀末～8世紀初めとしている。

土師器高坏は形態的には、混内山横穴4号墳出土高坏（第29図4）に類似するが技法的に若干違いが認められる。

土師器甕底部。これらについては特定した年代は比定できない。

須恵器

須恵器坏1類の底部切り離し痕（静止糸切り離し痕）及び底部周辺と体部下半の回転ヘラケズリ技法に限ってみれば、8世紀前半に位置づけられている日ノ出山6号窯出土の須恵器坏1ｂ類に類例がみられるが、坏の法量についてみれば2号墳出土の坏の法量が大きく形態的にいくぶん違いがみられる。

短頸壺：短頸壺については特に年代は比定できない。

須恵器甕：須恵器甕口縁についてみると、色麻古墳群の207号墳にその類例がみられる。

円頭把頭・鐸・鉄鏃は石室の床面から出土している。これらの鉄製品は3号墳前庭出土の土師器坏・高坏などに近い年代が考えられ、7世紀末～8世紀前半の頃のものと思われる。

このように出土遺物の年代を従来の研究成果をもとにして検討すると上記のようになる。これに色麻古墳群の成果を加えれば、須恵器坏2類、高台付坏、蓋、甕等も含め、土師器坏2類を除くすべてが共伴関係にあり、7世紀末～8世紀初めの年代を考えることができる。

（遺構の年代）

確認した古墳の遺物出土状況は次のようである。

1号墳　土師器甕底部・須恵器（甕1・2類）

2号墳　須恵器（坏1類・短頸壺）

3号墳　土師器（坏1・2・3類、高坏）、須恵器（坏2類・高台付坏・蓋）、鉄製品（円頭把頭、鐸・鉄鏃）

3号墳出土遺物土師器（坏1・3類）、須恵器（坏2類・高台付坏・蓋）が一括して7世紀末～8世紀初めに位置づけられると考えられるが、土師器坏2類は平安時代まで下がるので、後からの流入と考えられる。

このことから3号墳・2号墳の時期は7世紀末～8世紀初頭と考えることができる。

このことは色麻古墳群の属する年代とほぼ同時期のものといえる。また、1号墳周溝出土の須恵器甕口縁についてみると、色麻古墳群の207号墳・227号墳出土の甕に類例が見られることで、1号墳もこの年代の幅に入ると思われる。

火葬墓の年代は使用された土師器甕がロクロ使用の甕であることで、表杉ノ入式期（平安時代）としておきたい。

2. 館跡の調査

館跡と伝えられる地域は木戸川南岸の扇状地に張り出した小丘陵上と木戸川北岸の扇状地東端部分の2ヶ所である。館跡が立地する地域について明治19年の地籍図をみると、黒沢村上館囲では南東隅に水路によって区画された長方形の区割が見られ、黒沢村北館囲では南側に方形にめぐる水田跡と水路がみられる。上館囲の南半分は上館跡、北半分は中館跡として、北館囲の長方形の区割部分は北館跡として伝えられている。

a．中館跡

上、中館跡と伝えられる地域は東西280m、南北200mの範囲で、西と北が木戸川に面し、東と南が水田に面した東に傾斜する平坦部である。中館と呼ばれる地域は、この丘陵の北側にあたり、東西130m、南北80mの平場である。現状として残っている遺構は中館長寿宅の西側にある土塁（1号土塁）と、木戸川に面した1段低い腰郭部的な平坦面である。トレンチ調査の結果北館地区との境に東西方向の1号堀、土塁と木戸川の間で南北方向の2・3号堀、2号堀と土塁の間の平場で土壙と掘立柱痕跡が検出された。この結果、平場が3つに区画されていることが判明したので、1号土塁の東側を平場A、3号堀と土塁の間を平場B、2号堀と3号堀の間を平場Cとした。

1号堀:

中館と上館の境界にある東西方向の堀である。平場の中央付近と西側で2・3号堀と接続している。堀の北側肩は確認できたが、幅は確認できなかった。確認できた長さは80mである。

2号堀:

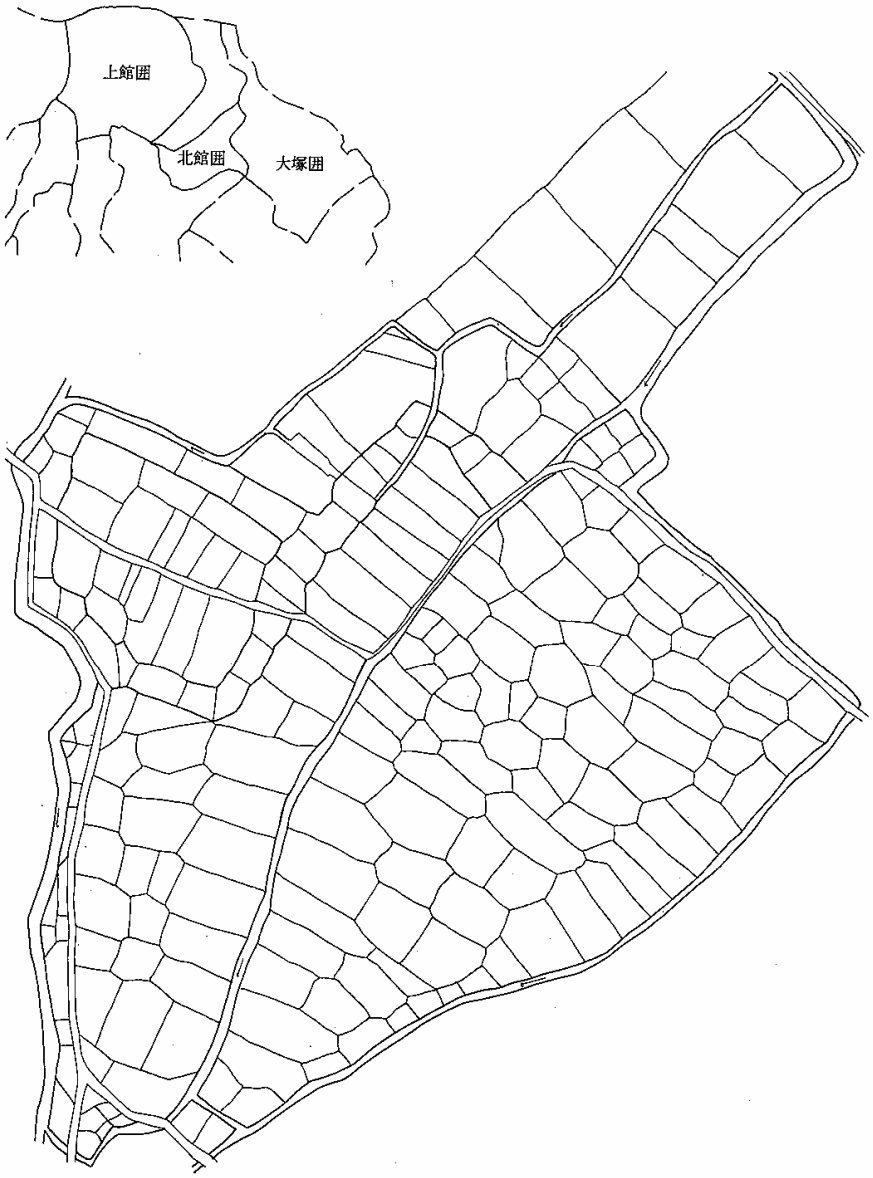
中館地区の西を区画する南北方向の堀で、南側は1号堀、北側は木戸川に接続する。長さ約70m、幅約5mである。

3号堀:

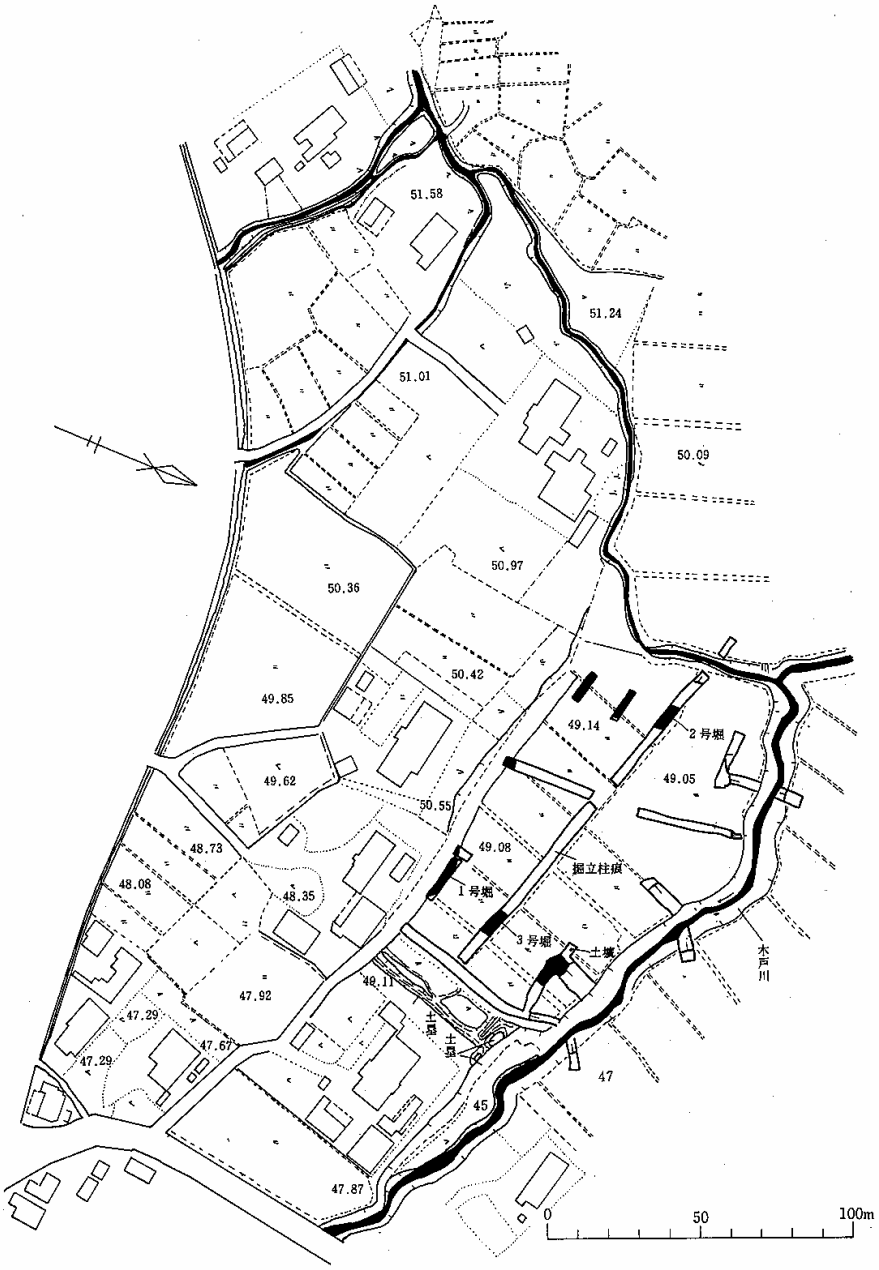
1号堀と土塁のほぼ中間に位置する南北方向の堀で、南側は1号堀、北側は木戸川に接続する。長さは約60m、幅約10mである。木戸川に接続する部分が約13mでやや広い。

これらの遺構からの出土遺物はみられない。

腰郭



第９図　北館囲地籍図



第10図　中館地形図及び遺構配図

現在は中館長寿宅の北側に木戸川にそって1段低く残っている平坦部である。木戸川周辺にトレンチを入れた結果、平場の北側が明治～大正にかけて開田で埋められていることが判明した。本来は平場の北側に約10m幅の平坦部が続いていたと思われる。

掘立柱痕跡

平場B・Cで検出されているが、組合わせは確認できなかった。

（館の形態）

中館：中館と伝えられる地域は1号堀・2号堀・木戸川で三方を区画された長方形の部分であり、規模は東西70m・南北40m（約2,800㎡）である。

現況で確認できる館に伴なうと考えられる遺構は中館長寿宅の西側にある南北方向の1号土塁と木戸川の南に見られる腰部的な平場Dである。この他にまた栗田重治の踏査によると、明治～大正頃には中館長寿宅と中館孟宅の間には堀（1号堀）があったと伝えられ、扇状地に面した部分と両屋敷の周囲に土塁があったことが知られている。また丘陵の東側には、木戸川と扇状地をつなぐように総堀と呼ばれた堀が現在は1段低い水田として残っている。このことは周辺に土塁・空堀があり、館を区画していたことをうかがわせる。また調査の結果から、平坦面は南北方向の3号堀と1号土塁でさらに3つの平場（平場A・B・C）に区画されており、平場B・Cには建物の他に土壙などの遺構の存在が考えられる。

（文献・伝承）

中館についての記録の初見は『黒沢村風土記書出』であり、下記のような記載がみられる。これ以後、『封内風土記』などにもその記録がみられる。

上黒沢
1上　館　南北三拾五間 東西四拾　間　御城主大崎義隆公御家臣黒沢治部少輔様御住居之由申伝候右年月相知不申候事

同所
1中　館　南北二拾八間 東西六拾　間　御城主黒沢治部少輔様と申伝候上館二丸と相見得申候先年北館御書上仕候処此度吟味仕候得ハ館跡も相見得不申候御家中屋敷ニも候哉と奉存候間右館ハ不申上候事

下黒沢
1内　館　南北六拾六間 東西六拾四間　御城主黒沢治部少輔様上館より此所江御取移御住居之由申伝候右年月相知不申候事

中館の規模は東西六十間（約108m）・南北二十八間（約50.4m）としているが、それに伴なう遺構についてはふれていない。しかし、隣接する上館の二ノ丸の様に見えるとしていることで大きくまとまりのある地域として認識されていたものと思われる。

このように文献や言い伝えなどからも館跡は中館と伝えられる地区だけを利用したものでなく、南側の上館と呼ばれる地域と連続して構成されていたものと考えられる。郭としては1号堀で南と北に大きく2つに区画され、中館、上館と呼ばれる地域が土塁・堀などでさらに区画されるものと思われる。

館主については黒沢治部少輔としているが、その時期については不明である。地権者である中館長寿宅に伝わる家譜から『四釜町史』では次のように記している。

「葛西清重の兄康家の子は浅野修理介重光と称した。重光の子浅野山城守重氏が文治の役の戦功によって黒澤のほか四釜本郷及び志田の内二千七百貫の知行を拝領、黒澤氏と改めて黒澤城に居を構えて黒澤家の祖となった。別に浅野家をついだ浅野因幡守重勝は、建武の役に南朝派に属して、足利尊氏追討の際は北畠顕家に従い戦功をたてた。顕家死後の奥羽は足利氏の支配となり、奥州探題として斯波家兼がこの地を支配するようになると、黒澤氏は保身のため大崎氏の家臣となったが七百五拾貫に減石された。

重勝の長子康重は代々要害城（内館）に、康重の弟高重は七百八拾貫を拝領し上館に分地、上館城に住み浅野家を継いだ。天正十六年（1588）大崎内乱の中新田城の戦には、黒澤城主黒澤治部は新井田刑部を助けて反義直派となり、大崎方の拠点中新田城に伊達軍を迎撃しこれを敗走させた。その後、大崎一揆の起る前年の天正十八年八月、伊達軍による屈辱を遁れるため所領を清野隼人に譲り津軽に走った。浅野隼人は、大崎一揆の際、佐沼城攻略に参加して戦死し、その子重磨は民間に下った。」

この家譜は葛西康家の子浅野修理介を祖とし、浅野高重の時に黒沢家から上館に780貫を割いて浅野を継いで代々黒沢村上館に住み、江戸時代に入って百姓となったと記している。この系図の真偽については明確でないが、中世末における館跡が若干改変されて屋敷地として継承されていったことを推測させる資料である。

（館の性格）

中館・上館は中新田と四釜のほぼ中間に位置し、保野川・木戸川・荒川の複合扇状地に臨む小丘陵に立地している。構造的には丘陵を利用して築かれ、その北側は木戸川、南側は扇状地性低地に面した東西に長い館で、土塁・堀をのぞいては自然地形をあまり変形することない平城である。

政治的には大崎氏の勢力下にあった黒沢氏一族の城であり、周囲の沖積地の支配と日常の居住をかねた地域武士の館である（中館はその一部と考えられる）。「安永風土記」の中に中館屋敷とみられることは中世以降にも継続してこの場所が居住用地として使用されたことを示すものと考えられる。

館の構築年代は不明であるが、15世紀末には成立していたものと思われる。

ｂ．北館跡

北館跡は木戸川と東側の湿地から入り込む小さな沢地に囲まれた周囲の水田より約1m高い東にやや傾斜する部分に立地する。現状では館遺構の痕跡は認められない。調査の結果、木戸川より約20m離れて、長方形にめぐる堀跡、堀の内側で掘主柱痕跡、堀の外側で土壙が認めら

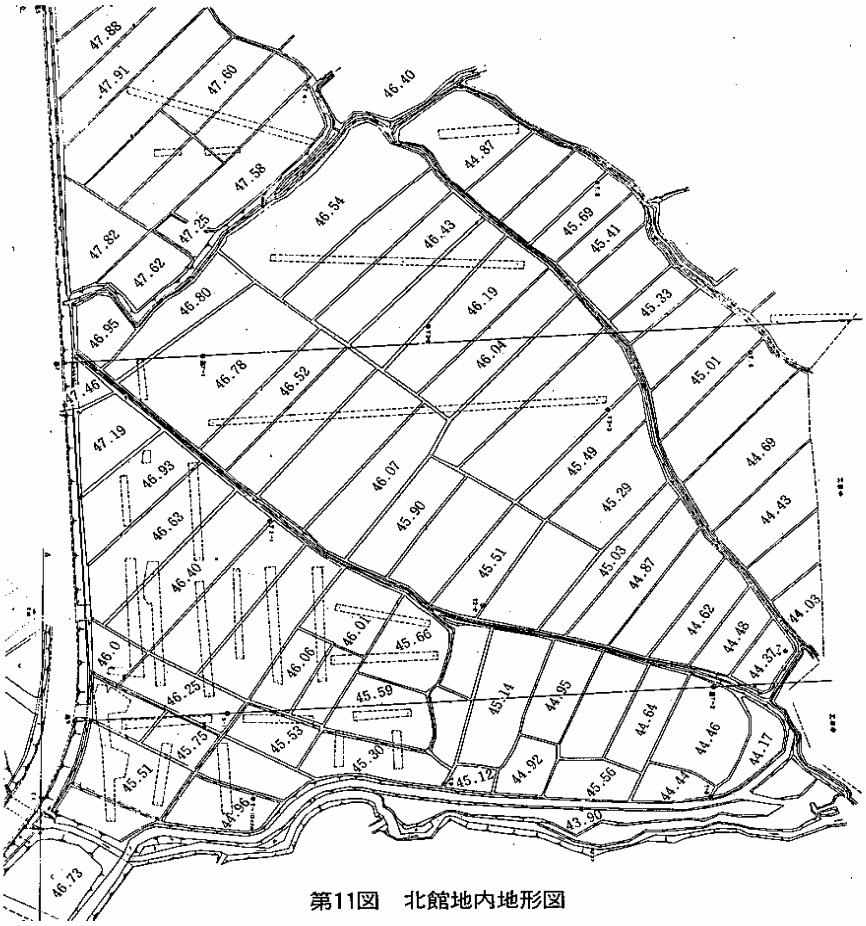
れた。

堀跡

堀跡は長方形にめぐり、その長さは東西約90m、南北60mである。堀の西辺中央が約4m途切れて平場状になっている。堀の規模と形態をみると、西辺は上幅4m・深さ1.5mである、断面形は「薬研堀」状である。東辺は上幅5～6m・深さ1.5mであり、断面形は「箱堀」状である。堆積土は西辺ではシルト質の土が堆積し、8層認められ、東辺では粘性のある土が堆積し、3層認められる。西辺堆積土中から染付皿、土師質の小皿が出土している（13図2・3）。

染付皿・土師質小皿

染付皿は浅い小皿で、外面に波状文が描かれる。江戸時代中頃以降のものと思われる。土師質小皿は底部から外傾して立ち上がるもので、体部下端に削りがある。土師質の小皿は中世から近世まで見られ、年代は特定できないが、染付皿とほぼ近い層から出土していることで江戸時代中頃のものと考えておきたい。



第11図　北館地内地形図

掘立柱痕跡

堀跡に囲まれた平坦部分約4,000㎡から柱痕跡が10個検出されたが、トレンチ調査のため、その組合せは不明である。

土壙

堀南西隅の外側から方形の土壙が2基重複して検出された。堆積土中から須恵器坏が出土している。

須恵器坏

（13図・1）は体部から口縁部にかけての破片である。体部は内弯しながら立ち上がり、口縁部は外面の稜を境にして外反しながら立ち上がる。全体の器形は不明であるが7世紀代の須恵器坏と思われる。

（館の形態）

北館と伝えられるところは木戸川の北側の扇状地に位置する。館跡の範囲は長方形の堀で囲まれた地域であり、その規模は南北約90m・東西約60mである。堀の西辺の1部が約4m途切れている。堀の内側からは掘立柱痕跡が検出されていることで建物の存在も考えられる。堀が一部途切れている部分は通路の可能性も考えられる。

（文献・伝承）

上黒沢
1上　館　南北三拾五間　東西四拾　間　御城主大崎義隆公御家臣黒沢治部少輔様御住居之由申伝候右年月相知不申候事

同所
1中　館　南北二拾八間　東西六拾　間　御城主黒沢治部少輔様と申伝候上館二丸と相見得申候先年北館御書上仕候処此度吟味仕候得ハ館跡も相見得不申候御家中屋敷ニも候哉と奉存候間右館ハ不申上候事

北館については『封内封土記』の中に上記のような記載がみられる。

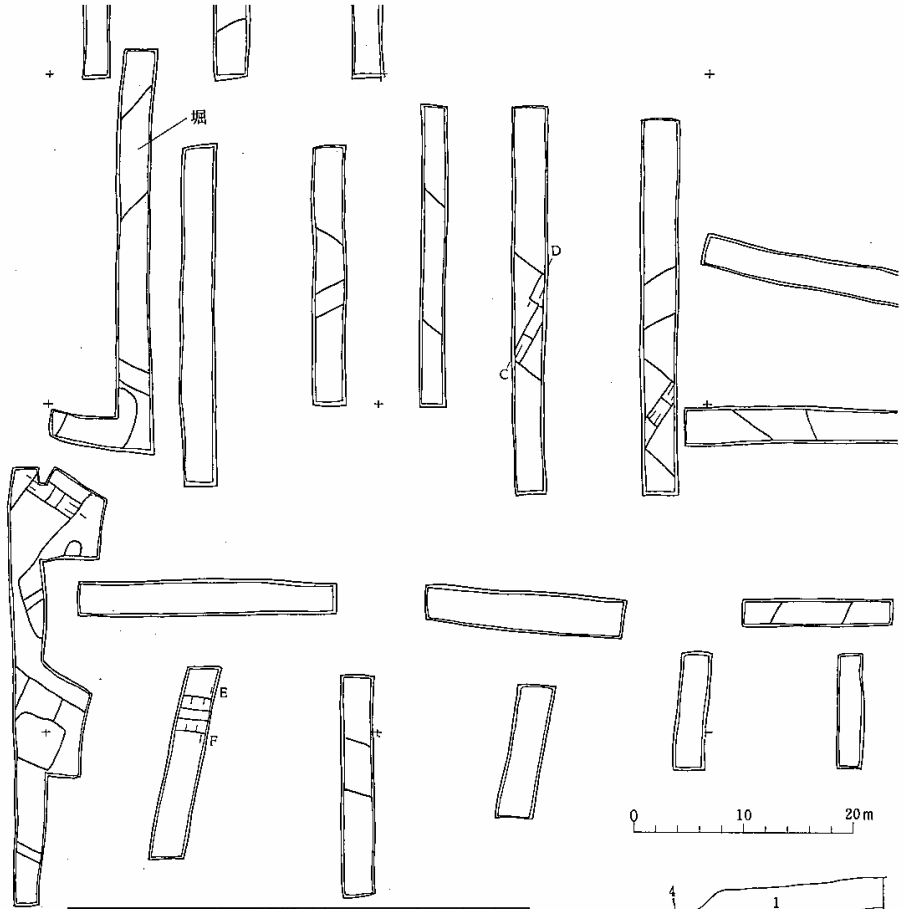
このことから江戸時代中頃には館跡としての痕跡はなく伝承だけが残っていたものと思われる。

（館の性格について）

北館は調査の結果、堀の堆積土中から、土師質小皿・磁器（染付皿）・近世の陶器（鉢・摺鉢）などが出土していることで、堀は江戸時代中頃には埋まったものと考えられる。

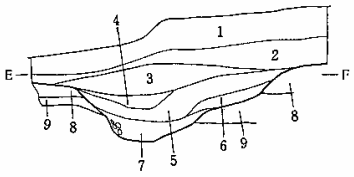
また、安永年間の『風土記書出』の中に次のような記載がみられる。これには

1原　屋敷　八軒　内沽却禿三軒
1山　崎屋敷　三軒　一谷　地屋敷　二軒
1新　屋敷　拾四軒　内沽却禿九軒
1北　館屋敷　一軒　一宿　屋敷　四軒
1清水川屋敷　二軒

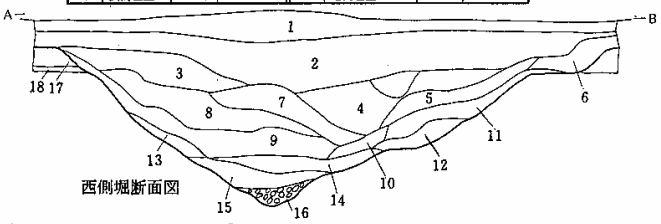


層位	土色	土性	備考
1	暗褐色土	シルト	水田耕作土
2	黒色土	シルト	
3	黄褐色土	シルト	堀埋土
4	黄褐色土	砂質	
5	極暗褐色土	砂質	
6	極暗褐色土	シルト	
7	黄褐色土	砂質	
8	黒褐色土	シルト	
9	黄褐色土	シルト	

層位	土色	土性	備考
10	灰褐色土	粘土質	堀埋土
11	黄褐色土	シルト	
12	褐色土	砂質	
13	褐色土	粘土質	
14	オリーブ褐色土	粘土質	
15	暗オリーブ色土	粘土質	
16	礫		
17	黒褐色土	シルト	旧表土
18	暗褐色土	シルト	



南側堀断面図

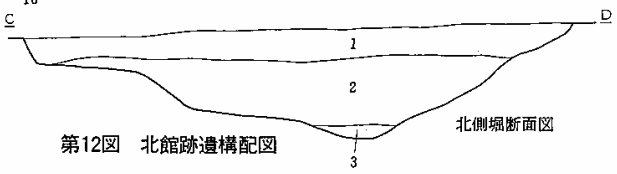


西側堀断面図

層位	土色	土性	備考
1	暗褐色土	シルト	水田耕作土
2	黒褐色土	シルト	
3	極暗褐色土	シルト	堀埋土
4	暗褐色土	砂質	
5	黒色土	シルト	
6	黄褐色土	粘土質	
7	オリーブ褐色土	粘土質	
8	黒色土	シルト	旧表土
9	暗褐色土	シルト	

0 1 2m

層位	土色	土性	備考
1	極暗褐色土	シルト	水田耕作土
2	オリーブ褐色土	粘土質	堀埋土
3	暗褐色土	砂質	

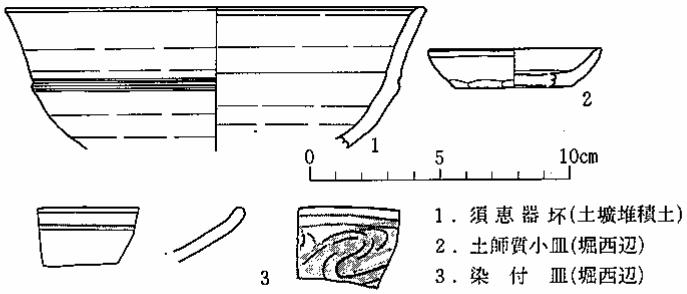


北側堀断面図

第12図　北館跡遺構配図

「一北間屋敷」とあることから、江戸時代には屋敷跡として利用されていた可能性がある。

このような、90m×60mの堀にかこまれた江戸時代以前の遺構は、宮城県伊具郡梶尾村向井家地籍図に見られるような中世期の屋敷をめぐる堀跡などに類似するものと思われる。構築の時期は不明であるが、中世に属する遺構と考えられる。中世期と考えることができるならば、この遺構が単独で存在したものでなく、南西側丘陵端にある上館・中館と関係したものと思われる。



第13図　土壙・掘出土遺物

引用参考文献

岡田茂弘他（1970）：「日ノ出山窯跡群」宮城県教育委員会

小井川・小川（1982）：「御駒堂遺跡」東北自動車道遺跡調査報告書Ⅵ　宮城県教育委員会

丹羽・阿部・小野寺（1981）：「清水遺跡」東北新幹線関係遺跡調査報告書(5)　宮城県教育委員会

色麻町史編纂委員会（1980）：「色麻町史」

「黒沢村風土記書出」・『封内封土記』については『宮城県史』30、『封内封土記』2より抜刷した。

(3) 千賀田遺跡

調査要項

遺跡記号：ＧＩ（宮城県遺跡地名表登載番号　10086）
遺跡所在地：宮城県伊具郡丸森町大字大内字千賀田
調査期間：昭和57年9月16日～昭和57年9月25日
調査主体者：宮城県教育委員会
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
調査員：狩野　正昭・佐々木和博
後藤　彰信・菊地　逸夫
調査対象面積：292㎡
発掘面積：292㎡

目　　次

Ⅰ　遺跡の立地と環境 191
Ⅱ　調査の概要 194
Ⅲ　発見された遺構と遺物 195
Ⅳ　まとめ 197

Ⅰ　遺跡の立地と環境

1. 遺跡の立地

千賀田遺跡は伊具郡丸森町大内字千賀田に所在する。

丸森町は、南に阿武隈山地、北西に角田山地、東に亘理山地を控え、阿武隈川の貫流する北部が角田盆地の末端に連なる沖積低地として開けている。この低地には阿武隈山地から小丘陵がいくつか張り出し、小河川がその間隙に狭隘な谷底平野を形成する。

この小河川の一つである雉子尾川は、大内地区を中心とした小規模な沖積低地と自然堤防を形成しつつ北部で阿武隈川に合流する。

千賀田遺跡は、雉子尾川西岸自然堤防上に立地し、標高34～36m、遺跡付近は南から北にかけて緩やかに傾斜する。遺跡の総面積は約9,000㎡であり、現在の地目は水田である（第1図）。

2. 周辺の遺跡

丸森町は、遺跡の数多く存在する地域として知られ、その数は149を数える。内訳は、縄文時代93か所、弥生時代20か所、古墳時代16か所、奈良・平安時代21か所、中世・近世17か所である。

大内地区においても、その周囲の小丘陵の麓および斜面、あるいは雉子尾川に注ぐ沢によって開析された谷、雉子尾川によって形成された沖積低地・自然堤防に、縄文時代早期から近世に至るまで多くの遺跡が連綿とかたちづくられてきた。千賀田遺跡周辺の遺跡について、概観すれば以下の通りである。

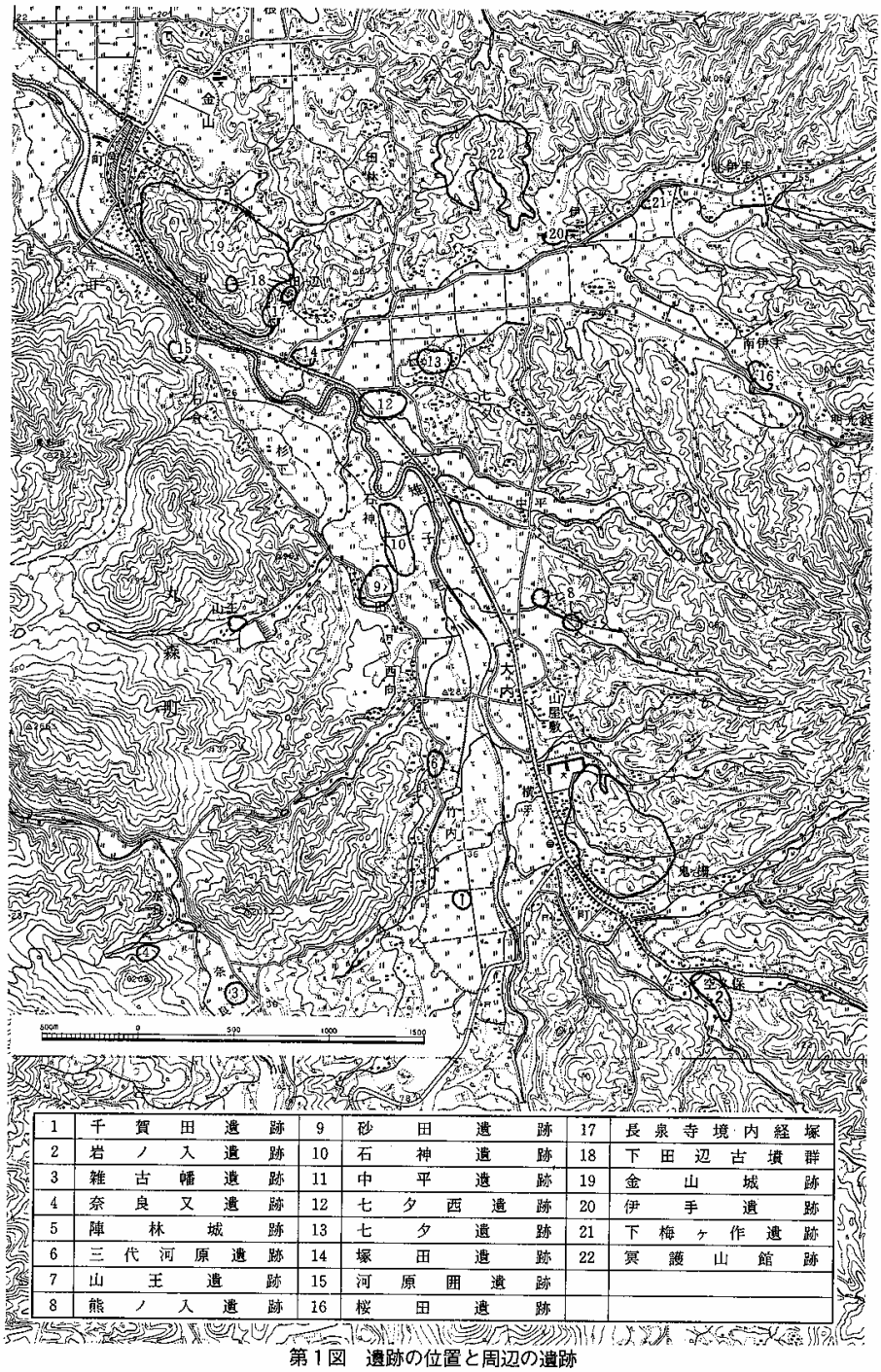
縄文時代　本遺跡に時期的（後・晩期）にも地理的にも近接するものとして、岩ノ入・三代河原・雑古幡・山王・東福田遺跡等がある。多くは丘陵麓および斜面に立地する。

弥生時代　岩ノ入・奈良又・河原囲・下梅ヶ作・伊手遺跡等がある。丘陵部から沖積地へ、しだいに占地を移す傾向がある。

古墳時代　台町古墳群・塚田古墳群等県内有数の古墳群が存在する。集落跡としては、塚田遺跡等があり、ほとんど沖積地に立地している。

奈良・平安時代　雉子尾川自然堤防上には石棉・砂田・七夕西遺跡等の集落跡が営まれた。

中世・近世　金山城・陣林城等に代表される館跡がある。

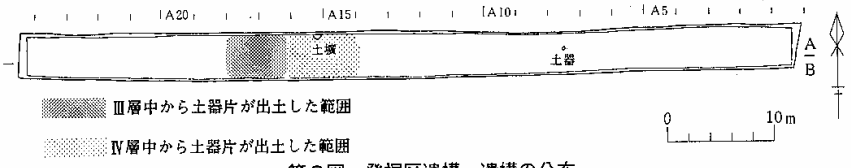


1	千賀田遺跡	9	砂田遺跡	17	長泉寺境内経塚
2	岩ノ入遺跡	10	石神遺跡	18	下田辺古墳群
3	雑古幡遺跡	11	中平遺跡	19	金山城跡
4	奈良又遺跡	12	七夕西遺跡	20	伊手遺跡
5	陣林城跡	13	七夕遺跡	21	下梅ヶ作遺跡
6	三代河原遺跡	14	塚田遺跡	22	冥護山館跡
7	山王遺跡	15	河原囲遺跡		
8	熊ノ入遺跡	16	桜田遺跡		

第1図　遺跡の位置と周辺の遺跡

35.14
35.08
34.86
34.84
35.22
35.23
35.14
35.11
34
遺物を含む層の範囲
前回遺物が多く出土した範囲
0
5
10cm

第２図　千賀田遺跡発掘区および遺跡の範囲



第３図　発掘区遺構・遺構の分布

Ⅱ　調査の概要

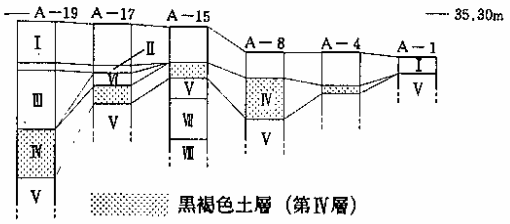
千賀田遺跡は、55年度の詳細分布調査によって、縄文晩期中葉から後葉にかけての遺物を含む層が南北約115m、東西約85mの範囲で存在することが判明し、盛土による遺跡の保存がなされていた。今回の調査は、本遺跡の一部にかかる排水路の取付未了部分について実施された（第2図）。

調査では、まず排水路掘削部分（4m×73m）を一つの発掘区として、その全面を覆う3m×3mを単位とするグリッドを設定し、北側をＡ区南側をＢ区に分け、東端から順に番号を付した。基準線は、現水田区画の基準線（磁北方向）に直交する（第3図）。今回は、前回調査の結果を踏まえ、遺物を含む層の精査を主たる目的とした。始めに発掘区における遺物を含む層の範囲の確定を行う。結果、この層がＡ－4区に始まり中央東側Ａ－9区で微かに高まり西に著しく傾斜することが知られた。Ａ－9区とＡ－19区では0.6mの高低差がある（第4図）。そこで、遺構の存在する可能性の高いＡ－4～19区を重点に精査を開始し、少量の土器片とＡ－8区で縄文土器のまとまりをＡ―16区で土壙を検出した。これらについては後述する。

なお、遺物を含む層を精査した後、Ａ－15～19区で以下の層についても掘り下げを行ったが遺構・遺物は発見されなかった。

発掘区の層位を次のようにまとめられる。

第Ⅰ層　にぶい黄褐色土（厚さ6～36cm）
第Ⅱ層　黄褐色土（厚さ0～8cm）
第Ⅲ層　暗褐色土（厚さ0～50cm以上）
第Ⅳ層　黒褐色土（厚さ0～40cm以上）遺物を含む
第Ⅴ層　暗褐色土（厚さ12～30cm）
第Ⅵ層　にぶい黄褐色土（厚さ0～12cm）
第Ⅶ層　黒褐色土（厚さ20～32cm）
第Ⅷ層　暗褐色土



層位	土色	土性	備考
Ⅰ	にぶい黄褐色（10YR4/3）	シルト	耕作土
Ⅱ	黄褐色（10YR5/8）	シルト	床土
Ⅲ	暗褐色（10YR3/4）	シルト	酸化鉄粒を若干含む
Ⅳ	黒褐色（10YR2/2）	シルト	粘性、しまりあり遺物を含む
Ⅴ	暗褐色（10YR3/3）	シルト	粘性あり
Ⅵ	にぶい黄褐色（10YR4/3）	サンド	ブロック状に黒褐色土を含む
Ⅶ	黒褐色（10YR2/3）	シルト	粘性あり、小礫を含む
Ⅷ	暗褐色（10YR3/4）	シルト	

第４図　発掘区北壁セクション柱状図と基本層位

Ⅲ　発見された遺構と遺物

1. 遺構

土壙、Ａ－16区北側からⅤ層上面で南半分のみ確認された。径83㎝、深さ30㎝の規模で、遺物は検出されなかった。時期および性格は不明である。堆積土は3層に分かれる（第5図）。

2. 遺物

（1）　縄文土器

Ａ－8区東側Ⅳ層下部の窪みから、2個体が重なった状態で拙土した（第6図）。窪みの上面から網目状撚糸文を施した土器①が、下部から単節縄文を施した土器②が検出された。

他にも少量の土器片が出土している。Ｂ－9、Ａ－15、16区Ⅳ層中から極く僅か検出されたが、図示しうるものはＢ－9区出土の1片③のみである。いずれも遺構にともなうものではない。

①（第7図1）は、深鉢形で体部が開き口縁部が直立する。粗製土器である。口縁直下から一段横回転に施文し、ついで体部は縦に施文している。原体は、まず1段Ｒの撚糸をＬ巻きにしさらに0段ℓの繊維束をＲ巻きに重ねて交叉させたものである。こうした施文の特徴をもつ土器は、角田市梁瀬浦遺跡のＢＤ－5区2層、ＡＴ－27区4層といった大洞C_2式期を主体とする遺物包含層中から出土することが報告されている（角田市教委　1976）。

②（第7図2）は、深鉢形で体部が開き体部上半から口縁部にかけて内弯するものである。

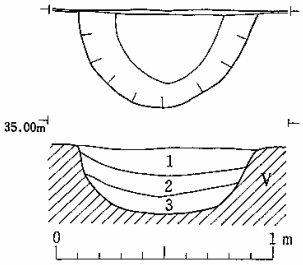
これも粗製土器である。ＬＲの原体を横位に回転させ口縁から体部下半まで斜行縄文を施文し口縁に近い体部上半に無節Ｒと0段ℓのＲ巻きに結束した綾絡を2条施している。

③（第8図1）は、Ｂ－9区Ⅳ層出土のものである。無節Ｒの斜行縄文を地文とし、縦に巾3～4㎜の太い沈線を平行に配している。胎土は砂粒を含み、焼成は不良である。

（2）　須恵器

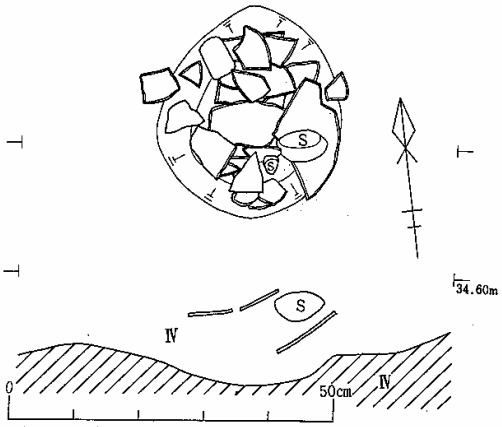
Ａ－17、18区Ⅲ層中から土師器および須恵器片が極く僅か出土している。図示しうるのは須恵器底部片一片のみである（第8図2）。

これは、回転糸切の切離しによるもので底部調整はない。切り離しの後、体部下半に手持ヘラケズリを加えている。

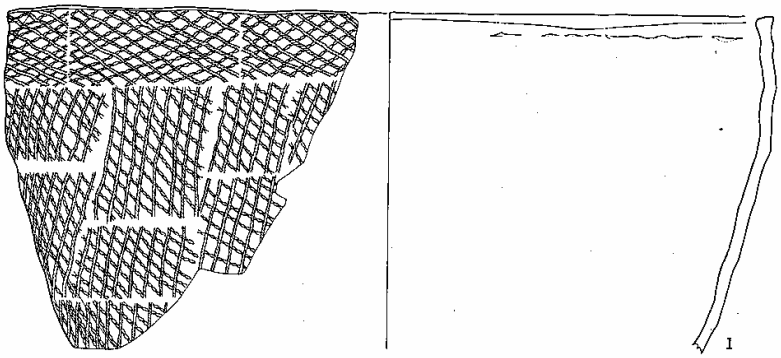


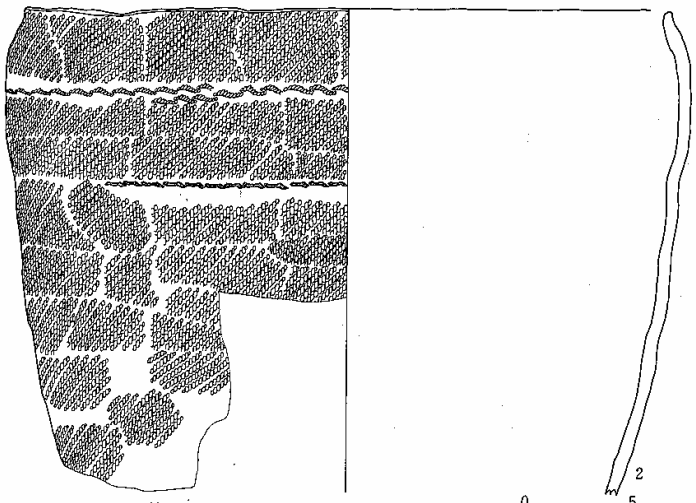
層位	土　　色	土　性	備　　考
1	黒褐色（10YR2/3）	シルト	酸化鉄粒を若干含む
2	黒褐色（10YR2/2）	シルト	酸化鉄粒を微量に含む
3	黒褐色（10YR3/1）	シルト	

第５図　土壙平面および断面図



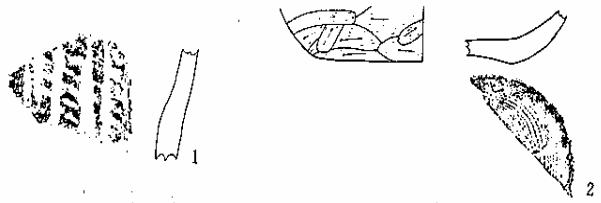
第６図　Ａ－８区、土器出土状態





第７図　千賀田遺跡出土遺物（その一）

0　5　10cm



1．縄文土器体部片
　Ｂ－９区、Ⅳ層出土

2．須恵器底部片
　Ａ－17区、Ⅲ層出土

第８図　千賀田遺跡出土遺物（その二）

Ⅳ　ま　と　め

1. 千賀田遺跡は、雉子尾川西岸自然堤防上に立地する。
2. 遺物を含む層であるⅣ層はＡ－4区から始まりＡ－9区で微かに高まり西に著しく傾斜する。
3. 土壙が1基確認された。遺物を伴なわないため、時期・性格等は不明である。
4. Ⅳ層出土土器中の網目状撚糸文土器は、出土例から縄文晩期中葉から後葉にかけてのものと考えられる。
5. Ⅲ層中から少量の土師器片・須恵器片が出土した。この時期の遺構が本遺跡の一部をなす可能性もある。

参 考 文 献

土岐山武（1981）：「千賀田遺跡三代河原遺跡」宮城県文化財調査報告書第75集

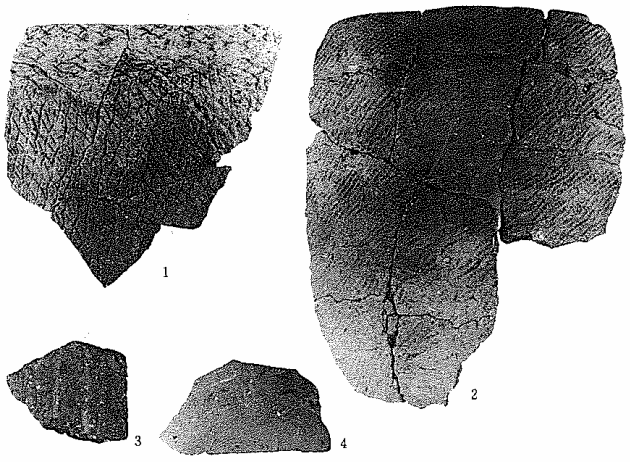
角田市教育委員会（1976）：「梁瀬浦遺跡」角田市文化財調査報告第1集

一条孝夫（1979）：「高畑遺跡発掘調査概報」丸森町文化財調査報告書第1集

丸森町教育委員会（1979）：「丸森の遺跡」丸森町の文化財第4集
丸森町文化財保護委員会

千賀田遺跡遠景
（東側より）

Ａ－８区，土器出土状態



出土土器

図版

(4) 岩（いわ）ノ入（いり）遺跡

調査要項

遺跡記号：HG（宮城県遺跡地名表登載番号　10061）
遺跡所在地：宮城県伊具郡丸森町大字大内字岩ノ入
調査期間：昭和57年11月4日～昭和57年12月1日
調査主体者：宮城県教育委員会
調査担当者：宮城県教育庁文化財保護課
調査員：狩野　正昭
村田　晃一
調査対象面積：26,000㎡
発掘面積：　800㎡

目　　次

Ⅰ．調査の方法と経過 201
Ⅱ．調査の成果
1．基本層位 202
2．発見された遺構と遺物
ａ．土壙 203
ｂ．ピット 206
ｃ．遺物包含層 207
ｄ．表土出土の遺物 215
Ⅲ．考　察
1．出土遺物 219
2．遺構 224
Ⅳ．まとめ 226

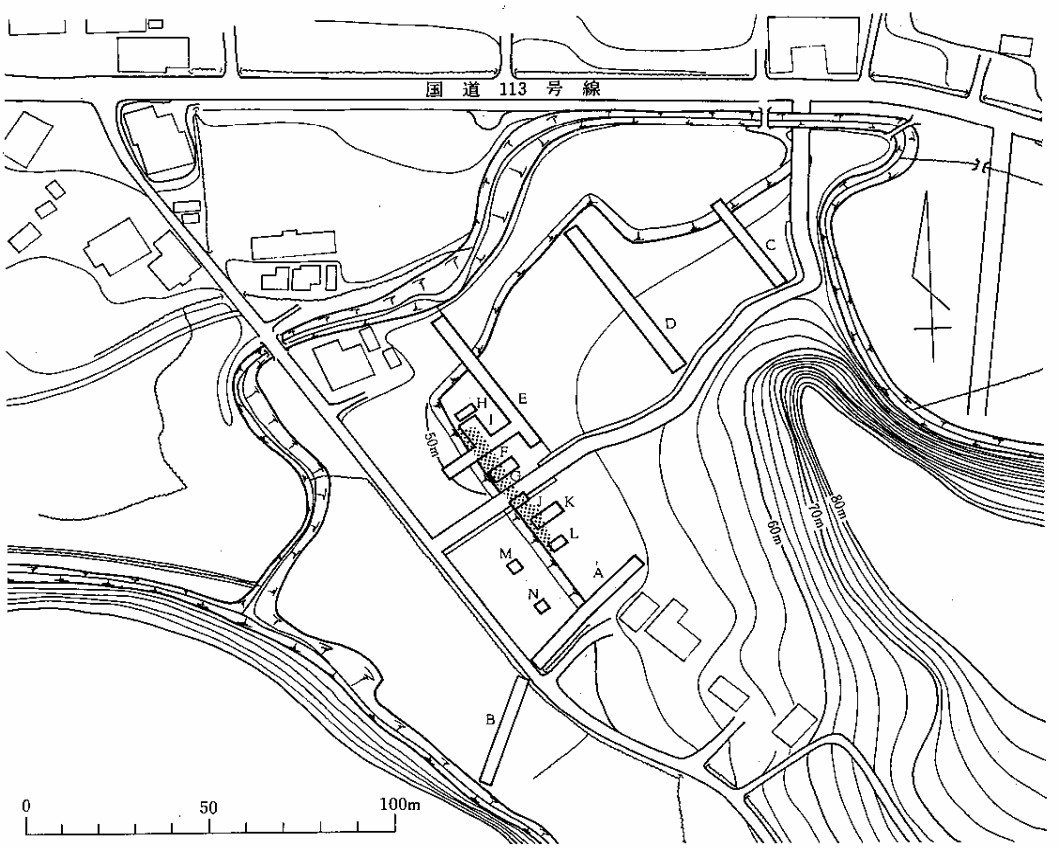
Ⅰ　調査の方法と経過

岩ノ入遺跡は伊具郡丸森町大内字岩ノ入に所在する。

遺跡は雉子尾川に注ぎ込む沢によってわずかに開析された北西にのびる小丘陵の舌状部縁辺西側に立地し、付近は北および西に向って緩やかに傾斜する。総面積は約26,000㎡で、現状は水田および桑畑である。なお、遺跡周辺の大地形や歴史的環境については、今回岩ノ入遺跡の北西約1.1kmに位置する千賀田遺跡の報告も収録されており、そちらを参照されたい。

昭和52年度より着手された丸森町大内地区のほ場整備事業は6年目を迎え、岩ノ入遺跡の所在する地域にもその面工事が及ぶこととなった。ただし、本遺跡部分については宮城県教育委員会と関係部局との協議の結果、遺跡内でほ場整備事業の実施される地域では、計画変更の余地がない排水路部分を除き、現地表の上に盛土をして遺跡の保存を図るという結論を得ている。

この結論を踏まえ、今回の調査は排水路敷設によって現状が変更する部分の記録保存と盛土が行われる部分の遺構確認をその目的としている。



第１図　トレンチ配置図

記録保存調査は排水路が遺跡の南側を長さ76m、幅2.2mにわたって敷設されるので、この部分に道路をはさんでＡ・Ｂトレンチを設けた（Ａ－40m、Ｂ－31m）。

遺構確認調査は、旧地形の残存している部分を中心に東から幅3mのＣ～Ｆトレンチを設けた。その結果Ｆトレンチ中央部で遺物包含層が確認されたので、包含層の範囲確認のためＦトレンチの南北に幅3m（Ｉトレンチのみ6m）のＧ～Ｌトレンチ、Ｆトレンチの南側に3×3mのＭ、Ｎグリッドを設けた。各トレンチの長さは以下の通りである。Ｃ－30m、Ｄ－50m、Ｅ－45m、Ｆ－24m、Ｇ－9m、Ｈ－6m、Ｉ－7m、Ｊ－5m、Ｋ－9m、Ｌ－5m（第1図）

調査によって確認された遺構は、Ａトレンチにおける土壙3基、ピット8個、Ｃ・Ｅ・Ｆ・Ｇトレンチにおける数基ずつの土壙、ピット、また、Ｆ・Ｉ～Ｌトレンチにおける遺物包含層である。遺物包含層は遺跡の西側緩斜面で南北44m、東西5mにわたって確認された。

これらのうち、排水路部分にかかるＡトレンチ内の遺構は全て精査を行い、他については性格把握のためその一部を調査した。遺物包含層についてもＧトレンチ内を長さ4.6m、幅1m精査したにとどまる。

調査開始は昭和57年11月4日で、一切の調査が終了したのは12月1日である。

Ⅱ　調査の成果

1．基本層位（第2図）

遺跡の大部分は開田の際にかなりの削平を受け、Ｅトレンチ以東、即ち遺跡の東半分以上は表土のすぐ下が地山となっている。Ａトレンチ付近は調査前より他地域に比べて幾分低かったが、調査によって小さい谷地形となっていることがわかった。谷部分には、砂・礫の混じるシルト層が堆積しており、磨滅した土器片などが若干含まれている。また、Ｆトレンチの西半分から一段低くなっているが、これは断面観察から低い部分は地山を削って整地してあり、遺跡の西側一帯は著しく原地形が失なわれているためとわかった。

遺跡内を概観してみると、遺跡は南から張り出した丘陵麓に位置し、北と西へ緩やかに傾斜し、丘陵裾部を小河川が流れている。Ａトレンチを設定した遺跡南側は小さい谷地形となっている。

このうち西の緩斜面は、遺跡中央やや西寄りからその傾斜を一層強くしており、ここに遺物包含層が形成されている。

次に、Ｇトレンチにおける基本層位を述べる。

《第1層》

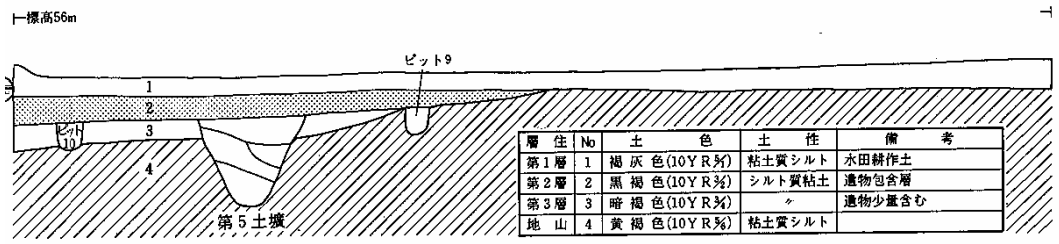
第1層は褐灰色（10ＹＲ5/1）の粘土質シルト、水田耕作土である。

〈第2層〉

第2層は遺物包含層で黒褐色（10ＹＲ3/2）のシルト質粘土層である。その範囲は北端がＩトレンチ、南端がＬトレンチで確認され、南北44m、東西5mの広がりをもつと考えられる。Ｇトレンチ内でもっとも厚いところは約30cmあった。

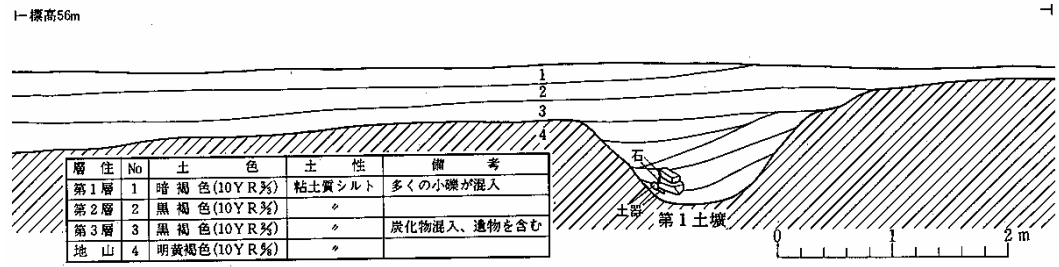
〈第3層〉

第3層は暗褐色（10ＹＲ3/4）のシルト質粘土で構成される。異物を若干含む。この層の下は黄褐色（10ＹＲ5/6）の粘土質シルトからなる地山である。



層 住	No	土 色	土 性	備 考
第１層	1	褐 灰 色(10ＹＲ5/1)	粘土質シルト	水田耕作土
第２層	2	黒 褐 色(10ＹＲ3/2)	シルト質粘土	遺物包含層
第３層	3	暗 褐 色(10ＹＲ3/4)	〃	遺物少量含む
地 山	4	黄 褐 色(10ＹＲ5/6)	粘土質シルト	

Ｇトレンチ北壁基本層位



層 住	No	土 色	土 性	備 考
第１層	1	暗 褐 色(10ＹＲ3/3)	粘土質シルト	多くの小礫が混入
第２層	2	黒 褐 色(10ＹＲ3/2)	〃	
第３層	3	黒 褐 色(10ＹＲ3/3)	〃	炭化物混入、遺物を含む
地 山	4	明黄褐色(10ＹＲ6/6)	〃	

Ａトレンチ南壁基本層位

第２図　基　本　層　位

2. 発見された遺構と遺物

ａ．土壙（第3図）

土壙は各トレンチで検出されているが精査したのはＡトレンチとＧトレンチ内のものだけで他は確認するにとどめた。

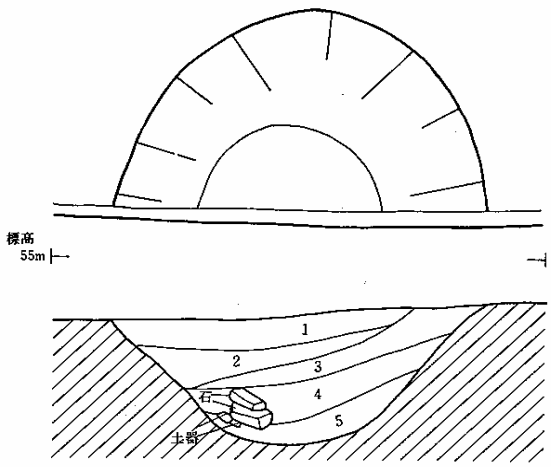
第1土壙

Ａトレンチ内東部に位置し地山面で検出された。その範囲がトレンチ外までのびるため全体の形は不明であるが、トレンチ内で確認された平面形は直径約2mの半円形を呈し、深さは82cmあった。底面は皿状を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。土壙内堆積土は5層にわかれる。各層は斜面上部からの自然流入の状態で堆積している。第1層・2層・3層・5層中から縄文土器が出

土しているが、いずれも磨滅が著しくその所属時期は明らかではない。

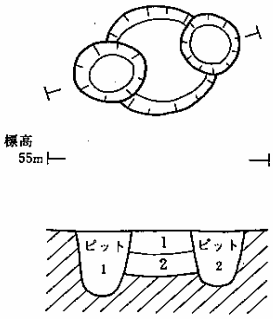
第2土壙

第1土壙のすぐ西側にあり、東西壁をピットに切られている。検出面は地山面である。平面形は直径66cmの円形を呈するものと思われる。深さは26cmある。堆積土は2層あり、いずれもほぼ水平状態の体積状況を示している。土壙断面観察においては両側をピットによって切られ



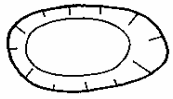
No	土　色	土　性	備　　考
1	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	遺物を含む
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	遺物を含む
3	暗褐色(10YR3/3)	〃	黄褐色土が混入、遺物を含む
4	黒褐色(10YR3/2)	〃	炭化物混入
5	黒褐色(10YR3/2)	〃	黄褐色ブロック混入、遺物を含む

第 1 土 壙

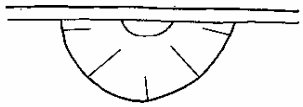


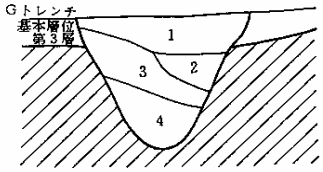
No	土　色	土　性	備　　考
1	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	
2	黒褐色(10YR3/2)	〃	黄褐色土が混入

第 2 土 壙



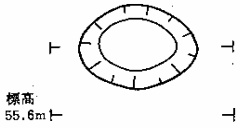
第 3 土 壙

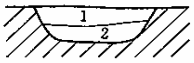




No	土　色	土　性	備　　考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	遺物を多く含む
2	暗褐色(10YR3/4)	粘土質シルト	
3	黒褐色(10YR3/2)	〃	黄褐色土混入、遺物少量出土
4	灰黄褐色(10YR4/2)	〃	黄褐色土が多量混入、遺物を含む

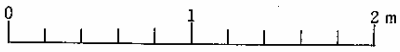
第 4 土 壙





第 5 土 壙

No	土　色	土　性	備　　考
1	黒褐色(10YR3/2)	粘土質シルト	遺物・炭化物を含む
2	暗褐色(10YR3/4)	〃	炭化物を含む



第3図　土　　壙

ているため人為的な堆積か自然流入の堆積か明らかにできなかった。出土遺物はない。

第3土壙

Ａトレンチ西端近く、地山面で検出された。平面形は90×50cmの長楕円形を呈し、深さは18cmある。底面はほぼ平坦で壁は緩やかに立ち上がる。堆積土は1層で出土遺物はなかった。

第4土壙

Ｇトレンチ西側、第3層上面で検出された。範囲がトレンチ外までのびるため、その範囲等は明らかでないが、トレンチ内で確認された平面形は直径94cmの半円形を呈し、深さは80cmある。底面は皿状になって壁はひらくように立ち上がる。堆積土は4層あり、堆積状況は自然流入の状態を示している。第1層・3層・4層から縄文土器が出土している。

〈出土土器〉（第4図）

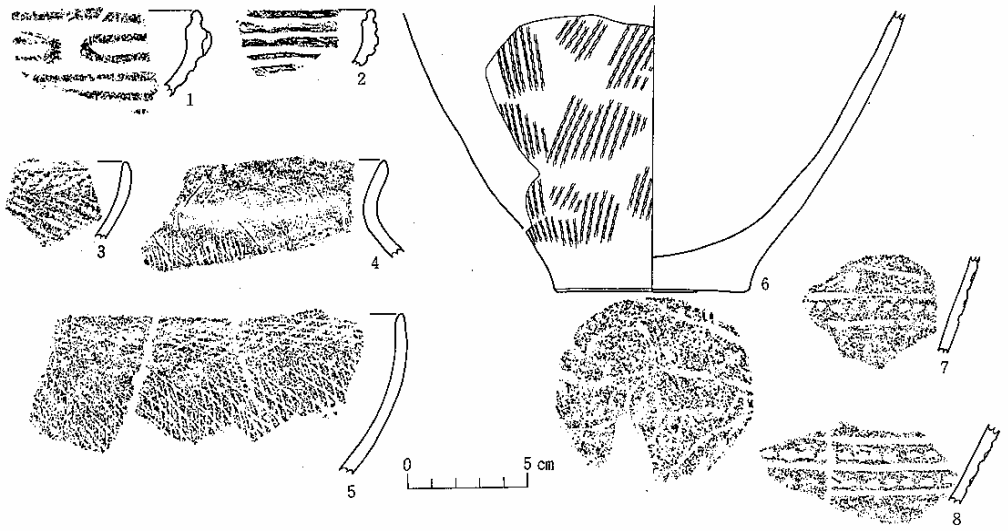
器形がわかるものには、浅鉢形土器と深鉢形土器がある。ここでは、口縁部、体部資料のうち文様の明瞭なもの、底部に特徴のあるもの8点を取り上げその内容を述べることとする。2・7・8が第4層から出土し、他は全て第1層からの出土である。

浅鉢形土器（1・2）

1は口縁下部に平行沈線を台形に彫去して描かれる工字状文が施されている。彫去部の両側は瘤状に盛り上がっている。2は小破片のため文様の構成はわからない。いずれも口縁部内面に一条の沈線が巡る。

深鉢形土器（3～8）

文様が施されるもの（7・8）と地文のみのもの（3～6）とがある。



第４図　第４土壙出土土器

7・8は頸部でくびれる深鉢形土器の口縁部破片と考えられ、沈線間に竹管による刺突が施されている。いずれも磨滅が著しい。

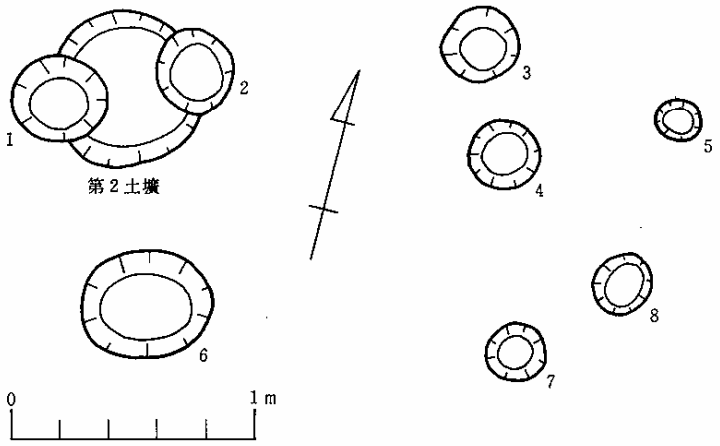
地文が施されるものには口縁部が外反するもの（4）と直立気味に立ち上がるもの（3・5）とがある。3には羽状縄文（ＬＲ、ＲＬ）、4・6には縦位の撚糸文（Ｌ）、5には網目状撚糸文（Ｌ）が施されている。5では口縁部と体部で施文の方向が異なっている。6は底面に木葉痕が認められる。

第5土壙

Ｇトレンチ東側、地山面で検出された。平面形は64×54cmの楕円形を呈し、深さは22cmある。堆積土は2層確認され、堆積状況はほぼ水平である。遺物は第1層、第2層から出土しているが、いずれも細片で図示できない。

b．ピット（第5図）

ピットは各トレンチで検出されているが、Ａトレンチ内の8個とＧトレンチ内の2個のみ精査を行い、他は確認するにとどめた。精査したピットからは出土遺物はない。



第５図　ピット平面図

Pit No	図版No	位　　置	確　認　面	平面形	(長径)×(短径)×(深さ)(cm)	堆　積　土	備　　考
1	1	Ａトレンチ第１土壙北側	地　　山	円　形	40×36×38	暗褐色(10 ＹＲ3/3)シルト質粘土	第２土壙西壁をきっている
2	2	〃	〃	〃	34×32×33	〃 (10 ＹＲ3/3)	第２土壙東壁　〃
3	3	Ａトレンチ東端付近	〃	〃	32×30×38	黒褐色(10 ＹＲ3/2)	小礫を含む
4	4	〃	〃	〃	29×28×31	〃 (10 ＹＲ3/1)	
5	5	〃	〃	〃	20×18×12	〃 (　〃　)	小礫を含む
6	6	Ａトレンチ西側	〃	楕円形	52×44×27	暗褐色(10 ＹＲ3/3)	小石を多く含む
7	7	Ａトレンチ中央部	〃	円　形	24×24×30	〃 (7.5ＹＲ3/3)	
8	8	〃	〃	〃	26×24×25	〃 (7.5ＹＲ3/4)	
9		Ｇトレンチ北壁中央	〃		(20×？×26)	〃 (10 ＹＲ3/3)粘土質シルト	トレンチ外に範囲がのびる
10		Ｇトレンチ北壁西端	基本層位第３層上面		(24×？×26)	黒褐色(10 ＹＲ3/2)	〃

第１表　ピット観察表

ｃ．遺物包含層（第2図）

遺物包含層の精査は「Ⅰ　調査の方法と経過」で述べたように、その内容把握を目的としたものであるためＧトレンチ内を長さ4.6m、幅1mの範囲で行ったにとどまる。

包含層はＧトレンチの第2層にあたり、黒褐色（10ＹＲ3/2）のシルト質粘土で構成され、その分布は遺跡西側緩斜面に南北44m、東西5mにわたって広がる。Ｇトレンチ内で最も厚いところは30cmあった。

遺物は層全体から出土しているが、特に中間部分では大形破片を含む多くの土器が出土していた。このことから、中間部分には本来層理面があり、包含層はさらに細分されると考えられるが、発掘時にはそれを明確にできなかった。出土遺物としては縄文土器、剥片石器、礫石器がある。発掘面積の割に出土量は豊富であった。

なお、Ｇトレンチ内では包含層下に第3層が存在する。層中からは遺物包含層と同様の特徴をもつ土器片が出土しているが、包含層出土土器に比べ量的に極めて少なく、また、磨滅も著しい。このことから、第3層は包含層形成以前の形成層ではあるが、包含層出土土器のもつ年代幅内に何らかの理由で生じた自然堆積層と考えられる。

〈出土遺物〉

(1) 土器

器形がわかるのは浅鉢形土器、壺形土器、深鉢形土器である。

遺物包含層出土土器は総計1,015点で、口縁部破片は124点ある。このうち、ある程度全体の様子がわかる個体は9点で他は全て破片である。

ここでは、文様の明瞭なもの、底部に特徴があるもの総数52点を取り上げその内容を述べる。

―口縁部及び体部―

((浅鉢形土器))

全体の器形から5つのタイプがある。

Ⅰ）頸部がくびれ、口縁部が外反もしくは外傾するもの

Ⅱ）頸部がくびれ、肩部がはり出すもの

Ⅲ）頸部で屈曲し、口縁部がやや外反するもの

Ⅳ）口縁部が内弯気味に立ち上がるもの

Ⅴ）全体的に外傾するもの

Ⅰ）頸部がくびれ、口縁部が外反もしくは外傾するもの（第6図）

完形品によると底部の形態には平底と丸底とがあり、底部と体部との境に一条の沈線が施される。頸部のくびれた部分はきれいにみがかれ、外反もしくは外傾する口縁部全体に文様が施されている。その文様は各種の工字状文によって構成されている。また、口縁部内面には一条

の沈線が巡る。

工字状文の種類には平行沈線間を下向きに台形に彫去して描かれたもの（1）、同じく上向きに彫去して描かれたもの（4）、上・下から交互に彫去して描かれたもの（5・8）、逆向きに上・下に施文したもの（9）、平行沈線間に反転する沈線と下向きに台形に彫去した沈線が組み合ったもの（3・6・7）、3本の平行沈線のうち上・下2本を台形に彫去したもの（6・7）とがある。また、後二者は6・7のように同一個体で交互に用いられることもある（3単位）。なお、1・4は小片のため正しくは不明であり交互に彫去したものになる可能性もある。また、2は小片のため全体の文様は不明であるが、反転する沈線による文様かと思われる。

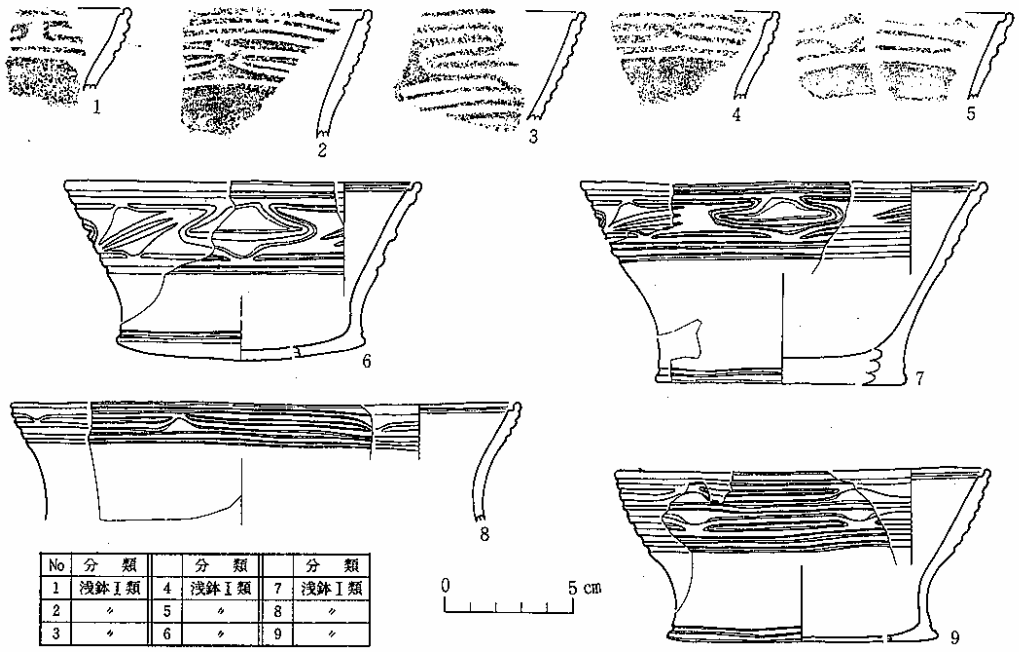
6・7・9の沈線部には丹が認められる。

Ⅱ）頸部がくびれ、肩部がはり出すもの（第7図2・3）

2例のみである。頸部は長くのび、きれいに磨かれている。2は口縁部と肩部に二条の平行沈線をもち、口唇部に2個一対の突起をもつ。3は口縁部を欠く。肩部に平行沈線間を上・下から交互に彫去して描かれた工字状文、体部に斜行縄文（ＬＲ）が施されている。

Ⅲ）頸部で屈曲し、口縁部がやや外反するもの（第7図1）

1例のみである。口頸部に平行沈線間を台形に彫去して描かれた工字状文がみられる。口唇部には2個一対の突起があり、突起間は沈線が走っている。体部には斜行縄文（ＲＬ）が施されている。



No	分　類		分　類		分　類
1	浅鉢Ⅰ類	4	浅鉢Ⅰ類	7	浅鉢Ⅰ類
2	〃	5	〃	8	〃
3	〃	6	〃	9	〃

第６図　遺物包含層出土遺物（１）　浅鉢形土器

Ⅳ）口縁部が内弯気味に立ち上がるもの（第7図4～10）

浅鉢形土器のうち最も出土の多いタイプである。文様帯が頸部以上に限られるもの（4～6）とそれ以下に及ぶもの（7～10）とがある。後者は前者に比べると頸部の屈曲が強い。

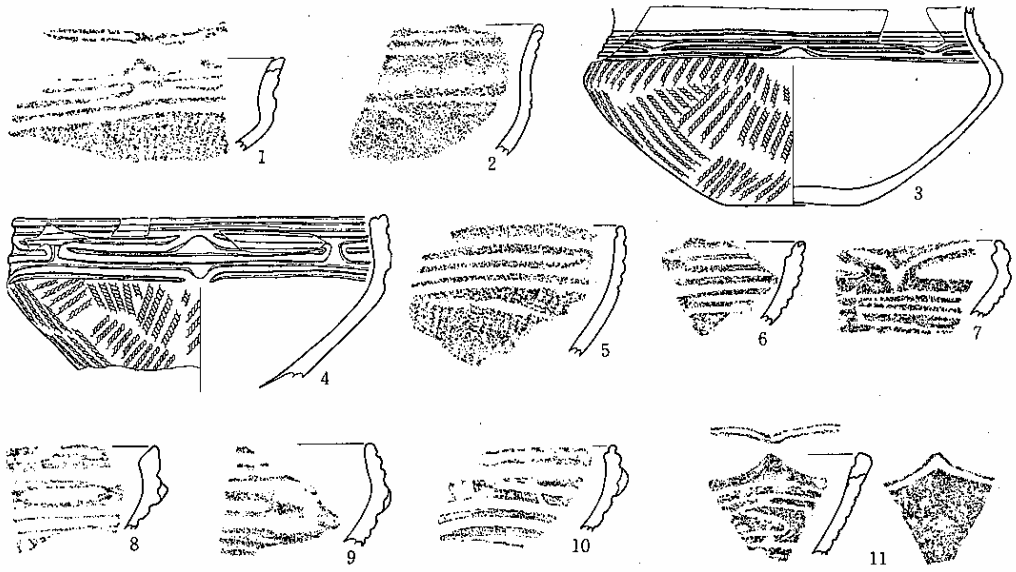
前者にみられる文様には、平行沈線間を逆向きに上・下に彫去した沈線と縦の沈短線とを組み合わせたもの（4）、前者の文様に沈短線がみられないもの（6）、平行沈線間を上向きに彫去したもの（5）がある。

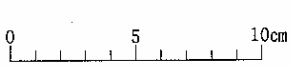
後者は口縁部に浮線楕円文がそれに類似する文様をもつもの（8～10）が多い。7には肩部以上に隆帯をもつ文様がみられる。これらはいずれも小片のため全体の文様構成はよくわからない。

4と7は沈線部に丹がみられる。

Ⅴ）全体的に外傾するもの（第7図11）

このタイプは出土量が少ない。11は口唇部に大きめの突起を有し、文様は口縁部から幅広く認められる。施文されているのは反転する沈線を横に連続させた工字状文である。口唇部、口縁部内面に沈線が巡る。





No	分　類	No	分　類	No	分　類	No	分　類
1	浅鉢Ⅲ類	4	浅鉢Ⅳ類	7	浅鉢Ⅳ類	10	浅鉢Ⅳ類
2	浅鉢Ⅱ類	5	〃	8	〃	11	浅鉢Ⅴ類
3	〃	6	〃	9	〃		

第７図　遺物包含層出土土器（２）　浅鉢形土器

((壺形土器))（第8図1～5）

1・2とも波状口縁をもち、口縁部と肩部に文様がみられ、頸部は無文である。口縁部内面に一条の沈線が巡る。2には波頂部を残して口唇部にも沈線が施される。

1の口縁部には平行沈線間を交互に彫去して描かれた工字状文がみられ、肩部も同様の文様が施されているものと思われる。2は口縁部に一条の沈線が施され、肩部に二条以上の平行沈線が施文されている。3～5は体部資料で、3には肩部に5条の浅い平行沈線が巡り、その中に円形の彫去がみられる。4は肩部に一条の沈線が施され、その下に斜行縄文（ＬＲ）が施されている。5には条線文がみられる。

((深鉢形土器))

大別して

Ａ）何らかの文様の施されるもの

Ｂ）地文のみ施されるもの

とに分けられる。

Ａ）何らかの文様が施されるもの

Ｉ）頸部がくびれ、口縁部が外反もしくは外傾するもの（第8図6～12）

口唇部に突起をもつもの（6～8）と突起をもたないもの（9～12）とに分けられる。

前者はいずれも口縁部内面に一条の沈線が巡り、口縁部に文様が施されている。施文された文様には平行沈線間を台形に彫去した工字状文（6・7）、（施文部位、口縁部全体）と一条の沈線（施文部位、口縁部上半）とがある（8）。

突起をもたないものは口縁部が無文のもの（9・10）と2～4条の平行沈線が施されているもの（11・12）とがある。前者には体部との境に一条もしくは二条の平行沈線が巡っている。双方とも体部に斜行縄文（ＬＲ）が施されている（なお、他の小破片にはＲＬが施されるものもある）。

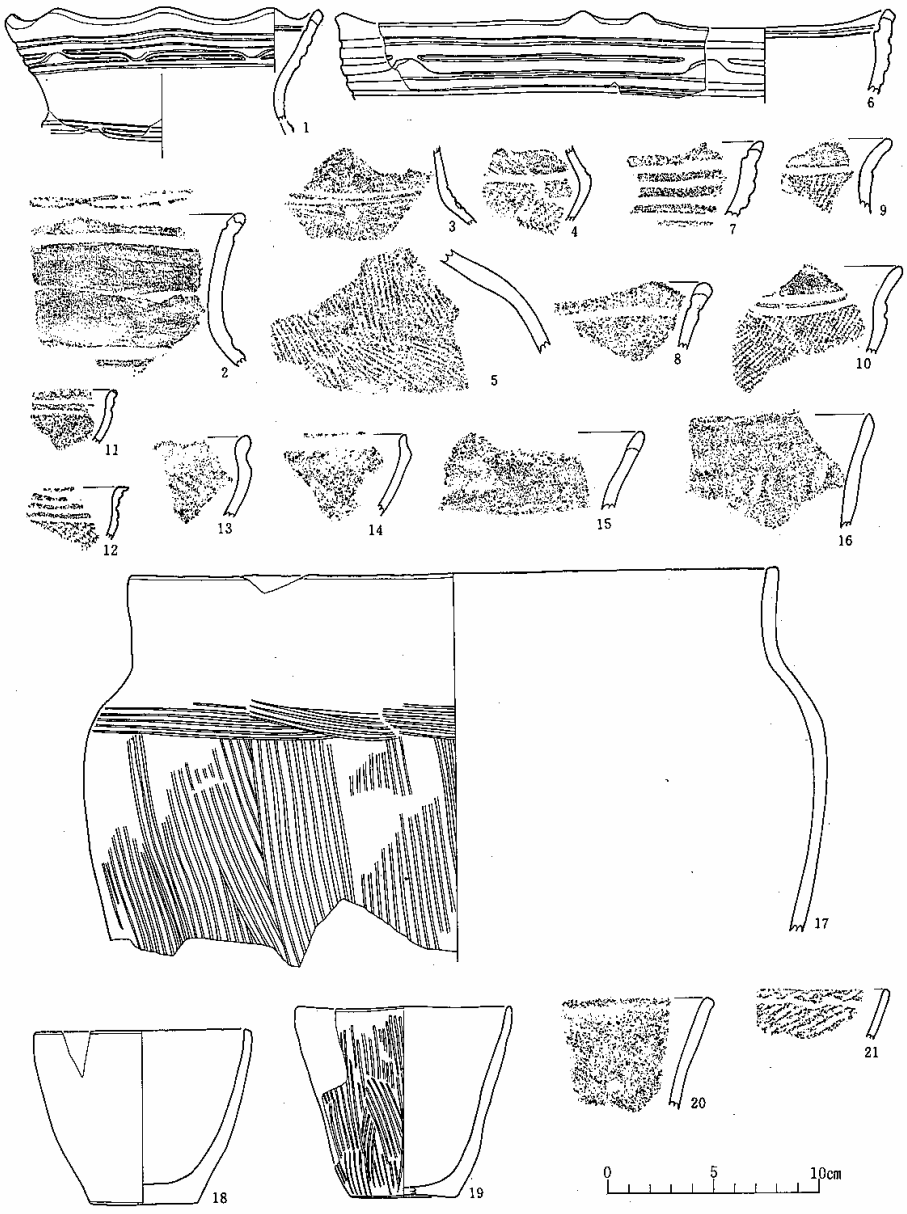
Ⅱ）頸部がくびれ、口縁部が外傾し長くのびるもの（第10図2～4）

2と4は口縁部が残り、双方とも口唇部に突起を有している。口縁部から肩部にかけて幅広く文様が施されている。

文様には平行沈線間に刻目を施したもの（2）、磨消縄文手法によって入組文を構成するもの（3）、瘤状小突起を起点として磨消縄文文様を弧状に施したもの（4）がある。

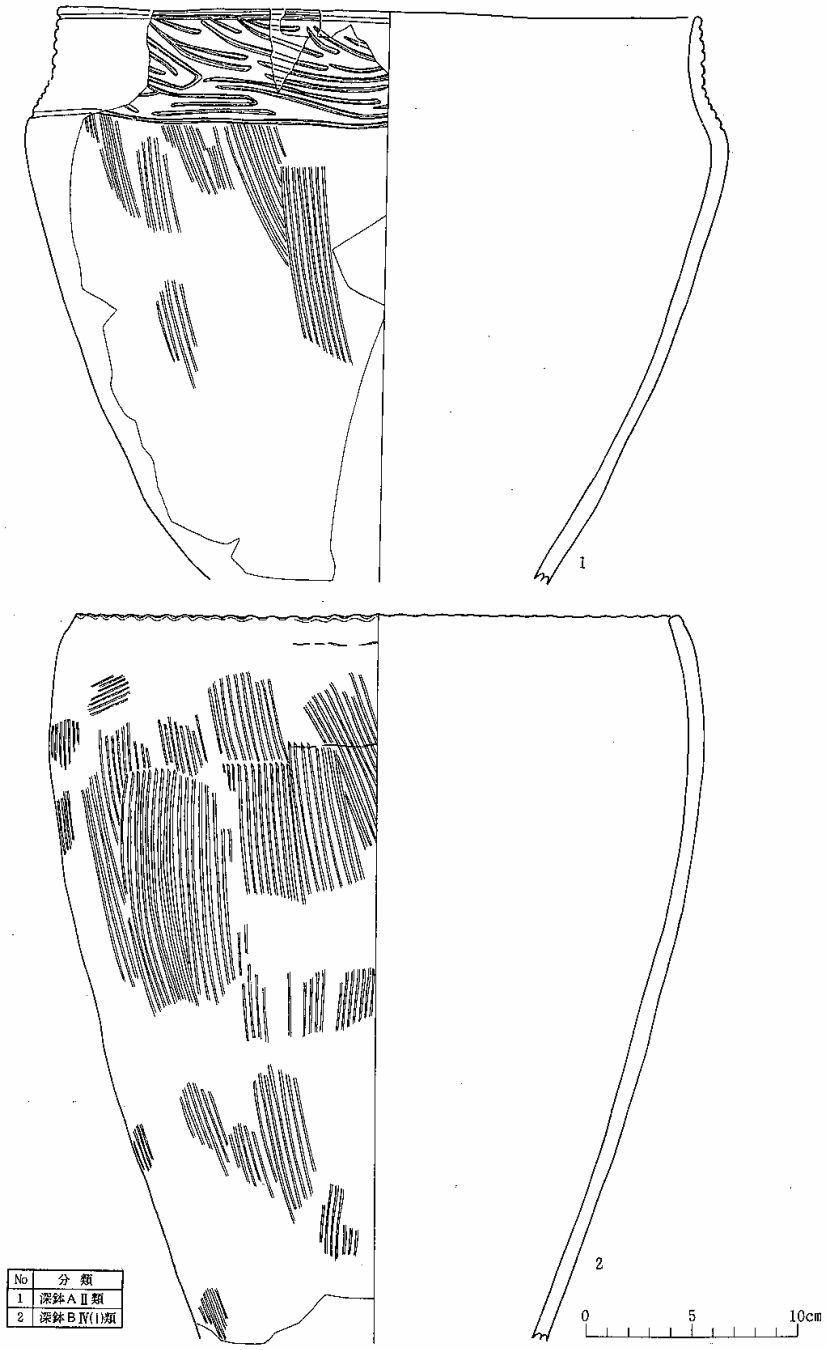
Ⅲ）頸部が屈曲し、口縁部が内傾するもの（第9図1）

1例のみである。口縁部全体に工字状文の著しく崩れたかのような文様がみられる。体部には条線が施されている。



No	分類	No	分類	No	分類	No	分類	No	分類	No	分類	No	分類
1	壺Ⅰ(i)類	4	壺	7	深鉢AⅠa類	10	深鉢AⅠb類	13	深鉢BⅠ(i)類	16	深鉢BⅡb類	19	深鉢BⅣ(ii)類
2	〃	5	〃	8	〃	11	〃	14	深鉢BⅠ(ii)類	17	深鉢BⅢ類	20	〃
3	壺	6	深鉢AⅠa類	9	深鉢AⅠb類	12	〃	15	深鉢BⅡa類	18	深鉢BⅣ(ii)類	21	〃

第8図　遺物包含層出土土器(3)　壺形土器・深鉢形土器



No	分　類
1	深鉢ＡⅡ類
2	深鉢ＢⅣ(1)類

第９図　遺物包含層出土土器(４)　深鉢形土器

Ⅳ）肩部からゆるく立ち上がり、口縁部が内弯するもの（第10図1）

1例のみである。深鉢というよりは体部が大きく開く鉢形土器といった方がよい器形である。口縁部に二条の平行沈線が巡り、それ以下に横方向に帯状にのびる磨消縄文文様が施されているが、全体の文様構成はわからない。また、口唇部には波状の粘土紐貼り付けがみられる。地文は斜行縄文（ＬＲ）である。

Ｂ）地文のみのもの

口頸部の形態から以下の4つに分けられる。

Ⅰ）頸部がくびれ、口縁部が短く内傾するもの

Ⅱ）頸部がくびれ、口縁部が外反するもの

Ⅲ）頸部が内弯し、口縁部が直立気味に立ち上がるもの

Ⅳ）底部から口縁部にむかって直線的に開くもの

Ⅰ）頸部がくびれ、口縁部が短く内傾するもの（第8図13・14）

波状口縁のもの（13）と平口縁のもの（14）とがある。いずれも口縁部が無文で体部に斜行縄文（13は不明、14－ＬＲ）が施されている。

Ⅱ）頸部がくびれ、口縁部が外反するもの（第8図15・16）

突起をもつもの（15）と突起のないもの（16）とがある。いずれも口頸部は無文である。

Ⅲ）頸部が屈曲し、口縁部が直立気味のもの（第8図17）

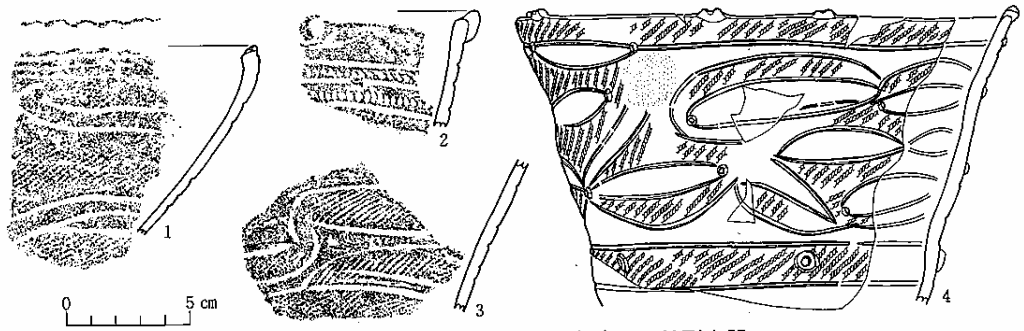
このタイプも出土量は少なく図示したのは1点のみである。口頸部は無文で肩部以下に条線が施されている。条線の方向は肩部が横で体部が縦である。

Ⅳ）底部から口縁部に向かって直線的に開くもの（第8図18～21・第9図2）

深鉢形土器の主体を占めるタイプである。外傾するもので（18～21）と内弯するもの（第9図2）とがある。

前者には無文のもの（18　20）と条線文（19）や斜行縄文（ＬＲ）（21）が施されているものがあり、特に21は口縁部に綾絡文も施されている。

後者は小波状口縁をもち、器両全体に条線が施されている。他に図示できなかったが、地文

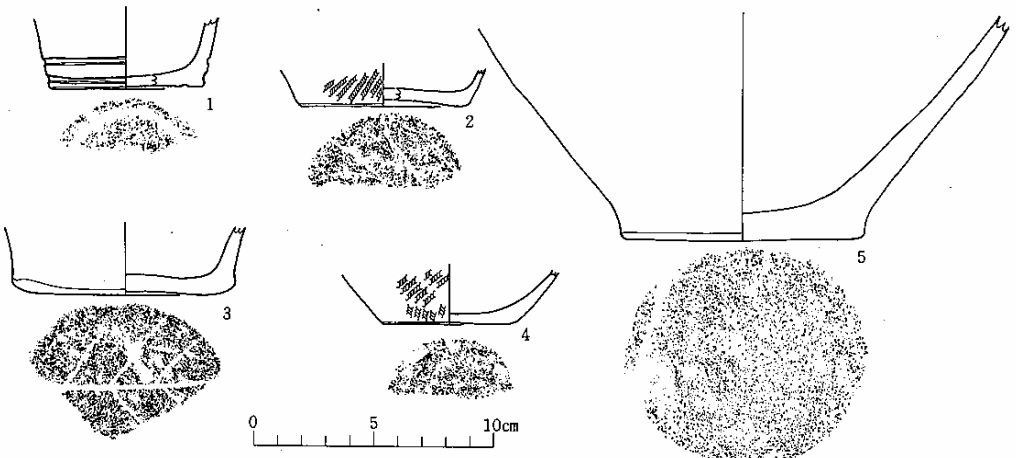


第10図　遺物包含層出土土器（5）　深鉢形土器

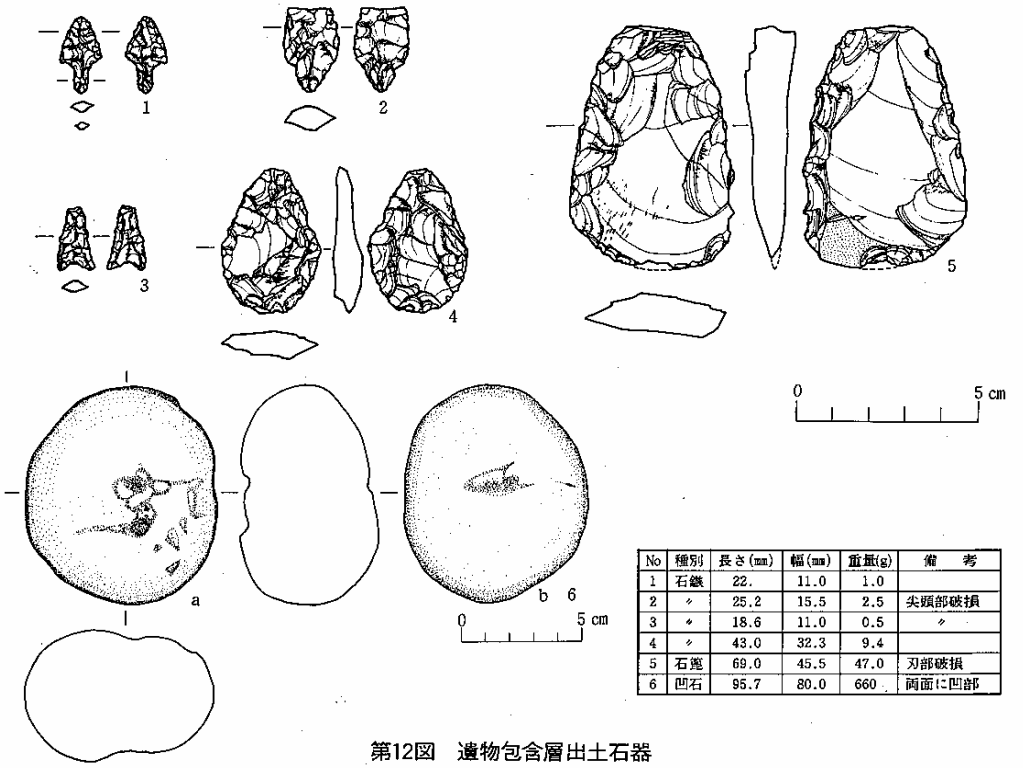
の種類として斜行縄文（ＲＬ）、撚糸文（Ｌ、Ｒ）等もみられた。

―底部―（第11図）

底部は全て平坦であるがやや揚底状のもの（2・3）もある。底面には沈線（1）、木葉痕（2・3）がみえるほか底面が無文のもの(4・5)もある。



第11図　遺物包含層出土土器(6)　底部



No	種別	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	備　考
1	石鏃	22.	11.0	1.0	
2	〃	25.2	15.5	2.5	尖頭部破損
3	〃	18.6	11.0	0.5	〃
4	〃	43.0	32.3	9.4	
5	石篦	69.0	45.5	47.0	刃部破損
6	凹石	95.7	80.0	660	両面に凹部

第12図　遺物包含層出土石器

(2) 石器（第12図）

石鏃（1～4）

4点出土している。1・2は有茎で3は無茎である。三者とも調整剥離が中央部に及ぶ。2と3は尖頭部が欠けている。4も石鏃と考えられ、基部形態が丸基の大形のものである。1～3に比べ調整が粗く、全体的に磨耗が顕著である。

石篦（5）

大形破片を素材とし、撥形に整形したものである。基部には打面を残し、調整は全体的に粗く、刃部に一部自然面を残している。

凹石（6）

9.6×8cmの楕円形の礫を利用したもので、ａ・ｂ両面に凹部を有する。ａ面には2個、ｂ面には1個の凹部がみられ、おのおの平面形は不整形で、両面の凹部とも形態は皿状に近い。

ｄ．表土出土の遺物

(1) 土器（第13図）

表土出土の土器は総計2,785点あり、うち口縁部資料は112点を数える。表土からの出土ということで、何れも磨滅が著しく、ここでは文様の明瞭なもの、底部に特徴のあるもの28点を取り上げその内容を述べる。

浅鉢形土器、高坏形土器、壺形土器、深鉢形土器があり、その他不明の土器もある。

((浅鉢形土器))（1～10）

口頸部の形態には、頸部がくびれ口縁部が外反もしくは外傾するもの（1・2）、口縁部が内弯するもの（3～5）、全体的に外傾するもの（6～10）がある。文様には反転する沈線による工字状文（1）、平行沈線間を台形に彫去した工字状文（2）、平行沈線間に二重に反転する沈線を配す工字状文（9）、中に沈線をもち直角に反転する工字状文（10）があり、これらは遺物包含層出土土器と同じ特徴をもっている。また、6～8については口縁部内面が肥厚（7・8）したり、太い沈線による磨消縄文（6）や波状文（7・8）が施されていることから、包含層出土土器とは明らかに区別される。5の沈線部には丹が認められる。

((壺形土器))（11～13）

口縁部資料（11・12）、体部資料（13）とがある。

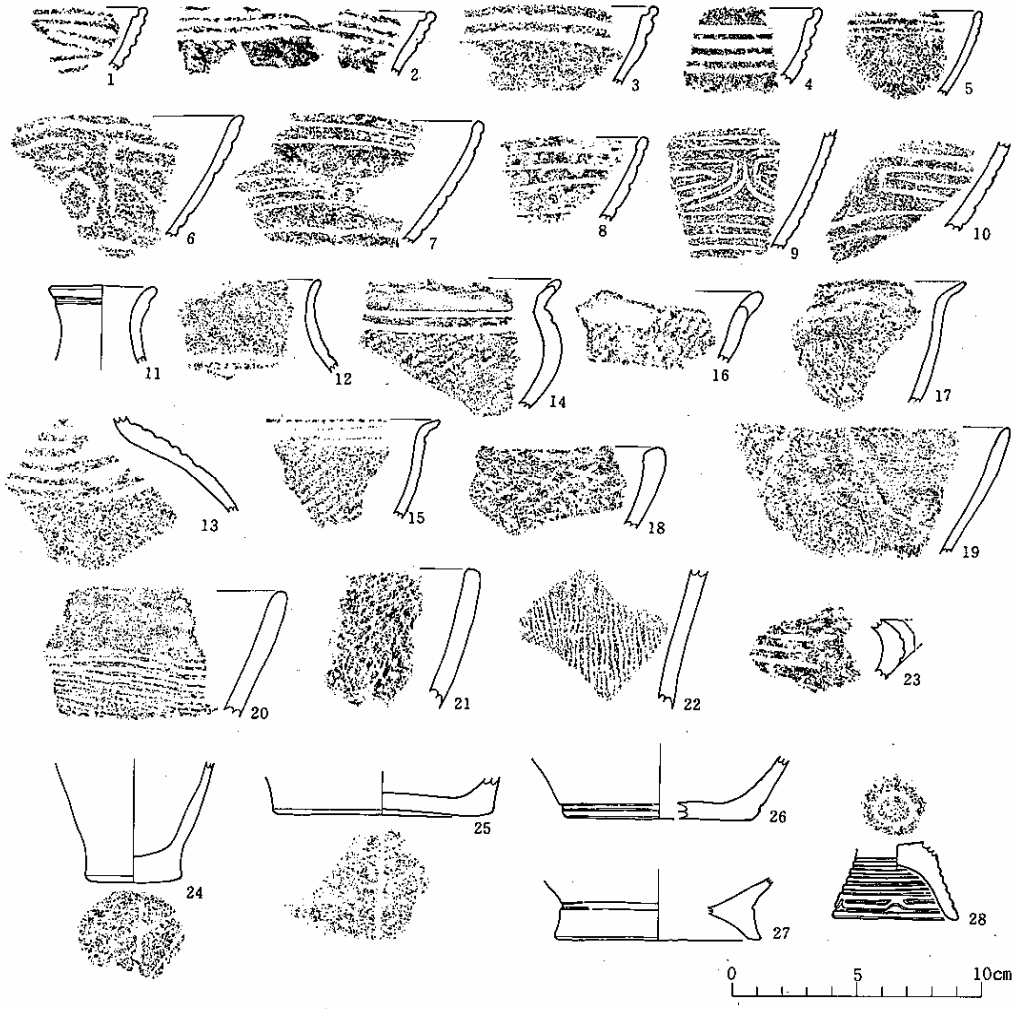
11は口径の小さい壺の破片で口縁部に一条の沈線が巡る。12は広口壺の破片と思われ、肩部に一条以上の沈線が施されている。13は肩部から体部にかけての資料で、肩部に平行線間を台形に彫去して描かれたものを上・下逆向きに施文した工字状文がみられる。

((深鉢形土器))（14～22）

文様の施文されるもの（14・15）、地文のみのもの（16～22）とがある。

文様の施文されるものは、いずれも頸部がくびれ口縁部が外反している。口縁部は無文で、体部との境に一条（15）、二条（14）の沈線が巡っている。体部には斜行縄文（ＲＬ）が施され、14の口唇部には2個一対の突起がある。

地文のみのものには、頸部がくびれ口縁部が外反するもの（16・17）と底部から口縁部に向かって直線的に開くもの（18～21）とがあり、前者には突起をもつもの（16）もある。



No	分　類	No	分　類	No	分　類	No	分　類	No	分　類	No	分　類	No	分　類
1	浅鉢Ⅰ類	5	浅鉢Ⅳ類	9	浅鉢Ⅴ類	13	壺・体部	17	深鉢ＢⅡｂ類	21	深鉢ＢⅣ(Ⅱ)類	25	
2	〃	6	浅鉢（弥生）	10	〃	14	深鉢ＡⅠａ類	18	深鉢ＢⅣ(Ⅱ)類	22	深鉢・体部	26	
3	浅鉢Ⅳ類	7	〃	11	壺Ⅱ類	15	深鉢ＡⅠｂ類	19	〃	23	壺？体部	27	
4	〃	8	〃	12	壺Ⅰｂ類	16	深鉢ＢⅡａ類	20	〃	24		28	高坏・脚部

第13図　表土出土の土器

頸部がくびれるものは、口縁部まで斜行縄文（ＬＲ）が施されるもの（16）と口頸部は無文で体部に網目状撚糸文が施されるもの（17）がある。

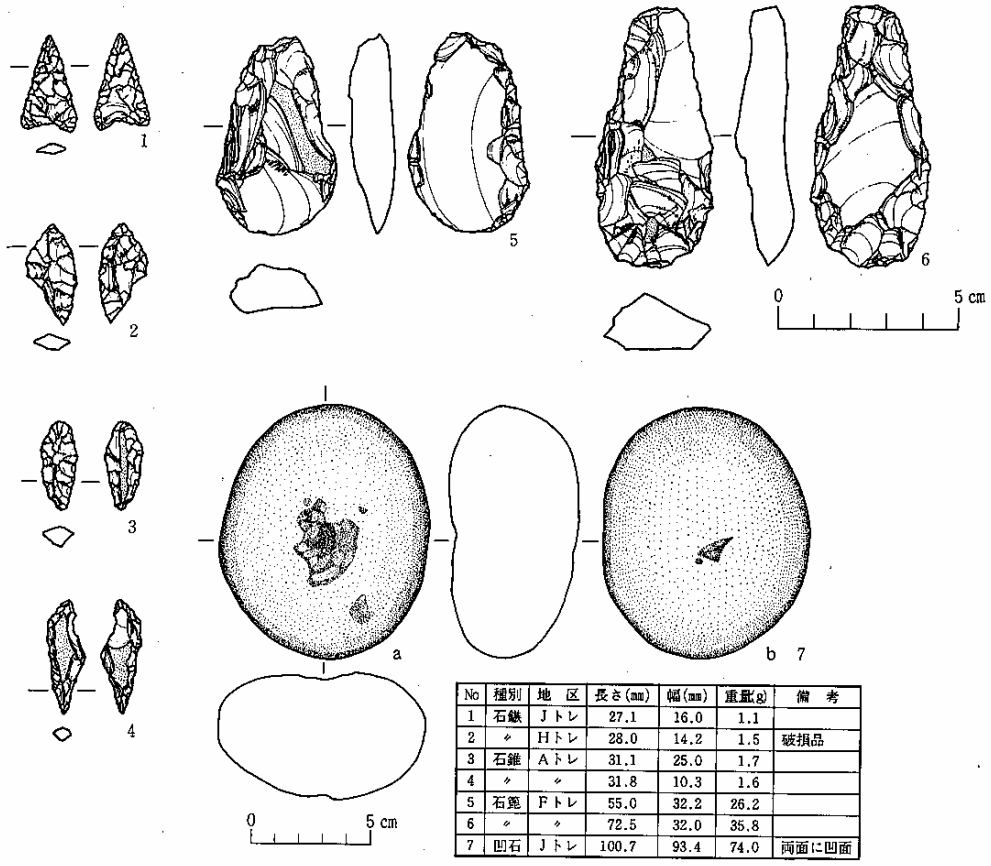
直線的に開くものは、口縁部まで地文が施されるもの（18・19・21）と口縁部無文のもの（20）とがある。地文には斜行縄文（ＬＲ）、網目状撚糸文（18・21）、条線文（19・20）がある。

22は体部資料で、撚糸文（Ｌ）が施されている。

((高坏形土器)) (28)

脚部のみ1点出土している。器面全体に平行沈線と平行沈線を台形に彫去した工字状文が施されている。文様単位は4単位である。

23は壺の肩部片と思われるが小片のため詳細は不明である。大形の突起を中心に三条の平行沈線が施されている。



No	種別	地　区	長さ(mm)	幅(mm)	重量(g)	備　考
1	石鏃	Ｊトレ	27.1	16.0	1.1	
2	〃	Ｈトレ	28.0	14.2	1.5	破損品
3	石錐	Ａトレ	31.1	25.0	1.7	
4	〃	〃	31.8	10.3	1.6	
5	石匙	Ｆトレ	55.0	32.2	26.2	
6	〃	〃	72.5	32.0	35.8	
7	凹石	Ｊトレ	100.7	93.4	74.0	両面に凹面

第14図　表土出土の石器

また、底部の資料を4点図示した。形態には平底のもの（24～26）と高台が付くもの（27）とがあり、24・25は底面に木葉痕が認められる。

(2) 石器（第14図）

石鏃（1・2）

1は無茎の鏃で、基部の中央部にえぐりが入っている。2は基部が失なわれているため、形態はよくわからない。双方とも調整剥離が中央部まで及んでいる。

石錐（3・4）

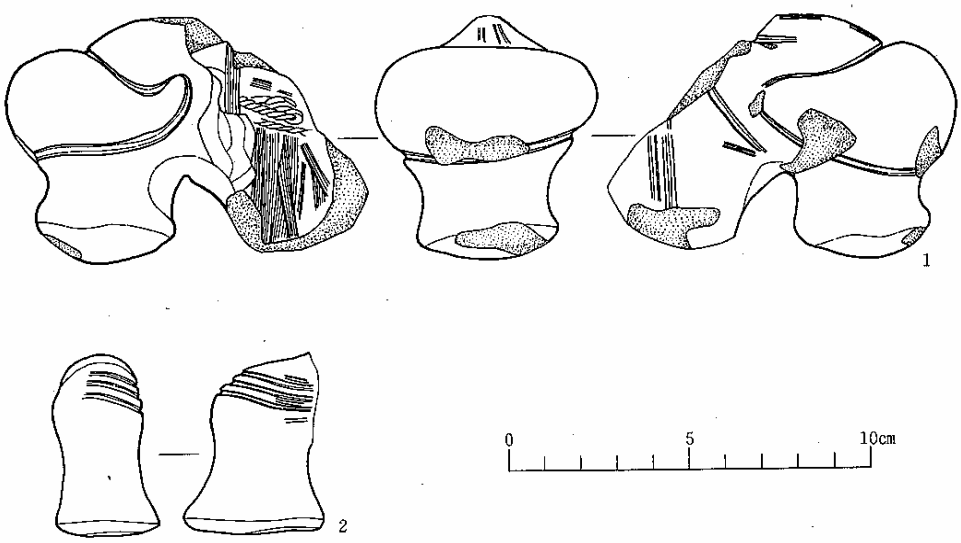
双方ともつまみ部から錐部へ明瞭な境をもたずに移行する。3はｂ面中央部にまで調整が及ばず、つまみ部付近にアスファルトの痕跡をわずかに残している。尖頭部両側は磨耗痕が顕著である。4はつまみ部に一部自然面を残しているが、錐部両側から調整が加えられている。錐部全体に磨耗痕が認められる。

石箆（5・6）

2点出土している。5は横長剥片を素材としており撥形を呈す。両側縁に調整が施され、刃部は膨らみをもち、調整をあまり加えていない。また、刃部には磨耗痕が観察される。6は縦長剥片を素材とし、撥形を呈している。調整は両縁辺から加えられているが全体的に粗い。横断面は三角形に近い。

凹石（7）

11×9cmの楕円形の礫を素材としている。ａ・ｂ両面に凹部があるが、どちらも形態は皿状である。ｂ面の凹部は浅い。



第15図　表土出土の土偶

(3) 土偶（第15図）

2点出土している。

1は胴から腕にかけてのもので中実である。盛り上った肩に短い腕がつく。肩の周囲には沈線が巡り、肩の上部に二条、背面に五条の沈線が施されている。内部には土偶製作時の芯として使用したと思われる木や縄の圧痕が観察される。このことから、この土偶はあらかじめ木と縄で祖形を作り、それに粘土を貼り付けて製作されたことがわかった。

2は脚部で中実である。1に比べかなり小振りである。御上部に五条の沈線が施されている。

Ⅲ 考　　察

前項まで述べてきたように、今回の調査では各種の遺構や遺物が発見された。

1. 出土遺物

a．土器

(1)　土器の年代

出土した土器は器形・文様表現技法・文様及び文様構成等の違いから以下の4群に分けられた。しかし、各群の中には極めて少量で小破片のみのものもある。したがって既に明らかとなっている県内他遺跡に類例を求め、その年代を考えてみたい。

○第1群土器―平行沈線と刺突、磨消縄文と瘤状小突起が組み合って施文されるグループ
器形は深鉢のみで、施文部位は肩部以上である。（第10図2～4）

名取市金剛寺貝塚・村田町東足立遺跡に類例があり、時期は縄文時代後期後葉金剛寺式と考えられる。

○第2群土器―横方向に帯状にのびる磨消縄文をもつ鉢や口縁部全体に平行沈線が施される深鉢で構成されるグループ。（第8図11・12、第10図1）

一迫町巻堀遺跡・角田市梁瀬浦遺跡に類例があり、時期は縄文時代晩期中葉大洞C_2式と考えられる。

○第3群土器―文様の主体が沈線で、施文範囲は狭く、器形毎にその部位が異なる。
器形には浅鉢・高坏・壺・深鉢がある。出土土器のほとんどを占める。

柴田町鹿野遺跡・角田市梁瀬浦遺跡・蔵王町鍛治沢遺跡に類例があり、時期は縄文時代晩期末葉大洞A’式と考えられる。

○第4群土器―太い沈線によって区画された磨消縄文や細い沈線の文様をもつグループ器形は
浅鉢のみである。（第13図6～8）

角田市鱸沼遺跡に類例があり、時期は弥生時代初頭大泉式と考えられる。

このうち第3群土器は今回の調査で最も多く出土し、遺物包含層の主体を占めているので、以下第3群土器について考えることとする。

(2) 第3群土器について

第3群土器は表土及び遺物包含層から出土しているが、層位的に共伴関係が検討できるのは遺物包含層出土のものである。しかし表土出土の大部分も包含層出土土器に対応するものであり、一括して取り扱うことができる。包含層からは後で述べる高坏形土器・壺形土器Ⅱ類を除いて各種類出土しており共伴関係が成立する。また包含層で認められなかったものも包含層出土土器と器形・文様・文様表現技法が同じであり、これらも大洞A’式の範疇に含められる。

第3群土器は土器の観察から文様を描く技法に「浮線」「沈線」「彫去」などがあり、沈線にはヘラ状工具のものと、棒状工具によるものとがある。

また、沈線部に丹が残っているものも多くみられた。

器面で観察された文様には「工字状文」「平行沈線文」「一条の沈線文」などがあり、工字状文の種類は大きくみて1）反転する沈線によるものと2）平行沈線を台形に彫去したもの3）連続する浮線楕円とに分けられる。

次に器形と文様の施文部位についてみてみる。

器形の種類には浅鉢形土器・高坏形土器・壺形土器・深鉢形土器の4つがある。なお、高坏形土器は台部と結びついたものがなく、口縁部や体部の資料では浅鉢形土器と明確に区別することができなかった。したがって、ここでは口縁部や体部資料で高坏形土器と思われるものも浅鉢形土器の中に含めて取り扱うことにした。

これらの器形は口縁部・体部の特徴からさらに細分され、これに文様の種類や施文部位に加えると以下のようになる。

（浅鉢形土器）

Ⅰ類―頸部がくびれ、口唇部が外反もしくは外傾するもの

施文部位：口縁部、体部下端、口縁部内面

Ⅱ類―頸部がくびれ、肩部がはり出すもの

施文部位：口縁部、肩部

Ⅲ類―頸部で屈曲し、口縁部がやや外反するもの

施文部位：口縁部、口唇部

Ⅳ類―口縁部が内弯気味に立ち上がるもの

施文部位：口縁部 or 口縁部～頸部以下、口唇部、口縁部内面

Ⅴ類―全体的に外傾するもの

施文部位：口縁部～頸部以下、口唇部、口縁部内面

このうち、体部下端、口唇部、口縁部内面に施される文様は一条の沈線文であり、これ以外の幅広い文様帯に施されるのは主として工字状文で、一部平行沈線文もみられる。

（壺形土器）

Ⅰ類―広口のもの、（ⅰ）波状口縁と（ⅱ）平口縁とがある。

施文部位：（ⅰ）口縁部 or 口縁部上半、口唇部、口縁部内面

（ⅱ）肩部

Ⅱ類―小形で口縁部が直立気味に立ち上がるもの

施文部位：口縁部上半（肩部以下は破片のため不明）

このうち、口縁部上半・口唇部・口縁部内面に施される文様は一条の沈線文で、口縁部や肩部の幅広い文様帯には工字状文がみられる。

（深鉢形土器）

A―何らかの文様の施されるもの

Ⅰ類―頸部がくびれ、口縁部が外反もしくは外傾するもの、平口縁、ａ―突起有、ｂ―突起無

施文部位：ａ―口縁部 or 口縁部上半、口縁部内面

ｂ―肩部

Ⅱ類―頸部で屈曲し、口縁部が内傾気味のもの、平口縁

施文部位：口縁部

口縁部上半や口縁部内面に施される文様は一条の沈線文で、口縁部にみられる文様は工字状文である。また、肩部の文様は一条もしくは二条以上の平行沈線文で、無文の口頸部と地文が施される体部とを区画している。

B―地文のみのもの

Ⅰ類―頸部がくびれ、口縁部が短く内傾するもの、（ⅰ）波状口縁と（ⅱ）平口縁とがある。

Ⅱ類―頸部がくびれ、口縁部が外反するもの、平口縁、ａ―突起有、ｂ―突起無

Ⅲ類―頸部で屈曲し、口縁部が直立気味のもの、平口縁

Ⅳ類―頸部に変化なく底部から口縁部に向かって立ち上がるもの、（ⅰ）波状口縁と（ⅱ）平口縁とがある。

地文の種類には斜行縄文（ＬＲ、ＲＬ）、撚糸文（Ｌ、Ｒ、網目状撚糸文、不明）、条線文がみられ、その中でも条線文の施された土器が一番多い。

(3) 遺物包含層出土土器の内容

①土器組成

遺物包含層出土土器の総数は1,015点であるが、このうち口縁部が残る資料で器形が判明した

のは96点である。ほとんどが破片であり、破片からの器形推定という資料上の制約は免れないが、土器組成の概要はつかめよう。

ただし、包含層からは金剛寺式・大洞C_2式土器も出土しており、地文のみの破片ではこれらと大洞A’式土器との区別がつきにくい。しかし、金剛寺式と大洞C_2式の資料は土器表面の磨滅が著しく、この点で大洞A’式の資料と明らかに違っており、両者の出土量が極端に少ないことを考え合わせれば他時期の土器の混入によって生じる誤差はほとんどないものと考える。

（浅鉢形土器）

52点、54％を占める。52点のうちわけは、Ⅰ類18点、Ⅱ類4点、Ⅲ類2点、Ⅳ類26点、Ⅴ類2点である。

（壺形土器）

2点、2％である。

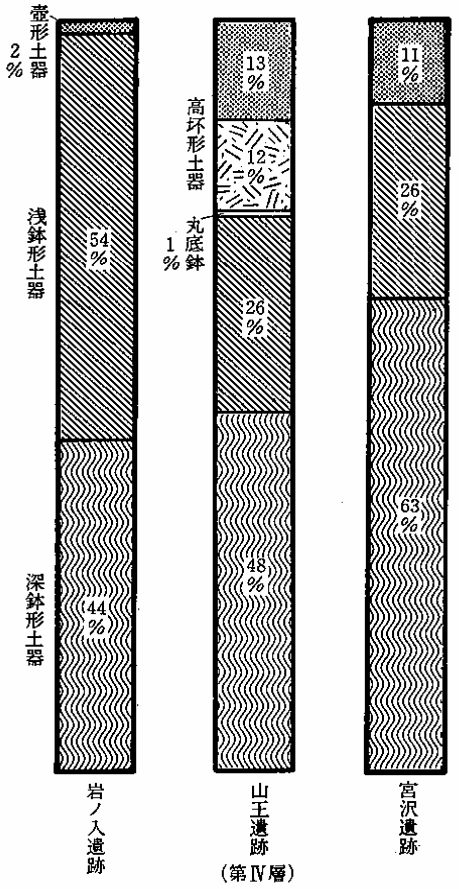
（深鉢形土器）

42点、44％を占める。AⅠ類5点、AⅡ類1点、BⅠ類3点、BⅡ類9点、BⅢ類2点、BⅣ類22点である。

以上、岩ノ入遺跡の土器組成をみてきたが、これを同時期の遺跡である宮城県一迫町山王遺跡第Ⅳ層や古川市宮沢遺跡の遺物包含層と比べてみると第16図のようになる。ただし、本遺跡や宮沢遺跡の場合、既に述べた理由から高坏形土器と浅鉢形土器とを明確に区別することはできず、両遺跡の浅鉢形土器とは正しくは高坏形土器をも含むものである。

この結果、岩ノ入遺跡の特色として浅鉢形土器の占める割合が大きく、反対に壺形土器の割合が極端に小さいことが上げられる。

次に浅鉢や壺に代表される装飾性に富む土器における双方の比は、壺を1とすると岩ノ入―27、山王Ⅳ層―3、宮沢―2.4とな



第16図　土器組成柱状図

り、本遺跡は装飾文様をもつ土器の中でも浅鉢形土器の占める割合が非常に大きいということがわかる。

②器形と文様

岩ノ入遺跡と同じ土器様相を示す県内の遺跡は、既述のように鹿野遺跡・梁瀬浦遺跡・鍛冶沢遺跡があり、これらは宮城県南に位置している。ここでは同じ時期でも県北に位置する宮沢遺跡を取り上げ、岩ノ入遺跡と比べてみたい。

まず、浅鉢形土器では口縁部の内弯する岩ノ入Ⅳ類は浅鉢全体の50％を占めるが、宮沢の同じタイプ（Ⅲ類）は24％あるにすぎない。文様の点でも岩ノ入Ⅳ類が浮線楕円文を主体とするのに対し、宮沢Ⅲ類にはそれが全くみられない。

また、これとは反対に頸部の屈曲する岩ノ入Ⅲ類は僅か浅鉢全体の4％であるが、これに相当する宮沢Ⅰ類は38％も占めている。さらに宮沢Ⅰ類は大振りの突起をもつ大形の浅鉢があるが、岩ノ入にはそれが全くなかった。

深鉢形土器では宮沢の資料には岩ノ入ＡⅠａ類・ＡⅡ類のような口縁部全体に文様の施されるタイプはみられない。

以上のような相違点があり、岩ノ入遺跡は県北の宮沢遺跡と土器の様相が異なっている。

③地文について

遺物包含層出土土器のうち地文の施されるものは浅鉢形土器Ⅱ類・Ⅲ類・壺形土器の一部（体部資料8図4・5）、深鉢形土器ＡⅠｂ類、ＡⅡ類、Ｂ類である。施文部位は主に体部であるが深鉢形土器の中には口縁部まで及ぶものもある。

地文の種類には斜行縄文（ＬＲ、ＲＬ、不明）、撚糸文（Ｌ、Ｒ、網目状撚糸文、不明）、条線文があり、その割合は斜行縄文―15％、撚糸文―7％、条線文―78％で、斜行縄文のみの内訳はＬＲ―41％、ＲＬ―8％、不明―51％、撚糸文のみの内訳はＬ―63％、Ｒ―12％、網目状撚糸文―9％、不明―12％であった。

この結果、岩ノ入遺跡の地文の特徴としては条線文が多く、撚糸文も存在するということがあげられる。この地文に条線文や撚糸文がみられるという特徴は宮城県南の鹿野遺跡や梁瀬浦遺跡と共通しており、県北の宮沢遺跡のように両者とも存在しないものと際立った違いをみせている。

岩ノ入遺跡の大洞Ａ’式土器については、遺物包含層の精査面積が狭いことから不確定な要素を含む部分もあるが、①～③の結果、同時期でも宮城県北に位置する富沢遺跡とは土器組成器種の内容・文様や地文の用い方等に相違点が認められた。

特に地文については条線文や撚糸文の有無によって、岩ノ入等宮城県南諸遺跡と宮沢等県北

諸遺跡とに明らかな違いがあり、前者は東北地方南部の、後者は東北地方北部の特徴と一致し地文による地域性を指摘できる。

ｂ．その他の遺物

(1) 石器

石器は剥片石器（石鏃・石錐・石篦・不定形石器）、礫石器（凹石）などが出土している。これらの石器は遺物包含層および表土から出土している。

石器の年代は共伴する土器から包含層出土のものは大洞A’式期に属すると考えられる。表土出土のものはその年代を決めることができない。

(2) 土偶

Ｅトレンチ表土から土偶の肩部から胸部にかけてのものが1点、Ｇトレンチ表土から脚部の片方が1点出土しているが、表土出土ということでその年代を確定し難い。しかし、その形態は縄文時代晩期のものに類例があり、この時期のものと思われる。

2. 遺　構

ａ．土壙

土壙はＢトレンチを除く各トレンチで確認されたが、ＡトレンチとＧトレンチの5基のみ精査を行った。このうち第2・第3土壙は出土遺物がないため、年代・性格は不明である。これに対し、第1・第4・第5土壙からはその堆積土中から遺物の出土をみている。

第1土壙は検出面が地山で、堆積土の第1・2・3・5層から縄文土器が出土している。しかし何れも磨滅が著しく、細かい所属時期は明らかでない。

第4土壙は検出面がＧトレンチ基本層位第3層上面で、堆積土の第1・3・4層から縄文土器が出土している。土器の所属時期は縄文時代後期後葉金剛寺式と縄文時代晩期末葉大洞A’式のものとがあり、量的には後者が多い。さらに、Ｇトレンチ基本層位第3層は土中から小片ではあるが大洞A’式の土器が出土しているため、時期は大洞A’式期ではあるが遺物包含層形成以前の表土と思われ、第4土壙がこれを切って作られているので、時期としては大洞A’式期のものであるといえる。

第5土壙は検出面は地山で、小片で図示できなかったが堆積土の第1・2層中より大洞A’式土器が出土している。このことから、この土壙の時期も第4土壙と同じく大洞A’式期に求められる。

また、第2・第5土壙において堆積状況がほぼ水平であったが、これは第2土壙では土層断面の両端がピットで切られているため、正確に水平状の堆積であったか不明である。第5土壙についても堆積土に混じりものがないので人為的な堆積とは決め難く、今のところ自然堆積と

考えている。

b．ピット

Ｂを除く各トレンチより検出されているが、Ａトレンチの8個、Ｇトレンチの2個のみ精査を行った。その結果、第9ピットは遺物包含層の下面で検出されたため、年代は大洞A’式期以前に、第10ピットはGトレンチ基本層位第3層を切っているので、大洞A’式期に求められる。これを除くＡトレンチの8個のピットは検出面が地山で、出土遺物もないことから、その年代や性格について言及できない。

c．遺物包含層

確認された遺物包含層は範囲が南北44m、東西5mにわたり、西へ緩く傾斜する丘陵縁辺部に位置している。範囲については包含層西側が開田の際削平を受けているので、さらに西方向にのびる。包含層の内容把握のためGトレンチ内を4.6m×1m精査したが、その結果、包含層は一枚で最も厚いところは約30㎝あった。遺物の出土状況は層全体から出土しているが、特に中ほどで大形破片が面的にまとまって出土しており、これらは層理面に沿っていると考えられ、包含層はさらに細分されるが発掘時にそれを明らかにすることはできなかった。

包含層の年代は出土土器のほとんどを縄文時代晩期末葉の大洞A’式のものが占めるため、該期のものと考えられる。他に少量ではあるが縄文時代後期後葉金剛寺式、縄文時代晩期中葉大洞C_2式の土器がみられたが、これらは混入と考えられる。

Ⅳ　ま　と　め

1. 岩ノ入遺跡は雉子尾川の支流に向けて南から張り出した舌状丘陵西麓に立地し、遺跡内は北と西に向かって緩やかに傾斜している。
2. 今回の調査によって発見された遺構には土壙・ピット・遺物包含層があり、このうち年代が判明したのは第1土壙―縄文時代、第9ピット―縄文時代晩期末葉以前、第4・第5土壙、第10ピット、遺物包含層―縄文時代晩期末葉である。
3. 発見された遺物には縄文土器・弥生土器・石器及び土偶があるが、遺物包含層から縄文時代晩期末葉の大洞A’式土器がまとまって出土しており、この時期の土器の内容を知る上で貴重な資料である。
4. 本遺跡からは以前に縄文時代後期後葉の金剛寺式土器や石器類がまとまって出土したり、弥生時代中期初頭の大泉式土器や石庖丁も発見されているので、これらの時期の遺構が遺跡内にあると推定される。

〈引用・参考文献〉　（五十音順）

一迫町教育委員会（1977）：「巻堀遺跡」

角田市教育委員会（1976）：「梁瀬浦遺跡」宮城県角田市文化財調査報告書第1集

加藤道男（1982）：「青木畑遺跡」宮城県文化財調査報告第85集

黒川利司（1981）：「東足立遺跡」宮城県文化財調査報告第81集

小井川和夫（1980）：「金剛寺貝塚」宮城県文化財調査報告第67集

斎藤・高橋・真山（1980）：「宮沢遺跡」宮城県文化財調査報告第69集

志間泰治（1971）：「鱸沼遺跡」

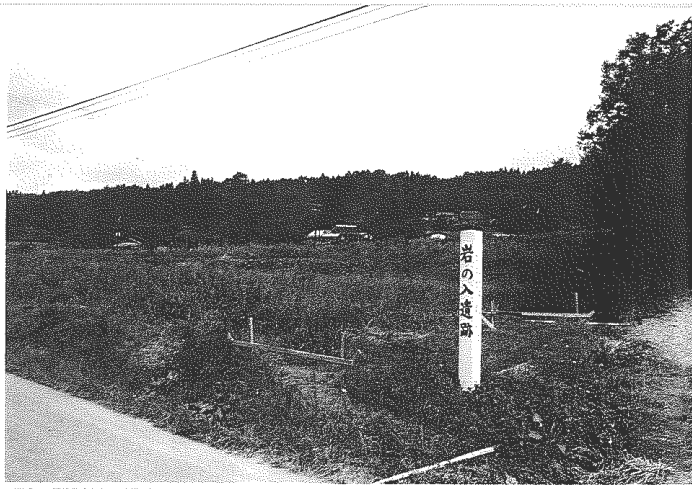
鈴木克彦 他（1973）：「亀ヶ岡遺跡発掘調査報告書」青森県埋蔵文化財調査報告書第14集

須藤　隆（1973）：「土器組成論」考古学研究第19巻第4号

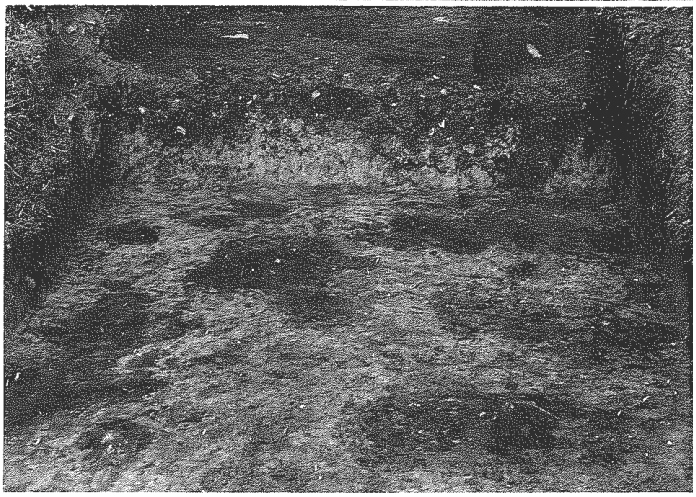
芳賀寿幸（1976）：「鹿野遺跡」柴田町文化財報告書第8集

山内清男（1930）：「所謂亀ヶ岡式土器の分布と縄文式土器の終末」考古学第1巻第3号

遺跡遠景
（南から）

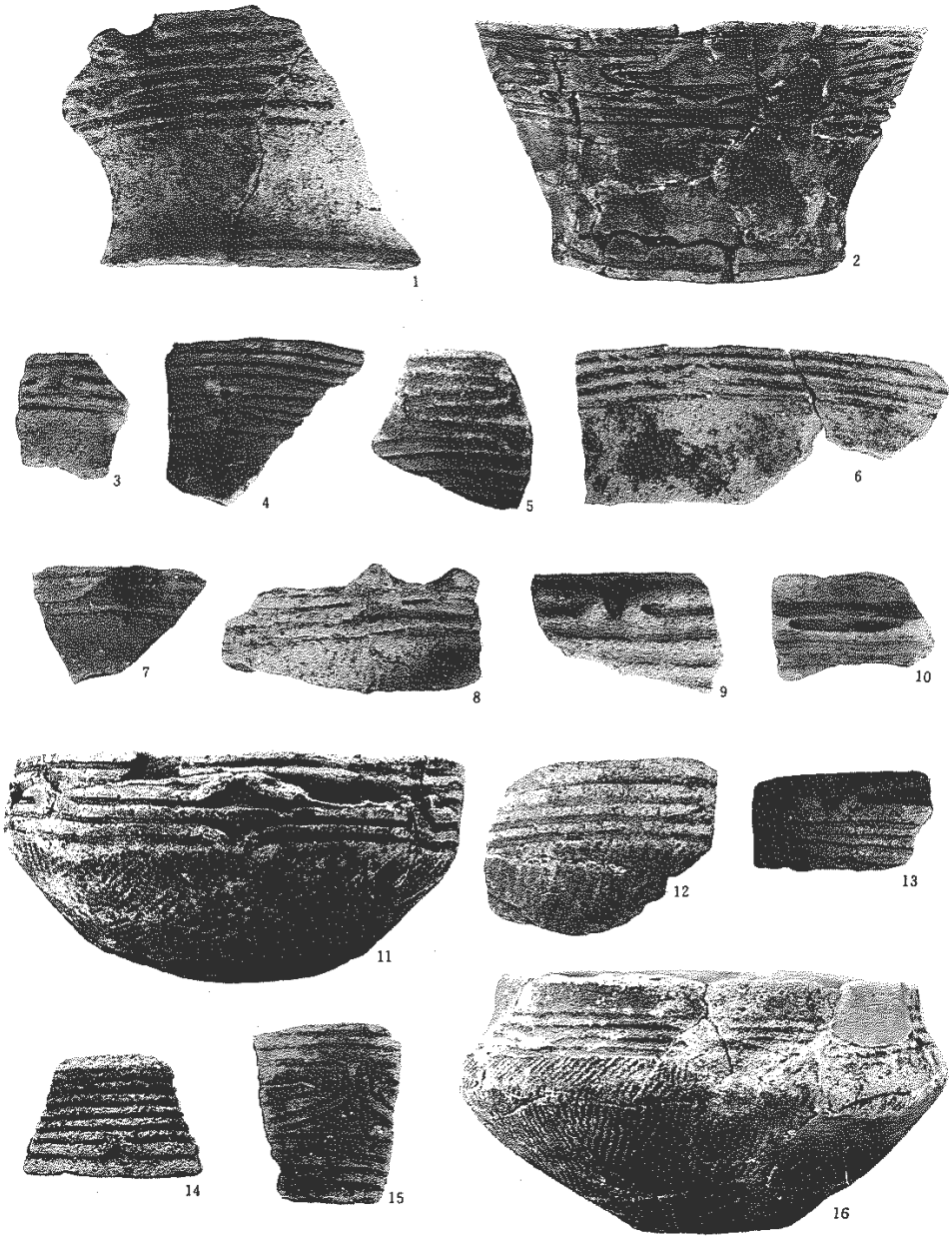


Ｆトレンチ
遺物包含層断面



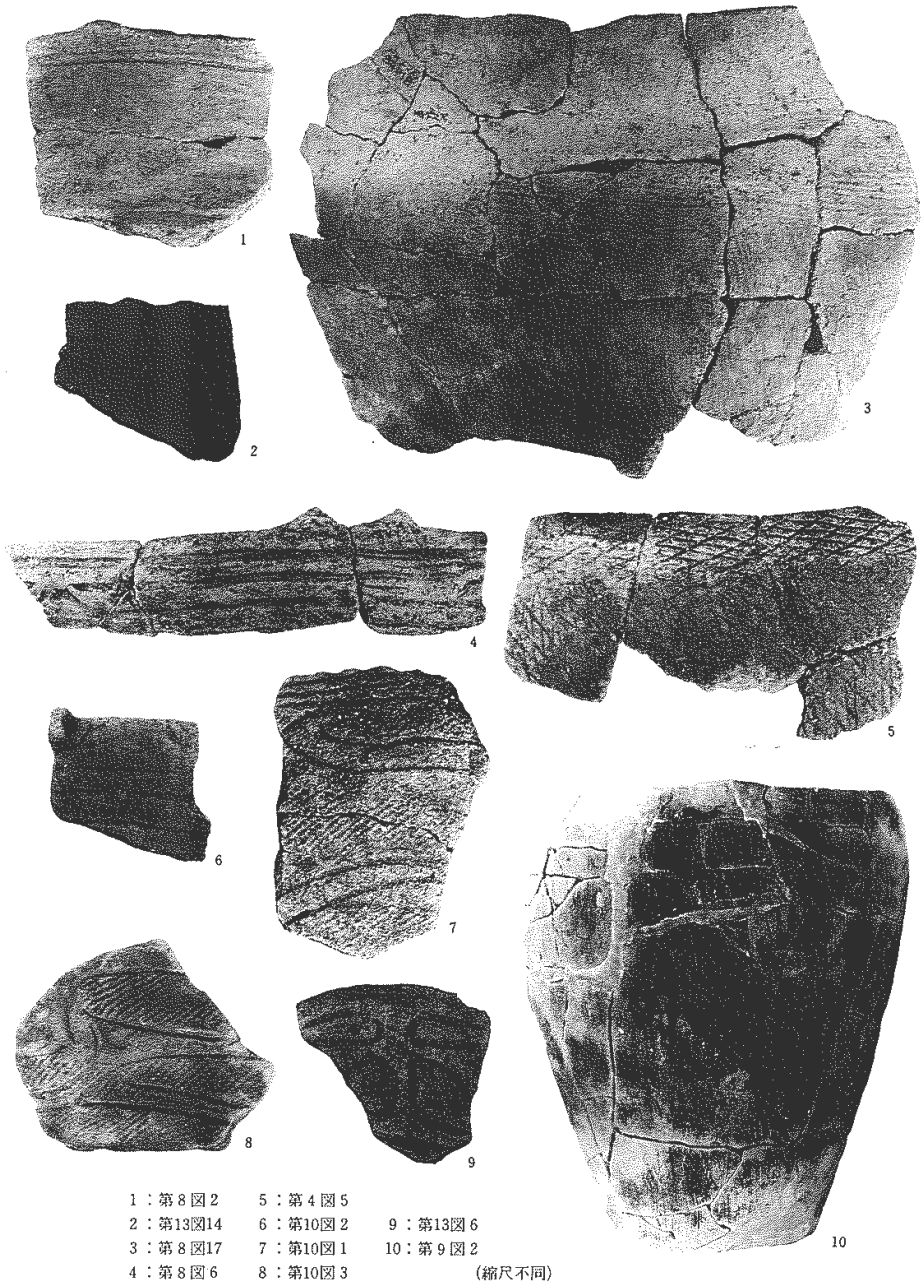
第１土壙断面

図版１　遺　　構



1：第6図9　5：第6図3　9：第4図1　13：第7図7
2：第6図7　6：第6図8　10：第7図8　14：第13図28
3：第6図1　7：第6図4　11：第7図4　15：第13図9
4：第6図2　8：第7図1　12：第7図5　16：第7図3　（縮尺不同）

図版2　出土遺物（1）



1：第８図２　　5：第４図５
2：第13図14　　6：第10図２　　9：第13図６
3：第８図17　　7：第10図１　　10：第９図２
4：第８図６　　8：第10図３　　（縮尺不同）

図版２　出土遺物（２）